

## 7 軟体動物

### 軟体動物門の概要

前版との最大の相違点 – 畠田和一コレクションの再発見に伴う新知見

今回、軟体動物門について完成できた解説は以下に挙げる 326 (絶滅 70, 絶滅危惧 I 類 148, 絶滅危惧 II 類 47, 準絶滅危惧 24, 情報不足 37) 種分である。しかし、それら以外に岡山県で既に絶滅したか、あるいは危機的な状況にあると考えられる種は少なくともさらに約 300 種あると考えられ、今回は遺憾ながらすべてを網羅できなかった。また、現時点で情報が不足している多板・頭足・掘足各綱も検討対象外とせざるを得なかった。

岡山県版レッドデータブック (以下, *RDB*) の前版 (2009 年度; 福田, 2010a) の作成時には、種の選定の基礎となった岡山県野生生物目録 2009 に掲載された軟体動物の種数合計は 639 であった。このうち 25 種はのちに誤同定と判明したか、または研究の進展に伴って複数の種が統合されたためそれらの分だけ種数は減り、当時実際に岡山県で産出が記録されていた種は 614 種である。

ところが *RDB* 刊行後の 2010 年秋、鏡野町において、長く消息がわからなかった畠田和一 (1897–1965) の貝類コレクションが再発見された。畠田は岡山市在住で、1930~1960 年代にかけて熱心に貝類蒐集を続け、ハタケダマイマイなど複数の新種の発見にも直接関与し、その名を現在に伝える著名なアマチュアである。歿後、その生涯をかけて築き上げた膨大な標本群は行方不明となっていた。

およそ 45 年ぶりに、幸運にもほぼ原型通りの状態で見出された畠田コレクションは、衝撃的な内訳を示していた。標本総数は 7000 ロット以上に達し、それらの産地は日本全国から戦前~戦中の旧日本領のほぼ全域 (千島、樺太、沿海州、朝鮮半島、台湾、パラオ、ヤップ、フィリピン、ニューギニアなど) に及ぶのみならず、戦後絶滅した種や、例えば北朝鮮などアクセスが困難となって事実上再入手が不可能な種なども多数含まれる。中でも彼が地元岡山県で自ら採集した標本には、上記の岡山県野生生物目録 2009 に掲載されていない種が多数存在する。

それらすべてを再同定して加味した結果、岡山県で産出が記録された貝類の種数は前回の目録から一挙に 283 種増加し、現時点で 897 種となった。この増加分には畠田コレクション以外で新たに記録された種も含まれるが、大半は畠田の遺した標本のみによる。つまり、それら畠田標本に見られる岡山県産の種の大半は、その後の本県で一切産出が確認されていない。再確認された種もわずかな死殻や破片のみで生貝は見出されていない例が多い。したがって畠田が目にしていた当時の岡山県の自然環境は、現在我々が見ているものとは著しく異なり、両者の間に大きな断絶があることは明らかである。畠田が歿した 1965 年以降、日本は高度経済成長期に突入り、国土全体で急激な開発がなされて自然環境が一変した史実はもはや繰り返すまでもないが、とりわけ岡山県はその時代の環境悪化の影響が大きく、それまで県内に棲息していた貝類の多くの種が絶滅した。その規模はまさに大量絶滅の語にふさわしい (後述)。その事実の直接的にして唯一の物的証拠を、今に伝えているのが畠田コレクションである。

#### 岡山県での絶滅種数と絶滅率

岡山県版 *RDB* 前版でも指摘した通り、貝類はあらゆる動物の分類群のなかでも、とりわけ環境の変化に敏感である。大半の種は個体群を維持する上での環境条件の嗜好が厳密である上に、移動能力が総じて低いと、棲息地の状態が急変すると適応できず、ただその場で滅びるしかない場合が多い。もともと著しく狭い範囲の固有種も多く (例えばキタギシマゴクリの項を参照)、それらの種はたった 1 箇所の産地が失われると即座に絶滅に直結する。

この結果、貝類は他のすべての動物の分類群に比べて、絶滅危惧種の数が最も多くなる。日本全国を対象とした環境省レッドリスト (以下, *RL*) 2019 では、動物のうちで評価対象種数が最多なのは昆虫類で約 32000 種に上るが、そのうち *RL* 掲載種数は 870 である。これに対し貝類の評価対象種数は約 3200 と昆虫類の 10 分の 1 であるにもかかわらず、*RL* 掲載種数は昆虫より約 300 種も多い 1169 種である。これは日本全国どこでも同様の結果になるはずで、どの都道府県においても *RDB* 掲載種数が最も多くなるのは貝類である (もしそうでなければ、それは単なる調査不足など、データの精度を下げる別の理由が加わっているだけである)。

環境変化に対する貝類の反応は、貝類以外の大半の生物より早く、しかも明瞭に現れるのが通例である。喩えて言えば貝類は炭坑のカナリアである。地下から無味無臭の有毒ガスが発生しても坑夫はしばらく気づかない（気づいた時は大概手遅れである）が、カナリアは坑夫に先んじて、敏感に反応して突如鳴き止むか、あるいは頓死する。これと同様に、他の生物が一見平然と生き延びていて環境になんら変化がないように見えても、貝類の種数だけが減り始めるか、あるいは特定の種だけが短期間で劇的に消えたならその場所には必ずや何らかの異変が生じている。逆に言えば、ある特定の場所で、どのような顔ぶれの貝類の種が棲息しているかを精査するだけでも、その場所の現状と歴史的経緯の概要を知ることができる。したがって貝類は、いわゆる環境指標生物として最適な存在であるとも言える。移動能力に勝るため環境攪乱が生じても他の場所へ逃げおおせる生物ならば、環境との関連性が薄いため指標としての適性も弱まるのは当然で、環境状態の良し悪しを最も端的に、しかも高解像度で反映するのが貝類であるとみて差し支えない。

これを踏まえた上で絶滅種や絶滅危惧種の実数を見ると、様々なことがくっきりと浮かび上がってくる。現在は 47 都道府県すべてが独自の RDB を公表し、それぞれにおける生物の絶滅種数を明確に知ることができる。それら各自自治体自らが公開した RDB 上のデータを引用して現時点での貝類の絶滅種数を多い順に挙げると、筆頭は東京都 (2010–2011, 本土と島嶼部の合計) の 34, 次いで大阪府 (2014) の 20, 千葉県 (2019) の 18, 愛知県 (2015) の 9, 愛媛県 (2014) の 6 種と続く。上位 4 都府県はいずれも大都市を擁するため環境悪化もとりわけ大規模で、絶滅種が多くなるのも当然である。

ところが、今回岡山県で検討したところ、本県では冒頭に記した通り、少なく見積もっても実に 70 種もの貝類が絶滅したことが明らかになった。また、今回絶滅危惧 I 類とした 148 種や、あるいは検討が完了していない約 300 種の中にも、実際には既に県内で絶滅した種が多く含まれている可能性が高い。しかも岡山県は貝類全体の種数が上記の通り 897 種で、そのうち絶滅種が 70 種を占めるので、絶滅率 (絶滅種 ÷ 総種数) はおよそ 7.8 % という高率である。例えば東京都は伊豆・小笠原諸島をも含むためその範囲は亜熱帯まで及び、貝類の種数合計が 2000 種を下回ることではなく、そのうち絶滅種は 34 であるから絶滅率は 2% に届かない。このような絶滅種数の多さ、絶滅率の高さは、以下に述べる本県独特の環境変質の歴史に起因している。

### 岡山県における環境の変質と貝類の絶滅の歴史

岡山県における人為的環境攪乱の歴史の始まりは、6 世紀半ばの古墳時代にまで遡る。そのころ、大陸から渡来してきた人々は「吉備地方」(現在の岡山県中央部) にたたら製鉄をもたらした。その技術は吉備の地に普及して根付き、長きにわたって発展したが、これには火力の確保が必須であった。必然的に岡山県の山々に繁茂していた樹木は盛んに伐採され、薪として消費されていった。これが原因で山林の多くがみるみる消失し、剥き出しとなった山肌から雨が降るたび土砂が崩れて低地へ流出する。それらの土砂は吉井川・旭川・高梁川の県内 3 大河川を通じて瀬戸内海へ着々と運ばれた。

それまでの岡山県の海岸線は、現在の岡山市東部から倉敷市西部～浅口市あたりに及ぶまで、水深の浅い水道が東西に走り、多数の島嶼が散在していた。岡山県南部と香川県島嶼部に固有な陸産貝類アキラマイマイは、この時代まで離島であった場所に産地が限定される。現在、岡山・倉敷・玉野・浅口各市で陸続きながらもアキラマイマイが見られる場所は、本来はすべて島嶼だった場所である。これらの島嶼間を満たしていた海域へ、山間部から流出した土砂が次第に堆積していった。時代を下るにつれて海岸線は漸次沖合へと移動し、陸地の面積は徐々に拡大していった。これらの地形変化自体が既に、上記のたたら製鉄に起因する人為的なものである。森林伐採はその後も長く続き、江戸時代までには本県の南半分の大半は禿山と化してしまい、熊沢蕃山が治水治山や持続可能な農業経営の観点から警鐘を鳴らしたことはよく知られている。

海辺の浅海域に土砂が堆積し、干潟が拡大していった様子は、貝塚から掘り出される貝類遺骸からも知ることができる。弥生時代あたりから岡山県南部には多くの貝塚が形成され、ハイガイとヤマトシジミが多く見出されるが、時代の経過とともにハイガイの産出量が飛躍的に増してゆき、安土桃山時代あたりでピークを迎える (ハイガイの項を参照)。これはハイガイが棲息可能な泥干潟がどんどん拡大していったことを明示している。ハイガイは現在の日本では干潟棲貝類の絶滅危惧種の代表例として認知されている。

しかし岡山県では、人為的要因によって分布を拡大した時代が確かに存在したのも事実である。

陸地の拡大と海岸の水深の減退は、奈良時代ごろ着手された干拓事業の促進に拍車をかけた。干潟はもとより平坦な地形であるから、海水の侵入さえ防げば農地などに転用可能な土地が確保できる。もともと陸地化が進行し続けていた岡山県では、それに乗じて干拓がなされたのは自然な流れではあった。室町時代以降本格化した干拓工事によって、江戸時代末期までには岡山市と倉敷市の間にあった水道は全て陸地と化し、大きな島であった現在の児島半島も完全に陸繋された。その後さらに戦後に至るまで、間断なく大規模な干拓が進行してゆくことになる。

江戸時代当時までの岡山県に実際にどのような貝類相が存在したかは、上記の貝塚から知る以外には有力な手段がなく、文献記録もほとんど残されていない。欧米人による岡山県産貝類に関する最古の報告は、英国の貝類学者 Edgar A. Smith (1847-1916) によるものである。明治維新からまもない 1870 年代、H.C. St. John 船長率いる調査船 *Sylvia* 号が日本や朝鮮半島周辺海域の 32 地点でドレッジ調査を行い、その中の「Station 22. Inland sea between Shikoku and Nippon, 34°31' N. lat., 133°40' E. long.; 22 fathoms」(地点 22。四国と日本 [本州のこと] の間の瀬戸内海、北緯 34 度 31 分、東経 133 度 40 分; 水深 22 尋) は、その経緯度の数値から、現在の倉敷市玉島沖である。Smith (1879) はこの場所からの採集品を用いて、ヒラドサンゴヤドリとカンダイボシャジクの 2 種を新種記載し、同時にムシボタルとアミコシボソクチキレツブの産出を記録した。わずか 4 種ではあるが、これらの記録は極めて重い意味をもっている。なぜなら、ヒラドサンゴヤドリは近年少数の古い死殻が見出されたのみで棲息は確認されず、アミコシボソクチキレツブは畠田コレクションに含まれるのみ、カンダイボシャジクとムシボタルに至っては Smith の報告以後一切岡山県では産出例がなく、彼の記録が最初で最後となったからである(それぞれの種の項を参照)。したがって明治時代初期の倉敷市沖の海底環境や生物相が、現在のそれと全く異なっていたことには疑いを容れる余地がない。

しかしそれでも戦前から戦後まもない時代(1950 年代ごろ)までは、まだ岡山県の貝類の多様性は、現在とは比較にならないほど高かったと考えられる。これはもちろん畠田コレクションが主たる証拠である。また、国立科学博物館の明治時代の標本、福井市自然史博物館所蔵の古川田溝コレクション、大阪市立自然史博物館所蔵の吉良哲明コレクション、東海大学自然史博物館所蔵の野口博コレクションなどにも、今は生貝を見ることの叶わなくなった岡山県産の種の標本が少数ながら含まれている。それらのうち、かつては岡山県内に確かに産出していながら、現在は消滅してしまった海産貝類の種は、以下の 3 群に大別できる:

1) 大規模な内湾奥部の、干潟や河口汽水域に特異的な種。例、シマヘナタリ、クロヘナタリ、タケノコカワニナ、ウネハナムシロ、キヌカツギハマシイノミ、ハイガイ、ササゲミミエガイ、スミノエガキ、チリメンユキガイ、サビシラトリ、ウラカガミ、ハマグリ、ハナグモリ。

2) 内湾の潮下帯(水深約 5~30 m)の砂泥底に棲む種。例、イワカワチグサ、ヤツシロガイ、カズラガイ、ホソオリイレボラ、ミクリガイ、トウイト、ナガニシ、マクラガイ、リュウグウボタル、アワジタケ、ハンレイヒバリ、アオサギ、アワジチガイ、ウスベニマスオ。

3) 湾口部または外洋を主な棲息環境とする種。例、ヒナシタダミ、バテイラ、ダンベイキサゴ、チグサカニモリ、コハナマツムシ、コホラダマシ、キンチャクガイ、ユキノアシタ、ヒシガイ、サギガイ、ズングリアゲマキ、シラオガイ、サツマアカガイ、ワスレガイ、ベニワスレ。

上記の諸種は、1950 年代頃までに岡山県内で採集されて標本が残されているが、その後全く棲息が認められなくなり、今回の RDB で絶滅と結論づけたものである。これら 3 群の絶滅要因は以下の通りそれぞれ異なる。

1 の直接的にして最大の絶滅要因は、いうまでもなく 1959 年の児島湾閉め切り淡水化である。それまで長い年月をかけて干拓が継続され、既に広い範囲が陸地化していたものの、それでもまだ児島湾の奥部には決して狭くない泥質干潟が残されていた。そこには依然としてハイガイをはじめとする干潟特有の貝類相が見られ、明治時代に有明海から移植されて根付いたアゲマキも多産していた。これらの種は湾の閉め切りによって一挙に棲息可能な環境を奪われ、絶滅した。閉め切り堤防の内側だけでなく、外側に位置する吉井川や旭川の河口においても同時期に大規模な護岸が施され、水辺が直線的に単純化されたことで土砂の堆積が妨げられ、ヨシ原や干潟が失われた。これには吉井川や旭川それ自体の護岸の影響だけでなく、児島湾閉め切り堤防の設置によって湾外の海水の流れ全体が大幅に変更されたことも関係している可能性

が高い。児島湾の閉め切りは、当時は農地確保や治水などの点で必要な事業として実施され、一定の恩恵をもたらしたはしたが、その一方で干潟を消失させ、漁業を衰退させた側面もあり、そのどちらか片方だけを強調するのは偏った見方になりかねない。特に干潟に特異的な稀少底生生物の多くの種を絶滅させた歴史的事実は、岡山県 RDB 前版のみならず、環境省 RDB 2014（環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 2014）や『干潟の絶滅危惧動物図鑑』（日本ベントス学会編, 2012）などでも繰り返し記述され、もはや全国の底生生物研究者の間では一種の「常識」として受け止められている。

2 の種群がごとごとく消え去った最大の理由は、過剰な海底浚渫と考えられる。例えば現在の水島工業地帯は大垣内 (1968a, b) が報告している通りその沖合の海底から砂をサンドポンプで巻き上げ、それを用いて埋め立てることで造成された。また同時に、高度経済成長期には安価なコンクリート材料としての海砂の需要が飛躍的に高まり、岡山県を含む瀬戸内海中央部の海域各地で、盛んに砂の浚渫と採取がなされた。これを行うと海底の地形自体が大幅に変形し、そこに棲息する生物すべてを根こそぎ死滅させるばかりか、砂を削り取った跡地には巨大な掘り鉢状の陥没がいくつも生じる。その底が深い場合は陽光が届かず、腐敗して無酸素状態となり、嫌気性細菌によって硫化水素など毒性の強い物質が発生する。これが荒天の時などに攪拌され、底から巻き上げられて表層に出てくる。この結果、穴の奥底のみならず外においても多くの生物を死滅させ、あるいは生態系の平衡を崩壊させて赤潮などが頻発する。この繰り返しで、1960～80年代という比較的短期間のうちに、多くの種が耐えられず滅び去ったとみられる。

3 の種群の主たる絶滅要因は陸域からの汚水による水質悪化と考えられる。高度経済成長期に全国で問題となった公害の典型である。急激に増殖した工業地帯や都市から河川や海へ、大量の排水が規制もなく垂れ流され、富栄養化が生じたのみならず本来ならば自然界に存在しない物質も多く排出されてしまった。特に岡山・香川両県に挟まれた備讃海域は瀬戸内海の中でも東西の湾口から最も遠い奥部に位置するため、本来的に海水の交換が少なく、事実上の閉鎖水域である。そこへ汚水を急速かつ大量に流し込んだ結果、有害物質はいつまでも薄まらず濃度は高まる一方で、その場に棲む在来底生生物の大半が致命的な打撃を被ったことは想像に難くない。また船底塗料の有機錫に起因するインボセックスもこれら水質汚染被害のうちに含まれる（パイの項を参照）。賊腹足類の多くの種がこれに罹患して生殖不能となり、わずかな期間のうちに危機的状況に陥る過程は既に広く知られており、先ほど 2 の種群に挙げた種のうちでも、ヤツシロガイからアワジタケまでは、インボセックスがとどめを刺したとみることも十分に可能である。

また、上記 3 つの要因は相互に独立に生じたわけではなく、複数が重なり合ったことで絶滅した種も多かったにちがいない。それらが同時多発的に生じ、全体として激甚な環境悪化を生じてしまったのが戦後の岡山県の海域であるため、絶滅種が異常なほど多くなったのも当然であったと考えられる。

以上は海産・汽水産貝類に関する絶滅または減少要因の梗概であるが、岡山県（特に南部）では陸産貝類においても類似した傾向を指摘せざるを得ない。上記の通り、古墳時代から江戸時代初期までの間に既に県南部の天然林は大半が伐採され尽くしていたのは史実であり、それに伴って本来の陸産貝類相の大半も消滅したことはまず間違いないからである。現在の岡山県南部では、一見豊かな森林に見える場所でも陸産貝類は多くの場合わずかな種しか確認できない。しかもそれらの種のほぼ全てが西日本の広域に分布する普通種であり（例、ヤマタニシ、ヤマクマ、ヤマナメクジ、セトウチマイマイ）、岡山県という土地の固有性は失われ、一様化・凡庸化ばかりが際立っている。それら以外の種が見られるのは神社仏閣の社叢など、信仰上の理由といった特別な事情によって伐採の難を辛うじて逃れた、狭い範囲に局限される。それゆえ陸産貝類も、県南部においては本来の貝類相は江戸時代までに木っ端微塵に破壊され、その後に残った破片の形で存続しているに過ぎない。残念なことに本県の陸産貝類は海産貝類の場合と異なり、貝塚からの産出はほとんど記録されておらず、畠田コレクションも昭和初期以降のものであるから本来的状態を示すものではない。アキラマイマイやコオオベソマイマイのごとく乾燥環境への適応能力が高い種は別として、多くの種が記録すら一切ないまま近代以前に絶滅した可能性が高いが、現時点ではその具体的内訳を知るすべがない。ただ、畠田コレクションにも現在は確認できない種が含まれ（例、倉敷市児島由加産の標本が現存するものの、以後信頼できる情報がないアワジトメマイマイなど）、やはり海産貝類と同様、1950年代ごろまではまだかろうじて残っていた本来の陸産貝類相の欠片も、それ以降でごく一部を残して一掃されたことが垣間見える。

これら大量絶滅の発端にもう一度目を戻すと、今から約 1300 年も前に岡山県にもたらされた製鉄技術が、その後の本県の自然環境を激変させたいちばんはじめの出来事だったのである。洋の東西を問わず、

金属の生産と利用は文明を大きく動かすに足る重要な一要素である。日本ではそれはまず岡山県とその周辺で生じ、周囲の樹木をことごとく薙ぎ倒して、山々を崩し海の底を遠浅に変えた。人為的に拡張させられた干潟が今度は海水を奪われて干拓地となり、最終的に自然から程遠い人工物に変わり果てた。これはいわば有史以来の日本各地であまねく生じた様々な自然改変の集大成もしくは縮図であり、歴史的にも嚆矢に相当する。他の地域に同様の大規模な人為的開発・開拓の例を求めると、例えば北海道の開墾であるとか関東の利根川東遷、東京湾・三河湾・大阪湾岸の埋め立て、八郎潟・巨椋沼・諫早湾の各干拓、沖縄島南半分の本土復帰後の開発など枚挙にいとまがないが、それらすべてと比較しても本県でなされた森林伐採と干拓は、事業に要した時間の長さ、面積の広さにおいて突出している。その帰結として貝類は敏感に反応し、全都道府県で最多となる種が絶滅してしまった。

しかしながら、ここまで多様性が低下して単調化に蝕まれている近年の岡山県にあっても、他の都道府県で極めて稀産か、または全く知られていない種が見出されていないわけではない。海産種であれば例えば、1958年の笠岡での記録を最後に全く産出例が途絶えていたタクミナは2018年に生貝が60年の時を経て倉敷市高洲で見出され、同時に同じ場所では瀬戸内海中央部で新記録となるハマチドリの生貝も確認された。1974年を最後に全国で再発見されないままだったヒメエガイが2014年に倉敷市玉島黒崎で確認されると、相次いで新産地が見出されるのみならず随伴する稀少種ウネボラ、オガイ、ナガゴマフホラダマシまでもが棲息を把握できた。これらの種の産出は、最近5年間で急速に備讃海域の環境状態が改善に向かいつつあることを示すと考えられる。かつて海底を徹底的に傷つけた海砂採取は本県では2003年に全面禁止され、有機錫を船底塗料に用いるのもインボセックスを招くと周知されて1990年以後厳しく規制された。これらの動きが重なって、少なくとも1990年代～2000年代初頭までの状態と比べると劇的に変化しつつあるため、今回絶滅とした種の中にも、今後近隣他府県の海域から新規加入と定着が生じ、本県内に新たな個体群が復活するものが現れて、ランクダウンの必要が生じるかもしれない。むしろ筆者はそれを心から願うものである。

また陸産貝類は、県の北部（山間部）は南部ほど大規模な伐採を経ているわけではないため、現在も少しずつ稀少性の高い種が確認されつつある。従来ホラアナゴマオカチグサと同定されてきたものの、分子系統解析によって他県産の種群のいずれとも識別可能なイクラドウゴマオカチグサとマキドウゴマオカチグサの存在が認識された。前者は現時点で新見市の2つの洞窟、後者は同市と真庭市の4つの洞窟でしか生貝が確認されていない岡山県北西部固有種である。またこれまでコウロマイマイと混同されてきたが、これまた最近の分子系統解析によって別種と実証されたヒメコウロマイマイも新たな発見の代表例で、本県では恐らくこれら2種がともに分布すると予測されるが、コウロマイマイはまだ生貝が確認できていない。さらに今回和名のみ新称した未記載種ミマサカオトメマイマイや、マヤサンマイマイなども最近新たに県内での産出が明確化された。これらの種が示す通り本県北部はまだ調査が行き届いておらず、今後さらに新たな発見がなされるであろう。ただし、畠田コレクションの内訳をみると、高梁市山間部の一部で途轍もなく大量のダイセンニシキマイマイが得られていたり（現在は一度に数個体程度が関の山である）、新見市井倉で採れたとラベルにあるものの再発見されないトサマイマイ近似種が含まれるなど、いまだ当時の状況を把握できない種もある。北部においても道路工事、植林化、ダム建設などの影響で広葉樹が優占する自然林は縮小傾向にあり、陸産貝類相は決して安泰でないともみべきである。

さて、ここまで淡水産貝類に一切触れなかったのは、それらが本県では海産・陸産貝類の惨状とは対照的に、過去も現在も一貫して、他の都道府県と比しても遜色のない誇るべき多様性と固有性を維持していると考えられるため、上記に展開してきた県内の環境攪乱と大量絶滅の文脈に唯一そぐわないからである。例えばマメタニシは全国的に極端に強い減少傾向を示し、1960年代までに知られた既知産地の9割以上が消滅したが、岡山県では今なお比較的多産する。カワネジガイも現在確実に維持されている個体群は本県にのみ存在する。ナデガタモノアラガイは在来の未記載種の可能性が高い種であるが、県内中央部では場所によっては多産する。岡山市の低地を流れる水路の二枚貝類（特にイシガイ科）の著しい多様性の高さは1980年代には広く知られ、他府県では少ないオバエボシが今も健在であることは重要である。その一方で本県ではニセマツカサガイの方がオバエボシより少なく、そればかりか純然たる稀少性（産地の少なさ、密度の低さ、採集の困難さ）のみを考慮すれば、本県では驚くべきことに他の都道府県ではごく普通種のヤマトシジミの方がオバエボシより稀ということになってしまい、これら2種はともに絶滅危惧II類とせざるを得なかった。このように本県では淡水産貝類は今も比較的高い多様性が維持されているといえども、

一部には不自然な偏りが生じている。

また、岡山県の淡水産貝類を論じる際はミヤイリガイを忘れてはならない。詳細は同種の項に記したが、本種は本県の淡水産貝類中で唯一の絶滅種であり、しかもかつて井原市に存在した個体群は恐らく極めて小さく、標本は畠田コレクション中の4個体、明確な文献記録は岡部 (1961) くらいしか残されていない点で、もはや本当に取り返しのつかない存在である。

### 今回の記述方針

岡山県の貝類相が示す深刻な状況は、1種につきわずか数行程度で片付けてよいものではない。特に今回対象とした多くの種は、環境省や他の都道府県のRDBで一度として掲載対象とされたことがない(例、ベニバイ、チャツボ、ナガニシ、ヒバリガイモドキ、イシマテ、タマキガイ、ウミアサ)。これらを敢えて絶滅危惧種として扱う以上は、薄弱な根拠で不用意に取り上げたのでないことを示すために、同定の根拠の明示や、他の地方での産出状況の把握に慎重を期した。何より、保全対象とする種の同定が誤っていれば議論は振り出しに戻るばかりか、混乱の増幅に加担して無意味な弊害を生みかねないので、今回取り上げた全ての種(未記載種を除く)は原則的に原記載(無効名すなわち異名も含む)及びタイプ標本図示文献を確認するとともに、分布域の把握も主要な図鑑や目録だけに頼るのではなく、一次文献や標本にできる限りあたり直した。さらに原記載以外にも、分類学的・生物地理学などの観点において言及すべき重要な研究例や、議論または再検討の余地がある問題点が見受けられる場合は積極的に論評しつつ引用した。結果的に、本章で扱った各種の解説は、それぞれの種が最初に存在を認知されて以来現在に至るまでの研究経過の簡素な総説(review)たることを目指した。ただでさえ同定や分類上の位置が激しく混乱している貝類においては、これらの手続きなしには一体どの種のことを論じているのかすら、ただちに不明瞭になってしまいかねないからである。

これに伴って引用文献も、今回対象とした326種に対する有効名・無効名を問わず(異名や不適格名も含めて)原記載またはそれに準ずる文献、主要な再検討論文などを網羅することを前提とした。引用文献欄の見出しは「主な参考文献」とされているものの、実際には本文中で引用した文献を漏れなく挙げており、「主な」ではないことに留意されたい。なお、インターネット上に電子ファイルが存在する文献については、それらへのハイパーリンクを逐一つけたファイルも別途作成しており、筆者が個人的に配布するので、入手を希望される場合は [suikeil@okayama-u.ac.jp](mailto:suikeil@okayama-u.ac.jp) までご一報願う。

### 本章で用いた分類体系

福田 (2017a: 669–673) で詳述した通り、貝類(特に腹足綱と二枚貝綱)の分類体系は今なお激変期の最中にあり、安定していない。国内の文献で最新の状況を解説したものは上記福田 (2017a) が唯一であり、昨今の複雑極まりない状況に至った経緯や対処するにあたっての留意点などは、そこに記した内容から大筋での変更はないためそちらを参照されたいが、この2年間で分類体系自体にはかなりの変更がなされた。今回は MolluscaBase (2019, 2020) で用いられている体系におおむね準拠したが、相変わらず上位分類群間の関係が極端に複雑で旧来の体系との関係がにわかに把握しにくいこともあり、日本ではまだ普及に至っていない感が強い。そこで今回は、本章で採用した最新の分類体系(上位分類群名一覧と、ランクごとの対応表)を Tables 1–2 に提示する。

### 本章における分類学的変更

上記の通り、各種に対して原記載以来の学名の変遷を検討し直した結果、以下の分類学上の変更が必要となった。詳細はそれぞれの種の項を参照。

**新組み合わせ(属の所属変更):** カネコスズカゴ, ゴマツボモドキ, アツシオガマ

**従来の学名は無効または不適切なため、学名変更または旧学名復活:** タケノコカワニナ, オリイシラタマ, カンダイボシャジク, ウメムラシタラ, イシマテ, タナベヤドリガイ, ヒシガイ, アゲマキ

和名新称： ナデガタモノアラガイ， ミマサカオトメマイマイ， ソガイロシオガマ

より適切な和名に変更： カンダイボシヤジク (旧キボシシヤジク≠シラボシシヤジク)， チビマキギヌ (旧ササクレマキモノガイ＝シロヒメゴウナ)， マルシオガマ (≠旧ヒラシオガマ＝シオガマ)

(福田 宏)

### ***Red Data Book Okayama 2020: Molluscs (gastropods and bivalves) – summary***

We examined and listed threatened molluscan species of Okayama Prefecture. In total 897 species of molluscs were recorded from Okayama Prefecture in the latest version of *the Okayama Wildlife List 2019*. Amongst them, at least 70 species are recognised as extinct, 148 as endangered, 47 as vulnerable, 24 as near threatened, and 37 as data deficient. The number of extinct species and the extinction rate (7.8 %) are extremely large and the worst in the whole 47 prefectures of Japan. Also, this project has not yet been finished and more than 300 species should be added as threatened later. Most of these extinct species are found only in the collection by Waichi Hatakeda (1897–1965) who collected shell-bearing molluscs in Okayama during 1930s–1960s. Hatakeda is well known amateur collector especially as the discoverer of *Aegista hatakedai* Kuroda & Habe, 1951 (Camaenidae) and some other new species.

The disturbance of natural environments in Okayama Prefecture by human beings has a very long history. The forest trees in the southern part of the prefecture had been cut down for getting firewood that was essential in tatara (a traditional method of steelmaking) since the Kofun Period (*ca* 1300 years ago). Natural forests were diminished and the sediments from the mountains were flowed into the Seto Inland Sea through three large rivers for more than several hundred years. The shallow sea bottom became broad tidal flats and people began to reclaim the land from the sea around the 7th century and a long channel between eastern Okayama and western Kurashiki was changed to a broad reclaimed land mainly for rice fields around Kojima Bay before 1800s. The reclamation works continued throughout the 19th and early 20th centuries, and in 1959, when the water gates at the mouth of Kojima Bay were closed eventually, more than 20 molluscan species of tidal flats and estuaries became extinct at once. Along with this, sand dredging was often carried out from the subtidal zone outside the Bay for landfilling and getting inexpensive material for concrete in 1960s–1970s (a period of high economic growth after the World War II), and most parts of subtidal molluscan communities were destroyed in those years. Furthermore, the middle parts of the Seto Inland Sea were suffered from serious water pollution at the same time. The sea facing Okayama Prefecture is situated at the innermost part of the Seto Inland Sea and the seawater is not easily exchanged with the outside one. Because of these multiple causes of environmental destructions, many molluscan species became extinct and threatened.

The Hatakeda Collection contains many excellent specimens of interesting species and we also revised them taxonomically. As the results, we give the following taxonomic changes herein:

**New combinations** – *Conradia doliaris* A. Adams, 1863 is transferred to *Dolicrossea* Iredale, 1924 (Elachisnidae) based on a new live material. *Rissoa bella* A. Adams, 1853 *sensu* Habe (1961) is re-identified as *Rissoa delicatula* Philippi, 1849, and it is recognized as a member of *Hyala* H. & A. Adams, 1852 (Iravadiidae). *Jouannisiella* [sic] *tsuchii* Yamamoto & Habe, 1959 is transferred to *Felaniella* Dall, 1899 (Ungulinidae).

**New or revived synonyms** – *Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838) (Thiaridae) *sensu* Hidaka & Kano (2014) is a junior objective synonym of *S. torulosus* (Bruguère, 1789) because both names were established for the same specimen illustrated by Chemnitz (1786). *Crassispira* (*Crassispirella*) *kandai* Kuroda, 1950 is regarded as the junior synonym of *Crassispira flavonodulosa* (E.A. Smith, 1879) (Pseudomelatomidae). *Sitalina japonica* Habe, 1964 (Euconulidae) is the junior synonym and also the junior secondary homonym of *Coneuplecta* (*Sitalina*) *japonica* Kuroda & Miyanaga, 1943. *Leiosolenus* (*L.*) *lischkei* Huber, 2010 (Mytilidae) is regarded as an unnecessary replacement name and invalid according to ICZN Art. 23.9.5. *Nipponomysella tanabensis* Habe, 1960 is recognized as the junior synonym of *Nipponomysella subelliptica* (Yokoyama, 1927) (Lasaecidae). *Fragum carinatum* (Lynge, 1909) was previously treated as the junior homonym of *Cardium carinatum* Bronn, 1831 and *C. carinatum* Deshayes, 1838 by Matsukuma (2000,

2017), but the combination of Lyngø's taxon with *Cardium* has never been published and is not homonymous with the ones by Bronn and Deshayes, thus *F. carinatum* (Lyngø) should be revived as a valid name.

Furthermore, the following three taxa have long been misidentified and possibly still undescribed: *Batillaria zonalis* (Bruguère, 1792) (Batillariidae) *sensu* Kiener (1841) and many subsequent authors; *Melampus sincaporensis* L. Pfeiffer, 1855 (Ellobiidae) by the Japanese authors is probably not conspecific with the species; *Sunetta (Sunemerøe) kirai* Huber, 2010 (Veneridae) contains two different species and one of them may be undescribed.

(Hiroshi Fukuda)



**Table 1.** 本書で使用した Class GASTROPODA Cuvier, 1797 腹足綱の分類体系。括弧で囲んだ群は Informal group 非公式群（単系統群でない）。

Subclass 亜綱	Cohort 区	Subcohort 亜区	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科	
PATELLOGASTROPODA Lindberg, 1986 笠型腹足	なし	なし	なし	PATELLIDA Ihering, 1876 カサガイ	Lottoioidea Gray, 1840 コガモガイ	Lottidae Gray, 1840 コガモガイ	
						Nacellidae Thiele, 1891 ヨメガカサ	
VETIGASTROPODA Salvini-Plawen, 1980 古腹足	なし	なし	なし	SEGUENZIIDA Haszprunar, 1986 ホウシユエビス	Seguenzioidea Verill, 1884 ホウシユエビス	Chilodontiidae Wenz, 1938 サンショウガイモドキ	
				LEPETELLIDA Moskalev, 1971 ウロタマヤドリガイ	Fissurelloidea J. Fleming, 1822 スカシガイ	Fissurellidae J. Fleming, 1822 スカシガイ	
					Haliotoidea Rafinesque, 1815 ミミガイ	Haliotidae Rafinesque, 1815 ミミガイ	
					Scissurelloidea Gray, 1847 クチキレエビス	Scissurellidae Gray, 1847 クチキレエビス	
				TROCHIDA Cox & Knight, 1960 ニシキウス	Trochoidea Rafinesque, 1815 ニシキウス	Trochidae Rafinesque, 1815 ニシキウス	
						Calliostomatidae Thiele, 1924 エビスガイ	
						Liottiidae Gray, 1850 ヒメカタベ	
						Phasianellidae Swainson, 1840 サラサバイ	
						Tegulidae Kuroda, Habe & Oyama, 1971 クボガイ	
						Turbinidae Rafinesque, 1815 リュウテン	
NERITIMORPHA Koken, 1896 アマオブネ形	なし	なし	なし	なし	Helicinoidea Férussac, 1822 ヤマキサゴ	Helicinidae Férussac, 1822 ヤマキサゴ	
					Hydrocenoidea Troschel, 1857 ゴマオカタニシ	Hydrocenidae Troschel, 1857 ゴマオカタニシ	
					Neritoidea Rafinesque, 1815 アマオブネ	Neritidae Rafinesque, 1815 アマオブネ	
						Phenacolepadidae Pilsbry, 1895 ユキスズメ	
CAENOASTROPODA Cox, 1960 新生腹足	(ARCHITAENIOGLOSSA Haller, 1892 原始紐舌類)	なし	なし	なし	Ampullarioidea Gray, 1824 リンゴガイ	Ampullariidae Gray, 1824 リンゴガイ	
					Cyclophoroidea Gray, 1847 ヤマタニシ	Cyclophoridae Gray, 1847 ヤマタニシ	
						Diplommatinidae L. Pfeiffer, 1857 ゴマガイ	
						Pupinidae L. Pfeiffer, 1853 アズキガイ	
					Viviparoidae Gray, 1847 タニシ	Viviparidae Gray, 1847 タニシ	
					SORBEOCONCHA Ponder & Lindberg, 1997 吸腔	CAMPANILIMORPHA Haszprunar, 1988 エンマノツノガイ	なし
	CERITHIIMORPHA Golikov & Starobogatov, 1975 オニノツノガイ	なし	なし	なし			
						Batillariidae Thiele, 1929 ウミニナ	
		Dialidae Kay, 1979 スズメハマツボ					
		Litiopidae Gray, 1847 ウキツボ					
	Potamididae H. & A. Adams, 1854 キバウミニナ						
	Scaliolidae Jousseau, 1912 スナモチツボ						
	Semisulcospiridae Morrison, 1952 カワニナ						
	Siliquariidae Anton, 1838 ミミズガイ						
	Thiaridae Gill, 1871 トゲカワニナ						
	Turritellidae Lovén, 1847 キリガイダマシ						

Table 1. (承前)。

Subclass 亜綱	Cohort 区	Subcohort 亜区	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科	
		HYPSOGASTROPODA Ponder & Lindberg, 1997 高腹足	なし	なし	Epitonioidae Berry, 1910 イトカケガイ	Epitoniidae Berry, 1910 イトカケガイ	
			なし	なし	Littorinoidea Children, 1834 タマキビ	Littorinidae Children, 1834 タマキビ	
			なし	なし	Naticoidea Guilding, 1834 タマガイ	Naticidae Guilding, 1834 タマガイ	
			なし	なし	Triphoroidea Gray, 1847 ミツクチキリオレ	Triphoridae Gray, 1847 ミツクチキリオレ	
						Cerithiopsidae H. & A. Adams, 1853 アミメケンカニモリ	
						Newtoniellidae Korobkov, 1955 コンボウカニモリ	
			なし	なし	Vermetoidea Rafinesque, 1815 ムカデガイ	Vermetidae Rafinesque, 1815 ムカデガイ	
			なし	"Rissoiform Clade" リソツボ型クレード (未命名の単系統群)	Rissooidea Gray, 1847 リソツボ	Rissoidae Gray, 1847 リソツボ	
						Barleeiidae Gray, 1857 チャツボ	
						Rissoinidae Stimpson, 1865 ホソスジチヨウジガイ	
						Zebinidae Coan, 1964 クリムシチヨウジガイ	
						Truncatelloidea Gray, 1840 クビキレガイ	Truncatellidae Gray, 1840 クビキレガイ
						Assimineidae H. & A. Adams, 1856 カワザンショウ	
						Bithyniidae Gray, 1857 エゾマメタニシ	
						Caecidae Gray, 1850 ミジンギリギリ ツツガイ	
						Elachisinidae Ponder, 1985 フロリダツボ	
						Iravadiidae Thiele, 1928 ワカウラツボ	
						Pomatiopsidae Stimpson, 1865 イツマデガイ	
						Stenothyridae Tryon, 1866 ミスゴマツボ	
						Tornidae Sacco, 1896 イソマイマイ	
			Vitrinellidae Bush, 1897 イソコハクガイ				
			Vanikoroidea Gray, 1840 シロネズミ	Vanikoridae Gray, 1840 シロネズミ			
				Eulimidae Philippi, 1853 ハナゴウナ			
				Hipponicidae Troschel, 1861 スズメガイ			
LATROGASTROPODA F. Riedel, 2000 賊腹足			なし	なし	Stromboidea Rafinesque, 1815 スイシヨウガイ	Strombidae Rafinesque, 1815 スイシヨウガイ	
			なし	なし	Xenophoroidea Troschel, 1852 クマサカガイ	Xenophoridae Troschel, 1852 クマサカガイ	
			なし	なし	Calyptraeidea Lamarck, 1809 カリバガサ	Calyptraeidae Lamarck, 1809 カリバガサ	
			なし	なし	Cypraeoidea Rafinesque, 1815 タカラガイ	Cypraeidae Rafinesque, 1815 タカラガイ	
						Eratoidae Gill, 1871 ザクロガイ	
						Ovulidae J. Fleming, 1822 ウミウサギ	
						Velutinidae Gray, 1840 ハナツトガイ	
なし	なし	Tonnoidea Suter, 1913 ヤツシロガイ	Tonnidae Suter, 1913 ヤツシロガイ				

Table 1. (承前)。

Subclass 亜綱	Cohort 区	Subcohort 亜区	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科
						Bursidae Thiele, 1925 オキニシ
						Cassidae Latreille, 1825 トウカムリ
						Ranellidae Gray, 1854 アヤボラ
				NEOGASTROPODA Thiele, 1938 新腹足	Volutoidea Rafinesque, 1815 ガクフボラ	Cancellariidae Forbes & Hanley, 1851 コロモガイ
					Buccinoidea Rafinesque, 1815 エゾバイ	Buccinidae Rafinesque, 1815 エゾバイ
						Columbellidae Swainson, 1840 タモトガイ
						Fasciolaridae Gray, 1853 イトマキボラ
						Melongenidae Gill, 1871 テングニシ
						Nassariidae Iredale, 1916 オリエレヨフバイ
						Pisaniidae Gray, 1857 ベッコウバイ
					Muricoidea Rafinesque, 1815 アッキガイ	Muricidae Rafinesque, 1815 アッキガイ
					Turbinelloidea Rafinesque, 1815 オニコブシ	Costellariidae MacDonald, 1860 ミノムシガイ
					Mitroidea Swainson, 1831 フデガイ	Mitridae Swainson, 1831 フデガイ
					Olivoidea Latreille, 1825 マクラガイ	Olividae Latreille, 1825 マクラガイ
						Ancillariidae Swainson, 1840 リュウグウボタル
					(所屬未詳)	Babyloniidae Kuroda, Habe & Oyama, 1971 バイ
					Conoidea J. Fleming, 1822 イモガイ	Borsoniidae Bellardi, 1875 シャジク
						Clathurellidae H. & A. Adams, 1858 コシボソクチキレツブ
						Drilliidae Olsson, 1964 ツノクダマキ
						Horacavidae Bouchet, Kantor, Sysoev & Puillandre, 2011 ツヤシャジク
						Mangeliidae P. Fischer, 1883 マンジガイ
						Pseudomelatomidae Morrison, 1966 モミジボラ
						Raphitomidae Bellardi, 1875 フデシャジク
						Terebridae Mörch, 1852 タケノコガイ
						Turridae H. & A. Adams, 1853 クダマキガイ
HETEROBRANCHIA Burmeister, 1837 異鰓	("Lower HETEROBRANCHIA" 原始的異鰓類)	なし	なし	なし	Architectonicoidea Gray, 1850 クルマガイ	Architectonicidae Gray, 1850 クルマガイ
					Mathildoidea Dall, 1889 タクミニナ	Mathildidae Dall, 1889 タクミニナ
	ACTEONIMORPHA Minichev, 1967 オオシイノミガイ形	なし	なし	なし	Acteonoidea d'Orbigny, 1843 オオシイノミガイ	Acteonidae d'Orbigny, 1843 オオシイノミガイ
	RINGIPLERA Kano, Brenzinger, Nützel, N.G. Wilson & Schrödl, 2016 マメウラシマ側	RINGICULIMORPHA Minichev & Starobogatov, 1979 マメウラシマ形	なし	RINGICULIDA Minichev & Starobogatov, 1979 マメウラシマ	Ringiculoidea Philippi, 1853 マメウラシマ	Ringiculidae Philippi, 1853 マメウラシマ
		NUDIPLERA Wägele & Willan, 2000 裸鰓	なし	PLEUROBRANCHIDA Deshayes, 1832 フシエラガイ	Pleurobranchoidea Gray, 1827 フシエラガイ	Pleurobranchidae Gray, 1827 フシエラガイ
						Pleurobranchacidae Pilsbry, 1896 ウミフクロウ

Table 1. (承前)。

Subclass 亜綱	Cohort 区	Subcohort 亜区	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科
				NUDIBRANCHIA Cuvier, 1814 裸鰓	Doridoidea Rafinesque, 1815 ドーリス	Dorididae Rafinesque, 1815 ドーリス Cadlinidae Bergh, 1891 カドリナウミウシ Discodorididae Bergh, 1891 ツブレウミウシ
					Polyceroidea Alder & Hancock, 1845 フジタウミウシ	Polyceridae Alder & Hancock, 1845 フジタウミウシ Okadaiidae Baba, 1930 オカダウミウシ
					Chromodoridoidea Bergh, 1891 イロウミウシ	Chromodorididae Bergh, 1891 イロウミウシ
					Onchidoridoidea Gray, 1827 ラメリウミウシ	Goniodorididae H. & A. Adams, 1854 ネコシタウミウシ
					Phyllidoidea Rafinesque, 1814 イボウミウシ	Dendrodorididae O'Donoghue, 1924 クロシタナシウミウシ
					Arminoidea Iredale & O'Donoghue, 1923 タテジマウミウシ	Arminidae Iredale & O'Donoghue, 1923 タテジマウミウシ
					Dendronotoidea Allman, 1845 スギノハウミウシ	Dotidae Gray, 1853 マツカサウミウシ Tethydidae Rafinesque, 1815 メリベウミウシ
					Fionoidea Gray, 1857 ヒダミノウミウシ	Trinchesiidae F. Nordsieck, 1972 フジエラミノウミウシ
					Flabellinoidea Bergh, 1889 サキシマミノウミウシ	Flabellinidae Bergh, 1889 サキシマミノウミウシ
					Aeolidioidea Gray, 1827 オオミノウミウシ	Aeolidiidae Gray, 1827 オオミノウミウシ Facelinidae Bergh, 1889 ヨツシミノウミウシ
					(所属未詳)	Madrellidae Preston, 1911 ショウジョウウミウシ
					(所属未詳)	Pseudovermidae Thiele, 1931 スナミノウミウシ
	TECTIPLEURA Schrödl, Jörger, Klussmann- Kolb & N.G. Wilson, 2011 被觸	EUOPISTHOBRANCHIA Jörger, Stöger, Kano, Fukuda, Knebelberger & Schrödl, 2010 真後鰓	なし	CEPHALASPIDEA P. Fischer, 1883 頭楯	Bulloidea Gray, 1827 ナツメガイ	Retusidae Thiele, 1925 ヘコミツララ Rhizoridae Dell, 1952 マメヒガイ Tomatinidae P. Fischer, 1883 オオコメツツガイ
					Cylichnoidea H. & A. Adams, 1854 クダタマガイ	Cylichnidae H. & A. Adams, 1854 クダタマガイ
					Haminocoeidea Pilsbry, 1895 ブドウガイ	Haminocidae Pilsbry, 1895 ブドウガイ
					Philinoidea Gray, 1850 キセワタ	Philinidae Gray, 1850 キセワタ Aglajidae Pilsbry, 1895 カノキセワタ
				APLYSIIDA Pelseneer, 1906 アメフラシ	Aplysioidea Lamarck, 1809 アメフラシ	Aplysiidae Lamarck, 1809 アメフラシ
		PANPULMONATA Jörger, Stöger, Kano, Fukuda, Knebelberger & Schrödl, 2010 汎有肺	SACOGLOSSA Ihering, 1876 囊舌	なし	Oxynooidea Stoliczka, 1868 ナギサノツツ	Juliidae E.A. Smith, 1885 ユリヤガイ
					Plakobranchoidea Gray, 1840 チドリミドリガイ	Plakobranichidae Gray, 1840 チドリミドリガイ Limapontidae Gray, 1847 ハダカモウミウシ
			SIPHONARIIDA Van Mol, 1967 コウダカカラマツ	なし	Siphonarioidea Gray, 1827 コウダカカラマツ	Siphonariidae Gray, 1827 コウダカカラマツ
			PYLOPULMONATA Teasdale, 2017 発端有肺	なし	Pyramidelloidea Gray, 1840 トウガタガイ	Pyramidellidae Gray, 1840 トウガタガイ
			HYGROPHILA Férussac, 1822 水棲	なし	Lymnaeidea Rafinesque, 1815 モノアラガイ	Lymnaeidae Rafinesque, 1815 モノアラガイ Bulinidae P. Fischer & Crosse, 1880 インドヒラマキ

Table 1. (承前)。

Subclass 亜綱	Cohort 区	Subcohort 亜区	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科
						Physidae Fitzinger, 1833 サカマキガイ
						Planorbidae Rafinesque, 1815 ヒラマキガイ
			EUPULMONATA Haszprunar & Huber, 1990 真有肺	ELLOBIIDA Van Mol, 1967 オカミミガイ	Ellobioidea L. Pfeiffer, 1854 オカミミガイ	Ellobiidae L. Pfeiffer, 1854 オカミミガイ
				SYSTELLOMMATOPHORA Pilsbry, 1948 収眼	Onchidioidea Rafinesque, 1815 ドロアワモチ	Onchidiidae Rafinesque, 1815 ドロアワモチ
					Veronicelloidea Gray, 1840 アシヒダナメクジ	Veronicellidae Gray, 1840 アシヒダナメクジ
						Rathousiidae Heude, 1885 ホソアシヒダナメクジ
				STYLOMMATOPHORA Schmidt, 1855 柄眼	Achatinoidea Swainson, 1840 アフリカマイマイ	Achatinidae Swainson, 1840 アフリカマイマイ
					Streptaxoidea Gray, 1860 ネジレガイ	Diapheridae Panha & Naggs, 2010 タワラガイ
					Punctoidea Morse, 1864 ナタネガイ	Punctidae Morse, 1864 ナタネガイ
						Helicodiscidae Pilsbry, 1927 イシノシタ
					Succineoidea Beck, 1837 オカモノアラガイ	Succineidae Beck, 1837 オカモノアラガイ
					Pupilloidea W. Turton, 1831 サナギガイ	Enidae B.B. Woodward, 1903 キセルモドキ
						Gastrocoptidae Pilsbry, 1918 スナガイ
						Pyramidulidae Kennard & B.B. Woodward, 1914 ナタネモドキ
						Truncatellinidae Steenberg, 1925 ミジンサナギガイ
						Valloniidae Morse, 1864 ミジンマイマイ
						Vertiginidae Fitzinger, 1833 キバサナギガイ
					Clausilioidea Gray, 1855 キセルガイ	Clausiliidae Gray, 1855 キセルガイ
					Arionoidea Gray, 1840 オオコウラナメクジ	Arionidae Gray, 1840 オオコウラナメクジ
						Philomycidae Gray, 1847 ナメクジ
					Limacoidea Lamarck, 1801 コウラナメクジ	Limacidae Lamarck, 1801 コウラナメクジ
						Agriolimacidae H. Wagner, 1935 ノコウラナメクジ
					Gastrodontoidea Tryon, 1866 コハクガイ	Gastrodontidae Tryon, 1866 コハクガイ
						Pristilomatidae Cockerell, 1891 エゾエンザ
					Trochomorpoidea Moellendorff, 1890 カサマイマイ	Euconulidae H.B. Baker, 1928 シタラ
					Helicarionoidea Bourguignat, 1877 ベッコウマイマイ	Helicarionidae Bourguignat, 1877 ベッコウマイマイ
					Helicoidea Rafinesque, 1815 マイマイ	Camaenidae Pilsbry, 1895 ナンバンマイマイ
Subclass 亜綱	Cohort 区	Subcohort 亜区	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科

Table 2. 本書で使用した Class BIVALVIA Linnaeus, 1758 二枚貝綱の分類体系。

Subclass 亜綱	Infraclass 下綱	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科			
PROTOBRANCHIA Pelseneer, 1889 原鰓	なし	なし	NUCULIDA Dall, 1889 クルミガイ	Nuculoidea Gray, 1824 クルミガイ	Nuculidae Gray, 1824 クルミガイ			
			SOLEMYIDA Dall, 1889 キヌタレガイ	Solemyoidea Gray, 1840 キヌタレガイ	Solemyidae Gray, 1840 キヌタレガイ			
PTERIOMORPHIA Beurlen, 1944 翼形	なし	なし	MYTILIDA Férussac, 1822 イガイ	Mytiloidea Rafinesque, 1815 イガイ	Mytilidae Rafinesque, 1815 イガイ			
			ARCIDA Gray, 1854 フネガイ	Arcoidea Lamarck, 1809 フネガイ	Arcidae Lamarck, 1809 フネガイ			
					Glycymerididae Dall, 1908 ベンケイガイ			
					Noetiidae Stewart, 1930 サンカクサルボオ			
					Parallelodontidae Dall, 1898 シコロエガイ			
				Limopsoidae Dall, 1895 シラスナガイ	Limopsidae Dall, 1895 シラスナガイ			
			OSTREIDA Férussac, 1822 カキ	Ostreoidea Rafinesque, 1815 イタボガキ	Ostreidae Rafinesque, 1815 イタボガキ			
				Pinnoidea Leach, 1819 ハボウキ	Pinnidae Leach, 1819 ハボウキ			
				Pterioidea Gray, 1847 ウグイスガイ	Pteriidae Gray, 1847 ウグイスガイ			
			PECTINIDA Gray, 1854 イタヤガイ	Pectinoidea Rafinesque, 1815 イタヤガイ	Pectinidae Rafinesque, 1815 イタヤガイ			
	Spondyliidae Gray, 1826 ウミギク							
	Anomioidea Rafinesque, 1815 ナミマガシワ	Anomiidae Rafinesque, 1815 ナミマガシワ						
LIMIDA Moore, 1952 ミノガイ	Limoidea Rafinesque, 1815 ミノガイ	Limidae Rafinesque, 1815 ミノガイ						
PALAEOHETERODONTA Newell, 1965 古異歯	なし	なし	UNIONIDA Gray, 1854 イシガイ	Unionoidea Rafinesque, 1820 イシガイ	Unionidae Rafinesque, 1820 イシガイ			
					Margaritiferidae Henderson, 1929 カワシンジュガイ			
HETERODONTA Neumayr, 1884 異歯	ARCHIHETERODONTA Taylor, Williams, Glover & Dyal, 2007 原始異歯	なし	CARDITIDA Dall, 1889 トマヤガイ	Carditoidea Férussac, 1822 トマヤガイ	Carditidae Férussac, 1822 トマヤガイ			
				Crassatelloidea Férussac, 1822 モシオガイ	Crassatellidae Férussac, 1822 モシオガイ			
	EUHETERODONTA Giribet & Distel, 2003 真異歯		ANOMALODESMATA Dall, 1889 異鞭帯	なし	Pandoroidea Rafinesque, 1815 ネリガイ	Pandoridae Rafinesque, 1815 ネリガイ		
						Lyonsiidae P. Fischer, 1887 サザナミガイ		
					Thracioidea Stoliczka, 1870 スエモノガイ	Thraciidae Stoliczka, 1870 スエモノガイ		
				Laternulidae Hedley, 1918 オキナガイ				
	IMPARIDENTIA Bieler, Mikkelsen, Collins, Glover, González, Graf, Harper, Healy, Kawauchi, Sharma, Staubach, Strong, Taylor, Tëmkin, Zardus, Clark, Guzmán, McIntyre, Sharp & Giribet, 2014 不完全歯		LUCINIDA Gray, 1854 ツキガイ	Lucinoidea J. Fleming, 1828 ツキガイ	Lucinidae J. Fleming, 1828 ツキガイ			
						(未命名の単系統群)	Gastrochaenoidea Gray, 1840 ツクエガイ	Gastrochaenidae Gray, 1840 ツクエガイ
						(未命名の単系統群)	Galeommatoidea Gray, 1840 ウロコガイ	Galeommatidae Gray, 1840 ウロコガイ
								Lasacidae Gray, 1842 チリハギ
		Basterotiidae Cossmann, 1909 イソカゼ						
ADAPEDONTA Cossmann & Peyrot, 1909 無面	なし	なし	Hiatelloidea Gray, 1824 キヌマトイガイ	Hiatellidae Gray, 1824 キヌマトイガイ				
			Solenioidea Lamarck, 1809 マテガイ	Solenidae Lamarck, 1809 マテガイ				

Table 2. (承前)。

Subclass 亜綱	Infraclass 下綱	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科
					Pharidae H. & A. Adams, 1856 ナタマメガイ
			CARDIIDA Férussac, 1822 ザルガイ	Cardioidea Lamarck, 1809 ザルガイ	Cardiidae Lamarck, 1809 ザルガイ
				Tellinoidea Blainville, 1814 ニッコウガイ	Tellinidae Blainville, 1814 ニッコウガイ
				Donacidae J. Fleming, 1828 フジノハナガイ	Donacidae J. Fleming, 1828 フジノハナガイ
				Psammobiidae J. Fleming, 1828 シオサザナミ	Psammobiidae J. Fleming, 1828 シオサザナミ
				Semelidae Stoliczka, 1870 アサジガイ	Semelidae Stoliczka, 1870 アサジガイ
				Solecurtidae d'Orbigny, 1846 キスタアゲマキ	Solecurtidae d'Orbigny, 1846 キスタアゲマキ
			(未命名の単系統群)	Chamoidea Lamarck, 1809 キクザル	Chamidae Lamarck, 1809 キクザル
			(未命名の単系統群)	Sphaerioidea Deshayes, 1855 ドブシジミ	Sphaeriidae Deshayes, 1855 ドブシジミ
			MYIDA Stoliczka, 1870 オオノガイ	Myoidea Lamarck, 1809 オオノガイ	Myidae Lamarck, 1809 オオノガイ
					Corbulidae Lamarck, 1818 シロクチベニ
				Pholadoidea Lamarck, 1809 ニオガイ	Pholadidae Lamarck, 1809 ニオガイ
					Teredinidae Rafinesque, 1815 フナクイムシ
				Dreissenidea Gray, 1840 カワホトトギス	Dreissenidae Gray, 1840 カワホトトギス
			(未命名の単系統群)	Mactroidea Lamarck, 1809 バカガイ	Mactridae Lamarck, 1809 バカガイ
					Mesodesmatidae Gray, 1840 チドリマスオ科
			(未命名の単系統群)	Ungulinoidea Gray, 1854 フタバシラガイ	Ungulinidae Gray, 1854 フタバシラガイ
			VENERIDA Gray, 1854 マルスダレガイ	Veneroidea Rafinesque, 1815 マルスダレガイ	Veneridae Rafinesque, 1815 マルスダレガイ
				Cyrenoidea Gray, 1840 シジミ	Cyrenidae Gray, 1840 シジミ
					Glaucnomidae Gray, 1853 ハナグモリ
				Glossoidea Gray, 1847 コウホネ	Kelliellidae P. Fischer, 1887 ケシハマグリ
				Arcticoidea Newton, 1891 アイスランドガイ	Trapezidae Lamy, 1920 フナガタガイ
Subclass 亜綱	Infraclass 下綱	Superorder 上目	Order 目	Superfamily 上科	Family 科

## サクラアオガイ

*Nipponacmea gloriosa* (Habe, 1944)

腹足綱 笠型腹足亜綱 カサガイ目 コガモガイ上科 コガモガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は波部 (1944a: 184, no. 12, figs 6, 8, as *Notoacmea* (*N.*) *gloriosa* サクラアヲガヒ)。T. Sasaki & Okutani (1993: 12–14, 32, 39–40, figs 15b, 16b, 17b, 18b, 19b, 20b, 21b; pl. 1, figs 5–6) が軟体部の形態も含めて詳細に再記載し、Higo *et al.* (2001: 12, fig. G44, as *Nipponacmea* [sic] *schrenckii gloriosa*) がホロタイプの写真を発表している。殻は低平な笠形で殻長約20–30 mm, 殻径約16–24 mm, 殻表は同属の他種の多くが濃緑色系の色彩を示すのと異なり、鮮やかな桃色の地に白い網目状の斑紋を呈するとともに、微細な顆粒をそなえた細肋を放射状に走らせる。内面は白色で光沢が強い。

写真： 備前市日生町頭島 外輪海水浴場西端, 2018年3月6日, OKCAB M28924, 福田撮影。殻長14.1 mm, 殻高2.9 mm。



**分布** タイプ産地は「高知縣吾川郡浦戸」。佐々木猛 (2017: 742, pl. 15, fig. 2) は本種の分布域を「男鹿半島・銚子から九州南部, 朝鮮半島, 中国。稀に北海道南部」としているが、銚子より北の宮城県本吉郡南三陸町志津川湾でも複数個体が得られている (福田未発表, 2009年7月, OKCAB 岡山大学農学部水系保全学研究室所蔵 M26245, M26460, M26665。以下, 本章で番号の前に「M」をつけた標本はすべて同様に OKCAB 所蔵標本である)。

**生息状況** 潮通しの良い海岸岩礁の潮間帯下部～潮下帯において、桃色の石灰藻に覆われた転石の下面に付着する。太平洋や日本海などの外洋に面した海岸に多く、瀬戸内海ではもともと棲息に適した場所が限られるため、稲葉 (1982: 75, no. 29, as *Notoacmea schrenckii gloriosa*) はその全域を通じて「少ない」としている。特に岡山県では2018年3月に備前市日生町頭島の外輪海水浴場西端にある岩礁で生貝1個体 (写真) が得られたのみで、それ以前に標本も文献記録もなく、著しく稀産である。本種が棲息可能な環境は島嶼部などに存在する可能性はあるが、そうだと決して広範囲でないことは明らかで、今後増加傾向に転じる兆しは今のところない。過去に存在したはずの個体群や棲息環境の大半が水質汚濁や海岸の護岸・埋め立てなどによって消失した結果、現在のように稀産となった可能性も大いに考えられる。

(福田 宏)



## ツボミ

*Patelloida conulus* (Dunker, 1861)

腹足綱 笠型腹足亜綱 カサガイ目 コガモガイ上科 コガモガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Dunker (1861: 24, no. 112, pl. 3, fig. 19)。 *Patelloida* (*Asteracmea*) *lampanicola* Habe, 1944: 177–178, no. 5 は新参異名。 To. Nakano & Ozawa (2005: 363, figs 1C, 5A–D, 6C–D) が分子系統解析も含めて詳細に再記載し、ネオタイプの指定と図示も行っている。また Higo *et al.* (2001: 11, fig. G27s) は *P. (A.) lampanicola* のホロタイプの写真を公表した。殻は螺塔の著しく高い笠形で、殻長約 6.5 mm、殻径約 5.5 mm、殻高約 5.0 mm、殻頂がほぼ中央に位置する高円錐形をなし、厚質で、殻表は不透明灰白色の地に褐色の細かい網目模様と放射彩をもつ。軟体の臙面は淡緑色ないし淡黄色。

写真： 備前市日生町鹿久居島現寺（ウミナナ殻上、甚だしく螺塔の高い個体）、2018年3月6日、多留聖典撮影。



**分布** タイプ産地は「Japon」。 *Patelloida* (*Asteracmea*) *lampanicola* は「和歌山縣田邊灣内島」から記載された。陸奥湾北部及び山口県北長門海岸から九州、沖縄島（羽地内海、塩屋湾）、朝鮮半島に分布する（福田・木村昭, 2012; 16, text-fig.）。

**生息状況** 内湾奥の砂泥干潟中～下部の表層に棲息するウミナナ・ヘナタリ等の生貝の殻表に付着することが多いが、棲息密度が高い場合は表面が平滑な岩盤・礫や他の貝類の死殻上などにも見られる。かつては全国的に普通に見られ、近年も多産する場所は決して少なくはないが、ウミナナ類が絶滅または減少した地域では本種も確認できなくなっている。その代表例が東京湾及び瀬戸内海中央部であり、特に岡山県ではイボウミナナやヘナタリが絶滅し、ウミナナも危機的状況に追い詰められたのと同調して本種も姿を消していた。畠田和一コレクションには「[岡山市南区飽浦] 甲浦」(#5619) 産の標本2個体が含まれるが、その後は長らく県内から再発見されず、ようやく2018年3月に備前市日生町鹿久居島現寺の砂泥干潟でまとまった個体群が見出された（写真；OKCABM28925）。しかし今なお棲息範囲は局限され、危機的状況を脱したとは言えない。ホストであるウミナナ類の個体群の復活も芳しくないことから、本州の浮游幼生が近隣他県から岡山県に辿り着いたとしても、多くの場合定着に成功できず個体数の増加に至らないものと推測される。

（福田 宏）

## テンガイ

*Diodora quadriradiata* (Reeve, 1850)

腹足綱 古腹足亜綱 ウロダマヤドリガイ目 スカシガイ上科 スカシガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 県内では古い死殻が採集されるのみで棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1850 in 1849b–1850: pl. 14, sp. 108, as *Fissurella quadriradiata*)。シタイプ 2 個体の写真を Higo *et al.* (2001: 16, fig. G165) が公表している。*Fissuridea elaborata* Sowerby III, 1914: 37, pl. 2, fig. 8 は新参異名。別名コムソウガイ。殻長約 15 mm, 殻高約 5.5 mm, 殻頂がやや前方に寄った笠形で、殻高は高く、硬質堅固。殻頂には前後 2 ヶ所で縊れて鍵穴状をなす縦長の頂孔が開く。殻表は太い放射肋と成長輪肋が交わって格子目状となる。殻色は白色の地に緑褐色の幅広い十字形斑紋をもち、肋上の顆粒の一部が桃色となる個体もある。内面は白色。軟体はクリーム色で、中庸な長さの頭触角をもち、口吻や腹足の側面に褐色斑を散在し、外套縁は白点で彩られたカーテン状の襞を巡らす (A. Adams, 1864b: 144, as *Glyphis quadriradiata*; 高重, 2019: 32–33, text-figs)。かつて Pilsbry (1895: 108), 岩川 (1909: 118; 1919: 9), Yokoyama (1924: 36, no. 62, pl. 2, fig. 9), 波部 (1945a: 1–2, no. 3, fig. 8) などが本種に同定していた *Diodora rueppellii* (Sowerby I, 1835: 128, as *Fissurella Ruppellii* [sic]) や *D. ticaonica* (Reeve, 1850 in 1849b–1850: pl. 14, sp. 107, as *Fissurella Ticaonica*) はそれぞれ、日本には産しない別種である。



写真： 浅口市寄島町青佐鼻，2002年12月4日，OKCAB M28676，福田撮影。殻長 12.2 mm，殻高 5.4 mm。

**分布** タイプ産地は「Bais, Island of Negros, Philippines」(フィリピン・ネグロス島のバイス)。*Fissuridea elaborata* のタイプ産地は「Oshima」(黒田他, 1971: 12 (英文) は「奄美大島」と解釈している)。房総半島及び能登半島以南、小笠原諸島、南西諸島、朝鮮半島南部、中国大陸沿岸、インド-太平洋に広く分布する (Cernohorsky, 1978: 29, pl. 4, fig. 3; Higo *et al.*, 1999: 43, no. G165; 関他, 2004: 89, fig. 73; Lü, 2004: 13, pl. 005, fig. A)。

**生息状況** 主に太平洋や日本海など外洋の開放的な海岸において、潮間帯下部から潮下帯の岩礁転石下に産する。本県以外の瀬戸内海でも潮流が速く海水の入れ替わりが盛んな湾口部や海峡部周辺に見られ、死殻が砂浜に打ち上げられたり、海底の砂中に見出されることは少なくない (e.g. 福田, 1992: 49, pl. 3, fig. 23; 濱村, 2004: 21, text-figs; 瀬尾・Tanangonan, 2014: 90, no. 5)。しかし本県でも近隣他県と同様に産出して不思議はないにもかかわらず、実際には周縁の一部が破損した古い死殻 1 個 (写真) が 2002 年に浅口市寄島町青佐鼻に打ち上げられていたのが現時点で唯一の産出例であり、それ以前も以後も他の標本や文献記録は知られていない。本種と同様に外洋的な環境を好む他の種 (クロマキアゲエビス、ベニバイなど) が過去に記録はあるものの現在はごく稀か全く見られないことを考えると、本種もそれらの種と同様に絶滅またはそれに近い状況にあると考えられる。

(福田 宏)

## セムシマドアキガイ

*Rimula cumingii* A. Adams, 1853

腹足綱 古腹足亜綱 ウロダマヤドリガイ目 スカシガイ上科 スカシガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。絶滅またはそれに近い状態にある可能性もある。

**形態** 原記載は A. Adams (1853d: 227, no. 2, as *Rimula Cumingii*)。のちに A. Adams & Sowerby II (1863: 210, no. 1, pl. 245, *Rimula*, fig. 1), Sowerby II (1873b: sp. 2, pl. 1, fig. 2), Pilsbry (1891 in 1890–1891: 271, pl. 63, fig. 9, as *Emarginula (Rimula) cumingii*) が図示し, Yen (1942: 175, pl. 11, fig. 4) と Higo *et al.* (2001: 15, fig. G131) がホロタイプの写真を公表した。殻長約 5.0 mm, 殻径約 3.3 mm, 殻頂が後方に寄った笠形で、殻の前方の正中線上に細長い孔をもち、殻表は多数の明瞭な成長脈と放射肋が交わって格子目状となり、薄質。殻色は死殻では白いが生時は殻表が赤茶褐色の沈着物で覆われる。軟体は白色で細長い一対の頭触角をもつ。

**分布** タイプ産地は「Eastern Seas」(東洋の海)。茨城県北部及び佐渡から九州西岸、小笠原諸島父島に分布する(福田, 2012: 18, text-fig.)。A. Adams & Sowerby II (1863) と Sowerby II (1873b) はいずれも本種を *R. echinata* Gould, 1859: 163 (タイプ産地は「Gaspé [= Gaspar] Straits」(ガスパル海峡, インドネシア・スマトラ東部) と同種としており, その通りならば本種の分布域はインドネシアまで広がるが, Gould (1859) 自身が「標本は失われた」「*R. propinqua* A. Adams と同種かもしれない」と心許ない記述をしており, 真相は明らかでない。*R. propinqua* A. Adams, 1853d: 227, no. 4 は本種と同時に「Catanan, Philippines」から記載されたが, 上記の A. Adams & Sowerby II (1863) や Sowerby II (1873b) は本種とは異なる種として図示している。

**生息状況** 内湾湾口部の平坦な礫干潟において、砂に埋もれた転石下のやや還元化して赤褐色に染まった環境に見られ、スカシエビス、ヒナユキスズメ、スジウネリチョウジガイ、アラウズマキ等と同所的に産することが多い。瀬戸内海においては香川・広島・山口各県において近年も生貝が確認されている(福田, 2001b: 18, text-fig.; 2012; 濱村, 2004: 20, 185, text-figs; 瀬尾・Tanangonan, 2014: 90, no. 4, pl. 1, fig. 2)。報告例は全国的に見ても少なく、潮下帯以深での棲息状況は明らかでない。岡山県では矢野 (1979: 2) が岡山市中区新岡山港に揚げられた浚渫砂中からスカシエビス等とともに死殻を採集したと報じたのが唯一の記録である。また、岡大玉野臨海 (1978: 160) の種名リストの中に含まれている「ヤブレガサ [*Puncturella pelex* A. Adams, 1860]」は本種を指していたのかもしれない。それら以外には一切確認例がないため、県内ではスカシエビスと同様に護岸・埋め立て・干拓・水質汚濁・海砂採取などの環境悪化によって既に絶滅したか、それに近い状態にあると考えられる。

(福田 宏)

## スカシエビス

*Sukashitrochus carinatus* (A. Adams, 1862)

腹足綱 古腹足亜綱 ウロダマヤドリガイ目 クチキエビス上科 クチキエビス科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。絶滅またはそれに近い状態にある可能性もある。

**形態** 原記載は A. Adams (1862c: 346, no. 1, as *Scissurella carinata*)。Higo *et al.* (2001: 14, fig. G83) がシタイプの写真を示したのち、Geiger (2012: 612–616, figs 476–478) が奥尻島産の標本をレクトタイプに選定した。殻長約 1.5 mm, 殻径約 2.0 mm, 螺塔は低く、薄質で白色、体層に 6~7 本の強い螺肋を巡らし、肩部と周縁の螺肋は著しく強くレール状で、殻底の数本は細い。殻口外唇後方に生じる切れ込みが殻口縁で癒合し、その後方の体層上で零形の孔を形成する。臍孔は狭いが明瞭に開く。軟体は無色半透明で、楡の歯状に棘を並べた細長い一対の頭触角及び数本の上足突起をもつ。蓋は角質で円く、核を中央にもつ多旋型で、足の左側に載る。

**分布** タイプ産地は「Okosiri; 35 fathoms. Seto-Uchi; 16 fathoms. Gotto; 71 fathoms」(北海道奥尻島；瀬戸内海；長崎県五島列島)。北海道奥尻島から九州、沖縄、朝鮮半島、フィリピン、フィジーに分布する (Geiger, 2012; 福田, 2012: 16, text-fig.)。Horst & Schepman (1908: 487) や E.A. Smith (1910: 207–208, pl. 8, fig. 3, as *Schismope carinata*) は南アフリカから本種を報告しているが、それらの記録は Herbert (1986: 629–631; 2015: 13–14) によって別種 *Sukashitrochus dorbignyi* (Audouin, 1826) (= *Sukashitrochus maraisi* Herbert, 1986) の誤同定であるとされた。

**生息状況** 棲息深度の範囲は潮間帯から水深 50 m まで (Geiger, 2012) とも 100 m まで (長谷川, 2017: 771, pl. 41, fig. 2) とも言われるが、瀬戸内海においては内湾湾口部の潮通しがよく透明度の高い海水に洗われる海岸礫地 (干潟状の平坦な礫地を含む。河本 (1966: 40) は本種が好むそのような環境を「礫原地」と呼んだ) の潮間帯上~下部に生貝が見られ、砂中に完全には埋もれずに底面が浮き気味で、多少還元的となって赤茶褐色に彩られた転石下面に付着する (Fukuda *et al.*, 2000: 123, 178, no. 23, figs 4g, 5g; 福田, 2012)。潮間帯で生貝が確認される場所は全国的に見ても少なく、海岸の護岸などによって多くの個体群が失われた可能性が指摘されている。岡山県では矢野 (1979: 2) が岡山市中区新岡山港に揚げられた浚渫砂中より「50 個体余り」の死殻を採集したと報じたのが唯一の記録である。それ以降は一切確認例がなく、棲息に適した場所も現時点で知られていないため、県内では護岸・埋め立て・干拓・水質汚濁・海砂採取などの環境悪化によって既に絶滅したか、それに近い状態にあると考えられる。

(福田 宏)

## キバベニバイ

*Alcyna ocellata* A. Adams, 1860

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1860a: 408) で、のちに A. Adams (1868a: 43, no. 1, pl. 4, fig. 8) が自ら図示している。以下は新参異名：*Alcyna lepida* A. Adams, 1860a: 408; *A. rubra* Pease, 1861: 436 (Kay, 1965: 62, pl. 7, figs 5–6 がレクトタイプを指定して図示、さらに Robertson, 1985: 20, pl. 11 が再図示); *A. kuhnsi* Pilsbry, 1917: 211, pl. 15, fig. 9; *A. kuhnsi humerosa* Pilsbry, 1917: 211–212, pl. 15, fig. 8; *A. kapiolaniae* Pilsbry, 1917: 212, pl. 15, fig. 3。殻長約 3 mm, 殻径約 2 mm, 螺塔の高い卵円錐形で螺層はよく膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。薄質で殻表は光沢があり、殻底には微細な螺溝を巡らす。殻口軸唇には鋭い牙状の突起がある。色彩は灰色から褐色、鮮やかな紅色まで著しく変異に富み、螺状色帯を巡らしたり叢雲模様を散らす個体もある。蓋は角質で薄く半透明の黄色、円く多旋型。軟体は細長い一対の頭触角に加え、左右の体側に 4 対の長い上足突起を並べる (Hickman & McLean, 1990: 104, fig. 62B; 佐々木猛, 2017: 750, pl. 22, fig. 12)。

写真： 備前〔瀬戸内市〕牛窓, 1957 年, 畠田和一コレクション #5620, 福田撮影。殻長 3.7 mm, 殻径 2.8 mm。



**分布** タイプ産地は「Sea of Japan; off Talen-Sima; dredged from 25 fathoms」(日本海, [恐らく] 山形県飛島, 25 尋, ドレッジ)。 *Alcyna lepida* も同所から同時に記載された。 *A. rubra* は「Sandwich Islands」(ハワイ諸島), *A. kuhnsi* は「Off Waikiki (between Honolulu and Diamond Head) in 25 to 50 fathoms」(ワイキキ沖 (ホノルルとダイヤモンドヘッドの間), 25–50 尋), *A. kuhnsi humerosa* は「Waikiki beach」(ワイキキビーチ), *A. kapiolaniae* は「Waikiki beach, near Honolulu; Haleiwa, on the west coast of Oahu」(ホノルル近郊のワイキキビーチ, 及びオアフ島西岸ハレイワ) がそれぞれタイプ産地であり、ハワイ諸島だけで 4 つのタクサが創設されたが、現在は全て同種の変異と考えられている (Kay, 1979: 52, fig. 14K–L, as *Thalotia ocellata*)。房総半島・男鹿半島以南、奄美大島, 朝鮮半島, 小笠原～マリアナ諸島, ハワイ諸島に分布する (Kay, 1979; Higo *et al.*, 1999: 60, no. G373; 関他, 2004: 105, fig. 128)。

**生息状況** 暖流の影響下にある太平洋・日本海南西部に広く見られ、潮間帯下部から潮下帯の岩礁に繁茂した海藻上に多産する。瀬戸内海でも全域を通じて普通に産し (稲葉, 1982: 77, no. 50), そもそもキバベニバイという和名は淡路島産個体に対して与えられたものである (矢倉, 1932: 25, no. 306)。しかし岡山県ではこれまで信頼に足る文献記録はなく、畠田和一コレクション中の「備前〔瀬戸内市〕牛窓」(「稲葉 [明彦] 氏同定 1957.」, #5620 (写真) 及び 5621 (part), 各 1 個体) が唯一の産出の証拠である。それ以降は死殻すら確認例がない。広島県芸南地方では近年も棲息が認められており (濱村, 2004: 29, text-fig.), 岡山県での記録の極端な少なさには際立っている。戦後の海岸の過剰な改変や環境悪化によって、本種が棲息可能な場所がことごとく失われたことは疑いがなく。

(福田 宏)

## イワカワチグサ

*Cantharidus urbanus* (Gould, 1861)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Gould (1861: 19, as *Ziziphinus urbanus*)。ホロタイプを Johnson (1964: 163, pl. 18, fig. 3) 及び Higo *et al.* (2001: 21, fig. G368) が図示している。*Gibbula eucozmia* Pilsbry, 1895: 96, pl. 8, fig. 4 及び *G. vittata* Pilsbry, 1903: 69–70 は新参異名 (どちらもシムタイプを Higo *et al.*, 2001: 20, fig. G368s, as *Iwakawatrochus eucozmus* and *I. vittatus* が図示)。別名シモフリチグサ、クチベニチグサ。殻長約 4 mm, 殻径約 3.5 mm, 円錐形で螺層の膨らみは弱く、周縁は鈍く角張る。殻表は明瞭で太さのほぼ均一な螺肋を規則正しく巡らす。褐色の地に縫合下から白い稲妻模様を走らせ、周縁上には白点列を並べ、肋間も白い。臍孔は狭いが明瞭に開く。殻口内は真珠光沢がある。蓋は角質で薄く、半透明の淡褐色、円く多旋型。本種の属の所属は近年の文献のほぼ全てが *Iwakawatrochus* Kuroda & Habe, 1954: 85 (タイプ種は *G. vittata* シモフリチグサ, すなわち本種) としているが、ここでは MolluscaBase (2018) での扱いに従った。

写真： 備中〔笠岡市〕飛島、島田和一コレクション #5622, 福田撮影。殻長 4.7 mm, 殻径 4.5 mm。



**分布** タイプ産地は「Kagosima Bay」(鹿児島湾)。*Gibbula eucozmia* は「Hirado; N. shore of Prov. Tango」(長崎県平戸；丹後國〔現・京都府〕北岸)。*G. vittata* は「Riukiu I.」(琉球諸島)からそれぞれ記載された。房総半島・男鹿半島以南、南西諸島、朝鮮半島に分布する(西村正・渡部景, 1943: 64, no. 23, as *Vanitrochus eucozmus* クチベニチグサ; Higo *et al.*, 1999: 59, no. G368; 関他, 2004: 105, fig. 126; 久保, 2014: 281, 304, pl. 8, fig. 5; 322)。

**生息状況** キバベニバイやヒナシタダミと同様、太平洋側・日本海側ともに西南日本の潮間帯下部から潮下帯に普通に見られるが、岩礁よりむしろ砂泥底に生じたアマモ場の海草上などに多く、そのため内湾環境においても場所によっては多産する。瀬戸内海では全域を通じて普通に産し(稲葉, 1982: 78, no. 54), 例えば広島県芸南地方では近年も棲息が確認されている(濱村, 2004: 26, text-fig.)。通常は砂浜に殻が打ち上げられるのに加えて、潮下帯でのドレッジや採泥器などでも容易に採集できる種であり、本種がレッドリストに取り上げられるのは他県では到底考えられないことである。しかし岡山県では島田和一コレクション中の「備中〔笠岡市〕飛島」(12 個体, #5622; 写真)だけが産出の確かな証拠であり、それ以外は信頼できる文献記録も標本も存在せず、過去 20 年間で破片一つすら見出されていない。この状況はもはや異様というほかなく、1960 年代以降の本県における海底環境の悪化がいかに凄まじいものであったかを反映している。本種は掛け流し式の水槽内でも容易に次世代が出現することから、恐らく直達発生か、または浮游幼生期がごく短いと考えられる(久保未発表)。したがって必然的に分散能力は著しく低いとみられ、一旦水質悪化等で繁殖循環が絶たれると、たとえ隣接海域に個体群が維持されていたとしても新規加入は望めない。岡山県の本種はもはや絶滅し、今後復活する兆しも今のところない。

(福田 宏・久保弘文)

## クロマキアゲエビス

*Clanculus microdon* A. Adams, 1853

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウス目 ニシキウス上科 ニシキウス科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1853a: 184, 162, no. 43)。 *Clanculus microdon* var. *ater* Pilsbry, 1901c: 200–201 は新参異名。 *C. microdon*, *C. m.* var. *ater* とともにシタイプの写真を Higo et al. (2001: 20, no. G43, G43s) が公表している。別名クロナツモモ。殻長約 12 mm, 殻径約 15 mm, 螺塔の低い蝸牛形で硬質堅固, 殻表は紫がかった黒色 (稀に薔薇色) を呈し, 白色の稲妻模様や斑点をもつ個体もある。殻頂は鮮やかな桃色。殻表は明瞭な顆粒を載せた螺肋を多数巡らす。臍孔は白く, 広く開いてその周縁は強い疣状突起によって歯車状を呈する。殻口内部は鈍い真珠光沢をもち, 外唇内部は螺肋で刻まれる。蓋は円く, 茶色の角質で多旋型。軟体は黒色の地に白斑を散らし, 細長い頭触角のほか, 腹足の側面に4対の長い上足突起をもつ。

写真: 備前〔倉敷市〕下津井, 畠田和一コレクション #51, 福田撮影。殻長 9.7 mm, 殻径 12.0 mm。



**分布** タイプ産地は「―?」(不詳)。 *Clanculus microdon* var. *ater* のタイプ産地は「Hirado, Hizen」(長崎県平戸)。房総半島及び山形県から九州南部, 韓国に分布する (関他, 2004: 101, fig. 112-1–2; 佐々木猛, 2017: 748, pl. 21, fig. 2)。沖縄からも記録があるが (e.g. 黒田, 1960: 4, no. 98, as *C. (Mesoclanculus) microdon ater*), それは熱帯太平洋に広く分布する近縁の別種 *C. denticulatus* (Gray, 1827) (= *C. samoensis* (Hombron & Jacquinot, 1848), *C. atropurpureus* (Gould, 1849)) テツイロナツモモの誤同定かもしれない。

**生息状況** 内湾湾口部や海峡部など, 潮通しが良く透明度の高い海水に洗われる海岸の潮間帯下部～潮下帯の岩礁や礫地において, 礫間や転石下に棲む。瀬戸内海では淡路島周辺など湾口部での産出が古くから知られ (岩川, 1909: 103, as *Trochus (Clanculus) microdon ater*; 矢倉, 1932: 24, no. 291, as *C. m. ater* など), 広島県芸南地方では近年も棲息が確認されている (濱村, 2004: 25, text-figs) が, 岡山県では少なく, 対岸の香川県でも「燈灘のみで古い死殻が確認された」にとどまる (瀬尾・Tanangonan, 2014: 91, no. 23, pl. 1, fig. 4)。窪田 (1962: 12, no. 141, as *C. (Mesoclanculus) m. ater*) は福井市郷土博物館 (現・福井市自然史博物館) 所蔵の古川田溝コレクション中に「備前〔倉敷市〕下津井」産標本が含まれていることを挙げ, また畠田和一コレクションにも「下津井」産2ロット (各2個体; #51: 写真; #5971) が現存する。古川と畠田は互いに標本を交換していたため, それらの標本は全て畠田が下津井で得た同一ロットに由来するのかもしれない。それ以外の文献記録は, 岡大玉野臨海 (1978: 160) が目録中に和名を含めているに過ぎない。近年は2011年に笠岡諸島真鍋島南東岸の潮間帯転石地で複数の生貝が確認された (森下裕和私信) のが唯一の産出例である。島嶼部にはさらに個体群が残存している可能性はあるが, 本土沿岸では過去に存在した個体群や棲息環境の大半が, 海岸の護岸・埋め立てや水質汚濁などによって消失した可能性が高い。

(福田 宏)

## ヒナシタダミ

*Conotalopia ornata* (Sowerby III, 1903)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Sowerby III (1903: 499–500, as *Minolia ornata*)。 *Trochus* (*Minolia*) *angulatus* Tokunaga, 1906: 30, no. 78, pl. 2, fig. 5 は新参異名。 Yokoyama (1922: 111, no. 164, pl. 5, fig. 20, as *Solariella angulata*) が Tokunaga (1906) の学名に同定して報告した個体は本種ではなく別種カドコシダカシタダミで、のちに新名 *Minolia subangulata* “Oyama (MS.)” Kuroda & Habe, 1952: 12, 66 が与えられた。ヒナシタダミは殻長・殻径とも約 3 mm、独楽形、螺層には肩部と周縁がそれぞれ鋭く角張る。螺層上部の殻表は螺脈と縦肋が交叉して布目状となるが、体層では低く幅広い螺肋のみとなる。生貝では殻表に青緑色を帯びた真珠光沢があるが、死殻では失われる。白地に明るい褐色の不規則な紋様を散らす個体が多いが、ほぼ全体が白色で殻頂のみ褐色となる場合もある。臍孔は大きく開き、周囲に複数の螺肋を巡らす。殻口内は強い真珠光沢がある。蓋は角質で薄く、半透明の淡褐色、円く多旋型。歯舌を波部 (1958d: 45, no. 5; 54, pl. 2, fig. 4) が図示している。



写真： [笠岡市] 白石島、畠田和一コレクション #5629, 福田撮影。殻長 1.8 mm, 殻径 2.0 mm。

**分布** タイプ産地は「Hirado, Hizen」(長崎県平戸)。*Trochus* (*Minolia*) *angulatus* は「Ôji」(東京都北区王子) から記載された後期更新世東京層の化石である。竹之内 (1986: 52–53, text-figs) 以降に刊行された文献の多くが本種の分布北限を「北海道南部」としているが、筆者は北海道での確実な記録を見出すに至っていない。戸羽 (2009: 15, fig. 46) が本種として図示した岩手県大槌湾産の個体は螺層が角張らず、種名不詳の別種である。秋田県男鹿半島船越では西村正・渡部景 (1943: 64, no. 30, as *Minolia* (*Conotalopia*) *ornata*) が記録しており、同地では近年も採集されている (2007 年, OKCAB M21025)。南西諸島からは知られておらず、九州までと朝鮮半島に分布する (Higo *et al.*, 1999: 67, no. G475; 関他, 2004: 108, fig. 146)。

**生息状況** 太平洋側・日本海側ともに西南日本の潮下帯砂底に普通に産する種で、外洋に面した清浄な砂浜に多数の死殻が打ち上げられることが多い。瀬戸内海でも紀伊水道・豊後水道それぞれの北端部周辺では稀ではない (稲葉, 1982: 79, no. 67)。モミジガイ類などの海星類が好んで捕食し、その消化管から採集されることがある (福田, 1992: 51, pl. 41, fig. 60)。そのような普通種である本種も、岡山県では畠田和一コレクション中の「[笠岡市] 白石島」産 (1 個体, #5629; 写真) が唯一の産出の証拠であり、それ以外に信頼に足る記録はない。キバベニバイやイワカワチグサなどと同様、他県ではレッドリストにふさわしくない種であるが、岡山県では既に絶滅した可能性が高い。汚水の流入による富栄養化や赤潮の頻発、海底の砂の過剰採取による陥没と貧酸素化などが、かつて県内に存在していた本種の個体群に致命的な打撃を与えたものと推察される。イワカワチグサの項に記したのと同様の理由に加えて、本種は分布域が温帯域に限られていることから分散能力はイワカワチグサより一層低いと考えられ、個体群が一旦壊滅してしまった岡山県では、近隣海域からの新規加入による復活は望むべくもない。

(福田 宏・久保弘文)



## クローズケガイ

*Monodonta neritoides* (Philippi, 1850)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Philippi (1850: 170, as *Trochus neritoides*; これまでほぼ全ての文献が記載年を「1849」としているが、正しくは1850年3月刊行である) で、のちに Philippi (1855 in 1846–1855: 303–304, no. 395, pl. 44, fig. 4) が図示し、その図は Pilsbry (1889 in 1889–1890: 106–107, pl. 34, figs 20–22) に転載された。和名の由来は「黒漬貝」なので「クローズケガイ」と記すのは誤り。別名コシダカクローズケ (村岡, 1972: 20, no. 148)。殻長約12 mm、殻径約11 mm、多少扁圧されたドーム形で、殻頂は小さく、縫合の縊れは弱い。殻表は低く幅広い螺肋を巡らすが、不明瞭でほぼ平滑に見える個体もある。螺肋上で濃い緑色と暗赤色の斑点を交互に石畳状に並べる点が本種の際立った特徴で、高重 (2019: 54, text-figs) が図示しているような美しい個体も現れる。同様の色彩は同属の近似種 *Monodonta perplexa* Pilsbry, 1889 クビレクローズケには見られない。殻口内唇は白く光沢ある滑層が発達し、軸唇には強い牙状の突起がある。殻口内は真珠光沢をもつ。臍孔はない。蓋は角質で薄く、半透明の黄色、円く多旋型。軟体の頭部-腹足は背面の大半が黒色素で覆われ、一部は檸檬色を呈し、足の辺縁は二重の黒帯で縁取られる。頭触角は細く鞭状で白地に数本の黒条が走り、左右の体側に細長い上足突起を数本もつ。

写真： 笠岡、畠田和一コレクション #53, 福田撮影。殻長11.9 mm、殻径12.8 mm。



**分布** タイプ産地は「？」とのみ記され当初は産地不詳であったが、A. Adams (1870b: 176) が「Dagelet Island」(韓国鬱陵島)、Lischke (1871b: 87) が「Jokohama」(横浜, Martens 採集)、Dunker (1882: 140, pl. 6, figs 22–23) が「insula Hachijō-shima」(八丈島) から相次いで報告した。八田・佐々木望 (1910: 96, no. 50) は「函館」から記録し、北海道南部が分布の北限で、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国大陸沿岸、香港、台湾に分布する (村岡, 1972; Takenouchi, 1985: 415, 417; Higo *et al.*, 1999: 58, no. G356; 関他, 2004: 103, fig. 120, as *Diloma* (*D.*) *piperinus* (これは別種カザリクローズケの学名であり誤同定。またこの図鑑が本種としている個体はクビレクローズケ); Dong, 2004: 23, pl. 009, fig. O)。沖縄県からも記録はあるが (岡田他, 1959: 129, no. 63; 黒田, 1960: 3, no. 85)、今のところ沖縄島に確実に産するのはクビレクローズケであり (久保・黒住, 1995: 31, fig. 7)、本種も分布しているか否かは改めて検討が必要である。

**生息状況** 開放的な海岸の岩礁潮間帯汀線附近において、表面が滑らかで常に波をかぶって濡れている黒い玉石の表層を滑走するごとく迅速に這い回る。近縁種クビレクローズケが外洋に面した波当たりの激しい海岸に普通に見られるのに対して、本種は湾口周辺の多少波の穏やかな場所に特異的で、全国的に見るとクビレクローズケより格段に産地が少ないが、瀬戸内海のような内湾ではクビレクローズケは紀伊水道・豊後水道それぞれの北端を除いてほとんど見られず、例えば広島県芸南地方では本種のみが確認されている (濱村, 2004: 25, text-fig.)。多くの場合 *Japeuthria ferrea* (Reeve, 1847) イソニナが随伴する。瀬戸内海の最も奥まった位置にある岡山県の海岸ではもともと本種は少なかったものと推察され、文献記録もない。畠田和一コレクションには「笠岡」(4個体, #53; 写真; 6個体, #4479) の2ロットが現存し、それらの一部は蓋も残されているので採集時は生貝であったと考えられる。しかしその後は2011年に玉野市沼の出崎で体層の大破した死殻1個 (OKCAB M22006) が得られたのみで、それ以外に確認されていない。現時点で県内に健在産地があるかどうか不明であり、恐らくは1960年代以降の過剰な護岸や水質汚濁などによってほとんどの個体群が減り去ったものと考えられる。畠田標本の産地である笠岡市の本土沿岸はもはや絶望的な状況であるが、島嶼部ではまだ生き残っている可能性がわずかながら残されている。また出崎周辺では近年もイソニナの棲息が確認されているため、附近を精査すれば本種の生貝も見出されるかもしれない。

(福田 宏)

## アシヤガマ

*Stomatolina rubra* (Lamarck, 1822)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Lamarck (1822: 210, no. 3, as *Stomatella rubra*) で、シントタイプの写真を Mermod & Binder (1963: 134–135, fig. 205) が公表している。この学名は本種に対して現在広く用いられているが、それより早く記載された *S. sulcata* Lamarck, 1816: 10, pl. 450, fig. 3a–b という名も存在し、その図を見る限り本種と明確に区別できない。また Lamarck (1822) 自身が *S. rubra* の原記載の中で *S. sulcata* を異名表に含めており、後者が有効名と見なされない理由は不明である。のちの Deshayes (1832: 984–985, no. 2; 1845: 16, no. 2) や A. Adams (1854c: 842, no. 3, pl. 175, figs 53–56, as *Stomatia rubra*) も *S. sulcata* を *S. rubra* の異名としている。ただし、その時代を最後に *S. sulcata* は文献上に現れなくなり、今はほぼ忘れ去られているため遺失名 (*nomen oblitum*) と解釈される可能性があり、国際動物命名規約の条 23.9. に定める優先権の逆転の対象となるかもしれない。この問題はさらに検討が必要で、ここでは結論を急がず *S. rubra* を有効名とする慣用法に従う。一方、かつて本種の異名とされたことのある *Stomatia angulata* A. Adams, 1850a: 34 (タイプ産地は「in insulis Philippinis」(フィリピン諸島); A. Adams, 1854c: 842–843, no. 6, pl. 175, fig. 57 に図示; Higo *et al.*, 2001: 21, fig. G384, as *Stomatella angulata* にシントタイプの写真) は現在別種シワアシヤガマに用いられている (e.g. 佐々木猛, 2017: 751, pl. 23, fig. 6)。殻長約 13 mm, 殻径約 20 mm, 螺塔の低平なアワビ形で、殻頂は小さく体層が殻全体の大部分を占める。縫合は明瞭で多少階段状。殻表は細いが顕著な螺肋を巡らし、特に肩部の 2 本が強くて角をなす。螺肋上に微細な結節を並べるが、それらは殻口に近くに連れて弱まる。色彩は鮮やかな紅色を基調として白斑や黒斑を不規則に生じ、黄色や深緑色の螺状色帯を巡らす個体もあるなど、変異幅が大きい。殻口は広くて内面は強い真珠光沢を帯び、外唇は肥厚しない。臍孔は狭く開き、その周囲は白い。蓋は欠く。軟体の頭部・腹足も殻と同様に色彩が多様で、頭触角は細長い針状、足は扁平で幅広く、左右の体側に分枝した上足突起を多数並べる。足の後方背面も細かい突起で覆われる (濱村, 2004: 28, 186, text-figs; 佐々木猛, 2017: 751, pl. 23, fig. 4; 高重, 2019: 56, text-figs に生体写真あり)。刺戟を受けると足を自割する。  
写真： [倉敷市] 下津井久須美, 畠田和一コレクション #128, 福田撮影。殻長 9.0 mm, 殻径 13.0 mm。



**分布** タイプ産地は「les mers de l'Inde」(インド洋) で、黒田他 (1971: 67 (和文), 44–45 (英文), pl. 12, figs 1–2) が「模式産地：フィリピン」としたのは誤り。古参異名とみられるが現在使用されていない *Stomatella sulcata* は原記載に産地の表記がない。太平洋側は房総半島以南 (清水利, 2001: 23, no. 182), 日本海側は男鹿半島以南 (西村正・渡部景, 1943: 61, no. 33, as *Stomatia rubra* アシヤガマ [sic]; 鈴木庄, 1979: 156, no. 66, pl. 5, fig. 78), 南西諸島や伊豆・小笠原諸島 (西村和, 1999: 30, no. 197) を含めて暖流の影響の強い海域に広く分布し、国外は朝鮮半島 (權他, 1993: 63, fig. 6-1; 247, no. 6-1; 関他, 2004: 105, fig. 130-1-4), 中国 (海南島) (Dong, 2004: 28, pl. 012, fig. A, as *Stomatia angulata*), フィリピン (Poppe & Tagaro, 2008: 188, pl. 39, fig. 4), オーストラリア北部～西部 (Wilson, 1993: 73, pl. 11, fig. 5, as *Microtis rubra*) など西太平洋の広い範囲から産出が知られ、同種とみられる個体はアラビア湾 (Bosch *et al.*, 1995: 38, fig. 60, as *Stomatia cf. rubra*) やアフリカ東岸のモザンビーク, 南アフリカ北部 (Herbert, 2015: 62–64, fig. 8G–I, as *Stomatia cf. rubra*) から報告されている。

**生息状況** 外洋または湾口部の潮通しのよい海岸岩礁において、潮間帯下部から潮下帯に棲息する。多様な海藻が繁茂し、特に石灰藻が豊富な場所の転石下などを好む。太平洋や日本海沿岸では決して稀少な種ではないが、高重 (2019) が「個体数はやや少ない」としている通り、高密度で産することはなく、多くの場合 1～数個体が見出される程度である。内湾環境である瀬戸内海ではもともと多産せず、稲葉 (1982: 79, no. 69) は産出範囲を「全域」としながらも「少ない」とした。実際には淡路島周辺や伊予灘など東西の湾口部に産地が偏り (e.g. 矢倉, 1932: 23, no. 278, as *Stomatia rubra*; 福田, 1992: 51, no. 62, pl. 6, fig. 62a–b), より内側で継続的に産出が認められるのはせいぜい広島県の島嶼部くらいまでであるが、その海域でも「1990年代後半から各地で減少がみ」とされる (濱村, 2004)。岡山県では文献記録はなく、畠田和一コレクションに含まれる「[倉敷市] 下津井久須美」(「藤井宏志氏採集」, 1個体, #128; 写真) からの標本が唯一の産出の証拠である。この個体は殻表の色彩が褪せ、殻口外唇も破損しているため生貝であったとは思われない。畠田が主に活躍した 1950 年代以前にあってもこのような死殻 1 個を得るのが精一杯なほどに、本県では稀産であったと考えられる。その後も岡山県では死殻や破片を含めて一切確認されておらず、県内に今も本種が棲息している可能性は低い。ただし淡路島以東や芸南地方周辺に現在も個体群が健在であるならば、浮游幼生の伝播自体は岡山県へも継続的に生じているかもしれない。例えば備前市, 瀬戸内市, 笠岡市の離島に定着できても奇異ではないため、現時点では絶滅と断じるのは避ける。

(福田 宏)

## キサゴ

*Umbonium costatum* (Kiener, 1838)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Kiener (1838: 10, no. 3, pl. 2, fig. 5, as *Rotella costata* Valenciennes, MS.). *R. superba* Gould, 1861: 17, *R. Japonica* Sullioti, 1889: 70–71, no. 8, 及び *Monilea ojiensis* Yokoyama, 1927a: 426, no. 53, pl. 47, fig. 27 は新参異名。殻長約 17 mm, 殻径約 25 mm, 低平な算盤珠形で、硬質堅固だが殻口縁は薄く欠けやすい。殻表は多くの場合白色の地に灰褐色の明瞭な市松模様を呈し、光沢が強い。周縁に桃色の色帯を巡らす個体もある。螺層上半分に 4~5 本の螺肋を巡らし、縫合は溝となる。殻底は平滑で、紫褐色ないし桃色の広い滑層で覆われ、臍穴は外から見えない。蓋は黄色い角質で平く、多旋型。軟体の外部形態は瀧庸 (1929: 175–178, figs 1–6, 表紙, as *Umbonium moniliferum costatum*) による詳細な報告がある。体表は灰色で、鞭状の細長い頭触角と 4 本の上足突起をもち、左側前方には先端が喇叭状に広がる入水管、右側前方には出水管をそなえ、二枚貝類のごとく海水を出し入れする。眼柄は著しく伸びてその先に大きな眼がある。足は薄く扁平。



写真： 「備前 [國]」(岩川, 1919 の証拠標本), 国立科学博物館所蔵 NSMT-Mo 925, 長谷川和範撮影。

**分布** タイプ産地は「les mers de l'Inde」(インド洋)。新参異名である *Monilea ojiensis* のタイプ産地は「Ôji」(東京都北区王子, 後期更新世化石), *Rotella superba* は「Kagosima Bay」(鹿児島湾), *R. Japonica* は「mari Japonico」(日本の海) からそれぞれ記載された。北海道南部から九州, 韓国に分布する(八田・佐々木望, 1910: 96, no. 55; 権他, 1993: 63, fig. 5-26-1-4; 245; 関他, 2004: 109, fig. 144-1-3; 佐々木猛, 2017: 752, pl. 24, fig. 1)。近年中国から刊行された文献(Dong, 2004: 22, pl. 009, fig. M; 张, 2008: 36, text-figs; 张他, 2012: 32, no. 17, text-figs; 杨他, 2013: 24, 25, fig. 042; 王他, 2016: 11, no. 28, text-figs) にも本種と称する個体が掲載されているが、それらはとても日本のキサゴと同種に見えず、再検討を要する。

**生息状況** 外洋に面した海岸や内湾湾口部など潮通しの良い場所において、透明度の高い海水に常に洗われ、かつ清浄な細砂からなる遠浅の砂浜に産し、潮間帯中部~潮下帯の砂中に潜る。二枚貝類と同様、水管を用いて海水から懸濁物を濾し取り摂食する濾過食者であるため、水質汚濁に弱い。内湾奥部には見られず、岡山県ではもともとイボキサゴよりも棲息範囲が限られていたと推測される。明治時代に形成された旧東京帝室博物館のコレクションには「備前 [國]」産の本種が含まれており(岩川, 1909: 110–111; 1919: 28–29), その標本(6 個体, うち少なくとも 1 個体は採集時生貝であったとみられる; 写真) は今も国立科学博物館に所蔵されている(NSMT-Mo 925; ここに図示した)。また畠田 (1935: 234, no. 46) は本種もしくはイボキサゴが笠岡諸島白石島において地元住民から「カネキンツブ」の方言で呼ばれていたことを記録している。畠田自身も自らのコレクション中に「[浅口市] 寄島」(「[昭和] 31.11.21.」, 2 個体, #1767) 及び「[岡山市東区] 犬島」(4 個体, #246, イボキサゴ標本中に混在しているので、この産地では同所的に産していたと考えられる) で採集された標本を所持していた。しかしその後は県内からの産出を伝える文献記録がぱったりと途絶え、近年の確実な産出例は 2002 年に浅口市青佐鼻へ打ち上げられていた死殻 1 個(OKCAB M1771) のみである。かつて本種の方言が記録された白石島では 2018 年 7 月に調査を行ったものの死殻すらも見出されず、もはや棲息していない可能性が濃厚である。戦後の高度経済成長期以降、干拓・埋め立て・護岸・海砂採取によって本種の棲息環境がことごとく破壊された上に、汚水流出による著しい水質汚濁が加わって個体群の大半が消滅したことは明らかで、今もほとんど復活していない。

(福田 宏)

## ダンベイキサゴ

*Umbonium giganteum* (Lesson, 1831)

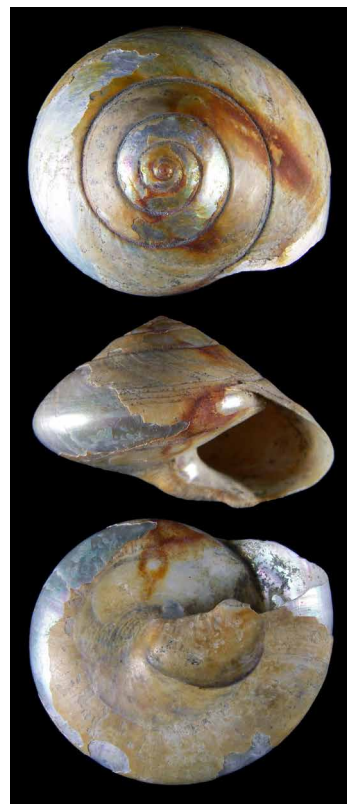
腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ニシキウズ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Lesson (1831: pl. 17, figs 1–3, as *Rotella gigantea*)。 *Umbonium giganteum naganumanum* Otuka, 1930: 25–26, text-fig. 1a–c は新参異名。この属の種としては世界最大級の大きさを持ち、殻長約 25 mm、殻径約 40 mm にも達する。殻形はキサゴに似るが殻表はほぼ平滑で、成長脈の他は周縁に弱い螺溝を巡らすのみ。多くの個体は青みがかった灰色で、縫合下に暗い藍色の斑紋を並べる。周縁は藍色と白色の楔形の斑点が交互に並んで明瞭なだんだら模様を呈するか、無紋で白色または薄桃色の色帯のみを巡らす個体も多い。殻底を覆う滑層の面積は大きく、単調な灰色で、殻口内唇に近づくほど白っぽい。蓋と軟体はほぼキサゴと同様であるが、上足突起が太くて長い(高重, 2019: 62, 63, text-figs に生体写真あり)。

写真： [瀬戸内市] 牛窓町, 畠田和一コレクション #127, 福田撮影。殻長 22.2 mm, 殻径 33.7 mm。

**分布** タイプ産地は「*Ignota?*」(不明?) だが、Kiener (1838: 6, no. 3, pl. 3, fig. 7) 及び Philippi (1853 in 1852–1853: 50, pl. 8, fig. 1, as *Globulus giganteus*) は原記載の図を模写しつつ産地を「*les mers du Japon. ?*」(日本の海?) または「*Japan?*」と推定した。*Umbonium giganteum naganumanum* のタイプ産地は「長沼 (神奈川県豊田村)」(現・横浜市栄区長沼町, 前期更新世化石)。現生個体は鹿島灘及び男鹿半島から九州南部に分布するとされるが(佐々木猛, 2017: 752, pl. 24, fig. 4), 産地は不連続的で局限され、特に日本海や瀬戸内海では少ない。A. Adams (1860b: 110–111) と Schrenck (1867: 369–370, no. 50) は本種を「*Hakodadi*」「*der Bai von Hakodate*」(いずれも函館) から報告したがその後北海道からの記録は一切ないため、波部・伊藤潔 (1965: 15) による「大型のキサゴが誤られたのかもしれない」という判断は妥当と思われる。また Higo *et al.* (1999: 66, no. G461) は分布域に「*Korea (Pusan)*」を含めた。近年韓国のレッドリスト (National Institute of Biological Resources, 2012: 32) には「*미평가 (Not Evaluated, NE)*」(評価せず) として本種が記載され、その後も Kim (2017: 290, no. 1635) の海産生物目録に種名だけ挙げられているものの、權他 (1993) や関他 (2004) などの図鑑には言及がなく、本当に産出するかどうかは不明である。韓国に分布しない場合は日本固有種となる。



**生息状況** 外洋に面した大規模な砂浜が主な棲息環境であり、千葉県九十九里浜などが代表的な産地である。潮間帯にはほとんど見られず、潮下帯(水深 5–30 m)の砂底に潜る。場所によっては高密度で出現し、外房・相模湾・駿河湾・浜名湖などでは食用として漁獲され「ながらみ」の名で知られている。対照的に瀬戸内海では全域を通じて少なく(稲葉, 1982: 79, no. 63), 殊に岡山県での記録は今日までにわずか 2 例しか知られていない。一つはキサゴと同様、明治時代の旧東京帝室博物館コレクションに「備前」産の本種が含まれていたことが記録に残されている(岩川, 1909: 110; 1919: 29)。ただし現在この標本は行方不明である(長谷川和範 2019 年 5 月私信)。もう一つは畠田和一コレクション中に「[瀬戸内市] 牛窓町」産の、殻表の磨滅が激しい死殻 1 個体 (#127; 写真) が現存している。その後は県内での本種の産出記録や標本は一切知られていない。それどころか、現在の一様で単調な岡山県海産貝類相や海岸環境を前提に考えると、本種のような瀬戸内海中央部に似つかわしくない外洋性の種は、過去の県内のどこにどのように棲息していたのか想像することすら困難なほどである。同様の例は鹿島灘や遠州灘などで本種とともに見られることが多いワスレガイで、この種もやはり畠田コレクション中に「牛窓」産標本が現存するが、その後一切岡山県では確認されていない。これらの標本から、高度経済成長期より前(1950 年代以前)の瀬戸内市牛窓町周辺には、主として太平洋岸に産する外洋性種も棲息可能な環境が小規模ながら存在していたものの、その後の人為的攪乱によって跡形もなく消滅し、県内の生物多様性を構成していた特異で貴重な一要素が失われたとみることができる。

(福田 宏)

## イボキサゴ

*Umbonium moniliferum* (Lamarck, 1822)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウス目 ニシキウス上科 ニシキウス科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Lamarck (1822: 7, as *Rotella monilifera*) で、それ以前に刊行された二語名法適用外の文献 (Gualtieri, 1742: pl. 65, fig. E; Schröter, 1783: pl. 3, figs 12–13) での図示個体に対して命名された。殻長約 10 mm, 殻径約 13 mm, キサゴに似るが小型で、縫合下の螺肋上に強い疣状突起を連ねる個体が多く (キサゴにはこの突起はない)、さらに殻底中央部を覆う滑層の面積がキサゴよりも広い点で識別可能である。殻表の色彩や模様に着しい変異幅が見られ、灰色・桃色・黄色・白色・藍色を呈するもの、細かい稲妻模様をもつものもたないもの、周縁や縫合下に白や桃色の色帯を巡らすものやそうでないものなどが同一個体群内に現れる。蓋はキサゴと同様。軟体はキサゴよりやや濃色。

写真： [倉敷市] 下津井, 畠田和一コレクション #112, 福田撮影 (上下は別個体)。上：殻長 10.2 mm, 殻径 15.5 mm ; 下：殻長 9.9 mm, 殻径 15.2 mm。



**分布** タイプ産地は「les mers de l'Inde」(インド洋)。佐々木猛 (2017: 752, pl. 24, fig. 2) は分布の北限を「北海道南部」としているのに対し、波部・伊藤潔 (1965: 15, note at nos 15–16) は北海道から記録があるのはキサゴであり、本種は「発見されていない」と明言している。確かに北海道南西部の貝類相を報告した主要な文献 (e.g. 木下虎・諫早, 1934; 木下虎, 1937; 黒田・木下虎, 1951; 石川政, 1953; 石山, 1970; 馬渡他, 1985; 吉岡, 2000; 柏尾・福井, 2012) のいずれにも本種は言及されておらず、キサゴの記録があるのみである。ただしこのうち木下虎・諫早 (1934: 5, no. 15, pl. 2, fig. 14, as *Umbonium moniliferum costatum*) が図示した個体は、殻底に広がる滑層の面積が広いことからキサゴでなく本種にも見えるが、あまり鮮明でないため判然としない。したがって現時点では、本種が実際に北海道にも産するか否かは確定できない。また、本種とキサゴは比較的近年まで混同されてきたため、古い文献記録はどちらを指しているか判断できないことが多く、例えば西村正・渡部景 (1943: 61, no. 31) の男鹿半島船越での記録は「*U. (Suchium) moniliferum*」と現在の本種の学名を用いているものの、和名は「キサゴ」としている。現時点で確実と思われる北限は太平洋側が三陸海岸 (Nomura & Hatai, 1935: 43–44, no. 230; 石山, 1972: Table 1; 堀越他, 1979: 55), 日本海側が山形県 (鈴木庄, 1979: 156, no. 62) である。東北以南、九州まで見られ、国外は朝鮮半島南部にも産するが (関他, 2004: 109, fig. 143-1-3), 黄海沿岸では近縁種 *U. thomasi* (Crosse, 1863) チョウセンキサゴに置き換わるため本種は見られない。逆に日本ではイボキサゴが圧倒的に優勢で、チョウセンキサゴの産地は山口県萩市見島と長崎県対馬・壱岐周辺のごく狭い範囲に限定され、両種は恐らく生態的になんらかの競争関係にあるものと推察される (福田, 1989: 31–32)。

**生息状況** キサゴやダンバイキサゴが外洋や内湾湾口部など開放的な海岸に棲息するのに対し、本種は主として内湾奥の砂泥干潟に見られ、潮間帯中～下部の砂中に潜る。本種も上記 2 種と同様に濾過食者である。かつては全国的にごく普通に高密度で見られ、おはじきの材料とされていたのも多くの場合本種であったと思われるが、戦後の海岸開発に伴う干潟消失や水質汚濁の直撃を受けて、三浦半島、三河湾、伊勢湾などで完全に絶滅またはそれに近い状況に陥ったことが知られている (木村・山下, 2012)。岡山県では畠田和一コレクション中に「備前朝日村切石 [現・岡山市東区正義]」(1 個体, #99), 「[倉敷市] 下津井」(3 個体, #112), 「[岡山市東区] 犬島」(17 個体, #124) が含まれ、近年 (2002 年以降) も瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜, 倉敷市児島唐琴町高洲, 同市連島町及び玉島乙島の高梁川河口, 同市玉島黒崎の沙美海岸, 玉野市渋川海岸及び沼の出崎海水浴場, 浅口市寄島町, 笠岡市西大島などで死殻が得られており (OKCAB M1741, 1770, 8502, 8583, 8622, 9298, 9849, 9861, 9917, 20099, 22008, 28713, 28751), このうち高洲では 2018 年 7 月の調査でも複数の生貝が確認された。このため減少傾向はキサゴほど著しくないとと言えるものの、確実に個体群が維持されているのは高洲のみであるため、健全な状態にあるとは言い難い。また本種は高密度で多産する場所では殻の色彩パターンが多様であるのに対し、人為的攪乱が激しい場所に見られる個体群では大半の個体が一様に灰色の稲妻模様だけを呈し、変異幅が小さくなる傾向がある。これは一旦個体数が激減して遺伝的多様性が低下したことの反映と考えられる。高洲に現存する個体群も色彩の変異に乏しいため、戦後に大きく数を減らしながらも辛うじて生き延びた少数個体の末裔が、本来の豊饒な遺伝的多様性を十分に回復できないままの状態にあると見なされ、その意味ではいまだ危機的状況を脱したとは言えない。

(福田 宏)

## コシダカエビス

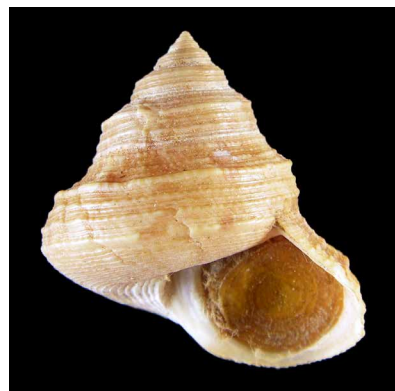
*Tristichotrochus consors* (Lischke, 1872)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウス目 ニシキウス上科 エビスガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Lischke (1872: 104–105, as *Trochus consors*) で、のちに Lischke (1874: 65–66, pl. 4, figs 2–3) に図示されたが、タイプ標本の所在は現在不明である (Cosel, 1998: 27, 45)。新参異名が 3 つある： *Calliostoma hungerfordi* Sowerby III, 1889a: 568–569, pl. 28, fig. 14 コマガタエビス； *C. sagamianum* Yokoyama, 1920: 93–94, no. 105, pl. 6, fig. 1a–b； *C. (Tristichotrochus) kiense* Ikebe, 1942: 269–270, pl. 28, figs 7, 8a–b キイエビス。このうち *T. consors* と *C. hungerfordi* の原図は Pilsbry (1890 in 1889–1890: 343, pl. 34, fig. 11; 347, pl. 63, figs 22–23, as *C. consors*) に転載され、さらに *C. hungerfordi* のシントタイプの写真を Higo et al. (2001: 22, fig. G400s) が公表している。ニヨリエビスは本種の別名で、この名は現在 *C. problematicus* (Kuroda & Habe in Kuroda, Habe & Oyama, 1971) に対して用いられているが (e.g. 佐々木猛, 2017: 757, pl. 28, fig. 3), 本来は兵庫県産の *C. hungerfordi* に対して命名された (矢倉, 1932: 25, no. 313)。殻長・殻径とも約 25 mm, 整った円錐形で、やや厚く堅牢、縫合は明らかな。各螺層の肩部及び体層周縁は鋭く角張り、その強さは個体間で変異がある。殻表に太さが一様でない多数の螺肋を巡らす。光沢は鈍く、淡黄色または淡紅色の地に赤褐色の稲妻模様を配し、さらに螺肋上に細かい赤斑を等間隔に並べる。殻口は広く、内面は強い真珠光沢を帯び、外唇は肥厚せず鋭い。臍孔はない。蓋は角質、茶色で半透明、円く、中央に核をもつ多旋型。

写真： [倉敷市] 下津井, 畠田和一コレクション #6900, 福田撮影。殻長 32.2 mm, 殻径 30.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Bucht von Jedo, und zwar von Jokohama bis hinaus zur Insel Eno-Sima」(江戸湾, より厳密に言えば横浜から江ノ島外周までの間)。異名である *Calliostoma hungerfordi* は「Japan」, *C. sagamianum* は「Naganuma Zone (Naganuma)」(横浜市戸塚区长沼の前期更新世長沼層化石), *C. (Tristichotrochus) kiense* は「Kii」(紀伊) からそれぞれ記載された。G. Yamamoto & Habe (1962: 8, no. 17, pl. 2, fig. 1) は青森県陸奥湾から本種を報告し、分布域に北海道やサハリンをも含めているが、そこではニシキエビスを本種の異名と解釈しており、彼らの図示個体も後種であるため、陸奥湾以北の記録はほぼ後種を指すと考えられる。一方、岩手県三陸海岸ではニシキエビスとは別に本種が確認されている (石山, 1973: 519, table, as *C. consors*; 堀越他, 1979: 53, as *C. (T.) consors*; 戸羽, 2009: 11, 12, fig. 17, as *C. consors*)。日本海側は男鹿半島以南 (西村正・渡部景, 1943: 64, no. 20, as *C. (T.) consors*) に知られ、太平洋・日本海両岸とも九州まで分布する。国外は韓国から報告がある (權他, 1993: 61, fig. 5-12-1–2; 240, as *T. consors*; 関他, 2004: 105, fig. 134, as *C. (C.) consors*)。一方, Dong (2004: 20, pl. 009, fig. C, as *C. consors*) が中国の東シナ海から本種として図示した個体は明らかに別種であり、中国に本種が産するか否かは不明である。

**生息状況** 潮間帯下部から漸深海底 (黒田他, 1971: 35 (和文), 24 (英文), pl. 10, figs 13–14 は相模湾の「水深 78–85 m」から生貝を記録している) にかけて岩礁間の砂底・砂礫底に棲息し、漁屑や海底から浚渫された砂の中に時折見られる。太平洋など外洋においては特に減少傾向が認められず、これまでレッドリストに掲載された例はない。瀬戸内海においても稲葉 (1982: 76, no. 39) は全域に「普通」とし、近年も濱村 (2004: 22, text-figs, as *Calliostoma consors*) は広島県芸南地方から、瀬尾・Tanangonan (2014: 90, no. 17, as *C. consors*) は香川県 (丸亀港漁屑と備讃瀬戸沖) からそれぞれ生貝の産出を記録している。しかし岡山県ではそれら近隣各県と大きく状況が異なり、稀産で文献記録もない。かろうじて畠田和一コレクション中に、「備前 [岡山市南区] 小串村 (漁網ニテ)」(1 個体, #75) と「[倉敷市] 下津井」(1 個体, #6900; 写真) の 2 ロットが含まれている。このうち下津井産は殻長 32 mm を超え、著しく老成した重厚な個体で、蓋も付いているため生貝を採集したものと考えられる。しかしこれら 2 個体以降は、2004 年に下津井漁港の漁屑から腐肉入りの小さな幼貝 1 個体 (OKCAB M28926) が採集されたのみで、ニシキエビスともども目にする機会は極端に少ない。恐らく両種とも 1960 年代以後の海底環境の荒廃によって激減したとみられる。

(福田 宏)

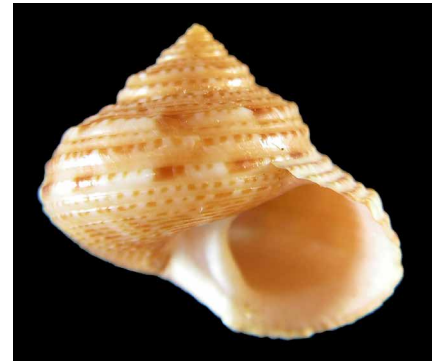
## ニシキエビス

*Tristichotrochus multiliratus* (Sowerby III, 1875)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 エビスガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Sowerby III (1875: 127, pl. 24, figs 10–11, as *Ziziphinus multiliratus*) で、その図は Pilsbry (1890 in 1889–1890: 342–343, pl. 15, figs 45–46, as *Calliostoma multiliratum*) に転載され、Herbert (1990: 201–204, figs 1–2, as *C. multiliratum*) がレクトタイプを指定して写真を公表した。その際 Herbert は、それまで南アフリカの研究者間で本種が *C. crossleyae* E.A. Smith, 1910: 205–206, pl. 7, fig. 17 (タイプ産地は同国の「Isezela, Natal; Port Shepstone」) と同種とみなされていた (e.g. Kilburn, 1972: 395–396, fig. 2, as *C. multilirata* [sic]) のに異を唱え、両者を別種とした。ただし Herbert の見解に対して土田 (1990: 7–8, pl. 1, figs 2–3, as *C. (Tristichotrochus)* sp.) は、*C. multiliratum* のレクトタイプとニシキエビスは「異なることが明らか」と主張し、本種を種小名不詳としている。またそれ以前に黒田 (1938b: 188–189) や池邊 (1941: 58–59, no. 12, as *C. consors multiliratum*) は *Photinula quaesita* A. Adams, 1864b: 140–141 が本種の最古参名かもしれないと議論しており (実際に堀越他, 1963: 12 は本種を *C. (T.) quaesita* としている)、さらに池邊は *C. ishianum* Yokoyama, 1926b: 373–374, pl. 43, fig. 9 を本種の new name とした (その原図は Makiyama (1958: pl. 55, fig. 9, as *C. multiliratum*) に転載)。この通り本種に対する適切な有効名が何であるかは意見が分かれたまま、いまだ明快な説明はなされていないが、ここでは現在の慣用法 (e.g. 佐々木猛, 2017: 757, pl. 28, fig. 7) に則り *T. multiliratus* を使用した。本種の殻はコシダカエビスに近似し、G. Yamamoto & Habe (1962: 8, no. 17, pl. 2, fig. 1, as *T. consors*) は本種とコシダカエビスを同種とみなしている。しかし本種は殻長・殻径とも最大でも 20 mm 前後でコシダカエビスほど大きくならない。また、各螺層の肩部及び体層周縁は角張るものの、後種ほど鋭い稜角は形成せず、全体から受ける印象は丸みを帯びて滑らかである。さらに後種より殻表の紅色の斑紋が鮮やかな個体が多く、特に殻底の螺肋上に並ぶ斑点はより大きく、破線の連なりとなる。殻口内部の真珠光沢はコシダカエビスより青みの強い玉虫色を呈する。また死後時間が経って褪色した死殻では、コシダカエビスの殻表は淡い藁色となるのに対し、本種は黄色くなる。これらの点に着目すれば、本種とコシダカエビスの識別はさほど困難でなく、両者は明らかに別種と考えられる。



写真： 備前〔倉敷市下津井〕六口島，畠田和一コレクション #54，福田撮影。殻長 11.1 mm，殻径 12.6 mm。

**分布** *Ziziphinus multiliratus* のタイプ産地は原記載では「Cape of Good Hope」(喜望峰)とされたが、Herbert (1990) はこれを誤りとみなして「China」(中国)に訂正した。本種の最古参名の可能性がある *Photinula quaesita* は「Aniwa Bay; 17 fathoms: Tatiyama: Kino-O-Sima」(サハリン南端の亜庭湾 17 尋，千葉県館山市，和歌山県紀伊大島)から記載され、新参異名とされている *Calliostoma ishianum* は「Upper clay, Tonami」(愛知県渥美郡高豊村豊南〔現・豊橋市〕)の中部更新世粘土層から産出した化石である。本種はコシダカエビスに比べてより北方に分布域をもつとされ、G. Yamamoto & Habe (1962) がコシダカエビスの産地として挙げたサハリンや北海道は本種の産地であり、実際に東北地方以北では普通に産する。ただし北方に限られるわけではなく、少なくとも瀬戸内海までは産出が認められる (池邊, 1941)。国外は韓国から知られる (權他, 1993: 61, fig. 5-11-1–2; 240, as *Tristichotrochus multiliratus*; 関他, 2004: 106, fig. 135, as *C. (C.) multiliratum*)。また *Z. multiliratus* が本種であるなら中国まで分布することになるが、上記の通り同定が確定していないため分布の全貌もまだ不明瞭である。

**生息状況** コシダカエビスとともに潮間帯下部から漸深海底の岩礁間の砂底・砂礫底に産し、漁屑や海底から浚渫砂に見出される点も共通している。特に東北地方以北ではごく普通種である。瀬戸内海においてもコシダカエビスより目にする頻度はむしろ高いが、稲葉 (1982: 76, no. 40) は逆に「少ない」とした。濱村 (2004: 22, text-figs, as *Calliostoma multiliratum*) は広島県芸南地方からコシダカエビスとともに美しい生貝を図示したが、その反面香川県で近年後種を記録した瀬尾・Tanangonan (2014) は本種の産出に言及しておらず、瀬戸内海においても場所によって密度に偏りがあるのかもしれない。岡山県ではコシダカエビスともども稀産で文献記録はない。畠田和一コレクションにも「備前〔倉敷市下津井〕六口島」(1 個体, #54; 写真) の標本が含まれているのみである。近年は 2004 年に玉野市大入崎～岡山市南区犬島間の海底で実施されたドレッジ (水深 10 m と 17.4 m, とともに砂底) で破片が 2 個得られ (OKCAB M24275, M24365), また 2011 年に同市沼の出崎海水浴場で幼貝の死殻と破片が各 1 個採集された (M22111) のにとどまり、生貝や新鮮かつ完全な死殻は全く見出されていない。ただし、2013 年には対岸の香川県坂出市小瀬居島～丸亀市牛島周辺の海底に仕掛けられた蛸壺から、蓋と腐乱した軟体が入った個体得られており (M25905), 岡山・香川両県の間備讃瀬戸には小規模ながらも個体群が存在するとみられる。したがって岡山県でもまだ絶滅したとまでは断定する段階にはないが、いずれにせよ 1960 年代以降の海底攪乱によって大きな打撃を被り、稀少化した可能性が高い。

(福田 宏)

## ヒメカタベ

*Liotina semicltrathrula* (Schrenck, 1862)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 ヒメカタベ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 県内では死殻が見出されるのみで棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Schrenck (1862b: 410, no. 7, as *Liotia semicltrathrula*) で、のちに Schrenck (1867: 370–373, no. 51, pl. 16, figs 16–25) に図示され、その図は Tryon (1888: 109, pl. 36, figs 98–100) に転載された。殻長約 5 mm、殻径約 4.5 mm、螺塔の低いシタダミ形で厚く堅牢、殻頂は平たく、螺層はよく膨らむ。縫合は浅いが明瞭。殻表は無紋の淡黄白色で、体層で 7 本前後の強い螺肋と縦肋が交わって粗い格子目状をなし、その交点は疣となるが、殻口に近付くにつれて縦肋は弱まり、螺肋だけとなる。殻口は円く、唇縁全体の内側が肥厚して外側へ広がる。外唇外側は太い縦脹肋を形成する。殻口内は白色で鈍い光沢を帯びる。臍孔は広くて深く、その内部にも複数の強い螺肋が走り、殻表の縦肋は臍孔内部まで届く。蓋は角質で厚く、円形で核を中央にもつ多旋型で、外側の表面には細かい顆粒が放射状に並ぶ。軟体の頭部-腹足はベージュ色の地に橙色の色素斑を散らし、頭触角は細くて短い。体側の上足突起は短くて数が少ない(高重, 2019: 43, text-figs に生体写真あり)。

写真： 浅口市寄島町青佐鼻, 2002 年 12 月 4 日, OKCAB M28677, 福田撮影。殻長 3.5 mm, 殻径 4.6 mm。



**分布** タイプ産地は「Fretum Sangaricum prope litus insulae Jesso」(蝦夷地附近の津軽海峡)。ヒメカタベ類は熱帯域に多くの種を擁するのにに対し本種は北海道から記載され、少なくとも西太平洋に産するこの種群の中で最北の分布域をもつ種である。ただし東北太平洋岸では明確な記録が見当たらず、一方で日本海側は新潟県中越地方及び佐渡島から繰り返し報告され(黒田, 1957: 16, no. 63; 伊藤勝, 1978: 205, no. 22; 1979: 43, no. 21; 1989: 44, no. 27, pl. 2, fig. 13, as *Liotinaria semicltrathrula*)、津軽海峡での産出は日本海を北上してきた対馬暖流の影響下に生じたものと考えられる。太平洋側は房総半島以南に九州まで見られ(清水利, 2001: 25, no. 240)、伊豆・小笠原諸島にも産する(Fukuda, 1993: 20, no. 41, pl. 5, fig. 41, as *Liotinaria semicltrathrula*; 西村和, 1999: 26, no. 93)。黒田他(1971: 68 (和文), 45–46 (英文), pl. 106, figs 18–19, as *Liotinaria semicltrathrula*)は「沖縄」を分布域に含めているが、最近の記録があるかは不明。国外は朝鮮半島で知られる(権他, 1993: 63, fig. 7-1-1-3; 247–248, no. 7-1, as *Liotinaria semicltrathrula*; 関他, 2004: 91, fig. 76-1-3)。

**生息状況** 潮下帯から漸深海底にかけて岩礁間の砂礫底に棲息し、死殻は海底から浚渫された砂中に多数混入しているが、生貝を見る機会は少ない。特に瀬戸内海では死殻が多く、1970 年代にコンクリート工事に海砂が盛んに採取されていた時期には、ゴマツボやハツカネズミなどとともに、必ずと言ってよいほど本種の殻が砂場などに含まれていた。近年は広島県芸南地方で生貝が採集されているが(濱村, 2004: 29, text-figs)、香川県では浚渫砂から少数の死殻が確認されたにとどまっている(瀬尾・Tanangonan, 2014: 90, no. 16)。岡山県では文献記録はなく、畠田和一コレクションにも標本は含まれていないが、2002 年に浅口市寄島町青佐鼻の砂浜に死殻 4 個が打ち上げられていた(OKCAB M28677; 写真)。岡山県では隣接他県と比較して本種は格段に少なく、もともと狭い範囲に小規模な個体群が存在するのみであったか、あるいは既に死滅して古い死殻が残っているだけなのかもしれない。広島県に近年も生存していることを考えれば岡山県内のどこかに棲息していても不思議はないが、少なくとも多産しないことは明らかで、その上に戦後の開発や水質汚染、海砂採取などが本種を激減させた可能性も想定しうる。

(福田 宏)



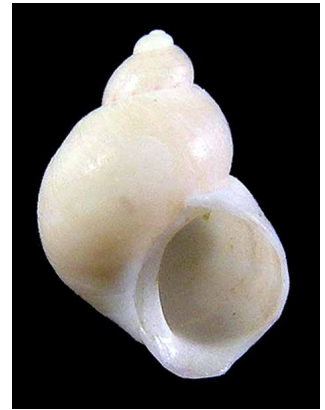
## ベニバイ

*Hiloa variabilis* (Pease, 1861)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 サラサバイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pease (between Aug. 1860 and Mar. 1861: 436, as *Collonia variabilis*) で、Kay (1965: 61–62, pl. 7, figs 1–2) がレクトタイプの写真を発表した。*Eutropia (Tricolia) virgo* Angas, 1867a: 115, no. 25, pl. 13, fig. 25 は新参異名で、Pilsbry (1888 in 1888–1889: 163, 176, 181, pl. 39, fig. 93; pl. 39a, figs 21–22, as *Phasianella variabilis*, *P. virgo*) がそれら両者を図示している。のちに Pilsbry (1895: 90–91, pl. 8, figs 8–9) は *P. megastoma* と *P. oligomphala* コシダカベニバイを別種として記載し (両名ともタイプ標本の写真は Higo *et al.*, 2001: 18, fig. G252s に掲載)、また Pilsbry (1917: 208–209, pl. 15, figs 10–15) が *P. variabilis kahoolawensis*, *P. bryani*, *P. molokaiensis*, *P. thaanumi*, さらに Pilsbry (1918: 330, fig. 18) が *P. variabilis mutation trizonalis* を記載したが、それらもすべて異名。もう一つ、*P. gregaria* Laserer, 1955: 77–78, fig. 1 も本種の異名と考えられる。これらの異名のタイプ標本 (*P. variabilis mutation trizonalis* を除く) を Robertson (1985: 72–102, pls 55–81, 84–85, as *Tricolia variabilis*) が図示している。*T. micra* Pilsbry, MS. ミジンベニバイは正式に記載されておらず不適格名で使用できない。殻長約 3 mm, 殻径約 2 mm, 卵円錐形、螺塔は小さく、対照的に体層が極端に大きく膨らみ、縫合は強く縊れる。薄質半透明で殻表は光沢があり、ほぼ平滑であるが殻頂附近に微細な螺肋を巡らすこともある。色彩は紅色を基調とする個体が多いが黄、紫色などにも彩られ、様々な大きさや形の斑点や螺状色帯、稲妻・叢雲模様をもつなど著しく変異に富む。殻口は円く、外唇は薄い。蓋は厚い石灰質で白く、外側へ向かって膨れる。頭触角は細長く鞭状で、全体に繊毛を生じる。左右の体側に 3 対の長い上足突起を並べる (Hickman & McLean, 1990: 64, fig. 30C, as *T. variabilis*)。Robertson (1985) はインド-西太平洋の広い範囲の産地間で殻と歯舌の変異を詳細に検討した。またその際、本種の殻には性的二型があり、雄は雌より螺塔が低く体層が幅広い傾向が見られ、*P. oligomphala* コシダカベニバイは雌に相当すると明示された。  
写真： [瀬戸内市] 牛窓町前島、畠田和一コレクション #2129, 福田撮影。殻長 4.2 mm, 殻径 2.9 mm。



**分布** タイプ産地は「Sandwich Islands」(ハワイ諸島)。異名である *Eutropia (Tricolia) virgo* は「Coodgee Bay, New South Wales」(オーストラリア、ニューサウスウェールズ州のクージーベイ)、*Phasianella megastoma* は「Nemoto, Boshu」(千葉県南房総市白浜町根本)、*P. oligomphala* は「Nemoto and Tokyo Harbor」(根本及び東京港)、*P. variabilis kahoolawensis* は「Kahoolawe, from the north shore」(ハワイのカホオラウエ島北岸)、*P. bryani* は「Haleiwa, west coast of Oahu」(オアフ島西岸のハレイワ)、*P. molokaiensis* は「Moomomi, on the north coast of western Molokai」(モロカイ島西部北岸のモオモミ)、*P. thaanumi* は「Hilo, Hawaii」(ハワイ島のヒロ)、*P. variabilis mutation trizonalis* は「Kailua, Hawaii」(オアフ島のカイルア)、*P. gregaria* は「Long Reef, north of Sydney」(オーストラリア、シドニー北部のロングビーチ) からそれぞれ記載された。北海道南部以南、日本全国に広く見られ、東は仏領ポリネシアのツアモツ諸島、南はオーストラリア南部 (東西両岸)、西は紅海～アフリカ東岸のザンジバルまで、インド-西太平洋に広く分布する (Robertson, 1985)。

**生息状況** 主に外洋に面した海岸の潮間帯～潮下帯にかけて、岩礁に繁茂した海藻上に高密度で多産する。太平洋・日本海ともに広く見られ、現在でも多くの場所でごく普通に産するため、これまで保全対象とすべき稀少種という観点で言及されたことはない。瀬戸内海でも稲葉 (1982: 81, nos 83–84, as *Hiloa megastoma*, *H. oligomphala*) は全域を通じて「普通」としている。ただし内湾奥には少なく、香川県では死殻だけが少数確認されている (瀬尾・Tanangonan, 2014: 91, no. 30, as *Eotricolia megastoma*)。岡山県に至ってはそもそも文献記録が存在せず、畠田和一コレクション中の「[瀬戸内市] 牛窓町前島」(1 個体, #2129; 写真) が唯一の産出の証拠である。この個体は岩礁飛沫帯の転石下に棲息する *Angustassiminea* sp. キントニイロカワザンショウの多数個体からなる標本に混入していたもので、後種の棲息場所に打ち上げられていた死殻と推測される。この標本以外に、本種は岡山県で全く確認された例がない。1950 年代以前の岡山県には外洋性の種も多く産出していたことが畠田コレクションから明らかであり、当時は本種もキバベニバイやチャツボなどと同様、少ないながら本県沿岸に棲息していたと考えられるが、その後の環境悪化によってこれらの種は姿を消した。これらの種は仮に県外から浮游幼生が辿り着いたとしても、海岸環境が劣悪なために定着できないものと考えられる。本種がレッドデータブックに掲載されるのは今回が初めてであり、このような種を絶滅危惧Ⅰ類という高ランクに含めねばならないことは、戦後の岡山県沿岸で生じた環境悪化が、他の都道府県とは異質であったことの証拠の一つである。

(福田 宏)

## バテイラ

*Tegula pfeifferi* (Philippi, 1846)

腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ目 ニシキウズ上科 クボガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Philippi (1846: 104, no. 26, as *Trochus Pfeifferi*) で、後年 Philippi (1851 in 1846–1855: 152, no. 184, pl. 25, fig. 2) に図示された。新参異名とされる学名は以下の3つ：*Chlorostoma aches* Gould, 1861: 20 (Johnson, 1964: 36, pl. 10, fig. 4 及び Higo *et al.*, 2001: 18, fig. G264s にレクトタイプの写真あり)、*T. Nordmannii* Schrenck, 1862a: 254, no. 3 (Schrenck, 1867: 349, no. 35, pl. 15, figs 1–2 に図示)、*C. quantoanum* Yokoyama, 1920: 88, no. 96, pl. 5, fig. 24a–d (Oyama, 1973: 14, pl. 3, figs 3a–d, as *Tegula* (*C.*) *pfeifferi* に転載)。



殻長約 40 mm, 殻径約 50 mm, 正円錐形, 螺層は膨らまず縫合も縊れないため側面は直線的。重厚堅牢, 殻表は大きく斜めに傾いた細かい成長脈を密に刻むのみで, 若干青みがかった黒色ないし灰褐色で無紋。殻底は平坦, 平滑で, 成長脈に沿って彎曲した黒色の明瞭な縞模様を規則正しく並べ, それらの間には白色。殻口外唇は著しく斜めに傾く。殻口内は真珠光沢が強い。臍孔は大きく深く開き, その周囲は白色。蓋は角質で濃茶褐色, 円く, 核を中央にもつ多旋型。頭部-腹足背面全体が漆黒色で, 頭触角は細長い針状。左右の体側に4対の顕著な上足突起を並べ, その前方にも小突起で縁取られた鰭状の構造がある (高重, 2019: 44, 45, text-figs, as *Omphalius pfeifferi* に生体写真あり)。最近 Yamazaki *et al.* (2018: 24–32, fig. 2) は本種を含む日本周辺の *Tegulidae* Kuroda, Habe & Oyama, 1971 クボガイ科各種の分子系統解析を行った。その系統樹上では本種と *T. rustica* (Gmelin, 1791) コシダカガンガラ及び *T. nigerrima* (Gmelin, 1791) ヒメクボガイが単系統群を形成し, その内部でヒメクボガイは独立したクレードとなるものの, 本種とコシダカガンガラはそれぞれ別々のクレードにまとまらず入り乱れているため, 素直に受け取れば両者は別種として明確に識別できなくなる。これらは殻の形態で容易に識別可能であり, 同種か否かが論じられた例もないため, Yamazaki らの結論には驚きを禁じ得ない。ただし彼らがこの種群をあらかじめ識別・同定するにあたり, 殻表の縦肋の有無・強弱を重視している点にやや疑問が残る。少なくとも本種とコシダカガンガラは縦肋の状態や殻形などは同定する上での本質的な差異ではない。最重要形質は殻底の紋様 (上記の通りバテイラは規則的かつ連続的な縞模様を並べ, コシダカガンガラはこの模様が必ず途切れて灰色の斑点を散在する) であり, むしろ両種は殻底だけでも同定が可能である。したがって Yamazaki らが解析に用いた両種の標本は同定が混乱していた可能性も疑われ, 再検討が必要である。

写真： 備前 [國], 国立科学博物館所蔵 NSMT-Mo 1050, 長谷川和範撮影。殻長 28 mm, 殻径 31 mm。

**分布** タイプ産地は「ubi habitat, non constat」(産地不詳)。異名である *Chlorostoma aches* は「Simoda」(静岡県下田市), *Trochus Nordmannii* は「Sinus Hakodate insulae Jesso」(北海道函館湾), *C. quantoanum* は「Yokosuka Zone (Yokosuka)」(神奈川県横須賀市, 化石) からそれぞれ記載された。北海道南部以南 (Gould, 1861; 黒田・木下虎, 1951: 10, no. 73), 九州南部まで (竹之内, 1986: 50, 51, unnumbered figs, as *Omphalius pfeifferi pfeifferi* は南限を「大隅半島」としている) の太平洋岸に固有で, 日本海側は同種の別亜種 *Tegula pfeifferi carpenteri* (Dunker, 1860: 237, no. 48, as *Trochus Carpenteri*) オオコシダカガンガラ (タイプ産地は「im Hafen von Decima in Japan」: 長崎市出島港; Dunker, 1861: 21–22, no. 100, pl. 3, fig. 12 に図示; Janssen, 1993: 407, pl. 1, fig. 2 がレクトタイプの写真を公表) が男鹿半島以南 (西村正・渡部景, 1943: 64, no. 29), 九州まで産すると古くから言われてきた。ただし韓国では両者とも産出するとされており (関他, 2004: 97, figs 98–1–2, 99–1–3, as *O. p. pfeifferi*, *O. p. carpenteri*), これら2「亜種」の区別は曖昧であるため, 異名として扱うべきかもしれない。

**生息状況** 主に外洋に面した海岸の潮間帯下部～潮下帯にかけて, 多様な海藻が豊富に生育した岩礁に産する。太平洋岸 (オオコシダカガンガラを異名とするなら日本海も) が主要な分布域で, 内湾環境には少ないが, 瀬戸内海では東西の紀伊・豊後両水道北端周辺には普通に見られ, 稲葉 (1982: 78, no. 58, as *Omphalius pfeifferi*) は大阪湾・周防灘・伊予灘に産するとしている。それらの産出は明らかに黒潮支流の末端が瀬戸内海に流入することで生じており, 必然的に湾口部から遠い中央部では全く見られないか稀産となる。山口県では1970年代までは鮮魚店の店頭で連日並べられるほど多産していた (福田, 1992: 51, pl. 4, fig. 51a–b, as *O. pfeifferi*)。愛媛県松山市でも記録されている (石川裕, 2012: 296, no. 55, as *O. p. pfeifferi*)。しかし広島県では瀧巖 (1938) も濱村 (2004) も本種へ言及しておらず, 香川県でも記録はない (畠山, 1977; 畠山・矢野, 1978, 1979; 瀬尾・Tanangonan, 2014)。ところが驚くべきことに岩川 (1909: 107–108; 1919: 24–25; both as *Chlorostoma pfeifferi*) は「備前 [國]」産の本種を記録し, その証拠標本は国立科学博物館に現存する (NSMT-Mo 1050)。この個体は岡山県での本種の最初で最後の記録で, これ以降本県では一切確認されていない。現在の岡山県の海況と貝類相を基準に考えると想像もつかないのだが, 数々の外洋性種の標本が畠田と一コレクションなどに残されているのを見る限り, 戦前の岡山県には太平洋から多様な種群が高頻度で入り込んできていたことは確実である。それらの種が県内で複数年にわたって個体群を定着させていたかは不明であるものの, 少なくとも稀に生貝が見出される程度には産出していたと推測される。その後, 戦後の高度経済成長期以降, 岡山県の海域は尋常一様でない海岸線改変と海底浚渫, 水質汚染等によって環境状態は根底から変質せしめられ, 他の海域から多様な種がやってきて棲み着く可能性はほぼ閉ざされてしまった。岡山県史上唯一のバテイラ標本は, 今や失われてしまった往時の豊饒な海の様子を微かに現在に伝える, 悲しい遺品である。

(福田 宏)

## ヒロクチカノコ

*Neripteron* sp.

腹足綱 アマオブネ形亜綱 アマオブネ上科 アマオブネ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 日本では古くから存在が知られた種であるが、いまだ種の同定が明確にされていない。Martens (1861: 48–50; 1875 in 1863–1879: 37–45, no. 15, 276, pl. 7, figs 1–14; 1877: 117, no. 71) や Pilsbry (1895: 88) は東京や横浜で採集された個体を「*Neritina crepidularia* [Lamarck, 1822: 186, no. 10]」

(現在は *Nerita violacea* Gmelin, 1791: 3686, no. 68 の異名; *file MolluscaBase*, 2020) に同定し、日本の後発研究者も長らくこれに倣ってきたが、この種は殻口に朱色に染まる点で異なり、中国南部から東南アジアを経てオーストラリア北部までの熱帯域に産し、日本周辺には見られない。土屋 (2017: 783, pl. 52, fig. 7) は本種を「*Neripteron (Dostia) pileolus* (Récluz, 1850) (= *Nerita intermedia* Deshayes, 1833, non Grateloup, 1828) としているが、この種はインド南西岸の Malabar (マラバル海岸) から記載されたものであり、日本のヒロクチカノコと同種ではない。本種は殻長約 10 mm, 殻径約 20 mm, 横長のヘルメット形で殻頂は平坦, 硬質堅固で、殻表は黄褐色の地に濃紫褐色の細かい網目模様をもち、鈍い光沢があり、弱い成長脈を刻む。殻口は半月形で、内唇は薄く緑色がかった灰色の滑層が著しく発達する。軸唇は細かく刻まれる。蓋は灰色の石灰質で厚く、強い牙状の突起 (ペグ) を内側から生じる。

写真： 岡山市東区乙子 永江川／吉井川河口間の洲, 2000年9月7日, OKCAB M20, 福田撮影。殻長 11.1 mm, 殻径 16.2 mm。



**分布** 東京湾及び山口県萩市以南の本州、四国、九州に分布し (Martens, 1875 in 1863–1879; 池田美・多田武, 1963: 1, 9, no. 117, as *Dostia violacea*; 福田・木村昭, 2012: 20, text-figs a–b, as *Neripteron* sp. A), 中国北部からも知られる (張, 2008: 50, text-fig., as *Neritina violacea*)。一方で朝鮮半島では明確な記録がない。従来の文献の多くが本種はインド-太平洋の熱帯域にも広く分布するとしていたが、それらは近似する別種 *Neripteron violaceum* (Gmelin, 1791) (= *N. crepidularia* (Lamarck, 1822)) や *N. cornucopia* (Benson, 1836) と本種を混同したことによる。南西諸島で本種とされてきた個体も別種の可能性が高い。

**生息状況** 河口部汽水域の軟泥底に生じたヨシ原の内部及び周辺において、水溜りなど止水環境に棲息し、流水中には見られない。泥上の濡れた転石や流木などに付着する。東京湾では戦後の急激な開発によって絶滅し、現在の生存個体群は三河湾、伊勢湾、瀬戸内海中央部及び西部 (周防灘)、博多湾、有明海など大規模な内湾の奥部に局限され (福田・木村昭, 2012), 分布は著しい不連続をなす。岡山県では岡山市東区乙子の永江川と吉井川の合流点に生じたヨシ原周辺 (写真) と、同市中区平井の旭川河口のわずか 2 箇所 to 個体群が現存するのみである。むしろ今でも岡山県内に棲息し続けていることが驚きで、これは本種の潜在的伝播能力が高いことの反映かもしれないが、そうだとすればたった 2 箇所しか産地がないのはいかにも少なすぎで、本種の定着が可能となる棲息環境がもはやわずかしか県内に残っていないことを示しているとも言えよう。

(福田 宏)

## ウミヒメカノコ

Smaragdina sp.

腹足綱 アマオブネ形亜綱 アマオブネ上科 アマオブネ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 日本では古くから存在が知られた種であるが、学名種小名はいまだ明確にされていない。本種の同定は最近まで *Smaragdina souverbiana* (Montrouzier in Souverbie & Montrouzier, 1863) キンランカノコ及び *Clithon pauluccianum* (Gassies, 1870) レモンカノコとの間で激しく混乱していた。ウミヒメカノコとキンランカノコは長らく種自体が混同され (e.g. Komatsu, 1986: 27–28, 42, no. 32, pl. 5, fig. 6; pl. 8, fig. 8 (左はウミヒメカノコ, 右はキンランカノコ); pl. 10, fig. 9 (*S. souverbiana* のシタイプ), as *S. (S.) souverbiana*), 両者が識別された後もキンランカノコとレモンカノコの学名は誤って取り違えられて (e.g. 福田, 1996: 19, pl. 1, fig. 11a–b), さらにそれが原因で3種それぞれの分布域や棲息環境までもが誤解されるという弊害を生んだ (その顛末は福田他, 2014: 29–36, figs 1–11 に詳述した)。レモンカノコは南西諸島以南に分布し、陸地からの湧水や伏流水が染み出している浜辺に特異的な種であり、九州以北や潮下帯の藻場には産しない。キンランカノコは本州でもウミヒメカノコとともに確認された例が知られており、岡山県にも産する可能性はあるが今のところ確認されていない。本種は殻長・殻径とも約 6.0 mm, 球形で硬質堅固。殻表は平滑で強い光沢をもち、淡い象牙色の地に短い縦方向の黒条を等間隔に並べた螺旋状帯を2本巡らし、それらの間の周縁と殻底に楔形の模様ややはり螺旋状に並ぶ。殻口は半月形で、内唇は純白の滑層が発達し、その外側は檸檬色に縁取られるが、この色彩は死殻では失われる。軸唇中央部は刻まれて5個前後の歯状突起となる。蓋は灰色の石灰質で厚く、鋭い牙状の突起(ペグ)を内側の辺縁から生じる。軟体は著しく細長い鞭状の頭触角をもち、足は幅広く、左右側面に周縁と平行に2本の黒条を走らせ、それらが足の後端背面で繋がって環状となる (福田他, 2014; 高重, 2019: 65, text-figs に生体写真あり)。

写真： 倉敷市高洲, 2013年8月20日, 福田撮影, OKCAB M23567。



**分布** 太平洋側は千葉県館山湾以南(清水利, 2001: 27, no. 276, as *Smaragdina paulucciana*), 日本海側は山口県油谷湾以南(池田美・多田武, 1963: 1, 9, no. 116, as *S. (S.) souverbiana*), 四国・九州を経て南西諸島まで点々と記録がある。国外では Poppe & Tagaro (2011: 610, pl. 1296, fig. 2, as *S. souverbiana*) がフィリピンの「Malapascua Island. 15 m」から図示した個体は明らかに本種である。したがって、今のところ明確な文献記録は見当たらないものの、南西諸島とフィリピン間の亜熱帯～熱帯域にも広く分布している可能性が高い。

**生息状況** 大規模な内湾の潮下帯細砂底または砂泥底において、*Zostera marina* Linnaeus アマモや *Z. japonica* Ascheron et Graebner コアマモとともに繁茂する海草 *Halophila nipponica* John Kuo ヤマトウミヒルモ (南西諸島では *H. major* (Zollinger) Miquel オオウミヒルモ) の葉上や根元に特異的に見られ、その葉肉を専食する。近年の生貝の確認例は全国的にも少なく、駿河湾奥の静岡県沼津市久連 (早瀬他, 2009: 17, fig. 2N), 兵庫県淡路島 (川淵, 2011: 147, text-fig.; 2012: [3], fig. G-3), 宮崎県庵川東入江 (三浦知他, 2012: 56, 59, fig. 7c), 奄美大島・沖縄島・西表島 (山下博・久保, 2012: 24, text-fig.) など数ヶ所しか知られていない。沖縄県では現在も複数の健在個体群が知られ (久保, 2014: 281, pl. 8, fig. 4; 福田・久保, 2017: 484–485), 例えば名護湾ではオオウミヒルモの葉上に生貝が見られる機会が少なくないものの、本州・四国・九州では著しく稀産で、多くの場合古い死殻しか見られない。香川県では瀬尾・Tanangonan (2014: 91, no. 33) が「[三豊市] 仁尾干拓跡干潟低潮帯のウミヒルモ帯において、本種のものと思われる食害痕を確認しているが、現在まで生貝および新鮮な死殻は採集できていない」と報告しており、現在の瀬戸内海中央部では本種の個体群はごく狭い範囲に局限され、見出すのは容易でない。岡山県では2002年に岡山市南区水門湾中央部(水深1.4 m, 泥底, OKCAB M24625)と玉野市波張崎南東沖(21.9 m, 砂底, M24449)におけるドレッジで死殻が採集されたのが最初の記録で、その後2013年7・8月に倉敷市児島唐琴町高洲で生貝が発見された(福田他, 2014; M23567; 写真)。その時はアマモ場の一部に生じたヤマトウミヒルモの葉上及び根元から計7個体が採集され、室内で摂食や産卵も観察されたが、その後は同じ場所でも確認されず、2018年7月の調査によっても見出されなかった。本種は生活史の大半をホストであるウミヒルモ類に強く依存するため、他の産地から浮游幼生が供給されても、その場所にウミヒルモ類が十分に維持されていなければ個体群は形成できない。近年は埋め立て、海底浚渫、水質汚濁などによって藻場が減少したためウミヒルモ類も全国で衰退傾向にあり、必然的に本種も危機的状況に陥っていると考えられる。

(福田 宏・久保弘文)

## ミヤコドリ

*Phenacolepas pulchella* (Lischke, 1871)

腹足綱 アマオブネ形亜綱 アマオブネ上科 ユキスズメ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Lischke (1871a: 41–42, as *Scutellina pulchella*)。その後 Lischke (1871b: 100, pl. 6, figs 20–23) が自らタイプ産地である長崎産個体を図示した。殻長（ここでは殻頂から殻口縁までの距離、すなわちいわゆる「高さ」もしくは「膨らみ」を指す）約 3 mm、殻径約 10 mm、笠形で縦長の楕円形をなし、強く膨らむ。殻頂は後方の中央に位置し、殻表には顆粒を伴う明瞭な放射肋を多数そなえる。殻全体が朱色を呈するが、殻表には多くの場合濃茶褐色の鉄分が沈着する。蓋は著しく小さく、半月形で、足の後方背面中央に埋もれている。軟体は鮮やかな薔薇色を呈し、鞭状の細長い頭触角をもち、外套縁全体に短い突起を放射状に生じる。生貝をひっくり返して腹面を上にとすると、頭部後方の外套腔の中から大きな三角形の鰓を覗かせる。  
写真： 岡山市南区宮浦 高島北東岸、2012 年 9 月 16 日、OKCAB M24691, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「in der Bucht von Nagasaki」（長崎の湾内）。太平洋側は房総半島（東京湾）以南に分布し（清水利, 2001: 27, no. 279, as *Cinnalepeta* (*C.*) *pulchella*），日本海側は従来の文献の多くが「佐渡島以南」としているが（e.g. 福田・木村昭, 2012: 26, text-figs a–b; 土屋, 2017: 785, pl. 54, fig. 7），それより北の男鹿半島や山形県でも記録がある（西村正・渡部景, 1943: 65, no. 41, as *Phenacolepas* (*Cinnalepeta*) *pulchella*; 鈴木庄, 1979: 159, no. 75, as *C. pulchella*）。太平洋・日本海両岸とも九州まで広く分布し、南西諸島にも知られ（名和, 2008a: 14, no. 23, pl. 1, fig. 13; 2009: 28, no. 52, pl. 1, fig. 12; both as *P. (C.) pulchella*），国外は朝鮮半島南部に記録がある（関他, 2004: 113–115, fig. 116-1–3, as *C. pulchella*）。

**生息状況** 内湾の湾口部に面した岩礫地の潮間帯上～中部において淡水が流入するタイドプール（潮溜まり）に棲息し、時に河口汽水域の干潟砂泥底に産することもある。酸素に乏しい還元的環境を好み、底泥に深く埋もれた転石の下面に附着している。随伴する種は *Pseudoliotia pulchella* (Dunker, 1860) シラギク、*Pseudogaleomma japonica* (A. Adams, 1862) ニッポンマメアゲマキなど。各地で海岸の護岸などで潮間帯岩礁の棲息環境が損なわれつつあるため減少傾向が伝えられ、例えば相模湾では絶滅したとされる（池田等他, 2001: 30, text-fig. 13, as *Cinnalepeta pulchella*）。岡山県では畠田和一コレクション中に「昭 [和] 10 [=1935].1.11.」に採集された「備前朝日村寶傳 [現・岡山市東区宝伝]」産の幼貝 1 個体（#5634; ヒナユキスズメ 1 個体とともに）が現存し、また倉敷市沙美海岸からの文献記録（大垣内, 1968b: 71）がある。しかし近年は、2012 年 9 月に岡山市南区宮浦の児島湾内にある高島の北東岸で採集された生貝 2 個体（OKCAB M24691；写真）以外に確実な産出例は知られていない。岡山県では海岸・河口ともに埋め立てや干拓、護岸などによって本来の海岸線の大半が人為的に改変されており、その結果本種が棲息可能な岩礁や干潟はもはやほとんど残存していないため、近隣他県の個体群（例えば香川県では近年も 2 箇所が生貝が確認されている：瀬尾・Tanangonan, 2014: 92, no. 35, pl. 1, fig. 5）から浮游幼生が伝播してきても定着できず、個体群の形成に至らないものと考えられる。

(福田 宏)

## ヒナユキスズメ

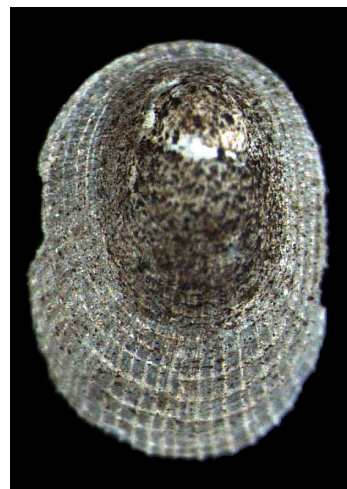
*Phenacolepas* sp.

腹足綱 アマオブネ形亜綱 アマオブネ上科 ユキスズメ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 未記載種。Hosaka & Fukuda (1996: 81, 94, no. 3, fig. 53) が山口県小野田市〔現・山陽小野田市〕後潟産個体を図示するとともに和名を新称したのが最初の報告である。次いで福田 (1996: 20, pl. 3, fig. 3; pl. 9, fig. 2a-b) や木村昭・木村妙 (1999: 47-48, figs 6A, 7A-B) が第二の産地として愛知県渥美郡田原町〔現・田原市〕汐川干潟を挙げ、さらに福田 (2001a: 36, fig. 1) が山口県山口市秋穂二島産の個体を図示するなどして徐々にその存在が知られるようになった。しかし正式な新種記載は今日までなされていない。殻長（ミヤコドリと同様の部位をいう）約1.5mm、殻径約4.5mm、ミヤコドリと同様に笠形だが大きさは半分以下で膨らみは弱く、前後に短い楕円形を呈し、殻頂が正中線より左側へ偏る点で識別は容易である。薄質で壊れやすく、殻表は微弱で不明瞭な放射肋が、同心円状の成長脈の上を跨いで微細な格子目を形成する。殻は無色半透明で、殻表は多くの場合汚黄褐色の沈着物を付けた殻皮で覆われる。蓋は著しく小さく、半月形で、足の後方中央に埋もれている。軟体は淡い紅色を呈し、鞭状の著しく細長い頭触角をもつ点はミヤコドリと共通するが、外套縁上の突起はごく微小で目立たない。

写真： 玉野市渋川，2004年4月21日，OKCAB M8570，福田撮影。殻長2.3mm，殻高0.7mm。



**分布** 三浦半島，浜名湖，三河湾，伊勢湾，瀬戸内海，玄界灘，有明海などから知られる（木村昭，2012: 27, text-figs a-b）。西日本に多くの産地が知られ、特に九州では佐賀・鹿児島両県以外の全県が本種をレッドリストに掲載している（野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所，2018）。また関他 (2004: 112, fig. 163-1-2; 113, no. 163) が「*Phenacolepas planata* (Habe, 1961)」(学名はヒナユキスズメのもので、明らかに誤同定である)として図示した韓国産の個体は本種と思われ、朝鮮半島まで分布している可能性が高い。

**生息状況** ミヤコドリと同様、内湾に面した岩礫地の潮間帯や干潟砂泥底に産し、底泥に深く埋もれた転石下面の還元的環境を好む点も共通しているが、ミヤコドリが内湾奥には少ないのに対し、本種は最奥部の河口部汽水域でも多産することがある。代表的な随伴種はミヤコドリの項に挙げた2種に加えて *Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954) ワカウラツボなど。岡山県では畠田と一コレクション中のミヤコドリの標本（「備前朝日村寶傳〔現・岡山市東区宝伝〕」，「昭10〔=1935〕.1.11.」，#5634）に本種1個体も混在しており、両種が同時に同じ場所で採集されたことがわかる。しかしその後は、2004年4月に玉野市渋川海岸の岩礁タイドプールでゴマツボモドキやウチノミツボなどとともに採集された生貝1個体（OKCAB M8570；写真）が唯一の産出例であり、ミヤコドリと同様の理由で著しく稀少化してしまったと考えられる。香川県（瀬尾・Tanangonan, 2014: 92, no. 36, pl. 1, fig. 6）や広島県（濱村, 2004: 33, 187, text-figs, as *Phenacolepadidae* ユキスズメガイ科の一種）では近年も棲息が報告されているが、それら近隣地域の個体群からの加入による自然回復は、現在の岡山県では幼生着底後の幼貝や成貝の棲息に適した環境自体が極端に乏しいため、期待できない。

（福田 宏）

## ツメナリミヤコドリ

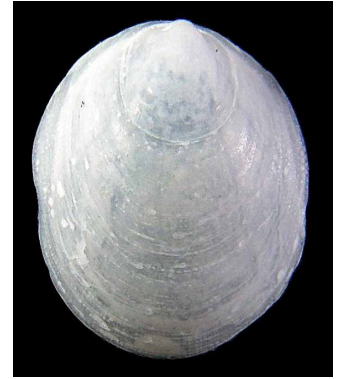
*Phenacolepas unguiformis* (Gould, 1859)

腹足綱 アマオブネ形亜綱 アマオブネ上科 ユキスズメ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Gould (1859: 162, as *Scutellina unguiformis*). Johnson (1964: 163, pl. 21, figs 1-2) がホロタイプの写真を公表している。殻長（ミヤコドリ・ヒナユキスズメと同様の部位をいう）約 2 mm, 殻径約 7 mm, 笠形で膨らみが弱いので扁平な印象をもたらし、前後に短い楕円形を呈する。殻頂は後方中央に位置する。無色半透明で薄質、殻表は微細な放射肋と成長脈が交わって布目状となり、褐色の沈着物で覆われるが、ミヤコドリやヒナユキスズメほど濃色にならない。内面の周縁部は平坦な縁取り状となる。蓋は著しく小さく、半月形で、足の後方中央に埋もれている。軟体は鮮やかな薔薇色を呈し、鞭状の著しく細長い頭触角をもつ点は上記 2 種と共通する。

写真： 備前朝日村 [現・岡山市東区正義, 久々井または宝伝], 畠田和一コレクション #5630, 福田撮影。殻長 1.3 mm, 殻径（長径）5.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Kagosima」(鹿児島)。太平洋側は福島県以南、日本海側は男鹿半島以南、九州までと朝鮮半島に分布する (鈴木庄, 1979: 159, no. 76, as *Plesiathyreus unguiformis*; Higo et al., 1999: 76, no. G601; 土屋, 2017: 785, pl. 54, fig. 6; 関他, 2004)。南西諸島からは明確な記録が見当たらず、分布していない可能性がある。

**生息状況** ミヤコドリ・ヒナユキスズメと同様、砂泥に深く埋もれた転石下面の還元的環境に特異的であるが、他の 2 種が内湾の干潟や河口等の潮間帯に見られるのと対照的に、本種は主として外洋や潮通しのよい湾口部・海峡部などに産し、潮間帯下部から潮下帯に及ぶ。他県では現在なお決して稀少種ではなく、都道府県発行のレッドリストにも本種は含まれていない。しかし岡山県ではこれまで文献記録が存在せず、畠田和一コレクション中に含まれる「備前朝日村 [現・岡山市東区正義, 久々井または宝伝附近]」（「波部 [忠重] 氏同定 1952.2.」, #5630; 写真）及び「[倉敷市] 六口島」（「波部氏同定 1959.」, #5632）の 2 ロット（各 1 個体）が産出の証拠のすべてである。ミヤコドリ及びヒナユキスズメと同様の理由で著しく稀少化したことは疑いがなく、しかも他の 2 種は 21 世紀に入ってから県内の少なくとも 1 箇所が生貝が確認されているが、本種は死殻や破片すらも見出されておらず、すでに県内では絶滅した可能性も否定できない。香川県（瀬尾・Tanangonan, 2014: 91, no. 34）や広島県（濱村, 2004: 33, text-figs）では近年も生貝の産出が報告されているにもかかわらず、岡山県で棲息が確認できないのは、本県の海域における環境悪化が、海岸の潮間帯のみならず潮下帯の生物相にまで近隣他県以上に深甚な影響を及ぼしてきたことを端的に示すものである。

(福田 宏)

## イトウムシオイ

*Chamalycaeus itonis* Kuroda, 1943

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科 ●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：絶滅危惧 I 類(CR+EN)

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は黒田 (1943: 7–11, figs 1–4, as *Chamalycaeus (Sigmacharax) itonis*)。ホロタイプの写真を阪神貝類談話会 (1986: 46, 70, pl. 2, figs 5–6) 及び菊池典他 (1996: 11, no. 9, pl. 2, fig 9a–b) が公表している。*Sigmacharax* Kuroda, 1943 イトウムシオイ亜属のタイプ種 (原指定)。殻長約 2 mm, 殻径約 4.5 mm, 螺塔低平な蝸牛形で、体層の末端近くに畸形と見紛うほど極端で幅広い縊れを生じるため、背面観での殻全体の輪廓は短い瓢箪形を呈する。やや厚く不透明、殻表は淡い黄白色で、明瞭な成長脈を等間隔に刻む。殻口は円く、外唇は肥厚し、弱く重複する。臍孔は広い。殻には性的二型があり、雄は殻頂附近の約 2.5 層 (胎殻を含む) が赤く染まるが、雌にはこの彩色はない。蓋は円形で角質半透明の黄褐色、核を中心にもつ少旋型。頭部–腹足は透明感のある白色で、頭触角は細長い。雄は右目の後方に円筒形の大きな陰莖をそなえる。

写真： 新見市馬塚, 2011 年 4 月 30 日, OKCAB M28927, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「岡山縣阿哲郡上市村」(現・新見市上市)。記載後に中国・四国北部の数箇所から産出が報告されたが (湊他, 1994: 93–95, fig. 1; 湊, 2014: 24), 矢野 (2019b: 13–17, text-figs) はそれらのうち広島県西部 (廿日市市冠山周辺) より西の島根県益田市匹見町, 山口県北東部 (萩市佐々連, 相原) などの個体群を, 山口県萩市笠山から記載された別亜種 *Chamalycaeus itonis shiotai* Minato & Yano, 1988: 33–36, figs 1–3 ヤサガタイトウムシオイに再同定した。矢野の見解によれば狭義のイトウムシオイは兵庫県淡路島先山, 愛媛県高縄半島の今治市檜原山, 岡山県北西部, 広島県神石郡神石高原町～庄原市東城町の帝釈峽, 同県三原市久井町吉田の久井の岩海などに分布が限定されるという。

**生息状況** 山間部の石灰岩地帯にある森林内の岸壁下や斜面のガレ場において、落葉下や礫間に見られる。原記載において既に「採集は頗る困難で、標本の個体数も甚だ多くない」、「相當な長時間と努力 [中略] にも拘らず僅か十數個を得られたに過ぎなかつた」、「産地が極めて局限されて居る」と記され、著しく稀産な種として知られる。タイプ産地の新見市上市附近では 1988 年にも確認され、また同市豊永赤馬の日畔坂鍾乳穴、高梁市川上町高山市の某神社でも見出されたが (矢野, 2019b, 私信), それらの産地での現状は不明である。近年は 2011 年に新見市馬塚でもごく少数ながら棲息が認められた (OKCAB M28927; 写真)。本種はもともと限られた範囲に低密度で出現する上に、森林伐採や石灰岩採掘などによる棲息地の縮小によって減少傾向にある。しかもその稀少性が特異な形態と相まって貝殻コレクターの興味を惹くため、標本販売業者やマニアによる乱獲対象となりやすい点は特に留意が必要である。

(福田 宏)



## ミヤマムシオイ

*Chamalycaeus* sp.

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 未記載種。殻長約 2 mm、殻径約 4 mm、螺塔低平な蝸牛形、背面観では輪廓は垂円形で、体層の末端附近に生じる縊れは弱い。やや厚く不透明、殻表は乳白色で、微細だが明瞭な成長脈を等間隔に刻む。虫様管は長く明瞭。殻口は円く、外唇は薄く肥厚反転するが重複せず、後端が多少突出するため殻口全体の輪廓は心持ち矩形に近づく。臍孔は広い。蓋は円形で角質半透明の黄褐色、核を中心にもつ少旋型。頭部-腹足は透明感のある白色で、頭触角は細長い。雄は右目の後方に円筒形の大きな陰茎をそなえる。殻口後端が多少張り出す点で九州中部に分布する *Chamalycaeus nishii* Minato, 2005 タカチホムシオイに似るが、体層収縮部の位置がより殻口に近い位置にあることより識別可能である。

写真： 高梁市備中町平川 某神社附近，2011年5月1日，OKCAB M28928，福田撮影。



**分布** 近年本種の産出記録をまとめた矢野 (2011: 28–34, figs 1 (left), 8–19) によると、目下の東限は兵庫県（神崎郡福崎町山崎及び亀坪，姫路市姫山原生林（姫路城），宍粟市波賀町音水溪谷）で、本州は岡山県西部から広島県東部の庄原市東城町帝釈峡にかけて点々と産地が知られ、四国では北西部の愛媛県松山市大井野町福見山・米野々町，同市（旧・北条市）小山田・高縄山，東温市（旧・温泉郡川内町）黒森峠，上浮穴郡久万高原町石墨山（黒森峠中腹），喜多郡内子町小田深山（淵首付近）などで確認されており、矢野はこれらの記録を総括して「中国地方では、西は広島県の帝釈峡周辺から東は兵庫県中部まで、断続的ではあるが、広く分布している」，「四国地方においては、愛媛県の中予地方において、南の小田深山周辺から北の高縄半島まで、南北方向に細長く分布している」と述べた。

**生息状況** 平地もしくは山間部の森林内において、林床落葉下や転石間に棲息する。石灰岩地帯にもそうでない地域にも見られ、場所によっては比較的高密度で産出するが、それぞれの産地は不連続的で局限される。岡山県では新見市草間の羅生門，同市豊永赤馬の日畔坂鍾乳穴，高梁市備中町平川の某神社（写真），真庭市湯原町櫃ヶ山など北西部でのみ知られ、県全体としても分布範囲は決して広くない。ただしまだ調査が不足している感もあり、兵庫県では姫路城周辺にも産することから類推して、岡山県の西部や南部にも未知の個体群が存在しても奇異ではなく、今後の精査が必要である。兵庫県レッドデータブックでは「ランク A」（絶滅危惧Ⅰ類に相当）とされている（増田，2014: 23, no. 19, text-figs）。

（福田 宏）

## サドヤマトガイ

*Japonia sadoensis* Pilsbry & Y. Hirase, 1903

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科 ●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 現存産地が県内に 1 箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry & Y. Hirase (1903d: 31) で、のちに [平瀬興], 1907: 175, pl. 5, fig. 57 に図示された。*Japonia toshimana* Pilsbry & Y. Hirase, 1904a: 104–105 トシマヤマトガイは新参異名とされているが (e.g. 湊, 1988: 7), 軟体部の比較解剖や遺伝子解析はまだなされておらず、また離島産であるため日本本土の個体群とは遺伝的に異なる可能性もあり、今後検討を要する。殻長約 4 mm, 殻径約 4.7 mm, 螺塔がやや高まった独楽形, 薄質, 殻全体が濃茶褐色で、殻表には繊細だが明瞭な螺脈を多数巡らし、それらの螺脈のうち、体層で 2 本, その他の後成層で 1 本が細くて長い針状の殻毛を等間隔に生やす。殻口は円く、外唇は薄く鋭い。臍孔は広い。蓋は円形, 角質, 黄色半透明, 核を中心にもつ少旋型。頭部-腹足の背面は黒色素で覆われ、頭触角は細く長い。口吻は円筒形で前端中央が明瞭に彎入する。雄は右眼の後方に大きな陰茎をもつ。腹足の両側面は溝で縁取られ、蹠面は灰色 (福田・多々良, 2010: 12, no. 3, fig. 9 に生体写真あり)。  
写真： 倉敷市尾原, 1989 年 9 月 30 日, 矢野重文採集, OKCAB M28929, 福田撮影。殻長 4.5 mm, 殻径 5.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Niibo-mura, Sado」(新潟県佐渡郡新穂村(現・佐渡市))。異名とされることの多い *Japonia toshimana* トシマヤマトガイは「Toshima, Izu」(東京都伊豆諸島利島)から記載された。関東以西の本州, 四国, 九州に分布するとされるが (湊, 1986: 66, 67, unnumbered figs; 1988; 東, 1995: 4, pl. 1, fig. 12), 複数種が混在している可能性もある。

**生息状況** 広葉樹林林床の落葉下の多少保湿された黒色腐葉土間に見られ、生時は地表の泥土に紛れて発見しにくい。分布域は比較的広いものの、決して多産する種ではない。乾燥と過度の多湿のどちらにも弱く、湿り気がわずかに保たれている程度の環境でないと生存できない。岡山県では 1989 年に倉敷市尾原で確認されたのが現時点で唯一の記録で (矢野重文私信; OKCAB M28929; 写真), 以後見出されていない。単に調査が不足している可能性はあるが、その一方で岡山県南部一帯の森林は江戸時代以前から大規模に伐採が進められ、瀬戸内海沿岸の乾燥した気候もあって広範囲が禿山と化していた時代が長かったため、本種の個体群は本県ではごく限られた範囲にのみ残存するものと考えられる。

(福田 宏)

## オオゴマガイ

*Diplommatina collarifera hirasei* Pilsbry in Pilsbry & Y. Hirase, 1909

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。

**形態** 原記載は Pilsbry & Y. Hirase (1909: 590–591, as *Diplommatina hirasei*). ANSP (2019: #95670) でレクトタイプの写真を閲覧できる。殻は日本産のゴマガイ類としては大形で殻長約 5 mm, 殻径約 2.5 mm に達する。体層と次体層で殻長の半分以上を占め、中ほどは円筒形に近いが、上部は側面が直線的な円錐形となる。殻色は赤みのある橙～淡い黄褐色で、雄は特に殻頂部の色が濃くなる傾向がある。殻表には繊細な縦肋をもち、体層と次体層では間隔が狭いが、殻長付近ではやや粗くなる。殻口は円く、内部は橙色、殻口縁は反曲し厚くなる。殻口の約 0.5 mm 後方には縦張肋状の隆起（第二口唇）があり（通常「殻口は二重」と表現される）第二口唇の後方はくすんだ白色。内唇は滑層が広く発達し縫合近くまで達する。体層には滑層に覆われる部分に弱い緊線があり、そのすぐ前方に腔襞をもつ。腔襞は名義タイプ亜種 *D. collarifera collarifera* Schmacker & Boettger, 1890: 123–124, no. 29 イブキゴマガイより短く、体層幅の 1/3 前後で、ほぼ滑層の覆っている範囲に収まる。軸歯はイブキゴマガイよりも強い。蓋は円形、角質で薄く、半透明な淡黄褐色で核を中心にもつが螺旋はゆるい。頭部–腹足は白色で、頭触角の基部に黒い色素斑をもつ。頭触角は長く、やや後方へ反る。眼は頭触角のすぐ後方に位置し、黒く明瞭。本亜種は大形であること、滑層が縫合近くまで達すること、腔襞が滑層部に収まることでイブキゴマガイや同種の別亜種とされるオオウエゴマガイから区別される。しかし、その 3 つの形質にはいずれも地域差や個体差があり、同定が難しい場合もある。また、近年新種として記載された類似種 *D. nakashimai* Minato, 2015: 75–78, figs 1A–F, 2A ダイオウゴマガイは腔襞を持たないことで識別可能とされるが、本亜種を含む広義のイブキゴマガイにも種内変異として腔襞を欠く個体が出現することもあり、判断には慎重を期す必要がある。本亜種とダイオウゴマガイとの類縁関係は現時点では不明である。分子系統解析によれば、日本産の大形ゴマガイ類（イブキゴマガイ各亜種, *D. shikokuensis* Kuroda, Abe & Habe in 波部, 1961a: 19, app. 7, pl. 9, fig. 16, as *D. (Simica) shikokuensis* シコクゴマガイなど）の大半は単系統群であることが示唆される（亀田他, 準備中）。しかし、その中では現在の殻形態による同定結果と DNA 塩基配列からみた地理的分化のパターンは必ずしも一致せず、将来的には分類や分布の見直しが行われる可能性が高い。本項では原記載に近い、上述の形態的特徴をもつ個体が出現する個体群をオオゴマガイとみなしたが、これらも単系統群ではない可能性があり、周辺地域のオオウエゴマガイやダイオウゴマガイ個体群も含めた分類学的な再検討が必要である。

**分布** タイプ産地は「Gakuenji, Izumo」（島根県出雲市別所町鱒淵寺）。中国地方北西部に分布するとされ、原記載と殻の特徴が一致する個体は鳥取県（宇野・谷岡, 2012: 148, text-fig.; 矢野, 2016: 22–28, text-figs）、島根県（タイプ産地）、広島県（標本は亀田・福田所蔵）で産出が確認されている。山口県では増野 (1992) がオオウエゴマガイの、矢野 (2019a) がオオウエゴマガイとダイオウゴマガイの棲息地点をそれぞれ記しているが、本種への言及はない。

**生息状況** 山間部の広葉樹林林床において、落葉や転石間などに棲息する。岡山県では畠田和一はオオウエゴマガイを記録しているものの本亜種へは言及したことがなく、標本も見当たらない。環境省（庁）の歴代の陸産貝類分布調査報告書には、環境庁自然保護局 (1993: 105, no. 0692, as *Diplommatina labiosa hirasei*) において本県北西部（新見市あたり）に産出を示す点の一つだけ打たれたが、その後の自然環境研究センター (2002: 162, no. 00692; 2010: 0759, no. 00692; both as *D. l. hirasei*) ではなぜか北西部の点は消され、代わりに鏡野町北部の鳥取県との境近くに新たな点が打たれている。これらの情報の出所や点の位置が変わった経緯は不明である。一方、近年の Minato (2015) や矢野 (2016) は岡山県北部からの大形ゴマガイ類の記録をダイオウゴマガイやオオウエゴマガイとみなしており、県内での本亜種の棲息実態は今なお甚だ不明瞭である。筆者らの手元にある近年の標本を見直してもオオウエゴマガイはあるものの、確実に本亜種に同定できる個体はまだ岡山県から見出されていない。ただ、本県北部でのゴマガイ類も調査は不十分であり、今後精査すれば本亜種が見出される可能性はある。

(亀田勇一・福田 宏)

## オオウエゴマガイ

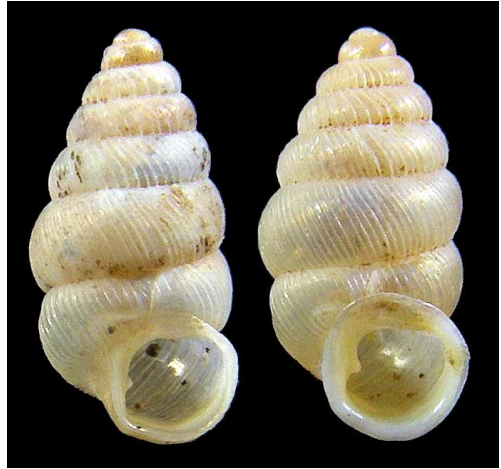
*Diplommatina collarifera tenuiplica* Pilsbry, 1900

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 現存産地が少なく、棲息環境も限定的である。

**形態** 原記載は Pilsbry (1900b: 525, as *Diplommatina tenuiplica*)。殻の形態はオオゴマガイに似るが、後者と比較してやや小型（殻長 4–4.5 mm 程度）で、内唇の滑層は縫合近くまで達せず、軸歯は小さい。殻口は二重であることが多いが、第二口唇は比較的弱く、その位置も殻口縁に近い。腔襞は短く、体層幅の 1/5 から 1/3 弱程度。頭部–腹足や蓋の形態はオオゴマガイと同様。矢野 (2016) はオオゴマガイとの識別点として、本亜種は殻口縁と第二口唇が近接することを挙げているが、岡山県内では同一個体群内でもこの形質に変異が見られる。したがって本項においては、オオゴマガイに同定される個体（基準は当該種の項を参照）が確認されなかった地点の標本を本亜種とみなした。

写真： 左、阿哲郡〔現・新見市〕草間村羅生門、1950年1月27日、畠田和一コレクション #4676、殻長 4.4 mm、殻径 2.1 mm。右、英田郡〔美作市〕後山、1951年6月24日、畠田和一コレクション #4678、殻長 4.4 mm、殻径 2.2 mm。ともに福田撮影。



**分布** タイプ産地は「Kashima, Harima」（兵庫県揖保郡香島村〔現・たつの市〕）。兵庫県以西の本州と九州北部に分布するとされ、兵庫県（タイプ産地）から山口県北部（池田美・多田武, 1963: 2, 10, no. 130; 矢野, 2019a）、及び福岡県（松隈他, 2014: 203, as *Diplommatina (Sinica) labiosa tenuiplica*）と大分県（神田, 1992: 23–24, no. 16, pl. 3, fig. 16; pl. 1, fig. 16; 濱田保, 2008: 89, no. 2143, pl. 89, fig. L16; both as *D. l. tenuiplica*）において記録がある。ただしこれらは多系統群である可能性が極めて高く（オオゴマガイの項を参照）、周辺地域の大形種や分布域の近接するオオゴマガイ、ダイオウゴマガイを含めた分類学的な再検討を行ったうえで改めて分布を議論する必要がある。

**生息状況** 山間部の森林林床において、落葉や転石間などに棲息する。広葉樹林のみならず針葉樹が目立つ森でも産出することがある。岡山県では畠田 (1951a: (22)348; 1951b: [3], no. 9, as *Diplommatina (Sinica) tenuiplica*; 1956: 2, no. 12) が記録したのが最初で、畠田コレクション中には証拠標本と目される以下の4ロットが現存する：「阿哲郡〔現・新見市〕草間村羅生門」（「オホウヘゴマガヒ 1950.1.27. 採集」, 1個体, #4676; 写真, 左）, 「備中〔現・新見市〕上市村足立」（「黒田氏同定品」, 1個体, #4677）, 「阿哲郡〔現・新見市〕豊永村日咩神社」（「1951.1.14.」, 1個体, #7124）, 「英田郡〔美作市〕後山」（「1951.6.24. 採集」, 12個体, #4678; 写真, 右）。これらの産地のうち羅生門では現在も多産し、石灰岩の巨大な岩壁に遮られて終日直射日光が当たらずつねに保湿された緩い斜面において、地表に敷き詰められた多数の石灰岩塊が豊富な蘚苔類に覆われたその隙間に生貝が暮らしている。また日咩坂鍾乳穴（亀田所蔵及び OKCAB M28930）や後山（M28931）でも生貝が確認されているが、羅生門ほどは多産しない。したがって岡山県での既知産地はまだ5箇所を満たさず、相互に飛び離れた場所から小規模な個体群が知られるのみである。ただし県北部での調査はまだ不足しているため、今後新産地が見出される可能性はある。

(亀田勇一・福田 宏)

## キュウシュウゴマガイ

*Diplommatina tanegashimae kyushuensis* Pilsbry & Y. Hirase, 1904

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。

**形態** 原記載は Pilsbry & Y. Hirase (1904d: 621–622, as *Diplommatina* (Sect. *Sinica*) *kyushuensis*)。レクトタイプの写真を ANSP (2019: #81896) で閲覧できる。殻長約 2.7 mm, 殻径約 1.5 mm, 螺塔は高い円錐形で、次体層が最も太い。縫合の縊れは弱い。殻表には低い縦肋が密に並ぶが、次体層より上ではやや粗くなる傾向がある。殻色は黄褐色で半透明、殻頂は雄では色が濃く、雌では白くなることが多い。殻口は全縁で、辺縁は反曲し肥厚する。緊線は殻口から 1 層弱、すなわち滑層部の中央附近に位置する。腔襞はわずかに上に凸で、長さは体層幅の 1/3 を超え、後端は緊線にほぼ接する。岡山県内には大ききさのよく似た *D. uzenensis* Pilsbry in Pilsbry & Gulick, 1900: 88 ゴマガイ (=ヒメゴマガイ) も棲息するが、本種よりも縫合の縊れが深く、縦肋が強く、腔襞は短いことで識別される。名義タイプ亜種の *D. tanegashimae tanegashimae* Pilsbry, 1901h: 64; 1901i: 497 タネガシマゴマガイや *D. nesiotica* Pilsbry & Y. Hirase, 1909: 589–590 ニヨリゴマガイとは遺伝的にかなり近縁で、単一種と見做される可能性が高い。その場合本種に対しては *D. tanegashimae* が有効名となる。なお、ゴマガイの学名として使用されることのある *D. cassa* Pilsbry, 1901e: 23 は、その原記載に「Kodakari, prov. Hida」(岐阜県飛騨市小鷹狩) 及び「Kyoto」(京都) がタイプ産地として挙げられている。後者の標本はキュウシュウゴマガイに相当すると考えられることから、黒住他 (2011: 122–123, no. 13, as *D. (S.) uzenensis*) は *D. cassa* が本種を指す可能性を指摘している。しかし、*D. cassa* は既に飛騨産の標本がレクトタイプに指定されており (Baker, 1964: 164; 標本の写真は ANSP, 2019: #81003 で閲覧可能)、本種に対して *D. cassa* を使用できないことは明らかである。

**分布** タイプ産地は「Kagoshima, Satsuma」(鹿児島) で、原記載では同時に「Kami-Koshikijima, Satsuma; Watarimura, Kiyoragi and Fukuregi in Higo; Saganoseki, Bungo; and Obi, Huga」(鹿児島県上甕島 [*Diplommatina nishii* A. Yamamoto & Uozumi, 1988 ハンミガキゴマガイの誤同定であろう]、熊本県球磨郡渡村 [現・球磨村]・上天草市松島町教良木・天草市天草町福連木、大分県大分市佐賀関、宮崎県日南市飢肥) の各産地が挙げられた。今後同種とみなされる可能性のある *D. tanegashimae tanegashimae* は「Tane-ga-shima」(種子島)、*D. nesiotica* は「Suwanosejima, Ōsumi」(トカラ列島諏訪之瀬島) からそれぞれ記載された。本州、四国、九州、大隅諸島(タネガシマゴマガイ)、トカラ列島(ニヨリゴマガイ) に分布する。本州での分布は愛知県以西とされ、多田昭 (2008) が確認地点として京都府内の 39 地点をあげているほか、矢野 (2015) は岐阜県や兵庫県産の標本を本種に同定している。

**生息状況** 広葉樹林林床の落葉間に棲息し、人里近くの里山から山間部まで広く見られる。九州ではごく普通種で、山口県まで分布することは古くから知られていたが、本州中部まで産すると認識されたのは比較的最近のことである。このため岡山県では古い文献には本種の名は見当たらず、標本も現存しない。自然環境研究センター (2002: 185, no. 00812; 2010: 0764, no. 00812) では本県北東部の美作市周辺に産出を示す点が複数打たれている。一方で黒住他 (2011: 122, no. 12) は「新見市井倉洞」と「真庭市神庭の滝」産の標本が石坂元コレクション中に含まれていると報じ、また矢野 (2015: 22–25, fig. 10) も「1985 年 12 月 15 日に岡山県美作町 [現・美作市] 湯郷で採集し」と述べた。しかし筆者らはいまだ岡山県産の本種の実物を目にする機会がなく、棲息実態は不明である。

(亀田勇一・福田 宏)

## マルタニシ

*Cipangopaludina cf. laeta* (Martens, 1861)

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 タニシ上科 タニシ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Martens (1861: 45–46, as *Paludina laeta*)。タイプ標本は波部 (1976a: 46, pl. 6, as *P. laeta*) に図示されている。殻長約 48 mm, 殻径約 30 mm, 螺塔の高い円錐形で、殻は薄く、殻表は茶色～緑褐色を呈す。摩滅し殻頂や殻皮が脱落していることがある。殻表は平滑なものや打痕があるものが見られ、細かい刻点状の彫刻を数条もつ場合がある。しばしば殻表に藻類が発生する。臍孔は極めて狭いか閉じる。殻口内部は白色～灰色。成貝では殻口周縁が黒く縁取られる場合がある。幼貝の殻は算盤珠状の輪廓をなし、周縁がやや角張る。蓋は水滴状、茶色～淡褐色の角質で多旋型、内側は平滑で、殻口を完全に塞ぐ。頭部-腹足は灰色～褐色の地に黒斑を散らし、頭部触角は長く鞭状。雄の右側の頭部触角はカールして交接の際に陰茎の役割を果たすのに対し、雌のそれはカールせず単純。波部 (1976a) は、*P. stelmaphora* Bourguignat, 1862: 116–117, pl. 5, figs 7–8 及び Reeve (1863 in 1862–1863: spp. 25–26, pl. 5, figs 25a–b, 26a–b) が記載した *P. malleata* と *P. abbreviata* を全て *P. laeta* の新参異名とし、マルタニシは中国産の *Cipangopaludina chinensis* (Gray in Griffith & Pidgeon, 1833) シナタニシの亜種とした。しかし近年の分子系統学・集団遺伝学的研究により、マルタニシとシナタニシは遺伝的に異なり、両者は互いに近縁ながらそれぞれ独立種である可能性が示された (Hirano *et al.*, 2015b: fig. 2, as *C. c. laeta*; 2019a: figs 6b, 7, as *C. laeta*)。平野・久保 (2017: 427–428, as *C. laeta*) ではマルタニシを独立種として扱った。しかし、*P. malleata*, *P. abbreviata*, *P. stelmaphora* はいずれもタイプ産地は「Japan」または「China」とのみ表記され、具体的な採集地が明らかでないため各タイプ産地の集団の系統的位置は不明である。加えて、マルタニシと形態的な区別が容易でないシナタニシが後述の通り日本に分布していることから、現状ではマルタニシの学名を暫定的に *C. cf. laeta* とするのが妥当と考えられる。また、マルタニシ・シナタニシともに中国雲南省から知られる *Margarya* Nevill, 1877 コブタニシ属とも近縁であり (Hirano *et al.*, 2015b; 2019a–b), 今後の分類学的研究によりさらに属の所属が変更される可能性がある。

写真： 備中野馳村〔現・新見市哲西町〕大野部，畠田和一コレクション #4642，福田撮影。殻長 42.9 mm, 殻径 34.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Japan」。異名の可能性がある *Paludina malleata* と *P. abbreviata* もともに「Japan」、*P. stelmaphora* は「China」から記載された。北海道・本州・四国・南西諸島の一部に広く分布する (Hirano *et al.*, 2019a)。ミトコンドリア (mt) DNA の解析ではマルタニシ・シナタニシを含めた種群が東アジア各地で地理的に遺伝的分化していることが示されたが、核 DNA を用いたゲノムワイド解析の結果とは不一致を示した (Hirano *et al.*, 2019a)。この解析結果から、九州にはこれまで主に中国大陸から記録されていたシナタニシが産出することが明示された。加えて、確実にマルタニシに同定可能な集団は九州から得られておらず、周辺の島嶼部 (対馬, 福江島, 種子島等) や山口県の一部に、シナタニシとマルタニシの交雑由来と推測される集団が棲息する。西表島では山口県から移入されたと称される集団が見つかっており (北野他, 2015: 44–48, figs 1, 4–5, as *Cipangopaludina chinensis laeta*)、これもマルタニシとシナタニシの交雑由来集団と考えられる。一方で、過去には南西諸島に広くマルタニシが分布していた可能性があるが、それらの系統的位置は不明である (平野・久保, 2017)。韓国では、*C. c. malleata* として記録されている (関他, 2004: 121, fig. 185-1-2) もの、これはマルタニシではなくシナタニシの可能性もある。中国やロシアでも類似する種が記録されている (Lu *et al.*, 2014)、日本のマルタニシと同種と考えられる集団はこれまで知られていない。しかし、ロシア (サハリン)・韓国 (鬱陵島) 産のマルタニシと思しき標本が西宮市貝類館に収蔵されている (平野他, 未発表)。そのためマルタニシは日本とその周辺地域の固有種と考えられるが、例えば台湾の集団 (Chiu *et al.*, 2002: 321–329, fig. 1, as *C. chinensis*) は今のところ遺伝解析が充分になされていない。なお、北米・ヨーロッパでもマルタニシもしくはシナタニシと考えられる集団が確認されている (Hirano *et al.*, 2019a)。

**生息状況** 池沼・湿地・水田などの止水域や流れの緩やかな水路などの純淡水環境の、主に軟泥底に棲む。溜池などでは護岸等の基質に付着する場合がある。琵琶湖周辺を除き、西日本では確認されている地点はとりわけ少なく (Hirano *et al.*, 2019a)、南西諸島では近年になって複数地点で絶滅した可能性が高い (平野・久保, 2017)。これらの背景にある要因として、棲息地消失や水質変化等の人為的攪乱による影響だけでなく、集団の分断に伴う遺伝的多様性の低下が考えられる。少数の遺伝子座による mtDNA を用いた解析ではマルタニシ・シナタニシの種間関係を解明することが難しく、加えて交雑・遺伝子浸透を生じているため (Hirano *et al.*, 2019a)、特に九州とその周辺 (中国地方を含む) の集団に対して mtDNA を用いた簡易的な DNA バーコーディングでは種判別できない可能性がある。そのため、マイクロサテライトや SNP などの複数の核ゲノム情報が種同定の際に有効である。岡山県内のマルタニシ様の種はまだ遺伝解析がなされておらず、系統的位置は明らかでない。岡山県内の集団がシナタニシ、もしくはシナタニシとの交雑集団である疑いは否定できないものの、仮にシナタニシであった場合、そもそも同種自体が日本での分布が局限されている上に、岡山県は分布の東限に相当することになる。マルタニシである場合は本県が本州での分布西限にあたる可能性も考えられ、いずれにせよ保全単位として重要である。にもかかわらず岡山県での本種は近年極端な減少傾向にあり、多産する場所を見出すのはもはや容易でない。もともと本県ではオオタニシに比べて少産で、環境省 (庁) の分布調査報告書 (環境庁, 1988: 556, no. 0980, as *Cipangopaludina chinensis*; 環境庁自然保護局, 1993: 141, no. 0980; 自然環境研究センター, 2002: 209, no. 00980; both as *C. c. laeta*) でもメッシュに打たれた点の数は格段に少ない。片山 (2001: 9, as *C. c. laeta*) も全県で 6 箇所しか産地を挙げていない。特に県南部での減少が激しく、稲臣 (1953: 48, no. 1, as *Viviparus malleatus*) は児島湾沿岸での産出を記録しているものの、現在その周辺では棲息が認められない (福田他, 2010: 45, as *C. laeta*)。まさに危機的状況にあるため早急な保全対策が必要である。

(平野尚浩・福田 宏)

## オオタニシ

*Heterogen japonica* (Martens, 1861)

腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 タニシ上科 タニシ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が県内にわずかしがなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Martens (1861: 44–45, as *Paludina japonica*). *Viviparus japonicus* var. *iwakawa* Pilsbry, 1902c: 117–118, pl. 9, fig. 3 カクタニシは新参異名。また *Vivipara Sclateri* Frauenfeld, 1865: 531, pl. 22, figs “*Viv. Sclateri*.” 及び *Basilissa? laeviuscula* Yokoyama, 1922: 113, no. 167, pl. 5, fig. 24 も異名の可能性がある。殻長約 53 mm, 殻径約 37 mm, 螺塔の高い円錐形で、殻は薄いものから厚いものまであり、殻表は濃い茶色～緑褐色（稀に赤みがかった茶色）を呈す。殻頂は摩滅して殻皮が脱落することがある。殻表は平滑なもの、打痕があるもの、弱い螺肋を複数生じるものまで変異に富む。殻表を藻類が覆う場合がある。体層周縁が角張る個体も見られる。臍孔は極めて狭いか閉じる。殻口内部は白色～灰色。幼貝の殻は算盤珠状の輪廓を呈し、周縁が強く角張る。蓋は水滴状、茶色～淡褐色の角質で多旋型、内側は平滑で、殻口を完全に塞ぐ。頭部-腹足は灰色～淡黄褐色の地に黒斑を散らし、頭触角は長く鞭状。雄の右側の頭触角はカールして交接の際に陰茎の役割を果たすのに対し、雌のそれはカールせず単純。体サイズや殻形にも性的二型が見られる (Van Bocxlaer & Strong, 2016: 235–260, fig 1–13, as *Cipangopaludina japonica*)。軟体部の内部形態は Van Bocxlaer & Strong (2016) が詳述している。近年の分子系統学・集団遺伝学的研究により、本種は琵琶湖固有の *Heterogen longispira* (Smith, 1886) ナガタニシ及び *H. sp.* 未記載種と最近縁になることが明らかとなった (Hirano *et al.*, 2015b: fig. 2, as *C. japonica*; 2019b: 5032–5047, figs 1, 3)。オオタニシは、ナガタニシや *H. sp.* とは殻頂附近の彫刻パターンや殻形態の輪廓パターンなどにより形態的に区別され、特に幼貝で顕著な差が見られる。また、これまでオオタニシは *Cipangopaludina Hannibal*, 1912 マルタニシ属の一員とされてきた。この属のタイプ種である *C. malleata* (Reeve, 1863) 自体の系統的位置は明らかではないが、同種は *C. chinensis* (Gray, 1834) シナタニシもしくは *C. cf. laeta* (Martens, 1861) マルタニシと同種あるいは近縁種である可能性が高く、シナタニシ・マルタニシはオオタニシや前述の琵琶湖固有種群とは遺伝的に大きく異なるクレードに入るため、分子系統分類学的にオオタニシは *Heterogen Annandale*, 1921 ナガタニシ属に所属させるのが現状ではよいように思われる。ただし今後の系統学・分類学的な研究により、さらに属名が変更されるかもしれない。

写真： 和気郡和気町田賀 岡山県自然保護センター 虫の原っぱ, 2018年11月7日, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「Japan」。異名である *Viviparus japonicus* var. *iwakawa* カクタニシは「Furukawa, Rikuzen, Japan」(陸前國(現・宮城県大崎市)古川)から記載された。北海道から九州まで(周辺島嶼部を除き)広く分布する (Hirano *et al.*, 2019b)。韓国からも記録があるものの (関他, 2004: 121, fig. 186, as *Cipangopaludina japonica*)、殻形態が比較的類似するシナタニシの誤同定かもしれない。ロシア沿海州や中国北東部にはナガタニシ属の姉妹群となる *Ussuripaludina Zatravkin & Bogatov*, 1987 が分布するが、オオタニシそのものは分布しない可能性が高い (Hirano *et al.*, 2019b)。そのため、本来オオタニシは日本列島固有種の可能性がある一方で、北米に人為的に移入されて分布を拡大している (Van Bocxlaer & Strong, 2016)。ミトコンドリア DNA では急速な種分化や過去の交雑・遺伝子浸透などからオオタニシと上述の琵琶湖固有種群を区別できず、ゲノムワイド解析の結果から、後群はオオタニシから分化した系統で、オオタニシ自体は側系統群である可能性が示された (Hirano *et al.*, 2015b, 2019b)。オオタニシは琵琶湖への流入河川にも見られ (Hirano *et al.*, 2019b)、琵琶湖内で採集された記録も過去にはあるが (松岡, 未発表)、それらは流入河川の河口部で確認されている。また、タニシ科の種は浮游幼生や卵の時期を経ず、直接幼貝が生まれ出る。オオタニシの繁殖戦略は生態学的にはいわゆる小卵多産の r 戦略をとるが、近縁種ナガタニシは大卵小産の k 戦略をとる。これは異なる生息環境 (池や水路といった攪乱を比較的受けやすい環境 vs. 古代湖など水系の状態が長期間安定している環境) に応じた適応の結果と考えられ、本科内部においてそれぞれの戦略が複数回独立に進化しており (L.J. Zhang *et al.*, 2015; Hirano *et al.*, 2019b)、オオタニシは生態的にも近縁種群とは区別される。そのため、琵琶湖は本来のオオタニシの分布域ではなく、近縁種群とは地理的・生態的に隔離されてきたと考えられ、オオタニシと琵琶湖固有種群の交雑は頻繁に起こるものではなく非常に稀なイベントと考えられる。

**生息状況** 池沼・湖などの止水域や流れの緩やかな水路などの純淡水環境の、主に軟泥底に棲む。溜池などでは護岸等の基質に付着する場合がある。稀に水田にも矮型化した個体が見られる (Hirano *et al.*, 2019b)。古来全国的にごく普通に見られ、マルタニシともども一般に広く親しまれた普通種であったが、戦後の低地の開発や稲作放棄に伴う棲息環境の消失や排水・農薬等による水質汚染に代表される複合的要因によって急減し、多産する場所は少なくなった。かつての岡山県では、環境省(庁)の歴代の分布調査報告書(環境庁, 1988: 555, no. 0970; 環境庁自然保護局, 1993: 142, no. 0970; 自然環境研究センター, 2002: 210, no. 00970; all as *Cipangopaludina japonica*)によって、ほぼ全県に満遍なく産地が存在したことが読み取れる。最近では、片山 (2001: 9–10, as *C. japonica*) が 1990 年代の調査によって本県内から 69 箇所もの産地を挙げているものの、それら全てが生貝であったか否かは不明である。現在確実に個体群が維持されているのは和気郡和気町田賀の県自然保護センター敷地内などわずかしがなく、健全な場所でははや貴重であるからなんらかの保全措置が検討されてよい。特に岡山県に産する本種は西日本に広く分布する系統の一部からなるが、遺伝要素が他の地域のものとは多少異なっているため、保全単位として重要と考えられる。

(平野尚浩・福田 宏)

## チグサカニモリ

*Plesiotrochus acutangulus* (Yokoyama, 1924)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 エンマノツノガイ形亜区 エンマノツノガイ上科 チグサカニモリ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Yokoyama (1924: 19–20, no. 20, pl. 1, fig. 7, as *Bittium acutangulum*) で、タイプ標本の図は Oyama (1973: 26, pl. 5, fig. 21a–b) にも転載されている。戦前はオーストラリア北部から記載された *Plesiotrochus pagodiformis* Hedley, 1907: 498–500, pl. 17, fig. 16 に同定されていたが、吉良 (1945: 54, no. 586) 以降は全ての著者が現在の学名を用い、用法は安定している。殻長約 8 mm、殻径約 4.5 mm、仏塔を想起させる高円錐形でやや厚く、周縁に強く角張った螺肋を巡らし、縫合は強く縊れる。体層では周縁の螺肋の直下にもう 1 本の螺肋が現れて並走する。殻表は細かい螺脈と畝状の縦肋があり、白色の地に赤茶褐色の斑点が散在する。殻口は円形に近く、外唇は肥厚せず鋭い。軸唇は緩く彎曲する。蓋は角質で少旋型。軟体は未詳。

写真： [笠岡市] 白石島，畠田和一コレクション #283，福田撮影。殻長 9.0 mm，殻径 4.9 mm。



**分布** タイプ産地は「Numa」（千葉県館山市沼，完新世の隆起サンゴ層中の化石）。現生個体は房総半島以南に分布する。日本海側は肥後・後藤 (1993: 100, no. 1358) が「男鹿半島以南」として以来、近年の文献もそれに従っているが、佐渡島（伊藤勝, 1978: 206, no. 54）より北の具体的な記録を筆者は見出すに至っていない。小笠原諸島父島 (Fukuda, 1995: 7, pl. 48, fig. 851), 沖縄島 (久保, 2014: 323), 朝鮮半島 (関他, 2004: 133, fig. 232), 台湾の屏東県琉球島 (村岡, 1972: 39, no. 540), オーストラリア北部 (Wilson, 1993: 132) からも記録されているが、それらの一部は *P. pagodiformis* など同属の他種と混同されているかもしれない。

**生息状況** 潮間帯下部から潮下帯にかけて岩礁の海藻上に棲息するとされるが、決して普通種ではない。瀬戸内海では稲葉 (1982: 89–90, no. 158) によって全域に普通に産するとされているものの、実際に生貝を目にする機会は少ない。広島県芸南地方でも近年は死殻が報告されたのみである (濱村, 2004: 37, text-fig.)。岡山県では文献記録はなく、畠田和一コレクションに含まれる「[笠岡市] 白石島」産 (1 個体, 「矢倉 [和三郎] 氏同定」, #283; 写真) 及び「[倉敷市下津井] 六口島」産 (1 個体, 「波部 [忠重] 氏同定 1957.6.」, #4208) の 2 ロットだけが本県での産出の証拠である。標本の状態から判断して両個体とも砂浜へ打ち上げられた死殻であったとみられるが、現在の岡山県で浜辺を歩いても本種の殻が拾えるとはとても想像できない。高度経済成長期の水質の悪化などによって岩礁藻場の生物多様性が著しく低下し、本種の個体群もその時代に壊滅したものと考えられる。

(福田 宏)



## ノミカニモリ

*Bittium glareosum* Gould, 1861

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 オニツノガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。絶滅した可能性もある。

**形態** 本種に対する最古参名は *Cerithium pusillum* Dunker, 1860: 224, no. 6; 1861: 11, no. 51, pl. 2, fig. 6 (not of Pfeiffer, 1840; Gould, 1849; Jeffreys, 1856) (Janssen, 1993: 415, pl. 3, fig. 17 にレクトタイプの写真あり) であるが、この名はそれ以前に一次同名が3つも存在するため無効である。Tryon (1887: 154, pl. 30, fig. 17) は置換名 *Bittium perpusillum* を与えたが、それより早く記載された *B. glareosum* Gould, 1861: 387 が有効名となる。ただし波部 (1960a: 21, no. 4; 26, no. 26) は *B. glareosum* と同一記事の同じ頁で記載された *B. craticulatum* それぞれのタイプ標本を比較した結果、「個体的には連続して区別を立てることが困難」と考え、*B. craticulatum* を有効名とした。もし両名が波部の指摘通り同種であれば、国際動物命名規約の条 24 に定める通り波部 (1960a) が両名に対する第一校訂者として *B. craticulatum* へ優位性を与えたことになり、*B. glareosum* は無効となる。しかし本種や同属の近縁種の変異幅はまだ十分に検討されたとは言えず、*B. craticulatum* と *B. glareosum* が別種である可能性も残るため、今回は両名をあえて同種とはせず、長谷川 (2017: 792–793, pl. 61, fig. 5a–b) に倣って本種の有効名を *B. glareosum* としておく。*B. craticulatum* 及び *B. glareosum* それぞれのレクトタイプの写真は Yen (1944: 569–570, pl. 50, figs 5, 20–21), Johnson (1964: 61, 84, pl. 12, figs 12, 15), Higo *et al.* (2001: 27, fig. G678; *B. glareosum* のみ) に掲載されている。殻長約 6 mm, 殻径約 2 mm, 細長い塔形で厚い。螺層は膨らまず縫合も浅く、側面は直線的。後成層の殻表に太い螺肋を 4 本巡らし、それらが低い縦肋と交叉して浅い格子目となり、結節点は疣状。殻底にも低い螺肋を数本もつ。殻表全体が濃茶褐色または白色で、螺肋のうち周縁附近の 2 本のみ不連続に褐色に染まる個体も現れ、この型にフタスジノミカニモリの和名が与えられたが、種内変異である。殻口は縦長の種子形で、外唇は肥厚せず、螺肋の末端に依じて波打つ。内唇～軸唇は単純。前管溝は短い。蓋は半月形、半透明な角質、少旋型。

**分布** ホモニムで無効となった *Cerithium pusillum* Dunker のタイプ産地は「im Hafen von Decima in Japan」(長崎市出島港)。現時点の有効名である *Bittium glareosum* は「Port Lloyd, Bonin Is., and Loo Choo Is.」(小笠原諸島父島二見港及び琉球列島)、同種とされることのある *B. craticulatum* は「Hong Kong; laminarian zone」(香港; 褐藻帯) からそれぞれ記載された。分布の北端を「北海道」とした文献が散見されるが (e.g. 奥谷, 1986: 82, 83, unnumbered fig.; Higo *et al.*, 1999: 84, no. G678), 北海道での具体的な産出記録は見当たらず、東北太平洋岸からも明確な報告はない。実際に産するのは太平洋側が房総半島以南 (清水利, 2001: 29, no. 311), 日本海側が佐渡島以南 (黒田, 1957: 19, no. 127; 伊藤勝, 1978: 206, no. 55; 1979: 44, no. 40; both as *B. craticulatum*) で、九州までと南西諸島、小笠原諸島から知られる (黒田, 1960: 13, no. 338; Fukuda, 1993: 32, no. 132, pl. 10, fig. 132, as *B. craticulatum*)。国外は中国海南島、台湾、フィリピンから記録がある (村岡, 1972: 38, no. 534, as *B. craticulatum*; Poppe *et al.*, 2008: 288, pl. 89, fig. 2)。韓国にも産するとされるが、関他 (2004: 123, fig. 194-1-2) の図示個体は *Cerithium variegatum* (Kuroda & Habe in Kuroda, Habe & Oyama, 1971) マダラチビカニモリであり本種ではない。

**生息状況** 潮間帯下部から潮下帯 (水深 20 m 程度まで) の礫混じりの砂底に棲息し、死殻は浜辺に打ち上げられる。タイプ産地の小笠原諸島では普通に見られる (Fukuda, 1993)。外洋に面した海岸により多いが、稲葉 (1982: 88, no. 144, as *Bittium craticulatum*) は瀬戸内海でも全域に「普通」とした。ただし小形で地味な外観の種であるためか文献記録は決して多くなく、全国的な産出状況は詳しく把握されているとは言い難い。岡山県では大垣内 (1968a: 45) が倉敷市塩生のサンドポンプで得たと述べたのが唯一の文献記録で、それ以外に情報は一切なく、畠田和一コレクションにも標本は含まれていない。対岸の香川県でも明確な報告が見当たらないことから、備讃海域ではもともと少なかったと推測されるが、近年も全く目にする機会がないのは、1960年代以降の海底浚渫や水質悪化などによって絶滅したからかもしれない。その判断を下すにはさらに情報を探す必要がある。

(福田 宏)

## カヤノミカニモリ

*Clypeomorus bifasciata* (Sowerby II, 1855)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 オニツノガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 本種を再検討した Houbriek (1985: 23–41, figs 10–17) によれば、最古参名 *Cerithium morus* Lamarck, 1822: 75, no. 29 (not of Bruguière, 1792) とそれに次いで古い *C. concisum* Hombron & Jacquinot, 1848: 102–103; 1854: pl. 24, figs 1–2 (not of Matheron, 1843) 及び *C. gemmulatum* Hombron & Jacquinot, 1848: 102; 1854: pl. 24, figs 3–4, 7–10, 39–41 (not of Marcel de Serres, 1840) はいずれも他の学名の新参一次同名で無効。*C. bifasciatum* Sowerby II, 1855: 874, no. 110, pl. 183, fig. 198 が有効名となる。これと同時に Sowerby II (1855: 874, nos 108, 109, 111, pl. 183, figs 193, 194, 198) が記載した *C. vittatum*, *C. Hanleyi*, *C. rubro-lineatum* は異名と見なされている。このほか新参異名が7つ知られる：*C. humile* Dunker, 1861: 9, no. 44, pl. 2, fig. 17; *C. nigro-fasciatum* Sowerby II, 1865: sp. 58, pl. 9, fig. 58; *C. obesulum* Sowerby II, 1865: sp. 149, pl. 20, fig. 149; *C. Uranus* Bayle, 1880: 251, no. 30 (*C. vittatum* Sowerby II の置換名); *Clypeomorus clypeomorus* Jousseaume, 1888: 171–173, no. 14; *Cer. oceanicum* Hedley, 1899: 431–432, fig. 19; *Cl. penthusarus* Iredale, 1929: 278 (*Cer. morus* Lamarck の置換名)。なお *Clypeomorus* Jousseaume, 1888 の性は女性であるので、本種の種小名の語尾を *-us* とするのは誤り。別名カスリカニモリ, アラレカニモリ, ビョウウチカニモリ。平均的な個体は殻長約 20 mm, 殻径約 10 mm であるが変異幅が大きい。蛹形ないし太短い紡錘形で厚く堅牢, 螺層はやや膨らみ, 縫合は目立たない。殻表は太く粗い螺肋と縦肋とが交叉し, 結節点は横長の疣状となる。九州以北では殻表全体が黒色の個体が大半を占めるが, 熱帯域では白っぽい個体が多く, 肋上の結節のみ黒く染まるか, または全体が淡橙色となったり, 褐色の螺状色帯を巡らすなど変異に富む。殻口は半月形で, 外唇は肥厚する。内唇後端に強い歯状突起を1個もつ。殻口内部は白い滑層が発達し, 光沢がある。前管溝は短くて広い。蓋は半月形, 半透明で茶色い角質, 少旋型。頭部-腹足背面の色彩も変異が大きい, 多くは淡褐色の地に細かい白点とそれより多少大きい黒斑を散在する。頭触角は細く, 長さ中庸。外套膜の辺縁に多数の明瞭な突起を並べる。足の右側に絨毛帯をもつ。Houbriek (1985) は殻の変異幅や歯舌, 外套腔, 消化器・生殖器・中枢神経系も含め, 詳細極まる記載を遺した。

写真： [瀬戸内市] 牛窓前島, 畠田和一コレクション #247, 福田撮影。殻長 17.2 mm, 殻径 9.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Nicholas, Island of Zebu, Philippines」(フィリピン, セブ島のセントニコラス)。異名のうち産地が明らかなものは *Cerithium concisum* が「Oceania」(オセアニア), *C. gemmulatum* は「Solomon Is; Torres Straits; Vavao [= Vava'u]」(ソロモン諸島; トレス海峡; トンガのヴァヴァウ諸島), *C. humile* は「Japonica」(日本), *C. nigro-fasciatum* は「Philippines」(フィリピン), *Clypeomorus clypeomorus* は「Obock」(ジブチのオボック), *Cer. oceanicum* は「Funafuti」(ツバルのフナフティ島) で, これら以外の異名は産地不詳である。日本は分布域の世界的北限で, 太平洋側は房総半島以南 (清水利, 2001: 28, no. 303) に知られる。日本海側は現生個体の北限は山口県北長門海岸 (河本・田邊, 1956: 20, no. 202; 池田美・多田武, 1963: 13, no. 209; both as *Cl. humilis*) であるが, Matsuura (1977: 145, no. 94, pl. 18, fig. 10) はさらに北の富山県氷見市朝日山から後期更新世の化石を報告している。伊豆・小笠原諸島や南西諸島からも知られる (e.g. Fukuda, 1993: 35, pl. 11, fig. 151, as *Cl. petrosa petrosa* [誤同定]; 久保, 1995: 40, fig. 5; 西村和, 1999: 38, nos 364, 366, as *Cl. humilis*, *Cl. petrosus* [sic]; 名和, 2009: 28, no. 59, pl. 1, fig. 13)。国外は朝鮮半島・中国 (閩他, 2004: 123, fig. 191-1-2; Ma, 2004: 41–42, pl. 018, fig. E, as *Cl. humilis*) を経てインド-西太平洋の広い範囲に分布し, マーシャル諸島, サモア, ニュージーランド, オーストラリア北岸, インド, アラビア湾, 紅海, マスカリン諸島, 南アメリカに至る (Houbriek, 1985: 38, fig. 17; Bosch et al., 1995: 53, fig. 165, as *Cl. bifasciatus* [sic]; Steyn & Lussi, 1998: 40, 41, fig. 141, as *Cl. bifasciatum* [sic]; Dekker & Orlin, 2000: 19, no. 18; Swennen et al., 2001: 110, fig. 286; Subba Rao, 2003: 129, pl. 20, figs 13–14; Dharma, 2005: 88, pl. 19, fig. 19a–c; Poppe et al., 2008: 292, pl. 91, fig. 1)。

**生息状況** 内湾湾口部または外洋に面しつつも波穏やかな海岸において, 岩礁の潮間帯上~中部の岩盤間や粗い砂礫底表層に高密度で群生する。太平洋岸や九州西岸以南では同所的に *Planaxis sulcatus* (Born, 1778) ゴマフニナが見られ, 本州~九州ではウネムシロがしばしば随伴する。南西諸島以南では今も多産する普通種であるのと対照的に, 九州以北では1970年代を境に劇的に減少し, 既知産地の大半で個体群が消滅した (福田, 2012: 28, text-fig.)。特に瀬戸内海での減少ぶりは著しく, 現時点で健在と呼べる場所は全域を通じて知られていない。減少要因は不明のまま, 河本 (1929: 132, as *Cerithium* (*Aluco*) *concisum* var. + *humile*) は山口県大島瀬戸での本種が「大正 13 [1924] 年の夏, 急に蕃殖し岩に鈴なりになつて附着して居た程であるのに, 又急激に減少して其の後は殆んど見る事の出来なくなつた... 其の原因が奈邊にあるか判断に苦む」(原文ママ) と述べている。まだ瀬戸内海の実環境攪乱が顕著でなかった 1920 年代においてもこのような観察がなされているため, 人為的な環境の荒廃だけが本種を減少させたわけではなさそうであるが, その上さらに護岸や埋め立てなどによる棲息地の消失や水質汚染が加わって, 本種の衰退傾向に拍車をかけた可能性が高い。岡山県では畠田 (1935: 234, no. 51) が和気郡 [現・備前市] 日生町大府島で, 本種が近隣住民に「ナガダビ」なる方言で呼ばれていたと記録しており, 当時は日常的に目にするほど高密度で産出したことが窺われる。畠田コレクションにも「[瀬戸内市] 牛窓前島」(41 個体, #247; 写真), 「[岡山市南区] 小串村米崎」(5 個体, #240), 産地表記なし (38 個体, #7355; 4 個体, #4458) の各標本が現存する。しかしそれ以降は岡大玉野臨海 (1978: 160) の目録中に登載されたのみで, 特に最近 20 年間では破片すら見出された例がない。本種は潮間帯上部の表層という目につきやすい場所に棲むため, 個体群が存在するなら見いだすのは容易なはずであるが, 長期間にわたって死殻すらも一切確認できないのはもはや完全に滅亡したとしか考えられない。

(福田 宏)

## ウミノナ

*Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 ウミノナ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 現存産地が少なく、棲息環境も限定的である。

**形態** 原記載は Lischke (1869a: 106, as *Lampania multiformis*) で、のちに Lischke (1869b: 74–75, pl. 6, figs 1–10; 1871b: 69, pl. 5, figs 23–24) に図示された。殻長約 35 mm, 殻径約 14 mm。太くずんぐりした塔形で厚く堅牢、螺層の膨らみは弱く、縫合はほとんど縊れない。殻表は低く幅広い螺肋を巡らし、個体によっては太い軟状の縦肋をもつが、概して縦肋は弱い。体層の左側が多少盛り上がって鈍く角張る。螺肋は黒褐色または灰褐色で、煉瓦を並べたごとく矩形の模様を連ねる個体が典型的であるが、縫合下や周縁に白色螺状帯が現れる場合もある。殻口は円く、外唇は肥厚し、イボウミノナがもつような彎入はない。内唇後端に著しく強大な滑層瘤を有し、軸唇は短く、白色で光沢がある。殻口内部は漆黒の螺状帯を規則的に巡らす。前管溝は短くて幅広い。蓋は円形、茶色い角質、核を中央にもつ多旋型。頭部-腹足背面は灰色の地に白斑を散在する。頭触角は細くて短い。頭触角及び口吻背面は細い黒条が密に並ぶ。足は短い垂円形、前端は直線的で多少左右に広がり、蹠面はベージュ色(高重, 2019: 69, text-figs に生体写真あり)。卵囊とヴェリジャー幼生を Furota *et al.* (2002: 15–21, 23, figs 3, 5, 6) が図示している。

写真： 玉野市沼, 2008年8月8日, OKCAB M23664, 福田撮影。殻長 35.2 mm, 殻径 14.0 mm。



**分布** タイプ産地は「mare Japonicum」(日本の海)であるが、のちの Lischke (1871b) は「Nagasaki, Kagosima und Liuku-Inseln」(長崎、鹿児島及び琉球列島)とより具体的に産地を記した。北限は北海道南西部で、八田・佐々木望 (1910: 95, no. 37, as *Potamides multiformis*) が「後志銭函」(後志支庁小樽市銭函)の産地を挙げ、黒田・木下虎 (1951: 13, no. 118) や波部・伊藤潔 (1965: 26, pl. 7, fig. 13), 柏尾・福井 (2012: 58, no. 68) も記録している。太平洋・日本海両岸とも本州・四国・九州沿岸に見られるが、奄美大島以南には同属の別種 *Batillaria flectosiphonata* Ozawa, 1996 リュウキュウウミノナが産する (Kojima *et al.*, 2003: 1423–1432, fig. 4)。国外は朝鮮半島 (權他, 1993: 69, fig. 26-6-2 [6-1 は *B. attramentaria* (Sowerby I, 1855) ホソウミノナ]; 269; 関他, 2004: 131, fig. 224-1–2; Hong *et al.*, 2010: 258, 260, fig. 6c), 中国 (Ma, 2004: 39, pl. 016, fig. J), ベトナム (Hylleberg & Kilburn, 2003: 36) から知られる。

**生息状況** ホソウミノナやイボウミノナとともに内湾の砂泥干潟表層に産する。ホソウミノナが外洋に面した岩礁間や砂底など幅広い棲息環境にも見られるのに対し、本種とイボウミノナは湾内の砂泥底にほぼ限定される。干潟上に夥しい個体数が高密度で棲息するのが本来あるべき光景であるが、近年は各地で絶滅や急減が伝えられる。減少傾向はイボウミノナほど顕著でないものの、東京湾や相模湾では激減して稀少化した (池田等他, 2001: 34, text-figs 20–21, pl. 1, fig. 6; 黒住, 2011: 433; 木村昭・福田, 2012: 31, text-figs a–d)。三河湾以西、瀬戸内海 (特に周防灘)、有明海などに健在個体群が点在する。本種とイボウミノナはともに浮游幼生期を経るが、その期間は後種が 7 日程度なのに対して本種はより長い (Kojima *et al.*, 2005: 687)。さらにホソウミノナは直達発生であり、この差異が環境変化への耐性に直結して、3 種間で減少傾向に差が生じた可能性が指摘されている (Furota *et al.*, 2002)。瀬戸内海中央部においてもイボウミノナが絶滅したのに対し、本種はまだ生き残っている。香川県では近年の調査でも決して少なくない産地が見出され、「本種よりもホソウミノナの方が個体数は少なかった」と報告されている (瀬尾・Tanangonan, 2014: 92, no. 43)。岡山県ではこれと逆で、ホソウミノナは少なくないが本種の現存個体群はわずかしかない。本県では戦前、県内の貝類方言を調査した桂 (1932: 9, fig. 9) と畠田 (1935: 235, no. 52) によって、現在の備前・瀬戸内・岡山・倉敷・笠岡各市に相当する地域の集落において、ミゴーナ、ゴウナ、ヒツキニシン、ヅミ、ナガツブ、ナガダミ、テンボロ、チンボダミ、ヤドカリなどと様々な名を与えられていたと記録されており、地元の人々も日常的に目にする普通種であったことを反映している。また窪田 (1962: 33, no. 429) は「児島湾」産の標本を挙げ、岡大玉野臨海 (1978: 160) と牛窓臨海 (刊行年不詳: 48) の目録にも掲載されている。しかし最近 20 年間で生貝が見出された場所は少なく、備前市穂波・新田川河口及び日生町鹿久居島現寺 (2018 年)、玉野市沼 (2008 年, OKCAB M23664; 写真)、倉敷市児島田の口 (2018 年)、同市玉島黒崎南浦 (2014 年, M28932) などで、棲息環境自体が海岸線の護岸や埋め立て、干拓によって分断されているため各個体群は互いに孤絶している。絶滅の危機が目前に差し迫っているというほどではないものの、どこにでも満遍なく多産していた往時の状況と比べると甚だしく減ったことは明白である。

(福田 宏)

## イボウミニナ

*Batillaria zonalis* (Bruguière, 1792)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 ウミナ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Bruguière (1792 in 1789–1792: 497–498, no. 39, as *Cerithium zonale*) であるが、この学名を本種に用いるには疑念が残る。原記載には図がなく、産地も「Je ne connois pas la patrie de cette coquille」(私はこの貝の出自を知らぬ)とされ、ただ異名表の中に Linnaeus (1767a: 1232, no. 604) の「*Trochus striatellus*」(産地は「in M. Mediterraneo」つまり地中海、原記載は Linnaeus, 1758: 760, no. 525) が疑問符付きで挙げられるとともに、M., S. & A. Lister (1770: pl. 1018, fig. 81) の図示個体(二語名法適用外、産地は「Jamaica, Barb.」即ちジャマイカとバルバドス)を「想起させるが、Lister には記載文がないので異名表に含めなかった」という趣旨のことが書かれている。しかし Dodge (1958: 215) によれば *T. striatellus* は正体不明のままであるし、Lister の図示個体は一見して本種とは異なる種であり、両者の産地も地中海とカリブ海のため本種と同種とは考えにくい。*C. zonale* が本種とされたのは Kiener (1841 in 1841–1842: 62–63, no. 47, pl. 8, fig. 1) が発端らしく、そこに図示された個体(産地は「Habite les mers de l'Inde et celles de la Chine」、インドと中国の海)は確かに本種であるが、Lamarck の標本と明記されている一方、Bruguière が *C. zonale* の記載時に用いたもの(つまりタイプ標本)とは記されていない。だとすると単に Kiener が *C. zonale* をタイプ標本ではない標本に基づいて誤同定し、それが現在まで連綿と伝えられている可能性も棄却できない。ここで直ちに結論を下すことは不可能なので、当面は慣用法に倣って *C. zonale* を本種の学名とするが、いずれ改めて慎重な考証が必要である。また Higo *et al.* (1999: 87, no. G733) や MolluscaBase (2018) などは *C. zonale* の新参異名として *Lampania aterrima* Dunker, 1877: 70, no. 12 (タイプ産地は「maris Japonici」、日本の海)を挙げているが、のちに Dunker (1882: 109–110, pl. 5, figs 7–8) が公表した図を見るとこれは本種でなくウミニナである。殻長約 40 mm、殻径約 13 mm。細長い塔形で厚く堅牢、螺層の膨らみは弱く、縫合はわずかに縊れる。殻表は太く粗い螺肋と彎曲した畝状の縦肋をもち、縦肋は肩部で低い結節状をなす。螺肋は濃茶褐色で肋間が白い個体が多いが、縫合下や周縁に幅広い白色螺状帯を巡らしそれ以外は濃褐色の個体も現れる。殻口は縦長の菱形で、外唇後方に大きな彎入をもち、前方は袖状に張り出す。内唇後端に強い滑層瘤を有し、軸唇は幅広く白色で光沢がある。前管溝は短くて幅広い。蓋と頭部・腹足はウミニナとほぼ同様(高重, 2019: 69, text-figs に生体写真あり)。

写真： 笠岡市西大島 大島川河口，2004年10月13日，OKCAB M9881，福田撮影。殻長 41.5 mm，殻径 15.1 mm。



**分布** タイプ産地は上記の通り不詳。多くの文献で「北海道南部以南」に分布するとされているが(e.g. Higo *et al.*, 1999; 長谷川, 2017: 793–794, pl. 61, fig. 14), 北海道の貝類相をまとめた主要な文献(Schrenck, 1867; 八田・佐々木望, 1910; 木下虎・諫早, 1934; 木下虎, 1937; 黒田・木下虎, 1951; 石川政, 1953; 波部・伊藤潔, 1965; 石山, 1970)には本種への言及がなく、具体的な出典を見出せていない。実際の北限は太平洋側が宮城県松島湾で(Kojima *et al.*, 2005: 686–693; 鈴木孝, 2016; 金谷他, 2018: 43, 45, 46, 47, fig. 3f (right)), 日本海側は男鹿半島以南(西村正・渡部景, 1943: 66, no. 61)に知られ、四国・九州を経て南西諸島(久保, 1995: 43, fig. 3)まで見られる。国外は朝鮮半島(權他, 1993: 69, fig. 26-8-1-2; 270), 中国(Ma, 2004: 39, pl. 016, fig. G; 楊他, 2013: 36, 37, fig. 098; 王他, 2016: 23, no. 59, text-figs), ベトナム(Hylleberg, 2000: 525; Hylleberg & Kilburn, 2003: 36), シンガポール(Tan & Chou, 2000: 76, text-figs), フィリピン(Lozouet, 2008: 286, pl. 88, figs 6–8, as *Batillaria zonale* [sic]) などから記録があるが, Ozawa *et al.* (2009: 503, 515m fig. 3) は分子系統解析の結果、香港産の一部とベトナム、シンガポール、フィリピンの個体が本種とは異なるクレードを形成したことから、後者を未記載種とみなしている。なお本種は 1930 年代に北米カリフォルニア州に *Magallania gigas* (Thunberg, 1793) マガキとともに移入されたと言われ、現地産個体に基づいて消化器系の詳細な解剖(Driscoll, 1972: 275–385, figs 2–8)や直達発生であること(Behrens Yamada & Sankurathri, 1977: 179, fig. 1)が報告されたが、Hanna (1966: 44–45, figs 37–39)の図を見ると移入されたのはホソウミニナまたはウミニナであって本種ではない。

**生息状況** 内湾の砂泥干潟中～下部の表層に産し、ウミニナやホソウミニナに随伴する場合も多いが、本種はより汀線に近い限られた範囲に見られることが多い。本州・四国・九州のウミニナ属 3 種は戦後にそれぞれ大きく産出の状況が変化し、ホソウミニナは現在も全国各地に多産するものの、イボウミニナは激減して絶滅の淵にあり、ウミニナはその中間である。本種は東京湾、相模湾、浜名湖、伊勢湾などで絶滅し(池田等他, 2001: 33, fig. 10; 黒住, 2011: 425; 木村昭・福田, 2012: 31, text-figs a–b), 健在と呼べる場所は英虞湾、周防灘西部、油谷湾、羊角湾などわずかしこ残されていない。一方で沖縄島以南には現在も高密度で多産する。九州以北での減少要因は明確でないが、水質の悪化が打撃を与えた可能性がある。瀬戸内海中央部での棲息は絶望的で、香川県では瀬尾・Tanangonan (2014: 92, no. 45, pl. 1, fig. 7) が 2009–2013 年に調査した結果、「著しく磨滅した死殻がごく少数採集されたのみ」と報告した。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 160) の目録に記載されているが、畠田和一コレクションには含まれておらず、20 世紀中に採集された標本はいまだ存在が確認されていない。しかし香川県と同様に古い死殻は現在も各地に散見され、岡山・玉野・倉敷・浅口・笠岡各市で得られている(OKCAB M68, M1774, M5597, M8503, M9332, M9881: 写真, M16349, M22012, M23522, M23648, M23683)。特に笠岡湾奥部では比較的多数の死殻が干潟に転がっている。また、児島湖周辺の明治以降に造成された干拓地からもウネハナムシロやハイガイ等とともに死殻が現れ、それらは褪色こそしているものの大きな破損がない殻も多いため、比較的近い過去まで県内に多産していたことは確実である。しかし現在の岡山県で本種が棲息している場所は一切知られていない。干拓や埋め立て、護岸による干潟消失に水質悪化が重なって、1960 年代以降に全個体群が致命的な打撃を被り、ついに岡山県から絶滅したと考えられる。

(福田 宏)

## シマヘナタリ

*Cerithidea tonkiniana* Mabilie, 1887

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 キバウミナ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧 I 類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息環境が失われたため絶滅した。

**形態** 原記載は Mabilie (1887: 158–159, no. 80) で、シタイプの写真を Reid (2014: 47–48, figs 2F, 13N–Y, 14A) が公表し、MNHN (2019) でも閲覧できる。日本産の本種は長らく *Cerithidea ornata* (Sowerby II, 1855: 887, no. 167, pl. 186, figs 277–278, as *Cerithium ornatum* “A. Adams”) (タイプ産地はフィリピン) に同定されてきたが、Reid *et al.* (2013: fig. 1) や Reid (2014) による検討の結果、*Cerithidea ornata* はフィリピン・インドネシア・ニューギニア・ソロモン諸島に産する *Cerithidea balteata* A. Adams, 1855b: 84, no. 15 (タイプ産地はフィリピンの Ticao) の新参異名であり、日本のシマヘナタリではないことが明確化された。殻長約 35 mm、殻径約 18 mm、細長い塔形、やや薄質、螺層は弱く膨らみ、縫合は浅い。成貝では殻頂部数層が脱落する。殻表は多少斜めに傾いた強く縦肋をほぼ等間隔に並べ、肋間は肋の幅の 1–1.5 倍程度で平滑。周縁は 1 本の螺肋を巡らして角張り、そこから前方の殻底に弱い螺脈を数本もつが、それ以外の螺状彫刻はごく弱いか完全に欠く。周縁角より後方に通常 4 本、殻底に 1–2 本の紫褐色の螺状色帯を巡らし、個体によってはそれらの一部が癒合して少数の幅広い色帯となる。殻口は歪円形で、外唇は明瞭に反転して肥厚する。軸唇は直線的で、前端は鋭い角をなし、背面側へ向けて多少突出する。殻口内部は光沢が強く、飴色で、殻表の螺状色帯がくっきりと見える。蓋は円く、茶色い角質、核を中央にもつ多旋型。頭部-腹足背面は灰色で、口吻の前方半分のみ艶やかな漆黒色を呈し、前端に鮮明な檸檬色の斑点を左右に一对生じる (福田, 2000: 106–110, 135, figs 5.4b, 5.5b, as *Cerithidea* (*C.*) *ornata* 及び Reid, 2014 に生時の写真あり)。歯舌を Li & Xu (2013: 452–453, figs 8–9, as *Cerithidea sinensis* Philippi, 1848 [誤同定]) が図示している。本種の殻は *Cerithidea moerchii* (A. Adams in Sowerby II, 1855) フトヘナタリに似るが、明瞭な螺状彫刻を欠いて縦肋が目立つこと、殻口内部が飴色で複数の褐色帯が見えること、口吻前端が黒くて檸檬色の斑点を 2 個有することにより識別は容易である。クロヘナタリとの識別点は後種の項を参照。



写真： 邑久郡幸西村 [現・岡山市東区西幸西・東幸西]，1956 年 3 月 21 日，畠田和一コレクション #238，福田撮影。殻長 37.3 mm，殻径 13.7 mm。

**分布** タイプ産地は「Tonkin」(ベトナム北部の東京＝トンキン)。国内では東京湾、瀬戸内海 (児島湾と周防灘)、玄界灘、有明海、八代海からのみ知られる (岡本, 1995: 83–86, text-fig. 1, pl. 16, figs a–e, as *Cerithidea ornata*; 福田・木村昭, 2012: 29, text-figs a–c, as *C.* (*C.*) *ornata*)。国外は朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム南部まで分布する (Kuroda, 1941: 89, no. 240; Ma, 2004: 38, pl. 016, fig. A [not fig. C]; 張, 2008: 61, text-figs; all as *C. ornata*; Hong *et al.*, 2010: 256, 258, fig. 4b, as *C.* (*C.*) *ornata*; Li & Xu, 2013; Reid, 2014)。

**生息状況** 大規模な内湾奥の河口汽水域において、軟泥底に生じたヨシ原の飛沫帯～潮間帯上部に特異的に見られる。地表を匍匐するのみならず走上性が強く、ヨシの茎や岩壁へ高さ 2 m 程度まで登る。宏大な泥干潟を擁する朝鮮半島や中国では広範囲に多産するが、日本ではもともと不連続かつ局所的に産する。戦後の沿岸開発に伴う河口塩性湿地の減少とともに多くの産地が失われ、東京湾と玄界灘で絶滅し、有明海でも 1997 年の諫早湾閉め切り以後、長崎県でほぼ全ての個体群が消滅するなど減少傾向が著しい。現在辛うじてまもった個体群が保たれているのは周防灘 (山口・福岡・大分各県) と八代海の一部に限られる。クロヘナタリと並び、汽水域のヨシ原の消失とそこに特異的な生物群集の崩壊を象徴する種の一つである。周防灘の各産地は 1985 年に筆者が再発見するまでほとんど知られておらず、それ以前は児島湾が瀬戸内海唯一の産地とされていた (稲葉, 1982: 88, no. 146, as *Cerithidea ornata*)。児島湾で最初に本種を見出したのは恐らく畠田和一で、そのコレクションには「[昭和] 14 [=1939].1.4. (黒田徳米氏同定品)」と日付のある「児島郡甲浦村 [現・岡山市南区] 郡」の標本 (2 個体, #7071) 及び、戦後の「1956.3.21.」に採集された「邑久郡幸西村 [現・岡山市東区西幸西・東幸西]」産 (7 個体, 乾燥した軟体入り, #238; 写真) が現存し、この 2 産地はそれぞれ児島湾南岸と吉井川河口左岸に相当する。また古川田溝と野口博がそれぞれ築き上げたコレクションにも本県産標本が含まれており (窪田, 1962: 33, no. 421; 波部・増田, 1990: 23, no. 0285; both as *C. ornata*)、それらも恐らく畠田が 1950 年代までに採集して提供したものと推測される。しかし 1959 年の児島湾閉め切りを機に県内の全産地が壊滅した。甲浦村郡は閉め切り堤防のちょうど南端にあたるため、同地の個体群は工事の際に既に潰されていた可能性が高い。また湾外に位置する吉井川河口もコンクリート護岸によってヨシ原や干潟が奪われ、岸辺の地形が単純化したことで消失したと考えられる。1960 年代以降、岡山県で本種とクロヘナタリの生貝が確認された例は一切ない。1994 年末に岡本正豊が水産庁の囑を受けて本種とクロヘナタリの全国の現状を調査した際、児島湾の両種の存否について地元の佐藤國康に照会した (岡本, 1995; 佐藤國, 1995)。佐藤は旭川・吉井川両河口を含む児島湾一帯を満遍なく探索したものの両種は遂に一切見出されず、その時点で完全に絶滅したと結論付けられた。佐藤の報告は、1990 年代時点で既に児島湾の貝類相は極端に多様性が低下し、荒廃していた事実を明瞭に示している点で歴史的価値が高い。シマヘナタリとクロヘナタリが健在だった当時の児島湾周辺には、両種とともにタケノコカワニナ、キヌカツギハマシイノミ、ハイガイ、ササゲミミエガイ、アゲマキ、チリメンユキガイ、ハナグモリなど多様な種群が棲息していたことを畠田標本が今に伝えているが、これら全ての種が湾の閉め切り及び同時代の環境悪化によって絶滅した。したがって 1950 年代までとそれ以後とは、児島湾とその周辺は全く異質な環境と言ってよい。現在わずかに残されている岡山県産のシマヘナタリや上記各種の標本は、こうした劇的な環境変化の証拠として甚だ貴重である。

(福田 宏)

## クロヘナタリ

*Cerithideopsis largillierti* (Philippi, 1848)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸盤区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 キバウミナ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧 I 類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息環境が失われたため絶滅した。

**形態** 原記載は Philippi (1848: 20, no. 83, as *Cerithium (Potamides) Largillierti*) で、Philippi (1849 in 1842–1850: 15, no. 7, *Cerithium* pl. 1, fig. 7) に図示された。*Cerithidea Fortunei* A. Adams, 1855b: 85, no. 20 (Sowerby II, 1866a: sp. 15, pl. 3, fig. 15a–b に図示) は新参異名で、Yen (1942: 207, pl. 15, fig. 77) はそのシタイプの写真を公表するとともに *Cerithium largillierti* と同種であると指摘した。Reid & Claremont (2014: 68–70, figs 2A–E, 3A, 4) は *Cerithium largillierti* のネオタイプを指定するとともに、同じ個体を *Cerithidea fortunei* のレクトタイプとした。このため *Cerithidea fortunei* は *Cerithium largillierti* の客観異名となり永久に無効である。殻長約 30 mm, 殻径約 13 mm, シマヘナタリに似るがやや小さく、螺層はより膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。成貝でも殻頂は脱落しない。殻表の縦肋と肋間はほぼ同幅で、シマヘナタリより数多くて密であるが、個体によっては発達せず殻表全体が平滑に近いこともある。周縁は角張らず丸い。殻底の螺脈は細いが明瞭。螺状色帯は濃紫褐色で幅広く、輪廓が不明瞭で、殻表のほぼ全体が暗色となる個体も多い。殻口は皿円形で、外唇は老成しても反転せず薄く鋭い。軸唇は直線的で、その前端は弱い角をなすものの、背面側へはさほど突出しない。殻口内部は光沢が強く、殻表同様の濃紫褐色。蓋は円く、茶色い角質、核を中央にもつ多旋型。頭部-腹足背面は黒く、口吻全体が艶のある漆黒色を呈する。口吻前端に鮮明な檸檬色の斑点を 2 個並べる点はシマヘナタリ同様であるが、本種は短い頭触角と眼の周囲も檸檬色に染まる(福田, 2000: 106–110, 135, figs 5.4c, 5.5c, as *Cerithidea (C.) largillierti* 及び Reid & Claremont, 2014 に生時の写真あり)。本種は従来一貫してシマヘナタリやフトヘナタリと同じく *Cerithidea Swainson, 1840* に属すとされてきたが、Reid *et al.* (2008: 680–699, fig. 2E) の分子系統解析に基づいて *Cerithideopsis* Thiele, 1929 に移された。

写真： 西大寺市〔現・岡山市東区〕西幸西、畠田和一コレクション #2974, 福田撮影。殻長 28.0 mm, 殻径 11.7 mm。



**分布** タイプ産地は「China」(中国)。異名の *Cerithidea Fortunei* もやはり「China」から記載されたが、のちに図示した Sowerby II (1866) は「Shanghai」(上海)とより具体的な地名を挙げている。国内ではシマヘナタリとほぼ同様に、東京湾、瀬戸内海(児島湾と周防灘)、有明海、八代海から知られるが、本種は玄界灘では確認例がない一方で、シマヘナタリの記録がない大村湾から報告がある(岡本, 1995: 79–81, text-fig. 1, pl. 15, figs a–b, d–f, as *C. largillierti*; 福田・木村昭, 2012: 28, text-figs a–c, as *C. (C.) largillierti*)。国外は朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム北部まで分布する(関他, 2004: 129, figs 218, 219–1–2, as *C. ornata* [誤同定] and *C. largillierti*; Ma, 2004: 38, pl. 016, fig. E, as *C. largillierti*; Hong *et al.*, 2010: 256, 258, 260, fig. 4a, as *C. (C.) largillierti*; 张他, 2012: 51, no. 36, text-figs, as *C. largillierti*; Reid & Claremont, 2014)。従来はフィリピンやオーストラリア北部まで分布するとされてきたが、それらの地域に産するのは本種でなく、Reid & Claremont (2014) が新種記載した *Cerithideopsis malayensis* または *Cerithideopsis australiensis* である。

**生息状況** 多くの場合シマヘナタリと随伴し、内湾奥河口汽水域のヨシ原周辺の軟泥底に見られるが、後種が飛沫帯～潮間帯上部に見られ、乾燥した場所へも積極的に登ってゆくのと対照的に、本種はほとんど走上傾向を見せず、活動範囲は潮間帯中～下部の水分の多い地表に限定される。干潮時は泥上に残された浅い水溜まりにとどまり、盛夏に水温 40 度を超えても活潑に匍匐する(福田他, 1990: 32–33, as *Cerithidea largillierti*)。しかしヨシ原への依存はシマヘナタリともども強く、植生のない干潟に見られることは少ない。このため後種と同様の要因によって戦後の日本で急激に減少した。東京湾では明治時代から産出が知られていたが(平瀬興, 1910: 38, no. 818; 岩川, 1919: 76; both as *Potamides (C.) fortunei*; 横山, 1931: 29, no. 931, as *C. largillierti*)、近年はごく稀に古い死殻が見られるのみで、絶滅したと考えられる。大村湾でも岡本 (1995) の時点で棲息に関する情報が得られていないとされ、その後も確認されていない。有明海もシマヘナタリ同様に長崎県でほぼ消滅するなど、全体的に甚だしく減少しており、もはや周防灘西部と八代海の決して広くない範囲に残るだけである。児島湾は、周防灘に面した山口県小野田市周辺(河本・田邊, 1956: 18, no. 171, pl. 8, fig. 73, as *C. (C.) largillierti*) とともに、瀬戸内海における数少ない本種の産地として知られていた(稲葉, 1982: 88, no. 145, as *C. largillierti*)。しかし岡山県産シマヘナタリの標本が本県以外の複数の博物館にも現存するのに対し、本種の標本は現時点で畠田和一コレクションのわずか 1 ロットしか見当たらない。「西大寺市〔現・岡山市東区〕西幸西 波部〔忠重〕氏同定 1956.9.」とラベルに記された 2 個体(#2974; 写真) がそれで、同じ産地(吉井川河口左岸)からはシマヘナタリの標本も残されている。シマヘナタリと同様、児島湾の閉め切りや吉井川河口の護岸によって棲息環境が消失したのみならず、さらに本種の場合はシマヘナタリより水に近い位置に産するため、排水による水質汚濁も悪影響を与えた可能性が高い。それ以降岡山県で本種の棲息が確認された例は一切なく、佐藤國 (1995) による調査の時点で既に完全に絶滅していたことは明らかである。

(福田 宏)

## ヘナタリ

*Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 キバウミナ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NP)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Reid & Ozawa (2016: 56–59, figs 3C–E, 4E–F, 15C, 19)。本種は最近まで長く *Cerithideopsilla cingulata* (Gmelin, 1791: 3561, no. 138, as *Murex cingulatus*) と同定されてきたが、Reid & Ozawa (2016) の再検討の結果、*C. cingulata* はベトナム以南、インドネシア以東の熱帯域に固有で、日本産のヘナタリとは別種と判明した。また *Cerithideopsilla* Thiele, 1926 は *Pirenella* Gray, 1847 の新参異名であり、属名も同時に変更された。殻長約 25 mm、殻径約 12 mm、細長い高円錐形、螺層は膨らまず、縫合はほとんど縊れない。成貝でも殻頂は脱落せず尖る。体層の左端に太い縦脹肋を生じる。各螺層の縫合直下に幅広い螺肋があり、さらにその下により細い螺肋を2本（体層では4本）巡らす。螺肋は黄色、橙色または赤褐色で、肋間は黒い。上部螺層では太く明瞭な縦肋が螺肋と交叉して疣列をなすが、体層に近くにつれて縦肋は弱まる。殻口は菱形で、外唇は著しく肥厚反転し、後端は尖り、前端は前管溝の末端を超えて左側へ突出する。外唇縁は白くて光沢が強く、殻口内には紫褐色の幅広い螺状色帯が複数見える。前管溝は短い明瞭。蓋は円く、茶色い角質、核を中央にもつ多旋型。頭部・腹足背面は灰色の地に白斑を散在し、口吻は黒く、短くて先細りとなる。足は短い楕円形（高重, 2019: 71, text-figs, as *C. cingulata* に生体写真あり）。

写真： 備中〔倉敷市〕連島、畠田和一コレクション #260, 福田撮影。殻長 20.6 mm, 殻径 10.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Kushida R., Matsunase, Matsusaka, Mie Pref., Japan」（三重県松阪市松名瀬、櫛田川河口）。日本・朝鮮半島・中国北部・台湾の固有種である (Reid & Ozawa, 2016: fig. 15C)。国内で最北の記録は太平洋側が福島県常磐地方（根本・秋元, 1990: 8–9, no. 50, as *Cerithideopsilla cingulata*）、日本海側が新潟県佐渡島（黒田, 1957: 18, no. 115, as *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *cingulata*) で、四国・九州を経て沖縄島まで分布するが、八重山諸島（石垣・西表両島）には本種は産出せず、別種 *Pirenella asiatica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016: 53–56, figs 2T, 3A, 4C–D, 15B, 18 ヤエヤマヘナタリが見られる。後種は中国（福建省以南）、台湾南部、ベトナム、タイを経てシンガポールまで分布するとされる。中国には南北でヘナタリとヤエヤマヘナタリがそれぞれ産出するため、従来の文献の大半で両種が混同されており注意が必要である。

**生息状況** 内湾奥の汽水域において、砂泥干潟中・下部の表層を匍匐し、カワアイとともに産出することが多い。ただしカワアイが軟泥干潟下部にも棲息可能であるのに対し、本種はより岸寄りで底質がやや粗い場所に限られる。奥谷・波部 (1975a: 67, unnumbered figs; 264, as *Cerithideopsilla cingulata*) が「干潟にばらまいたようにいる」と表現した通り、本来は高密度で多産する種であり、三河湾以西の西南日本には今も同様の光景を示す場所が少なくないが、関東～中部地方沿岸では湾奥の開発と水質・底質汚染のため減少傾向が甚だしく、東京湾ではかつて知られていた産地の大半が消失し、相模湾では絶滅した（池田等他, 1994: 36, pl. 1, fig. 7, as *Cerithideopsilla cingulata*; 福田, 1996: 22; 福田・木村昭, 2012: 29, text-figs; both as *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *cingulata*)。瀬戸内海では西部の周防灘には現在も健在であるのと対照的に、中央部ではもはや絶滅秒読み段階である。瀬尾・Tanangonan (2014: 92–93, no. 47, pl. 1, fig. 9, as *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *cingulata*) は 2009～2011 年の香川県における調査の結果、「著しく磨滅した死殻が、限られた地点でごく少数採集されたのみであった」と報告した。岡山県でもほぼ同様で、近年本種の生貝が確認されたのは笠岡市神島御手洗池のただ1ヶ所しかない（江木寿男私信, 2012年4月）。岡山県でもともと少なかったわけでは決してなく、例えば畠田 (1935: 235, no. 53, as *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *microptera*) は小田郡北木島村〔現・笠岡市〕飛島の地元住民が本種を「タバコシ」と呼んで認知していたと記録している。一般に腹足類の種を煙草という語で形容するのは味が苦いことに由来するから、当時の飛島では食用に供されていたと推測される。また畠田和一コレクションには「備中〔倉敷市〕連島」（3個体, #260, 写真; 「昭和」9〔=1934〕.6.11.〕, 1個体, #1728）産個体が現存し、連島周辺の高梁川河口に多産地があったものと考えられる。しかしその後は死殻が散見されるのみとなり、生貝の確実な産出記録は上記の笠岡市神島でなされるまで途絶えていた。唯一、片山 (2001: 15, as *Cerithidea cingulata*) は 1998～1999 年に岡山市東区乙子及び久々井で本種を採集したと報じているが、それらが生貝であったか否かは明記されていない。筆者が 2000 年以降現在に至るまで乙子周辺で複数回の調査を行ったところ、カワアイはごく少数の生貝が認められたものの、本種は全く確認できていない。現時点で吉井川・旭川・高梁川の各河口に本種の個体群は見られず、完全に壊滅したと考えられる。笠岡湾奥部ではさほど摩滅の激しくない死殻が干潟に少なからず転がっており、かつて広範囲に存在した個体群が比較的最近になって全滅したことを示している。1960年代以降の干拓・埋め立てによる干潟の消失と、排水による水質と底質の汚染が急速に本種を減少させ、いまや棲息に適した場所自体がほとんど残されていないため、外部からの新規加入も阻害されて定着に至らない状態が続いている。

(福田 宏)

## カワアイ

*Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 キバウミナ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NI)

**選定理由** 現存産地が少なく、棲息環境も限定的である。

**形態** 原記載は Reid & Ozawa (2016: 56–59, figs 35–39, figs 2I, J, 4G, H, 11B, 12)。本種もヘナタリと同様に Reid & Ozawa (2016) が再検討した結果、近年まで日本の文献で安定的に用いられてきた *Cerithideopsisilla djadjariensis* K. Martin, 1899 in 1891–1906: 216–217, pl. 33, fig. 502, 502a, as *Potamides (Cerithidea) djadjariensis* は中国南部以南の熱帯域に分布する *Pirenella alata* (Philippi, 1849 in 1842–1850: 17, no. 11, *Cerithium* pl. 1, fig. 11, as *Cerithium alatum*) の異名であり、日本のカワアイとは異なることが明示された。殻長約 35 mm, 殻径約 13 mm, ヘナタリに似るが一回り大きく、体層左側の縦脈筋は弱く、殻口外唇前縁の突出は弱い。螺肋の幅はほぼ均等で、縦肋は次体層あたりまでさほど弱まらない。殻表は全体が濃い代赭色を呈し、螺肋とその肋間の色にあまり違いがない。蓋や頭部-腹足はヘナタリとほぼ同様 (高重, 2019: 71, text-figs, as *Cerithideopsisilla incisa* に生体写真あり)。

写真： 備前市穂波 新田川河口, 2018年3月6日, 福田撮影。



**分布** タイプ産地はヘナタリと同じく「Kushida River estuary, Matsunase, Matsusaka, Mie Pref., Japan」(三重県松阪市松名瀬, 榎田川河口)。日本・朝鮮半島・中国・台湾・ベトナム北部の固有種である (Reid & Ozawa, 2016: fig. 11B)。国内で最北の記録は太平洋側が宮城県石巻市万石浦など塩釜湾一帯 (宮城県, 2016: 485–488), 日本海側が島根県隠岐 (島根大隠岐臨海, 2011: 10, as *Cerithideopsisilla djadjariensis*) であるが, 更新世の化石も含めれば Matsuura (1977: 144, no. 75, as *Cerithideopsis (Cerithideopsisilla) djadjariensis*) は石川県七尾市和倉から本種をヘナタリとともに報告している。四国・九州・南西諸島の各内湾に分布し, 小笠原諸島でも明治時代の標本 (岩川, 1909: 89, as *Potamides fluviatilis*) が残されているがそれきり再発見されていない (Fukuda, 1993: 35–36, pl. 11, fig. 157, as *Cerithideopsisilla djadjariensis*; Reid & Ozawa, 2016: 38)。

**生息状況** 多くの場所でヘナタリと同所的に出現するが, 本種はさらに干潟下部の軟泥底に *Fluviocingula elegantula* (A. Adams, 1861) カワグチツボやハイガイなどとともに産する場合もあり, 棲息可能な範囲はヘナタリより多少広い。とはいえ内湾奥の環境悪化や干潟の縮小・消失とともにヘナタリ同様の減少傾向に陥っており, 東京湾・相模湾・浜名湖・三河湾・伊勢湾で完全に絶滅したかそれ寸前で, ヘナタリはまだ確認できるものの本種が消滅した場所もある (池田等他, 2001: 37, text-fig. 26, as *Cerithideopsisilla djadjariensis*; 木村昭・福田, 2012: 30, text-figs; 木村昭・木村妙, 2013: 19, fig. 56a–d; 129; both as *Cerithidea (Cerithideopsisilla) djadjariensis*)。瀬戸内海でも一部地域ではヘナタリよりさらに危機的であり, 例えば香川県での 2009–2011 年の調査でヘナタリのわずかな死殻を採集した瀬尾・Tanangonan (2014: 93, as *Cerithidea djadjariensis*) は, 本種は遂に「死殻すら確認されなかった」と無念さを漂わせている。岡山県ではかつては広範囲に普通に見られたはずで, 畠田和一コレクションには「備中〔倉敷市〕連島」(「[昭和] 9 [=1934].6.11.」, 2 個体, #1729), 「玉島市〔現・倉敷市玉島黒崎〕沙美」(「1960.6.5. 文比古, 世津子, 同伴」, 1 個体, #5672), 産地表記なし (2 個体, #4415; 1 個体, #7357) の各標本が残されている。また波部 (1955a: 204–205, fig. 6, as *Cerithidea (Cerithideopsisilla) djadjariensis*) は本種の産卵と卵塊の形態を初めて報告したが, その際の観察は「岡山県笠岡市内海区水産研究所笠岡支所で行った」と記している。しかし現在の笠岡湾の大半では本種の生貝は確認できず, 唯一, ヘナタリの項に挙げた神島御手洗池に見られるのみである。ただし岡山県での本種はヘナタリほど極端に稀少化してはおらず, 2018年3月の調査では備前市片上湾一帯の小規模な入江には点々と棲息が認められ (写真), 同市鹿久居島でも生貝が見出された。また 2000 年には岡山市東区乙子の永江川河口 (OKCAB M162), 2008 年には玉野市沼の集落内にある汽水湿地 (M23662) で棲息が確認されている。このため現時点で県内に少なくとも数ヶ所の産地が存在し, ヘナタリと比較すると絶滅の危険はやや低い, それ以前に本来存在していた個体群の圧倒的多数が失われたことを忘れてはならない。特に, 児島湾の閉め切りによって一挙に広大な棲息地が消滅したことは歴史的事実である。現在水田地帯となっている岡山市南区内尾などではウネハナムシロやハイガイなどとともに本種の死殻が多数転がっており, それらは 1950 年代末まで健在であった絶滅個体群の名残である。

(福田 宏)



## サナギモツボ

*Finella pupoides* A. Adams, 1860

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 スナモツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 県内では死殻が見出されるのみで棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1860c: 336) で、のちに A. Adams (1868a: 47, no. 1, pl. 4, fig. 5) が自ら図示し、その図は Tryon (1887: 394, pl. 60, fig. 76) に転載された。また Habe (1977e: 157, fig. 4, as *Eufenella pupoides*) 及び Hasegawa (1998: 168–171, fig. 13) はシタイプとみられる標本を図示している。*Rissoia* [sic] *pyrrhacme* Melvill & Standen, 1897: 310, pl. 11, fig. 70, *Rissoia* (*Cingula*) *ichikawensis* Yokoyama, 1927b: 451, no. 9, pl. 51, fig. 5 イチカワモツボ、及び *Fenella* [sic] *perpupoides* Yokoyama, 1927b: 452, no. 11, pl. 51, figs 11–12 は新参異名。和名をモツボとしている文献もあるが (e.g. 奥谷, 1986: 81, unnumbered fig.), 明治以降でその名を初めて用いた岩川 (1909: 92; 1919: 66; both as *Fenella pupoides*) の記録に対応する標本は本種でなくシマモツボであり (Hasegawa, 1998: 172), 混乱を招きかねないので使わない方が無難である。また現在広く用いられているサナギモツボという和名は、矢倉 (1932: 32, no. 388, as *Alabina pupoides*) が命名した際は「サナギツボ」であった。殻長約 4 mm, 殻径約 1.5 mm, 細長い蝸形で薄質、螺層はよく膨らみ、縫合の縞れも明瞭。殻表は繊細な螺肋を多数巡らし、上部螺層には弱い縦肋がほぼ等間隔に現れる。淡黄褐色または濃赤褐色の螺状色帯を縫合下・周縁・殻底に巡らす個体が多いが、その色彩は死殻では失われがちである。殻口は殻長に比して小さく、半月形で、外唇は肥厚せず、内唇と軸唇の間は多少彎曲する。蓋は円く、半透明で黄色い角質、核を中央にもつ少旋型。軟体は無色半透明で白斑を散在し、足は前後に著しく細長くて幅が狭く、後端は尖る。頭部に中庸な長さの頭触角と、伸縮が自在に可能な口吻をもち、外套腔の辺縁から生じる外套触角が右側に 2 本(長いものと短いもの)、左側に 1 本(右の短い方と同等の長さ) ある (Ponder, 1994: 220–221, figs 1A, 3B–C)。

写真：岡山市南区米崎沖 水深 5.2 m 泥底, ドレッジ St. 6, 2002 年 9 月 18 日, OKCAB M24487, 福田撮影。殻長 1.8 mm, 殻径 1.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Tsu-Sima; 26 fathoms. Korea Strait: 46 fathoms」(長崎県対馬, 26 尋; 朝鮮海峡, 46 尋)。記載後に A. Adams (1864a: 39–40; 1868a; both as *Fenella pupoides*) が「Takano-Sima; Yobuko; Seto-Uchi」(千葉県館山市鷹ノ島; 佐賀県呼子; 瀬戸内海) の各産地を追加した。異名である *Rissoia pyrrhacme* は「Lifu [=Lifou], Loyalty Islands」(ニューカレドニア・ロイヤルティ諸島のリフー島), *Rissoia* (*Cingula*) *ichikawensis* は「Ichikawa」(千葉県市川市, 完新世化石), *Fenella perpupoides* は「Shimo-Suyeyoshi and Koyasu」(横浜市鶴見区下末吉及び神奈川県川崎市, とともに後期更新世下末吉層化石) からそれぞれ記載された。さらに Hedley (1899: 413–414, fig. 6, as *Obtortio pyrrhacme*) は「Funafuti」(ツバルのフナフティ島), Ladd (1972: 28, pl. 7, figs 1–3; pl. 6, figs 15–16) は「Eniwetok and Bikini」(マーシャル諸島のエニウェトク及びビキニ環礁, 中新世~完新世化石), Ponder (1994) は香港, Bosch *et al.* (1995: 56, fig. 183) はアラビア海・オマーン湾・ペルシャ湾, Swennen *et al.* (2001: 112, fig. 302) はタイ南部, Bouchet & Strong (2008: 300, pl. 95, fig. 1) はフィリピンから本種を報告し、特に Kay (1979: 116–117, fig. 44G) はハワイ諸島での産出とともに、本種の分布域がモーリシャスからオーストラリアにかけてと、ミクロネシア・ポリネシアに至るインド-西太平洋の広い範囲に及ぶことに言及した。日本は分布の北限に相当し、太平洋側は岩手県三陸沿岸以南、日本海側は佐渡島真野湾以南の各地で確認されている (伊藤勝, 1978: 206, no. 48, as *Eufenella pupoides*; Hasegawa, 1998)。

**生息状況** 大規模な内湾奥の潮間帯下部から潮下帯にかけて軟泥底または砂泥底 (特にアマモ場を好む) に棲息し、外洋に面した海岸では少ない。かつては各地の湾内で普通に見られたが、湾奥部は埋め立てや干拓、護岸、市街地や工業地帯からの汚水流入などの直接的な影響を受けやすいため急速に減少し、1990 年代後半には福田 (1996: 20) や Hasegawa (1998: 170) が指摘した通りほとんど生貝が見られなくなっていた。近年では福田 (2012: 28, text-fig.) が改めて強調している通り生貝が確認された場所は全国でもほんの数箇所程度しかなく、野外で目にするのはわずかばかりの古い死殻のみで、しかもその大半が著しく摩滅・褪色して化石と区別が困難なことから、多くの場所では個体群が消滅して相当の時間が経過していると考えられる。岡山県では古い標本や文献記録もないためもともと多くなかったものと思われるが、戦後の児島湾閉め切りとその後の海岸開発・水質汚濁・海底の砂の過剰浚渫など複合的な要因が重なって個体群は壊滅的打撃を受けたとみられる。現時点で県内唯一の確実な産出記録は、2002 年に岡山市南区米崎沖水深 5.2 m 泥底でのドレッジで得られた幼貝の死殻 1 個 (OKCAB M24487; 写真) であり、その個体も劣化が甚だしいため、今なお本県内に生存個体群が維持されている可能性は極めて低いと考えざるを得ない。

(福田 宏)

## シマモツボ

*Finella purpureoapicata* Preston, 1905

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 スナモツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 本種は矢倉 (1932: 32, no. 389) がシマモツボという和名を新称した際に学名を「*Alabina rufocincta* (A. Adams)」として以降、1990年代までずっと *Dunkeria rufocincta* A. Adams, 1861d: 300–301, no. 1 (大半の著者が属名を *Eufenella* として) に同定されてきたが、Hasegawa (1998) がタイプ標本も含めて詳細に再検討した結果、その学名は同属の別種ツヤモツボ (岡山県での記録はない) に相当し、本種は表記の学名を用いるべきことが明らかにされた。原記載は Preston (1905: 5–6, pl. 1, fig. 22) で、Hasegawa (1998: fig. 15) がシタイプを図示している。*Rissoa septentrionalis* Tokunaga, 1906: 26, no. 68, pl. 1, fig. 55 及び *Obortio elongella* Melville, 1910: 9, pl. 1, fig. 14 は新参異名。殻長約 5 mm, 殻径約 1.7 mm, サナギモツボに似るが本種は細長い塔形でより厚く、螺層の膨らみは弱くて側面は直線的となる。殻表は強いキール状の螺肋を 2~5 本程度巡らし、不明瞭な縦肋と交叉してその交点は弱い結節となる。縫合自体の縊れは弱い、その上下の螺肋が強いため明瞭に縊れているかのごとく見える。殻頂から数層は明るい赤茶褐色に染まり、それ以外の部分には個体間で変異が見られ、地色は乳白色で縫合下と周縁に輪廓の明瞭な赤褐色の螺状色帯を巡らす個体が多いが、全体が赤褐色または白色のものも現れる。殻口は半月形に近く、外唇は肥厚せず鋭い。蓋は円く、半透明で黄色い角質、核を中央にもつ少旋型。軟体は無色半透明で白斑を散在し、足は前後に細長い逆三角形で後端は尖る。頭部に中庸な長さの頭触角と長方形の口吻をもち、外套腔の辺縁から生じる外套触角が右側に 2 本 (長いものと短いもの)、左側に 1 本 (右の 2 本の中間の長さ) ある (Ponder, 1994: 220–221, figs 1B, 2, 3A)。

写真： [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #2111, 福田撮影。殻長 4.5 mm, 殻径 1.4 mm。



**分布** タイプ産地は「Ceylon」(スリランカ)。*Rissoa septentrionalis* は「Tabata」(東京都北区田端, 後期更新世東京層の化石)、*Obortio elongella* は「Mekran Coast, off Charbar」(イランのマクランコースト, チャーバール沖) からそれぞれ記載された。太平洋側は東京湾, 日本海側は新潟県以南に見られ, 南西諸島や香港, フィリピンを経てインド-西太平洋の熱帯・温帯域に広く分布する (伊藤勝, 1978: 206, no. 49, as *Eufenella rufocincta*; Ponder, 1994; Hasegawa, 1998; Bouchet & Strong, 2008: 300, pl. 95, fig. 2)。

**生息状況** 潮間帯下部から潮下帯にかけて砂泥底に棲息し, 特にアマモ場の根元の礫間などに多く見られる普通種である。内湾に加えて開放的な外洋でも多少湾状に入り組んだ場所に棲息可能で, 太平洋・日本海ともに多く見られ, 砂浜に多数の殻が打ち上げられる場所も決して少なくないため, 他県では保全対象として想定しがたい種であり, 都道府県別レッドリストにおいて唯一本種を取り上げているのは東京湾を擁する千葉県だけである (黒住, 2011: 434)。同属のサナギモツボは内湾奥に限定されるために埋め立てや干拓などの直撃を蒙って全国的に危機的な状況にあるのに対し, 本種はそれらの開発の影響をさほど受けないので, 日本全体としてはさほどの減少傾向にはない。岡山県においてもかつては普通に産していたらしく, 窪田 (1962: 34, no. 431) は「備前 [倉敷市下津井] 六口島」産の標本に言及し, また Hasegawa (1998: 172) も国立科学博物館所蔵の櫻井欽一コレクションに含まれる「Ushimado」(瀬戸内市牛窓町) 産個体を検討している。畠田和一コレクションにも「六口島」(100 個体以上, #2111, 写真; 3 個体, #3651 (part); 1 個体, #3963 (part)), 「備前朝日村切石 [現・岡山市東区正儀]」(2 個体, 「磨滅甚敷何ヤラ不明 (黒田 [徳米] 氏同定品) [昭和] 14 [= 1939].1.21.」, #2778), 「備前牛窓」(1 個体, 「波部 [忠重] 氏同定 1952.2.」, 1 個体, #4085), 「[笠岡市] 白石島産」(1 個体, 「1954.8.20.」, #5845) と多数の標本が含まれている。それらの一部は *Syrnola cincitella* A. Adams, 1860 ホソクチキレ, *S. serotina* A. Adams, 1863 コホソクチキレ, *Tiberia dunkeri* (Dall & Bartsch, 1906) ドウンケルクチキレなどととも管瓶に収められており, それらの種ともども砂浜に打ち上げられていたことが窺われる。ところがその後はほとんど確認できなくなり, 今世紀に入ってから 2004 年に瀬戸内市牛窓町鹿忍で打ち上げ死殻 1 個 (OKCAB M8624) が得られたにとどまり, その後現在までの 15 年間では全く見出されていない。1960 年代以降の水質悪化や海底攪乱が本種を激減させたことは明らかである。本種のごとく今なお普通種として知られる種すらもこれほどの長きにわたって消息不明となり, ほぼ絶滅状態に陥ってしまった事例は, 他の都道府県では知られていない。

(福田 宏)

## チビスナモチツボ

*Scaliola glareosa* A. Adams, 1862

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 スナモチツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1862d: 421, no. 3) で、シントタイプを波部 (1961b: 198, no. 21, pl. 2, fig. 24; pl. 3, figs 1-2, 4, as ミヂンスナモチツボ) が図示し、さらに Higo *et al.* (2001: 29, fig. G721) が写真を公表している。殻長約 4 mm、殻径約 1.5 mm、細長く薄質、螺層は膨らみ、縫合の縊れも明瞭であるが、同属の *Scaliola bella* A. Adams, 1860 スナモチツボほどではなく、一方で *S. arenosa* A. Adams, 1862 ホソスナモチツボよりは顕著。殻表は灰白色で明瞭な彫刻はなく、砂粒を付着させるが、死殻では脱落することが多い。殻口は殻長に比して小さく、亜円形で、唇縁はわずかに縁取られるごとく肥厚し、老成すると体層から遊離することもあるがスナモチツボほどははっきりとは離れず、またホソスナモチツボにおいて見られるような殻口全体の下降は生じない。蓋は円く、半透明で黄色い角質、核を中央にもつ少旋型。軟体は無色半透明で白斑を散在し、足は前後に著しく細長くて幅が狭く、後端は尖る。軟体は Ponder (1994: 230-232, fig. 5A-B) が同属の香港産未同定種（殻はホソスナモチツボに似る）について詳細に観察しているが、本種は未詳。

写真： 朝日村切石 [現・岡山市東区正儀]、畠田和一コレクション #4098、福田撮影。殻長 3.6 mm、殻径 1.2 mm。



**分布** タイプ産地は「Tsu-Sima; Takano-Sima」(長崎県対馬; 千葉県館山市鷹ノ島)。国内では下北半島～九州の間や小笠原諸島で知られ (Fukuda, 1993: 32, pl. 10, fig. 129; 長谷川, 2017: 797, pl. 64, fig. 5)、朝鮮半島でも確認されている (関他, 2004: 128, fig. 216-1-2; 129, no. 216)。Kay (1979: 135, fig. 44J) はハワイ諸島での産出を報告し、また Bandel & El-Nakhel (1993: 174-176, text-fig. 1, pl. 1, fig. 4; pl. 2, fig. 4) がスナモチツボとして図示した個体の一部 (インドネシア及びイエメン産) や AlShuaibi & Mahmoud (2018: 53-62, figs 2-5) が「*Scaliola cf. glareosa*」としたクウェート産個体はいずれも本種の可能性があり、Rosenberg (1992: 46, text-fig.) が記す通りインド-西太平洋に広く分布すると思われる。

**生息状況** スナモチツボ・ホソスナモチツボともども内湾・外洋を問わず潮下帯の砂底に棲息し、砂浜に死殻が打ち上げられることが多い。瀬戸内海でも 3 種揃って記録があり (稲葉, 1982: 88, nos 140-142, pl. 1, figs 4-6)、近年も広島県や香川県では 3 種のうち少なくとも 2 種の産出が確認されている (濱村, 2004: 40, text-figs; 瀬尾・Tananganon, 2014: 93, nos 48-49)。しかし岡山県ではこれまで 3 種とも文献記録はなく、畠田和一コレクション中で「朝日村切石 [現・岡山市東区正儀]」産 (23 個体、「波部 [忠重] 氏同定 1957.3.」, #4098 (part, ゴマツボモドキ 1 個体が混在); 写真) とラベルされた本種の標本だけがこの属の産出の証拠である。畠田和一は朝日村切石で本種以外にも多くの微小種の標本を得ており、それら全てが浅海の砂底または砂泥底に見られる種で、恐らく当時は現地の砂浜にそれらが打ち上げられていたと推測されるが、附近の環境状態は 1960 年代以降に悪化し、現在その周辺の砂浜に出向いても打ち上げられている貝類の多様性は低く、富栄養化した場所であっても棲息可能な少数の種が見られるのみである。湾の閉め切りに伴う潮流の変化や市街地からの排水の影響、さらに本種が主として棲息する潮下帯において高頻度でなされていた砂の浚渫など、複数の要因が重なって児島湾湾口部から本種は姿を消した。現在県内で本種が棲息する可能性のある場所は、にわかには想起できない。

(福田 宏)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 ミミズガイ科 ●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後は死殻が見出されるのみで棲息は確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Mörch (1861: 403–405, no. 4, as *Tenagodus (Siliquarius) cumingii*) で、タイプ標本と推定される Cuming の標本を Sowerby II (1876a: sp. 2, pl. 1, fig. 2, 2b [図版では “3”], as *Siliquaria Cumingii*) が図示し、さらにその図は Tryon (1886: 190, pl. 57, fig. 19; pl. 58, fig. 21, as *Siliquaria Cumingii*) に転載された。種小名を *cumingi* とした文献が多数あるがそれらは全て誤綴。また Mörch は本種を記載した際に  $\alpha$  *rudis*,  $\beta$  *conifer*,  $\gamma$  *platyomphala*,  $\delta$  *lumbricalis*,  $\epsilon$  *laevi-lirata*,  $\zeta$  *japonica* の 6 つの「Vars.」(変種)に分けており、黒田他 (1971: 98 (和文), 64–65 (英文), pl. 17, figs 9–10, as *Siliquaria cumingii*) はそれらのうち var.  $\zeta$  *japonica* を本種の亜種 (*S. c. japonica*) とした上で異名表に含め、タイプ産地の欄にも *S. japonica* と等価の適格名であるかのごとく挙げた。しかし Bieler (1996: 25) 及び Bieler & Petit (2011: 6) によれば、Mörch のいう「変種」は通常の意味での亜種や変種よりさらに下位のカテゴリであるため、不適格名とみなすべきである。また本種の属名は近年まで大半の著者が *Siliquaria Bruguière*, 1789 としてきたが、Bieler (1992: 15–17) によって *Tenagodus Guettard*, 1770 が有効名である (兩名のタイプ種はともに *Serpula anguina* Linnaeus, 1758 である) ことが明示された。旧名ハマカズラ (浄貞五百介圖; *Thylacodes medusae* Pilsbry, 1891 ハマカズラと異物同名)。殻長約 50 mm, 殻頂に近い数層は概ね規則的な螺旋をなすが、やがて巻きが解けて不規則に成長し、形は個体ごとに一定しない。螺管は細くてやや薄く、白色で、微弱な螺脈を多数巡らし、成長脈が皺状をなす個体もある。螺管の肩部に小孔の連なりからなる溝をもつ。蓋は円錐形、黒褐色の角質で、十数枚の円板が層となって重なり、辺縁には顕著な毛が多数並ぶ (佐藤勝, 1989: 95–96, figs 1–4, as *Siliquaria cumingii* が図示・詳述している)。

写真： 浅口市寄島町青佐鼻, 2002 年 12 月 4 日, OKCAB M28678, 福田撮影。殻長 11.4 mm, 殻径 13.2 mm。



**分布** タイプ産地は「Ins. Philippin.」(フィリピン諸島)。また、原記載に挙げられた 6 つの「変種」のうち 4 つはフィリピン産であるが、var.  $\epsilon$  *laevi-lirata* は「Singapuhra」(シンガポール), var.  $\zeta$  *japonica* は「Japan」(日本)産である。国内の太平洋側は房総半島以南 (清水利, 2001: 30, no. 333, as *Tenagodus (T.) cumingi* [sic]), 日本海側は男鹿半島以南 (西村正・渡部景, 1943: 65, no. 55, as *T. cumingi* [sic]; 鈴木庄, 1979: 161, no. 88, as *Siliquaria cumingii*), 九州までと、伊豆・小笠原諸島 (西村和, 1999: 40, no. 395, as *S. (Agathirses) cumingi* [sic]), 南西諸島 (黒田, 1928: 40, no. 434; 横山, 1931: 30, no. 963; 黒田, 1960: 11, no. 284; all as *S. cumingi* [sic]; 久保, 1995: 46, text-fig., as *Siliquaria* [sic] *cumingii*) に広く分布する。国外は朝鮮半島, 中国, 台湾, ベトナム, フィリピン, インドネシア, インド東岸 (ベンガル湾西岸, マナル湾) などから知られる (Kuroda, 1941: 87, no. 214, as *T. cumingi* [sic]; 權他, 1993: 67, fig. 20-1–2; 262, as *S. (A.) cumingii*; Thach, 2002: 9, as *S. cumingii*; Hylleberg & Kilburn, 2002: 25, as *S. cumingi* [sic]; Subba Rao, 2003: 142, pl. 24, figs 6–8, as *T. cumingi* [sic]; 関他, 2004: 133, fig. 231-1–3, as *T. (A.) cumingii*; Dharma, 2005: 92, pl. 21, fig. 13a–b; Poppe, 2008a: 302, pl. 96, fig. 2, as *T. cumingi* [sic]; 张, 2008: 64, text-fig.; 郑他, 2013: 105, text-figs; Tudu *et al.*, 2018: 1543, no. 120)。

**生息状況** 潮下帯から漸深海底 (水深約 200 m まで) の岩礁において、海綿動物の塊の中に埋もれて棲息する。自力で移動できないため二枚貝類などと同様に海水を吸い込み、懸濁物やプランクトンを濾過して摂食する。久保 (1995) は沖縄県では「多い時は 30 cm ぐらいの海綿から 100 個以上」が現れると述べた。日本ではこれまで特に稀少な種とは認識されておらず、レッドリストに記載されたこともない。瀬戸内海でも紀伊水道・豊後水道それぞれの北端に近い東部と西部では普通に見られる。ただし、中央部 (備讃瀬戸・備後灘・燧灘) ではもともと少ないとされており (稲葉, 1982: 87, no. 133, as *Siliquaria cumingi* [sic]), その海域は太平洋から最も遠く奥まった位置にあるため、浮游幼生が入り込む頻度が相対的に低いことが最大の要因と考えられる。特に近年の瀬戸内海中央部ではほとんど報告例がなく、濱村 (2004: 52, text-fig.) は広島県仁方町から底引で得られた死殻のみを挙げている。香川県では備讃瀬戸沖で生貝が見出されているものの、確認されたのはやはりごく少数のみとされている (瀬尾・Tanangonan, 2014: 92, no. 42)。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 160) の目録中に挙げられているが、それ以外に文献記録はない。畠田和一コレクションにも典型的な本種と呼べる個体の標本は含まれていない (ただしチャイロミミズガイはある: 後種の項を参照)。今のところ、倉敷市玉島黒崎の沙美海岸 (2002 年 2 月, OKCAB M28715) と浅口市寄島町青佐鼻 (2002 年 12 月, M28678; 写真) それぞれの砂浜に打ち上げられていた死殻 1 個ずつ (沙美海岸産は破片) が本県での産出記録のすべてである。本種は潮下帯で固着生活をしているため直接生貝を確認するのは困難で、密度や個体数の正確な把握も現時点では不可能であるが、岡山県とその周辺では本来的に稀産であったところへ、水質汚濁や浚渫などによる海底環境の悪化が加わってますます本種を定着しにくくしている可能性がある。少なくとも近年は生貝が全く確認されておらず、死殻も極めて稀にしか見られないため、既に絶滅したかそれに近い状態にある可能性が高い。

(福田 宏)

## チャイロミミズガイ

Tenagodus sp.

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 ミミズガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 県内では死殻が見出されるのみで棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。分類学的にも位置付けが確定しておらず、今後の詳細な検討を必要とする。

**形態** 前掲のミミズガイに似るが、殻表の大部分が濃茶褐色に染まる。またミミズガイほど大きくならず、ほとんどの個体は殻長 30 mm 以下で、螺管がさほど大きく解けないため殻径は狭い。殻表の螺肋が明瞭な個体も現れる。福田 (1992: 57, no. 122, as *Siliquaria* cf. *cumingii*) が山口県産個体に対して「ミミズガイの名で呼ばれるものには少なくとも 2 種が混同されているようである。一方は殻は白色、大型 (30–50 mm) で、漁屑などによって主に採集され、打上げでは得られないことから潮下帯以深にすむようである。もう一方は殻は濃い茶褐色に彩られ、比較的小型 (10 mm 前後) のものが多く、死殻は打上げで採集される。どちらも [山口] 県内では少なくないが、種名はいまのところ確定していない」と記したのはミミズガイ及び本種のことである。以下の文献に図示されている：関他 (2004: 133, fig. 230-1-2, as *Tenagodus* (*Agathirses*) *armata* (Habe & Kosuge, 1967) [この学名はムラサキコケミミズであり明らかに誤同定]; 濱田保 (2008: 13, no. 267, pl. 13, fig. G759-1, as *T. (T.)* sp.); 北川 (2017: pl. 222, fig. 29, as *T.* sp.)。ただしミミズガイの種内変異である可能性もあり、軟体部の比較を要する。

写真： [倉敷市下津井] 六口島，畠田和一コレクション #3963，福田撮影。殻長 19.6 mm，殻径 8.3 mm。



**分布・生息状況** 濱田保 (2008) は大分県の「[佐伯市] 蒲江深島沖」、北川 (2017) は「三重 磯」、関他 (2004) は韓国で採集された個体をそれぞれ図示した。筆者は神奈川県三浦市三崎町城ヶ島 (2006 年 12 月, 2 個体, OKCABM16599) 及び山口県下関市豊北町阿川 (1973 年 2 月, 1 個体, M12381) で採集しており、それらはいずれも砂浜に打ち上げられていた死殻である。岡山県では畠田和一コレクションに「[倉敷市下津井] 六口島」産の 1 個体 (#3963 (part, シマモツボ 1 個体と混在); 写真) が現存する。この標本は殻表の大部分が摩滅・褪色しており殻口も大きく破損しているため、打ち上げ死殻であろう。近年も倉敷市玉島黒崎の内海展望台附近 (2002 年 11 月, 1 個体, M5620) と浅口市寄島町青佐鼻 (2002 年 6 月, 1 個体, M1777) でやはり打ち上げられた死殻が採集されているが、どちらも畠田標本同様に古くて状態が悪い。ミミズガイから別種として識別できるか否かが不明のため現時点では情報不足としておくが、岡山県では生貝どころか新鮮な死殻もまったく見出されていないため、少なくとも著しく稀少であることは確実視される。

(福田 宏)

## タケノコカワニナ

*Stenomelania torulosa* (Bruguère, 1789)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 オニツノガイ形亜区 オニツノガイ上科 トゲカワニナ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 本種は近年まで種子島以北に固有とされてきたが、Hidaka & Kano (2014: 593–600, figs 1–3) は分子系統解析と形態の比較の結果、奄美大島以南に産するムチカワニナを同種と認めた。彼女らはその際に有効名を *Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838: 434–435, no. 17, as *Melania crenulata*) とし、この学名の古参異名とされてきた *Bulimus torulosus* Bruguère, 1789: 332 は本種ではないと考えた。しかしこれら2つの名はともに Chemnitz (1786: 165, pl. 135, fig. 1230) の図示個体に対して命名されたため客観異名であり、*M. crenulata* は、Chemnitz の標本以外の個体を敢えてレクトタイプ指定しない限り、無条件に無効である。また Hidaka & Kano は、*B. torulosus* はマダガスカル、*M. crenulata* はフィリピンからそれぞれ記載されたと解釈し、浮游幼生がマダガスカルから南西諸島まで届くとは考えにくいのがフィリピンからならありうるのでムチカワニナは *M. crenulata* であろうと主張しているが、ここにも事実誤認がある。Bruguère (1789) の *B. torulosus* の原記載ではマダガスカルが産地として確かに挙げられているものの、同時に Chemnitz (1786) の図示個体の産地は「les grandes Indes」であると記され、これは Great India 即ちインド以東の東南アジアの大半(ベトナム周辺まで)を意味し、現在知られる *M. crenulata* の分布域とはほぼ重なっている。しかも *M. crenulata* をフィリピン産と明記したのは Reeve (1859 in 1859–1860: sp. 26, pl. 5, fig. 26) が最初で、これは原記載ではなく、図示個体も Cuming の標本であって Deshayes (1838) が *M. crenulata* の記載に用いた標本ではない。したがって本種の有効名は *S. torulosa* とすべきである。以下は新参異名：*Helix crenata* Gmelin, 1791: 3655, no. 241 (not of 3623, no. 254)；*M. rufescens* Martens, 1861: 47–48 (not of I. Lea, 1842; 波部, 1976b: 81, pl. 8, figs, as *S. costellaris* forma *rufescens* がタイプ標本を図示)；*M. Martensi* Brot, 1862: 48–49 (*M. rufescens* に対する置換名)；*M. Löbbeckii* Brot, 1874: 185–186, no. 189, pl. 21, fig. 9；*M. Dunkeri* Heimbürg, 1884: 94–95, no. 3；*M. yokohamensis* Hartman, 1897: 41。別名カワセミガイ、レベックカワニナ。殻長約 70 mm、殻径約 20 mm、細長い塔形で厚く堅牢、螺層の膨らみと縫合の縊れは弱い。殻表は鈍い光沢を帯びた黒褐色ないし黄褐色の厚い殻皮に覆われるが、除去すると白地に赤褐色の斑点を散在するのがわかる。殻表全体がほぼ平滑な個体から明瞭な螺肋を巡らすもの、さらに螺肋が縦肋と交叉して粗い布目状彫刻をなすものまで多様であるが、南方の個体群ほど変異幅が大きく、九州以北では螺肋・縦肋ともに発達した弱い個体が多い。殻口は縦長の種子形で、外唇は肥厚せず薄く鋭い。蓋は角質で厚く、黒褐色で少旋型。頭部・腹足の背面は淡黄緑色の地に黒斑を散在し、老成個体では全体が漆黒に染まる。頭触角は細い針状で短い。口吻は円筒形で黒い横縞を並べる。足は短い楕円形で、前端は左右に広がり、蹠面は肌色(福田, 2000: 120–121, fig. 5-13a–b, as *S. rufescens* に生体写真あり)。

写真： 上道郡津田村〔現・岡山市東区君津・升田〕、畠田和一コレクション #2987、福田撮影。殻長 34.4 mm、殻径 10.0 mm。



**分布** タイプ産地は上記の通り「Madagascar」及び「les grandes Indes」。無効名である *Helix crenata* は「in Indiae fluviis」(インドの川)、*Melania crenulata* は「...」(不詳)、*M. rufescens* は「Japan」、*M. Martensi* も「Japon」、*M. Löbbeckii* は「Yeddo, Nagasaki」(江戸、長崎)、*M. Dunkeri* は「bei Hakau in der japanesischen Provinz Higo」(肥後國百貴〔熊本市西区西松尾町、坪井川河口；浜田善, 1993: 48–51, fig. 3, as *Stenomelania loebbeckei* [sic]]、*M. yokohamensis* は「Yokohama, Japan」(横浜)からそれぞれ記載された。太平洋側は千葉県鴨川市小湊及び東京湾以南(Brot, 1874; Hartman, 1897; 清水利, 2001: 30, no. 348, as *S. hastula*)、日本海側は男鹿半島以南(西村正・渡部景, 1943: 66, no. 58, as *Melanoides loebbeckii* [sic])、九州南部、種子島までタケノコカワニナ型が産し、奄美大島と沖縄島の少数の河川にムチカワニナ型が知られる(久保, 2012: 32, text-figs, as *S. crenulatus* [sic]; 2017: 430–431, as *S. crenulata*)。国外は台湾、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、ソロモン諸島、インド、マダガスカルまで記録があり(e.g. Seshaiya, 1940: 331–332, as *Melania (Radina) crenulata*; Benthem Jutting, 1958: 325; 1963: 480; both as *Melanoides torulosus*; Pace, 1973: 66–67, as *Thiara (S.) torulosa*)、台湾とフィリピンの個体は Hidaka & Kano (2014) に図示されているが、それら以外の記録には別種が混入している可能性があるためさらに検討が必要である。

**生息状況** 河口汽水域の緩い流水または止水において、粗砂底・砂泥底・軟泥底の表層に棲み、干潮時には溚筋や水溜まりの中で匍匐する。両側回游性で海流に乗じて分散し、特に紀伊半島以西の太平洋岸や東シナ海沿岸に産地が点在するが、本州日本海側では著しく稀産である。瀬戸内海でも東西の湾口部に附近に局限され、大阪府堺市(黒田, 1929b: 184, 187, no. 7, pl. 4, fig. 12, as *Melanoides loebbeckii*)や兵庫県加古川市(福田・木村昭, 2012: 33, text-figs a–b, as *Stenomelania rufescens*)、山口県山陽小野田市(河本・田邊, 1956: 17, no. 166, pl. 7, fig. 64, as *S. loebbecki* [sic]; 福田, 1992: 57, no. 117, pl. 9, fig. 117, as *S. costellaris rufescens*)などわずかしち知られておらず、しかも山口県では既に絶滅している。広島県では「神石〔高原町〕(油木)」から記録がある(瀧巖, 1938: 14, no. 91, as *M. loebbeckei* [sic])が、その場所は山間部であり誤同定の可能性がある。岡山県では稲臣(1953: 48, no. 6, as *Thiara loebbeckei* [sic])による「児島湾沿岸」が唯一の文献記録で、岡山大学医学部には「上道郡」(現・岡山市中区・西区、吉井川～旭川河口左岸一帯)とラベルされた大量の証拠標本(液浸を含む)が現存し、当時は旭川または吉井川の汽水域に多く見られたことが窺える。畠田和一コレクションにも「上道郡津田村〔現・岡山市東区君津・升田〕」(「黒田〔徳米〕氏同定品 1950.7.22.」, 2個体, #2987; 写真)及び産地無記入(90個体, #6555)が含まれ、後者の膨大な標本数はやはり当時の多産ぶりを示している。しかし1960年代以降は死殻すら一切見出されず、絶滅したことは確実である。旭川・吉井川ともに河口の両岸全域が護岸されて直線化・単純化したため、干潟やヨシ原が激減して本種が棲息可能な場所自体が消失し、排水による水質悪化も個体群存続を妨げたと考えられる。

(福田 宏)

## ウネナシトカケ

*Acrilla acuminata* (Sowerby II, 1844)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 高腹足亜区 トカケガイ上科 トカケガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本や文献記録が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Sowerby II (1844a: 106<sup>bis</sup>, no. 93, pl. 35, fig. 130, as *Scalaria acuminata*) で、Sowerby II (1873a: sp. 74, pl. 10, fig. 74a-b) にも図示された。殻長約 45 mm、殻径約 11 mm、螺塔の高い塔形で後成層は 12 層以上巻き、やや薄い。螺層は多少膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。細くてゆるく彎曲した低い縦肋をほぼ等間隔で密に生じ、体層で 50 本ほどを数えるが、殻口付近で弱まって完全に消失する個体もある。肋間の幅は縦肋とほぼ等しい。殻底の底板は角張った螺肋で縁取られ、この螺肋は縫合に繋がるかまたは縫合のすぐ上方を走る。各螺層に幅広い茶褐色の螺旋状色帯を 2 本巡らし、周縁附近は色が白く抜ける。殻口は亜円形で、外唇は肥厚せず薄く、軸唇は細くて白い。殻口内部も殻表と同じ褐色帯に彩られる。蓋は角質で薄く黄褐色半透明、種子形、少旋型。軟体はクリーム色で無斑、頭触角は細長い。鰓下腺から紫色の粘液を分泌する。なおアラビア海～南アフリカに分布するとされる *Acrilla minor* (Sowerby II, 1873a: sp. 70, pl. 10, fig. 70, as *Scalaria minor*; この名は *A. gracilis* H. Adams, 1860: 241–242 が *S. gracilis* Sowerby II, 1844a の新参二次同名となったため与えられた置換名で、*A. gracilis* は国際動物命名規約の条 59.3 に則り永久に無効) は本種の異名とされることがあるが (e.g. Higo *et al.*, 1999: 179, no. G1878), 両者を比較した Kilburn (1985: 249–251, figs 12–14, as *Amaea (Acrilla) minor*) によると *Acrilla minor* の縦肋は本種より数が少なく、間隔が広く、また底板を縁取る螺肋が上部螺層においても縫合を超えて現れる点で識別可能という。確かに Steyn & Lussi (1998: 80, fig. 303, *Amaea minor*) が図示した南アフリカ東岸産個体は日本周辺のウネナシトカケより縦肋が少なく、異なる印象を受ける。一方で、D. & E. Bosch (1982: 52, text-fig., as *Amaea acuminata*) や Bosch *et al.* (1995: 106, fig. 399, as *Amaea acuminata*; *A. minor* を異名と見なしている) による東アラビア産個体は日本産に酷似しており区別は困難である。また底板周囲の螺肋が縫合を超える個体は日本でも現れる (福田・木村昭, 2012: 61, text-figs a–b のうち b)。このため *Acrilla minor* は本種の異名であるのか、あるいはインド洋には本種と *A. minor* の 2 種が共存しているのかにわかに判断できず (Swennen *et al.*, 2001: 125, figs 403–404, as *Amaea acuminata*, *A. minor* はタイ南部の Sakom Beach から両種を同時に報告している), 今後改めて検討が必要である。

写真： 児島湾，畠田和一コレクション #2797，福田撮影。殻長 14.3 mm，殻径 5.0 mm。



**分布** タイ産地は「Malacca」(マレーシアのマラッカ)。同種の可能性がある *Acrilla minor* は「Mouth of the Indus」(インドス川河口) から記載された。太平洋側は茨城県鹿島灘 (村岡, 1972: 107, no. 2095) 以南、日本海側は男鹿半島船越 (西村正・渡部景, 1943: 66, no. 70, as *Cirsotrema (A.) acuminata*; 竹之内, 2001: 38) 以南、九州までと、朝鮮半島 (済州島を含む)、中国 (広東省、広西壮族自治区、海南島)、台湾、ベトナム、タイ、オーストラリア北部 (クイーンズランド州) から知られる (Abbott & Dance, 1982: 69, text-fig., as *Epitonium acuminatum*; Wilson, 1993: 274, text-fig.; Swennen *et al.*, 2001; Hylleberg & Kilburn, 2003: 67; 関他, 2004: 197, fig. 490; Li & Ma, 2004: 133, pl. 079, fig. F; Noseworthy *et al.*, 2007: 79; 楊他, 2013: 132, 133, fig. 501)。上記の D. & E. Bosch (1982) や Bosch *et al.* (1995) による東アラビア産個体が *A. minor* でなく本種であった場合は、本種の分布域はその周辺まで一気に広がる。

**生息状況** 内湾・外洋を問わず潮間帯下部から水深約 100 m までの砂底または砂泥底に産し (土田・長谷川, 2017: 892, pl. 181, fig. 7, as *Amaea acuminata* は棲息深度を「80～150 m」としているが、この表記だと潮間帯～潮下帯上部には産出しないうことになり、一部事実と反する)、有明海奥部では干潮時の干潟で生貝が確認できる (福岡県矢部川河口, 2001 年, OKCAB M3946)。また千葉県九十九里浜では 2006 年にも軟体や蓋が残った殻が砂浜に打ち上げられていた (福田・木村昭, 2012: text-fig. a の個体; M15740)。しかし産地は不連続で局在的であり、棲息密度も低いため決して普通種ではない。瀬戸内海では稲葉 (1963: 124; 1982: 118, no. 420) が「少ない」とし、産地の一つに「[倉敷市] 玉島」を含めた。これが今に至るまで岡山県唯一の本種の文献記録であるが、畠田和一コレクションにも「児島湾」産 (「1952.6.25. 黒田 [徳米] 氏送附 no. 205」, 1 個体, #2797; 写真) が含まれている。この標本は色彩や光沢が完全に失われてほとんど化石化した古い死殻で、1952 年当時においても生貝の採集はついに成し得なかったほど稀産であったらしい。その一方で、2002 年 9 月に玉野市波張崎南東沖 (水深 22 m, 泥底) で行われたドレッジによって、本種の螺層の一部 (外唇から殻底にかけて) だけが残された小さな破片 1 個が得られた (M24060)。しかしこの破片は、本種に特徴的な繊細な縦肋と角張った底板の螺肋、褐色の色帯、さらに内面の光沢も明瞭に残されており (だからこそ破片でも同定が可能となった)、完全に破砕されているとはいえ死亡後さほど時間は経っていないものと考えられる。したがって本種は、岡山県ではまだ一度も生貝が確認された実績がないものの海底には個体群が維持されている可能性があるが、もしそうだとすると少数の個体が低密度で生存しているだけと思われ、危機的状況にあることに変わりはない。

(福田 宏)

## クリンイトカケ

*Amaea thielei* (de Boury, 1913)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 イトカケガイ上科 イトカケガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本や文献記録が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 本種は古くから後掲のキヌイトカケと同定が混乱していた。現在の有効名である de Boury (1913: 180–183, pl. 8, fig. 8, as *Scala* (*Amoea* [sic]) *Thielei*) の上記学名 (ホロタイプの写真は波部 (1978b: 124, 126, fig. 1) が公表している) は, Lischke (1871b: 168; 1874: 52, as *Scalardia immaculata*) が記録したキヌイトカケが誤同定であるとの指摘とともに記載された。以下の3名は新参異名: *Scalardia* (*Acrilla*) *densicostata* Yokoyama, 1920: 79, no. 81, pl. 5, fig. 14a–c カズイトカケ; *Scalardia picturata* Yokoyama, 1922: 89, no. 122, pl. 4, fig. 20; *Scalardia* (*Acrilla* [sic]) *ojiensis* Yokoyama, 1927a: 417, no. 30, pl. 47, fig. 3 オウジイトカケ (オオジイトカケは誤記)。これら3異名の原記載の図はいずれも Is. Taki & Oyama (1954: 11, pl. 6, fig. 14, as *Amaea densicostata*; pl. 44, fig. 3, as *Amaea ojiensis*; pl. 24, fig. 20, as *Amaea picturata*) 及び Oyama (1973: 28, pl. 6, figs 29–30, as *Amaea densicostata*; pl. 6, fig. 31a–b, as *Amaea ojiensis*; pl. 6, fig. 13a–b, as *Constantia picturata*) に転載されている。旧名クリンガイ。殻長約30mm, 殻径約11mm, 螺塔の高い塔形で後成層は10層以上巻き, やや薄い。螺層は膨らみ, 縫合は明瞭に縊れる。細く鋭い板状の縦肋をほぼ等間隔で密に生じ, これらが細かい螺脈と交わって規則的な布目状を呈する。さらに太さの一定しない縦脹肋が不規則に現れる。殻底の底板は低い螺肋で縁取られ, その螺肋は縫合に繋がる。底板では螺脈は弱まって縦肋だけが目立つ。地色は白または淡いベージュであるが, 不明瞭な茶褐色の色帯をもつ個体もある。殻口は垂円形で, 外唇は肥厚して反転する。臍孔は閉じる。蓋は角質で薄く黄褐色半透明, 卵楕円形, 少旋型。頭部-腹足は半透明白色で背面全体に多数の白斑を散らす。頭触角は細く長い。足は細く, 後端が尖る (高重, 2019: 73, text-figs に生体写真あり)。

写真: 浅口市寄島町青佐鼻, 2002年12月4日, OKCAB M28679, 福田撮影。殻長20.7mm, 殻径8.8mm。



**分布** タイプ産地は「Japon」(日本)及び「Philippines」(フィリピン)。異名である *Scalardia* (*Acrilla*) *densicostata* は「Koshiba Zone (Koshiba); Upper Musashino of Musashi」(神奈川県横浜市金沢市柴町小柴の金沢層群小柴層), *S. picturata* は「Shitō. Oji in Musashi」(千葉県市原市市東の印旛層・市原層及び東京都北区王子の東京層), *S. (Acrilla) ojiensis* は「Ôji」(王子)からそれぞれ記載され, いずれも鮮新世～更新世の化石である。現生個体は太平洋側が房総半島 (岩川, 1909: 77, as *Scala sulcata* Sow. くりんがひ)以南, 日本海側が男鹿半島 (西村正・渡部景, 1943: 66, no. 69, as *Cirsotrema* (*Amaea*) *thielei*)以南, 九州までと, 朝鮮半島 (済州島を含む: 関他, 2004: 195, fig. 482; Noseworthy *et al.*, 2007: 79), 中国 (渤海～黄海沿岸) (Li & Ma, 2004: 133, pl. 079, fig. D; 张, 2008: 160, text-figs) から知られ, タイプ産地の一部であるフィリピンでも最近マクタン島産の個体が図示された (Poppe, 2017: 256, pl. 1428, fig. 2)。その一方で南西諸島では明確な記録が見当たらない。

**生息状況** 内湾・外洋を問わず潮下帯から漸深海底 (水深約5～250m) の砂底に棲息する。高重 (2019) は「夜間, イソギンチャク類の多い砂底を這いまわる姿が見られる」と述べ, 刺胞動物を捕食するとみられる。かつて死殻は浜辺に比較的高頻度で打ち上げられ決して稀な種ではなかったが, 1990年代には減少傾向が指摘されていた (福田, 1996: 32–33)。瀬戸内海でも稲葉 (1982: 118, no. 419) は全域に「普通」としていたが, 近年の生貝の記録は少なく, わずかに濱村 (2004: 63, text-fig.) が広島県倉橋島での産出を述べた程度で, 2009–2013年に香川県を調査した瀬尾・Tanangonan (2014: 97, no. 108) も少数の死殻を得たのみと報じている。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 160) の目録中に記載され, また島田和一コレクションにも「[浅口市] 寄島」(「昭和」31 [=1956].11.12.), 体層のみの破片1個, #1795) 及び「[笠岡市] 白石島」(2個体, #2696 (part)) からの標本が含まれている。このうち白石島産はキヌイトカケ1個体が混在しており, 両種が同時に浜辺に打ち上げられていたものと推測される。しかしその後県内で生貝が確認されたことはない。近年は2002年に浅口市寄島町青佐鼻 (2個体, OKCAB M28679; 写真) と玉野市波張崎沖水深21.9m砂底でのドレッジ (1個体, M24454), 2004年に瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜 (1個体, M8629) と玉野市渡川 (2個体, M8507), 2010–2011年に玉野市沼の出崎海水浴場 (6個体, M20106, M22120) で少数の死殻が得られたにとどまる。しかもその大半は摩滅または破損しており, 直近まで生きていたとは思えないため, 現在も県内に個体群が維持されているとは断定できない。もともと棲息密度が低く個体数も少ない種である上に, 水質汚染や海底浚渫によって本種のみならずホストである潮下帯のイソギンチャク類もろとも大きな打撃を受け, その数を大きく減らした可能性が高い。

(福田 宏)



## キヌイトカケ

*Epitonium immaculatum* (Sowerby II, 1844)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 イトカケガイ上科 イトカケガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Sowerby II (1844a: 93<sup>bis</sup>, no. 39, pl. 33, fig. 58, as *Scalaria immaculata*) で、その図は Tryon (1887: 61, pl. 12, fig. 80, as *S. immaculata*) 及び Brown (2008: 710, pl. 300, fig. 9) にも転載された。Brown & Neville (2015: 86) は Lischke (1871b: 168) が報告した「*S. immaculata*」を Sowerby の学名の新参一次同名かつ疑問名 (*nomen dubium*) と解釈しているが、Lischke は単に既存の学名を用いて同定しただけ (de Boury (1913) によればクリンイトカケの誤同定：後種の項を参照) であり新タクソンを創設したわけではないので、その扱いは不適切である。*Scala (Foliaceiscalia) venusta* Fenaux, 1943: 3, no. 3, fig. 3 は新参異名で、しかも *Scalaria venusta* H.C. Lea, 1841: 95, pl. 1, fig. 7 と *Scalaria venusta* Libassi, 1859: 24, no. 47 の新参二次同名で無効。殻長約 20 mm, 殻径約 9 mm, 殻はクリンイトカケに似るが最大の差異は後種がもつ底板を本種は欠き、また後種では閉じる臍孔が本種では明瞭に開くことである。螺塔の高い塔形で後成層は 9 層以上、やや薄い。螺層はクリンイトカケよりさらに膨らみ、縫合もより深い。細く鋭い板状の縦肋をほぼ等間隔で密に生じ、これらが細かい螺脈と交わって規則的な布目状を呈する。太さの一定しない縦肋も不規則に現れる。底板はない。全体が白色で色帯などの彩色はない。殻口は垂円形で全縁、外唇は肥厚して反転し、内唇・軸唇も厚い。臍孔ははっきりと開く。蓋と軟体は未詳。  
写真： [笠岡市] 白石島, 畠田和一コレクション #2696, 福田撮影。殻長 19.8 mm, 殻径 7.6 mm。



**分布** タイプ産地は「Catanauan. Isl. Luzon, Philippines」(フィリピン・ルソン島南部のケソン州カタナワン) で、原記載の 3 ヶ月後に刊行された Sowerby II (1844b: 26–27) では「in sandy mud at eight or ten fathoms」(砂泥底, 8 または 10 尋) と情報が追加された。異名とされる *Scala (Foliaceiscalia) venusta* は「Paumotou」(仏領ポリネシアのトゥアモトゥ諸島) から記載された。国内で最初に本種を図示した吉村 (1930: 16, no. 11, fig. 11) は「能登」と「肥前」の産地を挙げたが、それ以後の記録はごく少なく、いま目に付く限りを列挙しても房総半島 (清水利, 2001: 50, no. 781, as *Amaea (Filiscalia) immaculata*), 愛知県幡豆郡一色町 (竹之内, 2001: 38, as *A. immaculata*), 和歌山県和歌山市水軒 (村岡, 1972: 108, no. 2105; 伊藤勝, 1999: 67, no. 2112, both as *Variciscalia (Fil.) immaculata*), 三重県志摩市志摩町御座と紀伊長島 (20 m) (松本幸, 1979: 23, no. 375, as *V. immaculata*), 兵庫県淡路島 (矢倉, 1932: 39, no. 492), 広島県倉橋島・呉市豊浜・三原市沖の海砂 (いずれも死殻; 濱村, 2004: 63, text-figs, as *A. (Fil.) immaculata*), 山口県柳井市遠崎・大島郡周防大島町筆崎・同町情島 (河本・田邊, 1956: 22, no. 234, pl. 9, fig. 78; 福田他, 1990: 15, no. 2, pl. 2, fig. 8; 福田, 1992: 4, text-fig. 3; 65, no. 216; all as *V. (Fil.) immaculata*), 香川県荘内半島から坂出沖 (畠山・矢野, 1978: 5, as *V. (Fil.) immaculata*), 愛媛県今治市伯方島・松山市 (稲葉, 1982: 118, no. 422, as *V. (Fil.) immaculata*; 石川裕, 2012: 298, no. 168, as *A. (Fil.) immaculata*), 福岡県福岡市西区小戸・宗像市神湊 (高橋・岡本, 1969: 52, no. 450, 「稀」; 岡本, 1977: 15, no. 450, pl. 1, fig. 32), 長崎県西海市大瀬戸町 (堀川, 1964: 17, no. 250), 台湾高雄 (Kuroda, 1941: 93, no. 306, as *Epitonium (Depressiscalia?)* sp.) などが見える程度である。本州日本海沿岸, 南西諸島, 朝鮮半島, 中国大陸沿岸, フィリピン以外の東南アジアからの信頼に足る産出記録は、筆者は今のところ見出すに至っていない。

**生息状況** 上記の通り産出例が極端に少ない稀産種であるため棲息環境の情報も乏しい。比較的出現頻度の高い山口県伊予灘沿岸ではクリンイトカケと同所的に産することが多く、潮下帯の砂底に産すると考えられるが、後種が内湾にも見られるのに対し、本種はより湾口寄りで海水の入れ替わりが盛んな貧栄養の場所に限定され、稀少性は本種の方が際立って高い。稲葉 (1982) は瀬戸内海全体を通じて「稀」としている。岡山県での文献記録はないが、畠田和一コレクションにはクリンイトカケの項に挙げた「[笠岡市] 白石島」(#2696 (part)) の標本中に本種 1 個体 (写真) が含まれている。殻の状態から砂浜に打ち上げられていたものと推測され、外唇は破損している。これが今に至るまで本県における本種の唯一の産出の証拠であり、以後は破片すらも認められたことがない。クリンイトカケと同じ理由で個体群の存続が妨げられたものと考えられるが、全国的に見て本種よりは普通に見られるクリンイトカケすらも生貝が見出されない現在の岡山県で、本種が今なお棲息している可能性はほぼ失われている。

(福田 宏)

## チャマダライトカケ

*Epitonium stigmaticum* (Pilsbry, 1911)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 イトカケガイ上科 イトカケガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry (1911: 34, as *Scala stigmaticum*) で、その前後の時代には *Scalaria maculosa* A. Adams & Reeve, 1850: 51, no. 1, pl. 11, fig. 14 (タイプ産地は「China Sea」) に同定されていた (e.g. Y. Hirase, 1907e: 39, no. 1571, as *Scala Maculosa*; 平瀬興, 1910: 41, no. 865; 岩川, 1919: 43, as *Scala maculosa*; Yokoyama, 1922: 86, no. 116, pl. 4, fig. 14)。 *Glabriscala* [sic] *hayashii* Habe, 1961a: 33, app. 11, pl. 14, fig. 23 オボロイトカケは新参異名。 *Scala stigmaticum* と *G. hayashii* のタイプ標本はともに Higo et al. (2001: 54–55, figs G1901–G1902, both as *Glabriscala*) が写真を公表している。殻長約 24 mm, 殻径約 9 mm, 螺塔の高い円錐形で後成層は 10 層以上巻き、やや厚く不透明。螺層はよく膨らみ、縫合は強く縊れる。板状で白色の顕著な縦肋を広い間隔で生じ、体層で 9–10 本ほどを数える。肋間は平滑で光沢があり、地色は白く、周縁の前後に明るい栗色の大きな斑点を断続的に並べる個体が多いが、その輪廓が不明瞭となつてほぼ全体が褐色に染まる場合もある。殻底は丸く、底板はない。殻口は垂円形、全縁で、唇縁は強く肥厚して白い。殻口の奥も殻表と同じ褐色に彩色される。蓋は角質で厚く、黒色、少旋型。軟体は未詳。

写真： 児島郡 [現・岡山市南区] 小串村 タイラギ漁網, 1934 年 1 月 12 日, 畠田和一コレクション #2697, 福田撮影。殻長 35.0 mm, 殻径 11.9 mm。



**分布** タイプ産地は「Fukura, Awaji」(兵庫県淡路島南あわじ市福良)。*Glabriscala hayashii* は「愛知県幡豆郡一色町沖 (水深 20–30 m)」から記載された。太平洋側は房総半島以南、日本海側は兵庫県但馬以南、九州までと小笠原諸島、朝鮮半島、中国 (渤海・黄海沿岸)、ベトナム、フィリピン (マニラ湾、ビサヤ諸島カヤテス海 (Camotes Sea)、アリグアイ島 (Aliguay Id.)) から産出が知られている (伊藤勝, 1967: 52, no. 190, as *Glabriscala stigmaticum* [sic]; Springsteen & Leobrera, 1986: 75–76, pl. 18, fig. 12, as *Epitonium (Hyaloscala) hayashi* [sic]; Fukuda, 1995: 13–14, pl. 55, fig. 898, as *E. (H.) stigmaticum*; 清水利, 2001: 51, no. 808, as *E. (Hirtoscala) stigmatica* [sic]; Hylleberg & Kilburn, 2003: 67, as *E. hayashii* and *E. stigmaticum*; 関他, 2004: 198, figs 497–498, as *G. stigmatica* and *G. hayashii*; Li & Ma, 2004: 132, pl. 078, fig. G, as *G. stigmatica*; Brown, 2008: 706, pl. 298, fig. 4; 張, 2008: 158, text-figs)。南西諸島からは明確な記録がない。また Wilson (1993: 279, pl. 44, fig. 34) は本種と称してオーストラリアのクイーンズランド州産標本を図示しているが、その個体は縫合の縊れが深くて各螺層が遊離気味である点为本種と異なり、別種であろう。

**生息状況** 潮下帯から漸深海底 (水深 10–200 m) にかけて砂泥底に棲息する。外洋に産するイメージが強い種であるが、タイプ産地である淡路島では何度も繰り返し報告され (Y. Hirase, 1907e; 平瀬興, 1910; 岩川, 1919; 横山, 1931: 36, no. 1201; 矢倉, 1932: 39, no. 487; 窪田, 1962: 40, no. 521, as *Epitonium (Fuscoscala) stigmaticum*; 堀越他, 1963: 33, as *E. (F.) stigmaticum*)、また豊後水道北端の山口県柳井市附近でも知られており (河本・田邊, 1956: 23, no. 242, pl. 9, fig. 81, as *E. (Glabriscala) stigmaticum*)、瀬戸内海の東西の湾口は主要な産地の一つであった。しかし近年は生貝の記録がほとんどなく、広島県三原市や香川県備前瀬戸で死殻のみ報告されている (濱村, 2004: 65, text-fig.; 瀬尾・Tanangonan, 2014: 97, no. 109; both as *E. (Hyaloscala) stigmaticum*)。岡山県では文献記録はないが、畠田和一コレクション中に「児島郡 [現・岡山市南区] 小串村」産の標本 1 個体 (「タイラギ網ニカカル 昭 [和] 9 [=1934].1.12.」, #2697) が含まれている。この個体は光沢が多少失われており蓋もないため、採集時既に死殻であったと推測されるが、破損は全くしておらず殻頂・縦肋・唇縁とも完全で、何より殻長が 35 mm に達する壮麗な標本 (タイプ標本より 10 mm 以上も大きい) であることに驚かされる。しかしその後完全な個体は一切得られておらず、2002 年 9 月に玉野市の沖合で実施されたドレッジ調査では波張崎南東沖 (水深 22 m, 泥底)、波張崎～岡山市東区犬島の間 (水深 14.3 m, 砂底)、大入崎～犬島の間 (水深 10 m, 砂底) の 3ヶ所で、螺層のほんの一部だけになった数 mm 程度の微小な破片が計 4 個 (OKCAB M24061, M24155, M24283) 得られたにすぎない。かつて本種は湾口部の潮通しの良い場所に多く見られていたことから水質の富栄養化に弱いと考えられ、岡山県では 1960 年代以降の汚水流出や赤潮の頻発などが個体群に深甚な打撃を与えたものとみられる。度重なる海底の浚渫も潮下帯の棲息環境を徹底的に破壊したであろうことは想像に難くない。今もなお本種が県内のどこかに生き残っている可能性は限りなく低い。畠田標本の見事さと、今世紀に入って辛うじて得られたわずかな破片との間にある著しい落差は、戦後の岡山県の海域で起こった環境悪化をわかりやすく反映していると考えられる。

(福田 宏)

## モロハタマキビ

*Lacuna carinifera* A. Adams, 1853

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 タマキビ上科 タマキビ科 ●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 現存産地が県内に 1 箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1853c: 225)。波部 (1953c: 209, 211, no. 4, fig. 2) 及び G. Yamamoto & Habe (1962: 17, no. 39, pl. 3, fig. 17) は、*Lacuna unicarinata* E.A. Smith, 1875: 104, no. 60 及び *L. oxytropis* Pilsbry, 1895: 63, pl. 8, fig. 1 (後者は Higo *et al.*, 2001: 31, fig. G788s, as *Stenotis oxytropis* がシントタイプの写真を公表) を本種の新参異名とした。長谷川 (2000: 137, pl. 68, fig. 1a-b) は *S. setonaikaiensis* Habe, 1958c: 32, 36-37, no. 2, fig. 5 セトウチヘソカドタマキビも本種の一地方型にすぎないとしている。また中国産の *Lacuna loui* Yen, 1936 はこれまで本種と関連づけて考察された例がないが、Ma (2004: 33, pl. 014, fig. I, as *Stenotis loui*) の図示個体を見る限り本種の異名であろう。本種をタイプ種として *Carinolacuna* Theile, 1929 が提唱されたが、同属は有効な属とは認められず、*Lacuna* W. Turton, 1827 の異名にすぎない (波部, 1953c; Reid, 1989: 89; 長谷川, 1995: 91-92)。別名ススカドタマキビ、マルヘソカドタマキビ。殻長約 10mm, 殻径約 9mm, 算盤珠形、薄く半透明。螺層はよく膨らみ、縫合は強く縊れる。螺塔が高く、周縁に強い龍骨状の螺肋を巡らす。殻形や周縁角の強弱は地域間・個体間で変異幅が大きい。殻表は鈍い光沢を帯び、微弱な成長脈以外は平滑で、オリーブ色の殻皮に覆われ、個体によっては周縁角とその前後に暗赤褐色のだんだら模様をもつ。殻口は著しく大きな亜三角形で、外唇は薄く、内唇～軸唇は直線的。臍孔は広く開き、幅広い臍域の周縁を強い縋帯が縁取る。蓋は種子形、半透明な角質で薄く、淡黄褐色、少旋型で、内面の核の周囲に螺状の低い隆起 (ペグ) を有する。頭部-腹足は半透明の灰色で、背面の大部分と頭触角の両側面は黒色素で覆われる。頭触角は細長い鞭状で、足は短い楕円形。雄の陰茎は細長い。早瀬他 (2016c: 214-223, figs 2-4) が殻に加えて蓋、生体、肉抜き後の軟体、歯舌、卵囊、ヴェリジャー幼生を図示し、形態と初期生活史を詳述している。

写真： 備中〔倉敷市玉島〕黒崎村沙美、畠田和一コレクション #4296, 福田撮影。殻長 7.3 mm, 殻径 7.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Borneo」(ボルネオ)であるが、これは正しい産地かどうか疑わしい (理由は後述)。のちに A. Adams (1863j: 350, no. 3, as *Epheria carinifera*) は「Takano-Sima」(千葉県館山市鷹之島)を産地として追加した。異名である *Lacuna unicarinata* は「On a littoral species of *Sargassum*, North Japan」(北日本、潮間帯のホンダワラ属褐藻上)、*L. oxytropis* は「Tokyo Harbor」(東京港)、*Stenotis setonaikaiensis* は「Akio [sic; = Aio], Yamaguchi Pref., Honshu」(山口県山口市秋徳町)からそれぞれ記載された。*Lacuna loui* は中国北部産である。最北の記録は北海道 (木下虎, 1937: 6, no. 23, pl. 2, fig. 7, as *L. stenomphala*; 黒田・木下虎, 1951: 11, nos 93-94, as *St. (Sublacuna) oxytropis*, *Carinolacuna carinifera*) で、陸奥湾 (G. Yamamoto & Habe, 1962; 三上, 2018: 90, 92, fig. 3) 及び三陸海岸 (横山, 1931: 26, no. 821, as *St. (Sub.) oxytropis*; Nomura & Hatai, 1935: 35-36, no. 184, as *L. oxytropis*; 戸羽, 2009: 17, 18, fig. 4, as *L. (L.) smithii* [sic; 誤同定]) 以南の太平洋岸、佐渡島 (伊藤勝, 1989: 44, no. 26, pl. 2, fig. 12, as *St. carinifera*) 以南の日本海岸に点々と記録があるが、九州での記録は少なく、福岡県 (高橋・岡本, 1969: 32, no. 120, pl. 3, figs 8-9, as *St. (Sub.) setonaikaiensis* [sic]) で知られている程度である。国外は朝鮮半島 (関他, 2004: 136, fig. 244-1-2, as *St. cariniferus*)、中国北部の遼寧・河北・山東各省 (Ma, 2004: 33, pl. 014, fig. I, as *St. oxytropis*) から知られる。これらを総合すると本種の分布範囲は温帯域、それもやや冷帯寄りに限定され、南西諸島や中国南部より南の亜熱帯域からは原記載以外に明確な産出記録が知られていないため、Adams が記したボルネオの産地は誤記の可能性がある。

**生息状況** 内湾の潮間帯下部～潮下帯の平坦な砂泥底に生じた藻場において、アマモ・コアマモなど海草の葉上で暮らす。交尾と産卵は 1-4 月にかけてなされ、新規加入は 2 月に生じる。産卵基質はアマモの葉に限定される (ただし葉上の特定部位への産卵は認められない)。一方、稚貝～幼貝期間の付着基質には明確な植物の選択性が見られない。小卵多産型で、産卵後約 2 週間でヴェリジャー幼生が孵化し、その後少なくとも 1 週間は着底しないため比較的広範囲に分散が可能と考えられる (早瀬他, 2016c)。にもかかわらず本種は不連続的かつ局所的にしか産出せず、決して普通種ではない。近年は浅海域の埋め立てなどで本種の棲息可能な藻場が急速に縮小しつつある上に、早瀬他に記した通り本種は成長段階で基質とする植物を変えるため豊かな海藻藻場も必要であり、単にアマモ類が生えているだけでは個体群は存続できない。岡山県では波部 (1958c) がセトウチヘソカドタマキビを記載した際、「岡山県笠岡で採集したが、稀ではない」と述べている。また畠田和一コレクションには「備前朝日村 [現・岡山市東区正儀] 切石」(「*Lacuna* 幼 黒田 [徳米] 氏同定品 [昭和] 14 [=1939].1.21.」, 1 個体, #2792) と「備中〔倉敷市玉島〕黒崎村沙美」(「*Lacuna smithii* Pilsbry ヘソカドタマキビ 黒田氏同定品」, 1 個体, #4296; 写真) の標本が含まれ、特に沙美産は蓋と軟体が殻の中に残存しているため、採集時は生貝であったと推測される。その後 2004 年 5 月、瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜において、砂干潟に繁茂したコアマモの上で多数の生貝が確認されたが、全て殻径 2mm 未満の幼貝であった (OKCAB M8683)。これを最後に本種は岡山県で一度も再発見されずにいる。例えば倉敷市児島唐琴町の高洲は比較的広いアマモ場が存在するため本種が出現する可能性は十分にあるが、何度調査を重ねても見出されない。恐らく岡山県には今も浮游幼生が他の海域からやって来ているものの、着底した幼貝が成熟して繁殖するに至らない何らかの理由が存在するとみられる。それが水質や底質の劣悪さなのか他の要因なのか不明であるが、いずれにせよその場で生活史を全うし、健全と呼ぶ個体群は確認できていない。

(福田 宏・早瀬善正)

## サキグロタマツメタ

Laguncula pulchella Benson in Cantor, 1842

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 タマガイ上科 タマガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧 I 類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後は死殻が見出されたのみで棲息は確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Benson in Cantor (1842: 488) で、ホロタイプの写真を Yen (1942: 211, pl. 16, fig. 95) が公表している。新参異名が3つある：*Natica gilva* Philippi, 1851: 47–48, no. 48 (のちに Philippi, 1853 in 1849–1853: 138–139, no. 164, pl. 19, fig. 11 に図示)、*N. tenuis* Philippi, 1852 in 1849–1853: 97, no. 110, pl. 14, fig. 3 (not of Récluz, 1851)、*N. Fortunei* Reeve, 1855b: sp. 123, pl. 26, fig. 123。それら原記載の図は Crosse & Debeaux (1863b: 262–263, no. 8, pl. 9, fig. 5, as *N. Fortunei*) の見事な絵とともに Tyron (1886: 37, pl. 9, fig. 72; pl. 14, figs 22–23; pl. 21, fig. 9) に転載された。*N. fortunei* のシタイプの写真は Yen (1942: 210, pl. 16, fig. 93) と Higo *et al.* (2001: 44, fig. G1427, as *Lunatia fortunei*) が公開し、Yen は同時に *N. fortunei* と *N. gilva* を同種と明言している。学名の歴史の変遷は Oyama *et al.* (1993: 114–117, pl. 25, figs 1, 8a–b, 11a–d) と鳥越・稲葉 (2011: 12–13, no. 33, pl. 1, fig. 3) に詳しい。別名サキグロツメタ、ウミタニシ。殻長約 50 mm、殻径約 30 mm、卵円錐形、古くから何度も言われてきた通りマルタニシに似る。螺層はよく膨れ、縫合は縊れる。若い個体では薄いが老成すると厚い。日本でもともと知られていた個体は一樣に殻表が青磁色で殻頂部が黒ずむのに対し、中国や朝鮮半島では薄桃色で殻頂が紅色の表現型も現れる(関他, 2004: 170, fig. 389-1–2 が「*L. yokoyamai* (Kuroda & Habe, 1952)」(ヨコヤマオリイレシラタマ) と誤同定したもの；この型は日本にも既に移入されている：福田・木村昭, 2012: 58, text-figs a–c)。殻表は弱い成長脈以外は平滑。殻口は半月形で広く、外唇は薄く鋭い。内唇～軸唇は直線的で斜めに傾き、滑層は狭いが光沢が強く、殻口内部は濃紫褐色。臍域は狭く、臍索を欠き、臍孔は狭いが明瞭に開く。蓋は角質、半透明茶褐色、少旋型。軟体は灰色で、足は著しく大きく、扁平な楕円形。匍匐時は細長い一對の頭触角を斜め上方へ突き立てて進む(木村昭・木村妙, 2013: 28, fig. 97a–d; 高重, 2019: 124, 125, text-figs に生体写真あり)。歯舌を Golikov & Sirenko (1988: 14–15, figs 9, 27, as *L. gilva*) と Torigoe (1989: 46–49, figs 1–5, as *L. fortunei*) が図示し、外套腔・消化器・生殖器・中枢神経系など内部形態は土屋・竹山 (2011: 35–44, figs 2-1–4, as *Euspira fortunei*) が詳述している。

写真： 浅口市寄島町寄島園地～三郎島, 2002年2月27–28日, OKCABM28647, 福田撮影。殻長 21.6 mm, 殻径 18.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Chusan ... Said to inhabit canals」(中国浙江省舟山市, 運河産と称する)。異名の *Natica gilva* は「China」(中国)、*N. tenuis* は「China; an der Mündung des Yang-the-kwing」(中国; 揚子江河口)、*N. Fortunei* は「Shanghai [sic; Shanghai], China」(中国, 上海) からそれぞれ記載された。日本では本来、伊勢湾、瀬戸内海(岡山・山口両県)、福岡市今津湾、有明海に産出が限られていた(高橋・岡本, 1969: 40, no. 236, pl. 5, figs 18–19; 岡本, 1986: 69, fig. 4L, C; 鳥越, 1988: 69–70, fig. 2; 福田, 1992: 63, pl. 13, fig. 196, all as *Lunatia fortunei*; Oyama *et al.*, 1993; 福田, 1996: 32; 2000: 114–115, 136, figs 5-6b–7, as *Euspira fortunei*)。木村昭・木村妙 (2013) は「三河湾、伊勢湾の個体群を在来個体群とする記述があるが、明らかに移入」と主張し、確かに三河湾(齋藤, 2000: 251, pl. 125, fig. 3, as *E. fortunei*; 2017: 859, pl. 145, fig. 3) は最近の移入とみられる。他方伊勢湾では Oyama *et al.* (1993: 115, 116, 123) によると 1970 年代以前の記録が存在し、「it seems to have not dwelt today」(もはや棲息していないようだ) とされているため一概に決め付けられない。またそれ以前に、そもそも日本の個体群全体が 1940 年代以降に移入されたものとみる見解もある(山下博他, 2014: 150)。国外は朝鮮半島南西岸、中国渤海・黄海沿岸～広東省北部に分布する(e.g. Oyama *et al.*, 1993; 權他, 1993: 71, fig. 31-1; 275, as *E. fortunei*; Ma, 2004: 65, pl. 037, fig. E; 张, 2008: 110, text-figs; 张他, 2012: 62, no. 47, text-figs; 杨他, 2013: 62, 63, fig. 202; 郑他, 2013: 154, text-figs, all as *L. gilva*)。

**生息状況** 内湾奥の砂泥干潟中～下部表層に棲み、他の貝類を襲って捕食する。その生態は発生や生活史、行動なども含めて様々な観点からの研究結果が大越健・大越和(編, 2011, as *Euspira fortunei*) に詳述されている。1990 年代までの日本では、本種は伊勢湾、瀬戸内海、博多湾、有明海の限られた範囲に少数が見られるのみであった。ところがその後、中国もしくは朝鮮半島産の *Ruditapes philippinarum* (A. Adams & Reeve, 1850) アサリなど食用二枚貝類に随伴して日本各地へ非意図的に移入され、急激に増殖して深刻な漁業被害をもたらすに至った(大越健, 2004: 74, figs 1, 4–8, as *E. fortunei*)。瀬戸内海や有明海も例外でなく、それまで細々と存続していた国内個体群は新たな移入個体群に吸収または駆逐されてしまった可能性がある。岡山県は移入の顕在化以前より知られる数少ない産地の一つであり、最初の記録は稲葉 (1982: 97, no. 228, as *Lunatia fortunei*) による「Ushimado [瀬戸内市] 牛窓町; off Otojima [倉敷市玉島] 乙島沖, '64–XII-28」で、これは当時本州で唯一の産出例であった。Oyama *et al.* (1993) も乙島産標本 2 個体(瑞浪市化石博物館所蔵)を図示している。しかし 1960 年代以前は稀産であったらしく、畠田和一コレクションに本種の標本はない。上記以外に県内での発見例はなかったが、2002 年 2 月、浅口市寄島町三郎島附近の砂浜で死殻 1 個が得られた(OKCABM28647; 写真)。寄島町周辺には毎年大量の *Anadara kagoshimensis* (Tokunaga, 1906) サルボオが有明海から搬入され(福田, 2007: 160)、これに伴って *Nassarius sinarum* (Philippi, 1851) カラムシロなど外来種が侵入・定着しているため、上記の死殻も同様に移入された可能性があるが、それ以後追加個体は見出されていない。現時点で確言できるのは、稲葉や Oyama らが記録した本県の個体群はもはや消え去ってしまったこと、県外からの移入個体群はまだ定着に至らないことの 2 点である。後者は、日本各地で続々と出現が報告されている現状では例外的な事態である。サルボオは継続して他県から搬入されているから、本種が県内に入り込む機会自体は高頻度で生じているにちがいない。実際にカラムシロや、県内在来でない疑いが濃厚な *Paratectonatica tigrina* (Röding, 1798) ゴマフダマヤ *Mitrella martensi* (Lischke, 1871) マルテンスマツムシ等の生貝が倉敷～笠岡市一帯に少なからず見られる。にもかかわらず本種が見出されないのは、その侵入を阻む何らかの特異的な要因が存在する可能性もあり、今後も継続的に貝類相の変遷を注視する必要がある。

(福田 宏)

## ウチヤマタマツバキ

*Polinices sagamiensis* Pilsbry, 1904

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 タマガイ上科 タマガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry (1904a: 23–24, pl. 4, fig. 37, 37a) で、Higo *et al.* (2001: 44, fig. G1437) がホロタイプの写真を公表している。この学名が記載される以前は *Polinices powisianus* (Récluz, 1844) オオタマツバキと混同されていた (Dunker, 1882: 62, as *Uber Powisianum*; Pilsbry, 1895: 72, as *P. powisianus* v. *draparnaudii*; 内山, 1902: 429, pl. 27, figs 31–32, as *Natica powisiana*)。旧名シラタマツバキ。殻長約 37 mm, 殻径約 40 mm, やや横長の球形で厚く堅固, 不透明。殻表は成長脈以外は平滑で光沢があり, 白地に明るい橙色の幅広い色帯を巡らし, 殻頂から次体層までと体層の縫合下, 及び殻底は白く抜ける。殻口は半月形で内壁は白く, 内唇～軸唇はほぼ直線状をなし, 滑層が顕著に発達する。臍域は広く, 臍索は幅広く強大で, 臍孔はその周囲で C 字形に彎曲し, 生貝では内側に厚い黒色の殻皮を着ける。蓋は角質で硬く半透明, 赤みがかった褐色, 半月形, 少旋型。軟体は白色無紋, 足は厚く幅広い (斎藤, 2017: 860, pl. 146, fig. 2 及び高重, 2019: 128, 129, text-figs に生体写真あり)。東 (1961: 197, pl. 12, fig. 2) と稲葉 (1976: 87, no. 4, pl. 1, fig. 4) が歯舌を図示している。  
写真： [倉敷市] 下津井, 畠田和一コレクション #388, 福田撮影。殻長 34.9 mm, 殻径 36.6 mm。



**分布** タイプ産地は「Hayama, a place on Sagami Bay, about 4 miles from Kamakura」(相模湾の神奈川県三浦郡葉山町, 鎌倉市から約 4 マイル)。太平洋側は房総半島以南, 日本海側は男鹿半島以南, 九州までと, 伊豆諸島 (南は八丈島まで), 朝鮮半島 (済州島を含む), 中国南部 (福建省, 広東省, 広西壮族自治区, 海南島), 台湾まで分布する (鈴木庄, 1979: 168, no. 119; 西村和, 1999: 50, no. 603; 清水利, 2001: 41, no. 590; 関他, 2004: 171–173, fig. 391-1–2; Ma, 2004: 66, pl. 038, fig. B, as *Polinices peselephantii* [誤同定]; Noseworthy *et al.*, 2007: 77; 張, 2008: 114, text-figs; 楊他, 2013: 64, 65, fig. 211; 鄭他, 2013: 152, text-figs; 王他, 2016: 34, no. 93, text-figs)。ベトナムでも記録があるものの (Thach, 2002: 17; Hylleberg & Kilburn, 2003: 58), 実物の図示例がないため同定が正しいか判断できない。また斎藤 (2017) は「フィリピンまで」分布するとしたが, Springsteen & Leobrera (1986: 48, pl. 9, fig. 16) が本種として図示した個体は臍索が狭く, 臍孔の彎曲も小さいことなどから明らかに別種である。近年刊行された Poppe (Ed., 2008–2017) にも本種は掲載されておらず, フィリピンには分布しない可能性が高い。

**生息状況** 潮下帯 (水深約 10–50 m) の砂底に棲息する。内湾・外洋を問わず産出するが, 内湾では潮流が速くて海水の透明度が高く, 底質が清浄な細砂からなる場所に主として見られ, 湾奥の泥底や富栄養化した場所ではほとんど見出されない。かつての瀬戸内海では全域で「普通」とされ (稲葉, 1982: 96, no. 218), 例えば山口県周防灘～伊予灘沿岸では砂浜に頻繁に殻が打ち上げられ, 漁屑や浚渫された砂の中に見出されることも少なくなかった (福田, 1992: 63, pl. 13, fig. 190)。しかし近年は全体的に衰退傾向にあり, 生貝や新鮮な死殻を見る機会が減った感がある。岡山県では 1930 年代, 小田郡北木島村 [現・笠岡市] 飛島の住民が本種を「スベリニシ」なる方言で呼んでいたことを畠田 (1935: 235, no. 59) が記録している。また大垣内 (1968a: 45–46) は倉敷市塩生において, 水島工業地帯の埋立地造成のために海底からサンドポンプで吸い上げられた砂中で本種を見出したと報告している。畠田和一コレクションにも「[倉敷市] 下津井」産の 3 個体 (#388; 写真) が含まれ, その全てが蓋を持ち, 臍孔の黒い殻皮も完全に残されているので採集時に生貝であったことは確実である。しかしこの標本が実質的に本種の岡山県最後の確実な産出の証拠となってしまった。それ以降本県内で本種は死殻すらも見出されることがないからである。対岸の香川県では近年も備讃瀬戸沖などで少数ながら生貝が確認されているため (瀬尾・Tanangonan, 2014: 96, no. 90, as *Polinices powisianus*), 岡山県でも香川県に近い海域に生き残っている可能性は否定できないが, 畠田和一が活躍した 1930–50 年代とは比較にならないほど本種が激減したことは動かしがたい事実である。上記の通り本種は汚水流入による富栄養化に耐性が低いとみられ, また海底浚渫 (大垣内, 1968a が記したサンドポンプはその典型である) も本種の棲息環境を破壊して打撃を与えた可能性が高い。

(福田 宏)

## オリレシラタマ

*Gennaeosinum bathyraphe* (Pilsbry, 1911)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 タマガイ上科 タマガイ科 ●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry (1911: 33–34, as *Polinices bathyraphe*) で、シントタイプの写真は Higo *et al.* (2001: 44, fig. G1429, as *Lunatia bathyraphe*) や ANSP (2019: #97974) に公表されている。殻長・殻径とも約 6 mm、亜球形で厚く堅固、不透明。縫合は明瞭に窪んで浅い溝状となり、その辺縁は鈍く角張る。殻表は細かい成長脈に加えて微弱な螺溝を狭い間隔で多数巡らす。生貝では鈍い光沢を帯びた明るい淡橙色の殻皮に覆われるが、死殻では剥離して純白となる。殻口は半月形で内壁は白くて光沢が強く、内唇～軸唇はほぼ直線状をなし、滑層が発達して広がる。臍域は広いが臍索の発達は弱く、臍孔は大きく開く。蓋は角質で半透明、黄褐色、半月形、少旋型。軟体は白色で無紋、足は幅広い。鳥越・稲葉 (2011: 58–59, no. 149, as *Sigatica bathyraphe*) は歯舌の特徴を記述した上で、従来本種が所属するとされてきた *Sigatica* Meyer & Aldrich, 1886: 42 のタイプ種 *Sigaretus* (*Sigatica*) *Boettgeri* Meyer & Aldrich, 1886: 42, pl. 2, fig. 13 は北米ミシシッピ州産の化石で歯舌の情報がなく、また同属とされる他の現生種も大西洋産のため本種を *Sigatica* の一員と断定するには「問題が残る」と指摘した。むしろそれ以前の著者 (e.g. Kuroda, 1941: 99, no. 391; 大山, 1943a: 17, no. 160, as *Germaeosinum* [sic] (?) *bathyraphe*; Kuroda & Habe, 1952: 58; 稲葉, 1963: 128, pl. 3, fig. 8) によって疑問符付きで用いられていた *Gennaeosinum* Iredale, 1929: 279–280 (タイプ種は *G. peuleum* Iredale, 1929: 279–280, pl. 31, fig. 12, オーストラリア・クイーンズランド北部産; 鳥越・稲葉, 2011: 67, nos 176–177 が *Gennagosinum* としたのは誤綴) に属す種の方が本種により近似し (Kilburn, 1988: 523–526, figs 1–6, as *Eunaticina* (*Gennaeosinum*)), しかもそれらの分布域はインド-西太平洋であるので *Sigatica* よりは違和感が少なく、ここでは暫定的に属の所属を *Gennaeosinum* に戻した。むしろ正確な所属の決定には、歯舌をはじめとする内部形態の比較解剖や分子系統解析を俟つべきことはいまでもない。

写真： [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #4303, 福田撮影。殻長 7.3 mm, 殻径 8.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Fukura, Awaji」(兵庫県淡路島福良)。太平洋側は千葉県銚子市以南、日本海側は秋田県由利本荘市以南、九州までと、台湾から知られる (Kuroda, 1941; 清水利, 2001: 42, no. 605, as *Sigatica bathyraphe*; 福田・久保, 2012: 60, text-figs, as *S. bathyraphe*)。多くの文献が奄美大島や沖縄も分布域に含めているが、南西諸島からの確実な産出の証拠は確認されていない。名和 (2009: 35, no. 139, pl. 4, fig. 2) が沖縄島国頭郡恩納村屋嘉田湯原の「低潮帯, 海藻藻場, 粗砂底」から「*Eunaticina* sp.」として報告した個体は、縫合がさほど窪まない点を除けば本種に似ており (豪州シドニーから記載された *Gennaeosinum intercisum* Iredale, 1931: 217, pl. 23, figs 13–14 にも酷似する; Kilburn, 1988 を参照), 同様の個体が本種に同定されてきた可能性があるが、本種との関係は今後の検討を要する。一方, Swennen *et al.* (2001: 122, fig. 379) が「*Sigatica* cf. *umbilicata* (Quoy & Gaimard, 1833 [sic; 正しくは 1832])」として図示したタイ南西部サコム海岸 (Sakom Beach) での打ち上げ個体は恐らく本種であり、もしこの見立てが正しければ分布域は一気にタイまで広がる。

**生息状況** 波穏やかな外洋や内湾湾口部に面した砂浜において、潮間帯下部から潮下帯にかけて棲息する。海水の透明度が高い清浄な細砂底に特異的で、福田・久保 (2012) は同所的に見られる他の貝類としてマクラガイ, バイ, カバザクラ, *Macridiscus aequilatera* (Sowerby I, 1825) コタマガイなどを挙げた。タイプ産地である淡路島周辺は古くから本種の産地として知られ、矢倉 (1932: 35, no. 438, as *Neritaeformis* [(*Euspira*)] (?) *bathyraphe*) が本種に和名を新称した際 (原文は「オクイレシラタマガヒ」であるが誤植であろう) も同島産個体を対象としていた。のちの稲葉 (1982: 98, no. 238, pl. 2, fig. 24, as *Sigatica bathyraphe*) も同島をはじめ備讃瀬戸～備後灘・燧灘及び伊予灘に「普通」としている。しかし近年は頻繁に出現する種とはいいがたく、瀬尾・Tanangonan (2014: 96, no. 94, pl. 1, fig. 22, as *S. bathyraphe*) も近年の香川県では少数の死殻しか確認していない。岡山県では文献記録はなく、畠田和一コレクションに「[倉敷市下津井] 六口島」(37 個体, *Eunaticina linneana* (Récluz in Chenu, 1843) タマネコガイ幼貝 1 個体と混在, #4303; 写真), 「[倉敷市玉島] 黒崎村沙美」(1 個体, #5992) からの標本が現存する。このうち六口島産の 1 個体は蓋と乾燥した軟体が殻口内に残されており、他の死殻とともに生きてまま浜辺へ打ち上げられていたと推測される。沙美も海水浴場であるから、やはり砂浜での打ち上げ採集で得たものであろう。その後は 2002 年に岡山市南区米崎沖 (水深 5.2 m, 泥底) でのドレッジによって死殻 2 個体 (うち 1 個体は微小な幼貝) が得られた (OKCABM24495)。しかし生貝は確認されず、また浜辺に新鮮な死殻が打ち上げられている光景も全く見られない。このため畠田和一が活躍した 1950 年代以前の状態とは比較にならないほど激減したことは明らかである。近年もごく少数ながら死殻が得られているため県内から完全に消え去ったわけではなさそうであるが、浜辺に全く打ち上げられない点を考えれば、個体群が現存するとしても狭い範囲に局限されているのは少なくとも確実視される。1960 年代以降の水質汚濁や海底浚渫, 海岸開発に伴う干潟の消失などによって、かつて浅所に広がっていた個体群はほぼ一掃されてしまったと考えられる。

(福田 宏)

## ケシカニモリ

*Seila morishimai* (Habe, 1970)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 高腹足亜区 ミツチキリオレ上科 アミメケシカニモリ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** かつて本種は *Triphoris dextroversus* A. Adams & Reeve, 1850: 45, no. 4, pl. 11, fig. 31a–b (タイプ産地は「China Sea」) または *Cerithiopsis laqueata* Gould, 1861: 387–388 (Yen, 1944: 570, pl. 50, fig. 44 と Johnson, 1964: 98, pl. 10, fig. 7 にレクトタイプの写真あり; タイプ産地は「China Seas」) に同定されていた。波部 (1970b: 56, 57, text-figs 2–3) は本種を *Notoseila laqueata* とした上で、それとは異なる種として *N. morishimai* ホソケシカニモリを新種記載した (長谷川, 2000: 301, pl. 149, fig. 13b; 2017: 880, pl. 170, fig. 2 (右), as *Seila* (*Notoseila*) *morishimai* と Higo *et al.*, 2001: 52, fig. G1789 がホロタイプの写真を公開している)。しかし Marshall (1978: 94) は本種を *T. dextroversus* や *Cerithiopsis laqueata* とするのはいずれも誤同定であると指摘し、これを受けた長谷川 (2000) がホソケシカニモリ=ケシカニモリと見なして、本種に対する有効名として初めて *S. morishimai* を用いた。和名ケシカニモリは岩川 (1909: 90, as *C. terebrale* C.B. Ad.) が新称したが、のちの岩川 (1919: 78, as *C. sp.*) では同じ標本 (「淡路福良」産の「3879」) に対してセンダンマキケシカニモリという名が用いられている。別名キリオレダマシ。殻長約 6.8 mm, 殻径約 1.7 mm, 細長い塔形, 8 層以上巻き, 厚質で堅牢。螺層は膨らまず側面は直線的。胎殻は丸く, 白色で殻表は平滑。後成層の殻表は強いレール様の螺肋を 3 本巡らし, 6 巻は螺肋とほぼ等幅で, 微細な成長脈を刻む。殻色は濃い橙色で無紋。殻底は周縁のすぐ下に細い螺肋が 2 本あり, 強大な繃帯を巻く。殻口は亜方形で, 外唇縁は螺肋の末端によって波打ち, 前方へ多少広がる。軸唇は短くて直線的またはやや傾く。前管溝は短く, 背面側へ深い彎入を形成する。蓋は角質で薄く, 少旋型。軟体は白色。

写真: 備中 [岡山市東区] 犬島, 畠田和一コレクション #4300, 福田撮影。殻長 9.2 mm, 殻径 2.7 mm。



**分布** タイプ産地は「和歌山県串本町潮岬オゴクダ浜」で, 同時に「熊本県天草郡苓北町富岡; 山口県 [下関市豊北町] 角島 (日本海側)」の両産地も挙げられた。北海道南西部以南 (波部・伊藤潔, 1965: 21, pl. 6, fig. 28, as *Seila dextroversa*), 太平洋側・日本海側のいずれも東北地方から九州まで広く見られ, 小笠原諸島, 南西諸島にも産する (黒田, 1928: 38, no. 411; 1960: 14, no. 387; both as *S. dextroversa*; Fukuda, 1993: 56, pl. 19, fig. 338; 名和, 2009: 37, no. 157; both as *Notoseila morishimai*)。国外は朝鮮半島, 中国山東省, フィリピンのマクタン島・オランゴ島などから知られる (関他, 2004: 191–193, fig. 449, as *N. morishimai*; Ma, 2004: 42, pl. 018, fig. H, as *N. laqueata*; Poppe, 2008: 734, pl. 312, fig. 6, as *N. morishimai*; Cecalupo & Perugia, 2017: 134, pl. 1367, figs 7–8)。

**生息状況** 潮間帯下部岩礁の転石間に棲息し, 海綿動物を捕食する。死殻は浜辺へ頻繁に打ち上げられ, 特に外洋に面した海岸に多いが瀬戸内海でも潮通しのよい場所ならば稀ではなく, 稲葉 (1982: 91, no. 169, as *Notoseila laqueata*) は全域に「普通」としている。ただし中央部の備讃海域では多産するとは言えず, 香川県で本種を記録した畠山・矢野 (1978: 5, as *Seila dextroversa*) と瀬尾・Tanangonan (2014: 96, no. 99, as *Notoseria* [sic] *morishimai* [sic]) はともに死殻のみ確認している。岡山県では大垣内 (1968a: 45) が倉敷市塩生のサンドポンプ中から見出し, 岡大玉野臨海 (1978: 160) の目録にも記載されている。畠田和一コレクションには「備中 [岡山市東区] 犬島」(「黒田 [徳米] 氏同定品」, 1 個体, #4300; 写真) 及び「備前 [倉敷市下津井] 釜島」(1 個体, #2101) からの標本が現存し, いずれも浜辺に打ち上げられていたとみられるやや摩滅した死殻である。しかしその後は県内のいずこからも全く確認されず, ドレッジや採泥器などを用いても見出されないまま今日に至る。特に畠田標本の産地である犬島や, 釜島を含む水島諸島では潮間帯の岩礁が護岸などで狭められ, 荒廃して貝類の多様性が低下しており, 現在本種が棲息していそうな場所は見当たらない。カタワカニモリ, ヒゼンツクシ, ハッカクフタナシヤジク, チョウジガイなどやや外洋寄りの海岸岩礁に棲む他の種と同様, 県内で激減して絶滅に近い状態にあると考えられる。笠岡諸島や日生諸島など離島ならば今も個体群が維持されている可能性は残るものの, 1950 年代以前に見られた本来の棲息範囲の大半で消滅したことは確実である。

(福田 宏)

## カタワカニモリ

*Ataxocerithium abnormale* (Sowerby III, 1903)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 高腹足亜区 ミツチキリオレ上科 コンボウカニモリ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Sowerby III (1903: 498, as *Triforis abnormalis*)。イビツカニモリは異名。殻長約 15 mm、殻径約 5.5 mm、細長の円錐形で後成層は 12 層以上巻き、やや厚質。螺層の膨らみは弱いが縫合は多少縊れる。殻表は 4~6 本の明瞭な螺肋を巡らし、太い軟状の縦肋と交わって格子目状をなす。周縁は明瞭に角張る。殻色は多くの場合藁色で茶色と白色のまだら模様をなすが、全体が濃褐色、橙色または白色の個体も現れる。殻底は強く縊れ、直線的な水管が前端に向かってまっすぐ伸長し、殻底を超えて管状に突出する。殻口は亜円形で、唇縁は強く肥厚し、体層から遊離して広がり、滑層は光沢が強い。蓋は角質で薄く少旋型。軟体はクリーム色で、細く短い頭触角は橙色の色素斑で彩られ、頭部背面や腹足の両側面にも同色の縁取り状の紋様がある（奥谷, 1986: 82, 83, unnumbered figs に生体写真あり）。

写真： [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #3965, 福田撮影。殻長 12.7 mm, 殻径 3.5 mm。



**分布** タイプ産地は「Schizum Wakasa」で、黒田他 (1971: 109–110 (和文), 72 (英文), pl. 16, figs 20–21) は若狭國西津＝福井県小浜市西津のことであろうと推定している。太平洋側は房総半島以南、日本海側は佐渡島以南、九州までと、小笠原諸島父島、韓国済州島から知られる（伊藤勝, 1979: 44, no. 43; Fukuda, 1995: 13, pl. 55, fig. 893; Higo *et al.*, 1999: 173, no. G1797; 関他, 2004: 191–193, fig. 471; Noseworthy *et al.*, 2007: 79）。沖縄県には類似の別種がみられ、本種は確認されていない（久保未発表）。このため、近年 Tagaro (2017: 100, pl. 1350, figs 4–7) がフィリピンのミンダナオ島から本種と称して図示した個体は、本種と同種であるか疑わしく、検討の余地がある。

**生息状況** 主として外洋に面した海岸の岩礁において、潮間帯下部～潮下帯の岩盤や転石の間に棲息する。Newtoniellidae Korobkov, 1955 コンボウカニモリ科の他種や近縁な Cerithiopsidae H. & A. Adams, 1853 アミメキシカニモリ科の多くの種は海綿動物を捕食することが知られており、本種も同様である可能性が高いが、生態の詳細はいまだ不明である。瀬戸内海ではもともと少なく、稲葉 (1982: 90, no. 161) は備後灘の愛媛県伯方島、周防灘、伊予灘のみを産地として挙げている。岡山県でも文献記録は皆無であったが、畠田和一コレクション中に「[倉敷市下津井] 六口島」産の標本 1 個体（「波部 [忠重] 氏同定 1957.6.」, #3965）が含まれている。まだ水島灘の水質汚染が深刻化せず、海岸の埋め立てや海底の浚渫もさほどなされていなかった 1950 年代以前に、六口島を含む水島諸島の潮の流れの速い海域に本種の個体群が存在したものと考えられる。その後は 2002 年に岡山市東区水門湾中央部の水深 1.4 m 泥底でなされたドレッジによって本種の死殻 1 個 (OKCABM24633) が採集されたが、これは殻長 4 mm 程度の幼貝で、しかも殻色が完全に褪せて失われた古いものであり、現在も本種が附近に棲息していることの証拠とはしがたい。人為的改変の影響を比較的受けていない笠岡諸島南端周辺などでは今も個体群が残存している可能性は否定できないものの、もしそうだとするとごく狭い範囲にのみ局限されるであろう。

(福田 宏・久保弘文)



## チャツボ

*Barleeia angustata* (Pilsbry, 1901)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型クレード リソツボ上科 チャツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry (1901f: 396, as *Assiminea angustata*) で、タイプ標本の写真を Higo *et al.* (2001: 33, fig. G972) が公表している。Grabau & King (1928: 133, 231, 275, pl. 10, figs 106, 107) が記載した *Rissoina dunedini* 及び *R. nelsoni* (両名ともシタイプを Coan *et al.*, 2015: 209–210, figs 26A–B, 27A–B が図示) や、*Barleeia trifasciata* Habe, 1960: 295, no. 11 (ホロタイプを波部(稲葉亨・大山, 編), 1977: 126, pl. 2, fig. 8 が図示), ならびに *B. bifasciata* Habe in 奥谷・波部, 1975a: 65, unnumbered figs; 231 は新参異名。さらに Golikov & Kussakin (1978: 127–128, figs 85, 86) による *Ansola angulosa* 及び *A. labiosa* は、Kantor & Sysoev (2006: 79, pl. 38, figs I, K) が図示したタイプ標本を見る限り本種と識別困難で分布域も完全に重なっているため、今ここで新たに異名とみなす。別名トウガタカワザンショウ、ミジンツボ、トウダカチャツボ、ミスジチャツボ。殻長約 2.3 mm、殻径約 1.1 mm、螺塔の高い円錐形、やや厚く半透明で、螺層はさほど膨らまず、縫合は多少縊れる。未成熟個体では周縁が角張るが、成貝では丸い。胎殻は大きくドーム形で点刻列をもつ。殻表は弱い成長脈以外は平滑で、鈍い光沢を帯びる。全体が濃赤褐色の個体が多いが、白色の螺状帯を縫合下・周縁・殻底に巡らすものも現れ、これがミスジチャツボと呼ばれていた。殻口は種子形で唇縁は単純。蓋は厚い角質で濃赤褐色、半月形で、内面の軸唇寄りに強い突起(ペグ)をもつ。頭部-腹足の背面の大半は黒色素で覆われるが、頭触角は無色半透明で、その根元にある眼の後方には白斑群がある。頭触角は細長く、先端に数本の剛毛をそなえる。臆面後半の正中線上に粘液を分泌する溝が走る。本種は長らく *Barleeia* Clark, 1853 の一員とされてきたが、Kantor & Sysoev (2006) が *Ansola Slavoshevskaya*, 1975 (タイプ種は本種; Slavoshevskaya, 1976: 34–40, figs 1–3) に移して以降 MolluscaBase (2019) なども同様の扱いをしている。しかし Ponder (1983: 235, 236–239, 242, 243, 262, fig. 10F–G) は両属のタイプ種の内部形態を詳細に比較した上で差異はごくわずかとして *Ansola* を *Barleeia* の異名と判断しているため、今回はこれを重視して旧来の用法に戻した。

写真： 黒崎村 [現・倉敷市玉島黒崎] 沙美, 畠田和一コレクション #5985, 福田撮影。殻長 2.5 mm, 殻径 1.5 mm。



**分布** タイプ産地は「Rishiri, Kitami」(北海道利尻島)。新参異名はそれぞれ以下の産地から記載された：*Rissoina dunedini* と *R. nelsoni* は「Peitaiho」(中国河北省秦皇島市北戴河区)、*Barleeia trifasciata* は「Tomioka, Amakusa, Kumamoto Pref.」(熊本県天草郡苓北町富岡)、*B. bifasciata* は「房総半島以南」、*Ansola angulosa* は「southern Primorye, southern Sakhalin」(ロシア沿海州及びサハリン南部)、*A. labiosa* は「Peter the Great Bay, Japan Sea」(ロシア・ピョートル大帝湾)。サハリン南部・南千島以南、北海道を経て本州、四国、九州まで朝鮮半島、中国北部沿岸に分布する(関他, 2004: 145, fig. 281–285, as *B. angustata*, *B. calcarea*, *B. trifasciata*, *B. simplex*, *Amphithalamus fulcira*; Ma, 2004: 36, pl. 015, fig. H, as *Rissoina bureri*; Kantor & Sysoev, 2006; 長谷川, 2017: 811, pl. 80, fig. 1a–c)。国内では北海道～九州のほぼ全域に見られるが、寒冷地に分布が偏っており、南西諸島や小笠原諸島には産しない。

**生息状況** 本種は微小でしかも殻に際立った特徴がないため 20 世紀末までさほど関心を向けられず、同定も著しく混乱していた。その結果文献上の産出記録も決して多くないが、実際には国内温帯域の潮間帯中部から潮下帯において最も多産する貝類の一つで、内湾・外洋を問わず海藻上や転石間などに見られ、干潮時に現れる潮溜まりに夥しい個体数を見ることが少なくない。干潟や砂浜に漂着した海藻の切れ端の上に多数の生貝が乗っていることもある。このような種がレッドデータブックに登載された例はこれまで一度もない。しかし岡山県では驚くべきことに畠田和一コレクション中の唯一個(「[倉敷市玉島] 黒崎村沙美」産, #5985; 写真, 打上死殻とみられる)が唯一の産出の証拠であり、他に文献記録も近年の採集例も一切ない。瀬戸内海中央部ではもともと少なかったのかもしれないが、本種の場合は存在を明確に認識されるようになったのは最近のことでありそれまでは単に見過ごされていた可能性が高いため、標本や記録がないことを理由に棲息していなかったとは言えない。恐らく本種はかつての岡山県でも他県同様に産出はしていたものの 1960 年代以降にことごとく死滅し、本県の対岸の香川県でも近年の調査(瀬尾・Tanangonan, 2014: 93, no. 54)では死殻のみが「少数の地点でたまに見られ」ただけであったと報告されている。本種は直達発生(浮游幼生の時期を経ず、孵化後すぐに海底を匍匐する発生様式。したがって一般論としては分布拡大能力に劣る)であるため、一旦個体群が消滅すると外部からの新規加入に時間がかかるのかもしれない。

(福田 宏)

## イクラドウゴマオカチグサ

Cavernacmella sp. A

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型クレード クビキレガイ上科 カワザンショウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類  
●環境省：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN; ホラアナゴマオカチグサ)

**選定理由** 現存産地が世界全体でも県内のわずか 2 箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 未記載種。殻長約 1.5 mm, 殻径約 1.2 mm, 殻は卵円錐形で薄い硝子質, 無色半透明で殻表は光沢があり, 弱い成長脈を除いてほぼ平滑。臍孔は広く明瞭に開く。胎殻表面には顕著な皺状の彫刻を刻む。蓋は淡黄褐色半透明の革質で種子形, 少旋型。軟体の頭部-腹足は無色半透明で頭触角を欠き, 眼胞が発達するが, 眼それ自体や視神経は存在するものの黒色素を欠く。体の前方両側に明瞭な雑搬溝を縦方向に刻み, 左側の溝の方が右側より幅広く, 糞を排出する際には右側の溝をベルトコンベアのごとく用いて地表に 1 個ずつ落とす。匍匐時は足の前方 1/3 と後方 2/3 とを交互に伸縮させて尺取り虫状に進む。外套腔内の直腸は顕著な二重の S 字彎曲を描き, 生時は直腸に沿って黒い糞塊が並ぶのが透明な殻と外套膜を透過して見える。

写真： 新見市井倉洞, 2013 年 9 月 30 日, 亀田撮影。



**分布** 本種が属すホラアナゴマオカチグサ種群は岩手県以南の本州・四国・九州・南西諸島の石灰岩洞窟から産出が知られ (Habe, 1942: 28–31, figs 1–2, as *Paludinella* (*Cavernacmella*) *kuzuensis*; 伊藤良, 1967: 83–87, as *P. (C.) kuzuensis*; Fukuda & Mitoki, 1995: 6–9, figs 7–21; Fukuda & Ponder, 2003: 2017), 従来は *C. kuzuensis* (Suzuki, 1937: 87–92, text-fig. 1, pl. 18(7), figs 2–7, as *P.? kuzuensis*) ホラアナゴマオカチグサ (タイプ産地は「Tuizi, Kuzuu-mati, Totigi Prefecture」= 栃木県安蘇郡葛生町 (現・佐野市) 築地。更新世の化石とみなされていた) 1 種のみからなるとされてきたが, 最近の分子系統解析によれば洞窟ごとに別種へ分化しており, 少なくとも 50 種以上の未記載種が存在することが明らかにされつつある (亀田他, 2008, 準備中)。2013~2014 年に岡山県北西部の阿哲台地で本種群を調査した結果, 新見市では井倉洞, 豊永赤馬の満奇洞, 豊永宇山先村の宇山洞, 唐松の蝙蝠穴, 真庭市では旧真庭郡勝山町神代の鬼の穴 (死殻), 旧上房郡北房町上水田の備中鍾乳穴, 旧上房郡北房町下皆部の井弥の穴, さらに井原市 (旧後月郡芳井町) 上嶋の蛇の穴 (死殻) の 8 ヶ所で産出が確認された。

**生息状況** 本種群は国内のどの産地においても, 石灰岩地の洞窟内で陽光が届かず常に暗闇に保たれた部位の, 地下水で濡れた壁面を匍匐する。日本の陸産貝類の中で真洞窟棲と呼ぶるのは本種群のみである。石灰採掘によって洞窟そのものが破壊されれば必然的に個体群は消滅するが, のみならず近年は多くの洞窟が観光地化されて内部に照明が設置され, 来訪者の往来が激しくなった。この結果洞内から暗闇が失われて気温の上昇や乾燥化も生じ, 本種群の棲息可能な環境は急速に狭められつつある。また地球温暖化に伴って洞窟内が夏季に高温化し, 地下水が枯渇しがちなことも本種群への脅威となっている可能性がある。岡山県内で生貝が得られた 6 洞窟の個体を対象として分子系統解析を行った結果, 本県の個体群は他県産のいずれとも異なる単系統群を成し, しかも県内産だけでも井倉洞+蝙蝠穴と満奇洞+宇山洞+備中鍾乳穴+井弥の穴とがそれぞれ別個のクレードを形成して, 各群の COI 遺伝子の塩基配列の間には 5 %以上の遺伝的差異が認められた (亀田・福田, 準備中)。本種群に近縁な *Amnicolidae* Tyron, 1863 ヌマツボ科の先行研究 (Bichain *et al.*, 2007) ではミトコンドリア遺伝子の配列に約 1.5 %以上の差異があれば別種とみなされるとされるため, 本県内の上記 2 つの群はそれぞれ県内に固有の独立した種であると認められる。このため今後は井倉洞・蝙蝠穴の種をイクラドウゴマオカチグサ, 満奇洞・宇山洞・備中鍾乳穴・井弥の穴の種をマキドウゴマオカチグサと呼ぶことにする。一続きの決して大規模でない石灰岩地である阿哲台地内でさえ別種レベルに相当する遺伝的変異が蓄積されているのは驚くべきである。しかも両種は羅生門~佐伏川附近を境として西にイクラドウゴマオカチグサ, 東にマキドウゴマオカチグサが分布し, このことは同じ石灰岩地帯内においても地理的遺伝構造が生じていることを示すとともに, これより外の地域, 例えば高梁川以西や井原市方面に現生個体群が存在すればそれらがさらに別の種である可能性を強く示唆する。今のところ生貝の得られていない井原市蛇の穴や, 未調査の地域に棲息すると予想される個体群も, 上記 2 種とは異なる種と見なすべき可能性が十分に考えられる。その一方で, 井倉洞・満奇洞とも高名な観光地であり, 現在も休日には大勢の入洞者が列をなしている。両洞とも洞窟自体は貴重な自然遺産として保護規制がなされ, 許可なく鍾乳石に触れたり洞内生物を採集することを禁じている。しかし内部の景観・雰囲気がいかに保存されたとしても, 無計画に照明を増設したり入洞者の侵入可能範囲を今より拡張するようなことがあれば棲息環境の変質に直結し, 本種群は短期間で絶滅に追い込まれるおそれがある。このため, 洞内環境の変化が現存個体群に及ぼす影響を及ぼさうか, 精査して対策を立てることが望ましい。

(福田 宏・亀田勇一)

## マキドウゴマオカチグサ

*Cavernacmella* sp. B

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソソ型クレード クビキレガイ上科 カワザンショウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類  
●環境省：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN; ホラアナゴマオカチグサ)

**選定理由** 現存産地が世界全体でも県内のわずか4箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 未記載種。形態はイクラドウゴマオカチグサと同様。他県のホラアナゴマオカチグサ種群とも酷似し、多くの場合識別は困難である。

写真：新見市満奇洞（交尾中；小さい個体が雄，大きい個体が雌），2013年9月30日，亀田撮影。

**分布** イクラドウゴマオカチグサの項を参照。前種が新見市井倉洞と蝙蝠穴の固有種であるのに対し，本種は新見市満奇洞と宇山洞，及び真庭市備中鍾乳穴と井弥の穴の4つの石灰岩洞窟に固有である。

**生息状況** イクラドウゴマオカチグサの項で併せて述べる。



(福田 宏・亀田勇一)

## イナバメタニシ

*Bithynia inabai* Habe, 1985

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソソポ型クレード クビキガイ上科 エゾメタニシ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が少なく、棲息環境も限定的である。

**形態** 原記載は波部 (1985a: 1-2, figs 1-4, as *Bithynia* (*B.*) *inabai*)。殻長約 7 mm, 殻径約 5.6 mm, 卵円錐形, 螺層は 4~5 層でよく膨らみ, 縫合の縞れは強い。殻表は淡黄褐色で鈍い光沢があり, 彫刻は微弱な螺脈と成長脈のほか, 狭く低い縦張肋を各層に広く不規則な間隔で生じ, その前後で殻色が異なり, 縦張肋の直前は濃色で, 直後は淡色となることが多い。臍孔は広く深い。殻口外唇は多少広がり, 僅かに肥厚して濃褐色に縁取られる。蓋は半月形, 厚い石灰質で不透明な白色, 外側表面に同心成長脈をもつ。頭部-腹足は淡灰色の地に黄白色の斑点を散在する。頭触角は細長く鞭状で, 基部外側に眼がある。頭部の右側後方に短い水管をもつ。生時は半透明な殻を透過して, 外套膜上に広がる黒地に白の顕著な水玉模様が見える (生体の描画を福田, 2010b: 40, text-fig., 写真を多々良他, 2010: 49-54, fig. 2A-P, R, S が公表している)。

写真：美作市太田, 2018年7月15日, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「神戸市垂水区〔現・西区〕榎谷町寺谷」。兵庫県では南北の広い範囲に産出が認められ, 岡山県では後述の通り東~中部に限られる (増田, 1997b: 8-11; 増田・内山, 2004: 112, text-figs; 自然環境研究センター, 2010: 0781, no. 01250)。基本的にはこれら 2 県の固有種と考えられているが, そこから隔絶した 2 箇所からも記録が存在する。一つは島根県出雲市 (多々良他, 2010) でこれは恐らく在来個体群であるのに対し, もう一つの神奈川県座間市 (狩野・後藤, 1992: 13-14, fig. 2) は人為的移入個体群と考えられ, 当地では以後再発見されていない。

**生息状況** 低地の水田やその周囲の用水路などでもっぱら確認され, ごく浅い (水深 1~10 cm 程度) の止水中の軟泥底表層を匍匐する。冬季は湿泥中に潜って越冬し, 翌春水田に水が入ると再び活動を始め, 春から夏にかけて産卵する。したがって一年生ではなく少なくとも数年は生きる。当初は神戸市という大都市近郊で発見されたため, 新種記載からしばらくの間外来種の疑いがかけていられた。しかしその後, *Ciconia boyciana* Swinhoe, 1873 コウノトリ, *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842) ドジョウ, *Lethocerus deyrollei* (Vuillefroy, 1864) タガメなど多様な絶滅危惧種が見られる場所に棲息する例が多いと判明し, 兵庫・岡山両県在来の固有種と結論づけられた (多々良他, 2010)。岡山県では美作市, 勝田郡勝央町, 津山市, 苫田郡鏡野町, 久米郡美咲・久米南両町から産出記録があり (川口貞, 1985; 片山, 2001: 14; 福田, 2010a: 303), 特に県の中~北部において, 傾斜のある地形に形成された棚田などに多く見られる。しかし既知産地は県内全体で 10 箇所以下しかなく, どの個体群も小規模な上に相互に不連続である。用水路のコンクリート化, 農薬や化学肥料の濫用, 水田の管理放棄による消失, 温暖化に伴う過剰乾燥など, 様々な要因が本種の個体群存続を脅かしている。一方で, 本種は健全な水田環境の指標生物として適している。

(福田 宏)

## ヒメマルマメタニシ

*Gabbia kiusiuensis* (S. Hirase, 1927)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソソキ型クレード クビキガイ上科 エゾマメタニシ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 人為的移入個体群との関係が不明瞭で、稀少性評価を行うには情報が不足している。

**形態** 原記載は平瀬信 (1927: 1395, fig. 2682, as *Bulimus* (*Parafossarulus*?) *kiusiuensis* Hirase, Ms.)。殻長約 5 mm, 殻径約 3.0 mm, イナバマメタニシに似るが一回り小さく、螺塔がより高く(すなわち殻径に対して殻長が大きく)、個体群によっては極端に螺塔が高まって高円錐形をなす場合もある。螺層はよく膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。殻の彫刻, 色彩, 質感及び蓋や頭部-腹足の特徴は前種とほぼ同様。生体の写真を福田・川内野 (2012:124, text-fig.), 描画を福田 (2010e) が公表している。

写真：赤磐市岩田, 2014年7月16日, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「九州・朝鮮」。波部 (1961a: 22, pl. 10, fig. 11, as *Bithynia* (*Gabbia*) *kiusiuensis*) は「九州, 本州 (岡山県), 四国 (高松)」, 波部 (1973b: 318, fig. 17-2-13, as *B. kiusiuensis*) は「本州 (岡山), 九州 (福岡), 朝鮮に分布」とごく限られた産地しか挙げていなかった。しかし福田敏 (1990: 10, fig. 1, as *Bathynia* [sic] (*G.*) *kiusiuensis*) が山口県山口市徳地島地から産出を報告して以後, 中国・四国地方で急速に記録が増加し, 福田・川内野 (2012) は「埼玉・岐阜・兵庫・岡山・山口各県, 高知県を除く四国全県, 九州全県」に産するとした。その時に除外されていた高知県でも最近記録され (三本, 2018: 267), さらに京都府でも見出されて (近藤, 2014: 290), 今や近畿以西の広い範囲 (山陰地方を除く) に広がっている。九州では古くから産出が知られ, 広範囲に満遍なく多産するため本来の分布の中心とみられるが, 埼玉・岐阜両県と京都府の個体群は近年の移入によって生じた可能性が濃厚で, 西日本の他の地域においても人為的に運ばれて産地を増やしている疑いがある。また朝鮮半島にも確かに本種に形態的に酷似し識別困難なものが存在するが (関他, 2004: 141, fig. 267, as *G. misella* (Gredler, 1884); 順天, 2010年福田採集, OKCAB M22438), 日本産個体との関係は現時点で不明である。

**生息状況** イナバマメタニシと同様に低地の水田やその周囲の用水路などに見られ, 浅い止水中の軟泥底表層を匍匐する点も共通するが, 本種は主に平野部に見られ, 山間部の急峻な地形に形成された水田には少ないため, 両種がともに産する場所はこれまで全く知られていない。その一方で本種とマメタニシと随伴する例は複数の場所で確認されている。本種は上記の通り, かつてはわずかしか産地が知られていなかったが, 最近 20 年間で急激な増加傾向にある。従来記録のなかった中部・関東地方でも相次いで見出されるなど, 人為的移入による分布拡大の可能性が考えられるものの, 現時点で詳細は不明である。岡山県では波部 (1961a, 1973b) の後も依然として産地は少ない。岡山県レッドデータブック前版 (福田, 2010a: 304) で挙げた産地のうち, 「津山市, 美咲町」はイナバマメタニシの誤同定であった可能性が高く, 記録としての信憑性は低い。近年は倉敷市と岡山市の一部で確認され (OKCAB M1156-1158, M21388, M21399), 南部の低地数箇所に限定されているが, これらが在来個体群か, あるいは移入によるものなのか判然とせず, 今後分子系統解析などの検討が必要である。

(福田 宏)

## マメタニシ

*Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型クレード グピキレガイ上科 エゾマメタニシ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：未確定

**選定理由** 棲息環境が悪化し、明らかな減少傾向にある。

**形態** 原記載は Pilsbry (1901f: 405–406, as *Bithynia striatula* var. *japonica*) で、翌年 Pilsbry (1902c: 121, pl. 9, figs 9–12) に図示された。中国大陸産 *Paludina* (*B.*) *striatula* Benson in Cantor, 1842: 488 の「変種」(現在の亜種に相当)として記載されたが、その名は *P. striatula* Deshayes, 1825 in 1824–1837: vol. 2, 133, no. 12, pl. 15, figs 15–16 の新参一次同名であるため、*Bythinia* [sic] *Manchourica* Bourguignat, 1861: 535, pl. 24, figs 11–13 が名義タイプ亜種(和名はホンマメタニシ)の有効名となる。Abbott (1948: 275–276, text-fig. 8, pl. 1, fig. 17) は *Bithynia s. japonica* を *B. manchourica* の新参異名とみなし、杉原 (1954: 512–560; 1979: 57–111, figs 1–50 など一連の報告) はそれに追従して日本産個体を *Parafossarulus manchouricus* と呼ぶべく固執したが、日本の集団と大陸産集団の間の遺伝的差異は未検討で、たとえ形態的に明確な差異が見出せなくとも種や亜種として識別すべき可能性は今も残るため、当面は日本固有の亜種として大陸産から区別することとする。殻長約 12 mm, 殻径約 8 mm, 卵円錐形, 厚く不透明。螺層はよく膨らみ, 縫合は浅い。殻表は淡褐色で, 太い螺肋を巡らすとその強さや本数は個体(群)間で変異が大きく, ほぼ平滑な場合もある。殻口は種子形で唇縁はわずかに肥厚する。蓋は厚い石灰質で同心成長脈をもつ。頭部-腹足は灰色の地に白斑を多数散らす。頭触角は細長く, 基部外側に眼がある。頭部の右側後方に短い水管をもつ。Itagaki (1965: 169–180, pl. 17, figs 1–26) が内部形態も含めて軟体を詳細に記載している。琵琶湖・淀川水系などに産する個体の多くが比較的小型で顕著な螺肋を多数巡らすのに対し, タイプ産地の茨城県産個体や岡山県周辺のは大型で螺肋が弱い。名義タイプ亜種ホンマメタニシはどちらかと言えば後者に似る。国内でも産地間で遺伝的に分化している可能性が否定できず, 分子系統解析が必要である。*Clonorchis sinensis* (Cobbold, 1875) 肝吸虫の第一中間宿主となる(武藤, 1919: 1–28)。

写真： 赤磐市岩田, 2014年7月16日, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「Manabe, Hidachi」(茨城県土浦市真鍋)で, 原記載では同時に「Osaka」(大阪)が産地として挙げられた。日本での最北の産地は秋田県能代市浅内沼で, 宮城, 群馬, 千葉, 茨城, 埼玉, 新潟, 長野, 富山, 石川, 愛知, 三重, 岐阜, 滋賀, 京都, 大阪, 兵庫, 和歌山, 香川, 徳島, 岡山, 広島, 山口, 福岡, 佐賀の2府23県から記録がある(杉原, 1979)。大陸産ホンマメタニシは無効となった *Paludina* (*B.*) *striatula* が「Chusan」(浙江省舟山市), 有効名の *Bythinia Manchourica* が「le fleuve Amour et divers cours d'eau de la Sibirie méridionale」(ロシア東部のアムール川(黒龍江)及びシベリア南部の諸河川)からそれぞれ記載され, ロシア東部, 中国北東部, 朝鮮半島から知られる。

**生息状況** 平野部の水田や用水路, 池沼など止水または緩い流水の軟泥底に棲む。水深1–50 cm程度のごく浅い水中に特異的で, 一見すると高密度で多産するかに見える場所であっても, 棲息可能範囲は岸边から数 m 以内に限られるため棲息地の総面積は狭い。筆者は2000年以降, 杉原 (1979) が挙げた産地の多くへ出向いて調査したところ, 棲息が確認されたのは滋賀, 大阪, 兵庫, 和歌山, 岡山, 山口, 佐賀各府県と大分県臼杵市(新産地, 2006年7月, OKCAB M18343, M18350)のみであった。主要な棲息環境である平野部の水田や溜池などが都市化でことごとく失われ, また農薬や排水などによる水質・土壌の汚濁も打撃を与えたとみられる。1960年代以前に存在していた産地の80%以上が近年になって消失したことは明らかで, 全国的な個体群消滅率は日本の淡水産貝類全種の中でもカワネジガイに次ぐ。環境省第4次レッドリストで本亜種が絶滅危惧Ⅱ類(VU)とされているのは過小評価と認められ, 近々ランクアップされる(福田, 印刷中)。一方, 岡山県は古くから本亜種の代表的な多産地として知られ(Itagaki (1965) が解剖に用いた個体も畠田和一採集の岡山市産である), 肝吸虫の防除研究の一環として少なくとも3回, 寄生虫学者による徹底的な分布調査が実施されている(長野, 1927: 124–132, as *Bulimus Striatulus Japonicus*; 稲臣・木村道, 1955: 651–653, as *B. s. var. japonicus*; 長花他, 1978: 165–170)。それらのうち1950年代の稲臣らは戦前の長野の調査結果と比較して既に顕著な減少傾向を認め, 「原因は戦後目覚しい発展をした農業, 化学肥料更に戦後の人口膨張に伴う市街地の拡張は市街地排水及び工業排水の増加を来し, これによる用水の汚染が大いにあずかつて力あるものと考えらるべきであろう」と指摘している。この文章は21世紀に書かれたものかと思ふほど先見性があり, 現在もそのまま本亜種の減少要因に対する考察として有効であるが, 昨今はさらに地球温暖化に伴う過剰乾燥が新たな脅威として加わり, 本亜種を巡る環境は1950年代より一層過酷化している。岡山県ではもともとの個体群の規模が大きかったことと, 児島湾の淡水化と干拓(水田の拡張)が結果的に本亜種の棲息可能な環境を提供したこともあって現在も絶滅はしておらず, 場所によっては高密度で見られるが, それでも各集団は相互に分離されて徐々に孤立しつつある。本県よりもともと産地も少なく各個体群の規模も小さかった他の府県では既に大半が絶滅し, いまだわずかに残る個体群も順次消え去りかねないため, このまま状況が変わらなければ近い将来岡山県が本亜種最後の棲息地になってしまう日が来るかもしれない。

(福田 宏)

## カネコスズカゴ

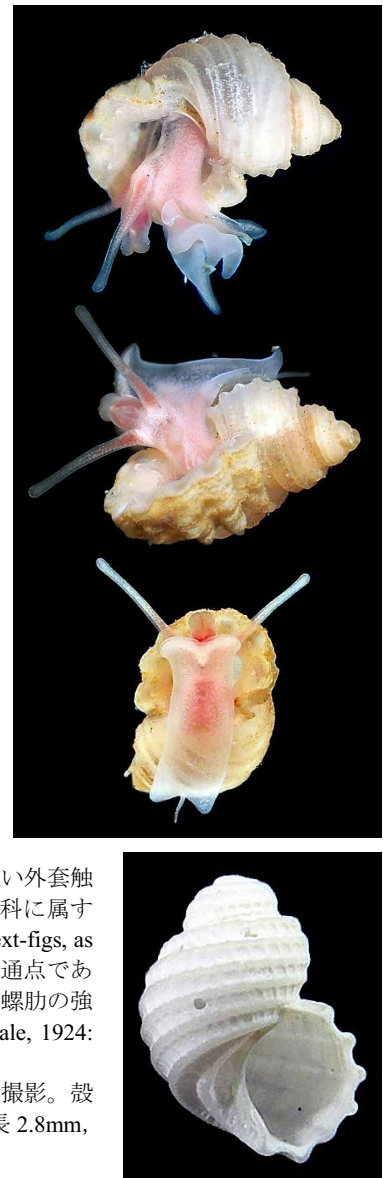
*Dolicrossea doliaris* (A. Adams, 1863) n. comb.

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型クレード クビキレガイ上科 フロリダツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1863f: 112, no. 5, as *Conradia doliaris*) で、波部 (1961b: 201, no. 40, pl. 4, fig. 9, as *C. doliaris*) がシタイプを図示した。*C. doliaris* var. *minor* Nevill, 1885: 169–170 及び *Fossarus (Couthouyia) eudmetus* Melville, 1906: 71, pl. 7, fig. 2 は新参異名の可能性がある (土田他, 1991: 16–17, no. 6, pl. 3, fig. 4, as *C. doliaris*)。本種は記載後 120 年以上再発見されなかったが、江川 (1989: 9–11, figs 1a–c, 2, as *C. doliaris*) がようやく再記載して存在が認知された (ただしそれ以前に高橋・岡本, 1969: 53, no. 460, pl. 11, fig. 1 が「*Kleinella neofelixoides* Nomura トウダカチリメンクチキレ」として図示した例はある)。その後鹿野・福田 (1990: 14–15, fig. 5, as *C. doliaris*) と土田他 (1991) がさらに殻の形態を詳述した。別名ナギサシタダミ。殻長約 3.2 mm, 殻径約 2.1 mm, 円錐形, 螺層はよく膨らみ, 縫合は強く縊れて溝状となる。薄質で白色無紋, 殻表は強いレール状の螺肋を体層で 7–11 本巡らし, 肋間には細かいが明瞭な縦肋を規則的に並べ, 両者が交叉して格子目をなす。殻口は卵円形で, 外唇は肥厚せず, 螺肋の末端によって鋸歯状となる。臍孔は狭いが明瞭に開き, その周囲は強い螺肋で縁取られて臍域は三日月形を呈する。本種はこれまで生貝の発見例が皆無で, 蓋や軟体部の形態に関する情報はなかったため, 殻の形態のみからの類推によって今日まで一貫して古腹足類の一員と見なされ, 古くは Skeneidae Clark, 1851 クボタシタダミ科, 近年は Conradiidae Golikov & Starobogatov, 1987 (= Crosseolidae Hickman, 2013) ツキヨシタダミ科に属すとされてきた (e.g. 長谷川, 2000: 83, pl. 41, fig. 4; 2017: 765, pl. 35, fig. 4; both as *C. doliaris*)。しかし 2018 年, 和田が遂に生貝の発見に成功したので, ここではその個体に基づいて蓋と軟体部の外部形態を初めて記載する。蓋は角質, 淡褐色半透明, 種子形で少旋型。頭部–腹足は背面全体が鮮明な薄紅色で, 多数の細かい白斑を散らす。頭触角は細長く, 先端は丸い。その基部外側にごく微小な眼がある。足は縦長の矩形で前方は左右に広がり, 前縁に沿って横向きの溝が開口し, そのすぐ後方へ白色不透明の粘液腺が V 字形に並ぶ。足の側面は直線的で左右がほぼ平行。後端は中央が大きく彎入し, 明瞭な後足触角を 1 本もつ。外套縁は殻の螺肋に応じて鋸歯状となり, 後端に一对の太短い外套触角を生じる。これらの特徴は新生腹足類の Elachisinidae Ponder, 1985 フロリダツボ科に属す *Dolicrossea* sp. ウズツボ (福田, 2001a: 34, fig. 3, as Elachisinidae gen. et sp.; 2012: 41, text-figs, as *D. bellula* に生体写真あり) に近似する (特に後足触角と外套触角の類似は重要な共通点である) ため, 本種は同科に属すると考えられる。殻も臍孔の状態がウズツボに似ており, 螺肋の強弱の差はあれど後種と同属と見ても奇異ではないため, 属の所属も *Dolicrossea* Iredale, 1924: 183 に変更する (新組み合わせ)。

写真： 生体, 兵庫県洲本市由良 由良湾内 水深 9 m 泥底, 2018 年 6 月 9 日, 和田撮影。殻長 3.1 mm。殻, 備中 [笠岡市] 白石島, 畠田和一コレクション #5633, 福田撮影。殻長 2.8 mm, 殻径 2.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Seto-Uchi (Mososeki, 7 fathoms) (瀬戸内海, 北九州市門司, 7 尋)」。異名の可能性がある *C. doliaris* var. *minor* は「Bombay」と「Tumb Isl.」(インドのムンバイとイランの Tunb 島), *Fossarus (Couthouyia) eudmetus* は「Gulf of Oman at 156 fathoms」(オマーン湾 156 尋) からそれぞれ記載され, もしこれらが同種であればインド西岸やアラビア半島まで分布することになるが, 長谷川 (2017) は南限を「中国南部」としている。日本では和歌山市名草ノ浜, 瀬戸内海, 福岡市今津湾などで記録され, 江川 (1989) は「瀬戸内海全域から北九州および紀伊水道沿岸の周辺海域に及ぶ」と総括したが, 既知産地はまだわずかしかない。

**生息状況** 従来は内湾の潮下帯から浚渫された砂泥中に時折死殻が含まれているのを目にする程度で, 棲息実態に関する知見は皆無であった。ここに挙げた生貝は淡路島南東部の由良湾内において, 潮下帯 (水深 9 m) の泥底からエアリフト (空気吸い上げ機) を用いて採集され, 同時にゴマツボモドキやイリエツボの生貝も見出された。それらの種に随伴して内湾潮下帯泥底のやや還元的な環境に棲息すると考えられる。瀬戸内海では近年濱村 (2004: 31, text-figs, as *Conradia doliaris*) も広島県三原市の浚渫砂から記録しているが, 岡山県では知られていなかった。ところが畠田和一コレクションを再検討すると, 「備中 [笠岡市] 白石島」のハツカネズミ (#5633; 同種の項を参照) に本種 1 個体 (写真) が混在していたことが判明した。この個体は殻表がかなり摩滅しており, 恐らく砂浜に打ち上げられていたものと推測される。これ以外に産出例は皆無のため既に本県では絶滅した可能性もあるが, さほど遠くない淡路島で生貝が確認されたことから, 潮下帯のどこかに個体群が残存していないとも限らず, 今回は絶滅と断定するのは避けるが, 岡山県の内湾奥潮下帯に本来産していた種の多くが絶滅した現状や, 本種本来の稀少性と棲息環境の脆弱さを考慮すれば, 本種だけが海底浚渫や水質悪化による打撃を免れ得たとも考えにくい。

(福田 宏・和田太一)

## ゴマツボモドキ

*Hyalia delicata* (Philippi, 1849) n. comb.

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型グレード クビキレガイ上科 ワカウツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 本種は従来 *Rissoa bella* A. Adams, 1853e: 267 (タイプ産地は「Philippine islands」, フィリピン諸島) に同定されてきた (e.g. 福田, 1996: 26, 51, pl. 9, figs 8-9, as *Iravadia (Pseudonoba) bella*; 2012: 37, text-figs, as *Hyalia cf. bella*; 長谷川・福田, 2017: 812, pl. 81, fig. 4, as *H. bella*)。これは波部 (1961b: 195, no. 7, pl. 2, fig. 3, as *Lucidinella bella*) が公表した A. Adams の標本 (「和歌山県由良」産) の絵に基づくが、上記の通り *R. bella* のタイプ産地はフィリピンなので、波部の図示個体はタイプ標本ではない。一方、Ponder (1984: 43, 46, 48, fig. 15A-D, as *I. (P.) bella*) は *R. delicata* Philippi, 1849b: 34, no. 120 が本種の最古参異名である可能性を疑問符付きで示唆している。そのタイプ標本が図示された例はないものの、記載文を読む限りは本種の形態と矛盾はない。最近 Poppe (2017: 324, pl. 1462, figs 1-2) が「*I. delicata*」の名のもとにフィリピンのマクタン島産個体を公表し、少なくともその個体は本種と同種とみられ、フィリピンにも本種が産することは事実される。そのためここでは本種の有効名を *R. delicata* と考えた。さらに Ponder (1984) は以下の5つを本種の新参異名としている：?*R. vitrea* Garrett, 1873: 215, pl. 2, fig. 19 ; *R. (Onoba) mercurialis* Watson, 1886 in 1885-1886: 586, 600-601, no. 26; 713, pl. 45, fig. 12 ; *O. philippinica* Boettger, 1893: 99-100, no. 3 ; *Rissoina oscitans* Preston, 1905: 5, pl. 1, fig. 19, 19a ; *Amphithalamus psomus* Melville, 1918: 147-148, pl. 5, fig. 19。ただしこれら全てが確実に本種と同種か否かはさらに検討を要する。また本種の属の所属は二転三転してきた。Laserson (1956: 416, figs 72-74, as *Dipsotoma mercurialis*) は上記の通り本種の異名候補の一つである *Rissoa (O.) mercurialis* をタイプ種として *Dipsotoma* Laserson, 1956 を創設したが、波部 (1961b) はやはり Laserson (1956: 427) が設けた *Lucidinella* に属すと考えた。Ponder (1984) は蓋と歯舌を検討した上で本種を *Iravadia* Blanford, 1867: 56-58 の亜属 *Pseudonoba* Boettger, 1902: 145 に移した。これは蓋が螺旋を描かず同心成長脈を示すこと (イリエツボの項を参照) が根拠であった。ところが福田 (2012) は、実際には本種の蓋は同心円状でなく、少旋型で螺旋を描くため *Iravadia* には属しないと指摘した。だとすると *R. bella* は本種とは属すら異なる別種か、さもなくば Ponder が図示した「*I. (P.) bella*」が誤同定であるかのいずれかである。ともかく本種に形態的に最も近似するのは *Hyalia* H. & A. Adams, 1852 の諸種であるため、福田 (2012) 以降本種の学名は *Hyalia bella* とされてきた。しかし今回は *R. delicata* を本種の有効名と見なすため、この名の属をも *Hyalia* に変更されなければならない (新組み合わせ)。なお和名ゴマツボモドキのもととなった標本は窪田 (1962: 25, no. 313, as *Chevallieria* sp.) が公表し、福井市自然史博物館に現存する。別名シリオレミジンナ。殻長約 5.5 mm, 殻径約 2.0 mm, 多少幅広い塔形、無色半透明の薄い硝子質で、螺層はやや膨らみは、縫合は明瞭に縊れる。胎殻は小さくドーム形。殻表に微細な螺肋を巡らす。殻口は縦長の種子形で、外唇は反転する。蓋は半透明黄褐色の角質で半月形、少旋型。頭部-腹足は全体が淡紅色に染まり、頭触角は細長い (福田, 2012 と長谷川・福田, 2017 に岡山県産の生体写真あり)。

写真：玉野市渋川, 2004年4月21日, OKCAB M8572, 福田撮影。

**分布** タイプ産地は「M[are]. Rubrum; ad Aden」(紅海, イエメンのアデン附近)。今回無効名とした *Rissoa bella* は上記の通りフィリピンから記載されたが、のちに A. Adams (1863i: 348, no. 4, as *Onoba bella*) は「Yara, 9 fathoms, mud」(和歌山県日高郡由良町, 9 尋, 泥底) からも報告し、波部 (1961b) の図示個体はその時のものである。新参異名の可能性がある ?*R. vitrea* は「Viti Isles」(フィジー), *R. (O.) mercurialis* は「Station 186. Lat. 10°30'S., long. 142°18'E. Off Wednesday Island, Cape York, North-east Australia. 8 fathoms. Coral mud」(北東オーストラリア, ヨーク岬, 水曜島沖 8 尋, 珊瑚砂), *O. philippinica* は「Insel Calumangan bei Surigao und Nord-Mindanao」(フィリピンのカルマンガン, スリガオ及びミンダナオ島北部), *Rissoina oscitans* は「Ceylon」(スリランカ), *Amphithalamus psomus* は「Mekran Coast, near Gwadûr」(パキスタン, グワダル近くのマクラン海岸) からそれぞれ記載された。分布域は豪州から紅海までインド-西太平洋の広域に渡るものの、世界的に記録の少ない種で、国内では宮城県石巻市万石浦, 神奈川県真鶴岬, 三重県英虞湾と的矢湾, 広島県三原市, 山口県周防灘と伊予灘, 大分県蒲江深島沖, 若狭湾, 鳥取県岩美郡岩美町, 熊本県天草富岡, 奄美大島, 沖縄島豊見城市与根, 石垣島などで知られる (伊藤勝, 1990: 87, no. 55, pl. 3, fig. 11, as *Scrobis* sp.; 濱村, 2004: 44, text-fig., as *Iravadia (Pseudonoba) bella*; 佐々木猛, 2006: 105, fig. 6B, as *I. sp. cf. bella*; 濱田保, 2008: 13, no. 280, pl. 13, fig. G819; 竹林・和田年, 2010: 14, no. 89; 23, fig. 4; both as *I. (P.) bella*; 福田・久保, 2017: 493-494, as *Hyalia cf. bella*)。国外では上記異名の各産地のほか、韓国 (閔他, 2004: 137, fig. 250-2 [1 は別種], as *I. (P.) bella*), タイから報告されている (Swennen *et al.*, 2001: 114, fig. 318, as *Pseudonoba* sp. 2)。

**生息状況** 福田 (1996) や佐々木猛 (2006) が強調している通り長らく生貝が見出されず、棲息環境も不明であったが、福田 (2010a: 295, text-fig., as *Hyalia cf. bella*; 写真) は玉野市渋川で生貝を初めて確認した。同地は波穏やかな入江に面した砂浜辺縁の岩礁潮間帯で、タイドプール内の砂泥に深く埋もれた転石下面の還元的環境に本種の生貝 2 個体が見られ、ヒナユキスズメヤウチノミツボ等が随伴していた。沖縄県でも同様の場所で見出されている (福田・久保, 2017)。また最近、淡路島近海の潮下帯泥底でも多数の生貝が確認された (2018年, 和田太一私信)。死殻は外洋の砂浜にも時折打ち上がるため内湾に特異的ではないと考えられるが、少なくとも内湾潮間帯の個体群は護岸や埋め立てなどの海岸改変, 陸域からの汚水流入などにより、存続基盤を奪われて既に多くが消滅した可能性が高い。特に岡山県では渋川以外に棲息地は知られておらず、依然として著しく稀産である。1960年代より前にはもっと産地が多かった可能性があり、畠田和一コレクションにも「朝日村切石 [現・岡山市東区正義]」(「波部 [忠重] 氏同定 1957.3.」, 1 個体, チビスナモチツボ 1 個体と混在, #4098) の標本が現存するが、それらの産地では環境悪化のため個体群が失われたと考えられる。

(福田 宏)



## ウチノミツボ

*Pellamora* aff. *densilabrum* (Melville, 1912)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型グレード クビキレガイ上科 ワカウラツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 当初本種の学名は福田 (1996: 26, pl. 9, figs 10–11) によって *Iravadia* (*Pseudonoba*) *densilabrum* (Melville, 1912: 245, pl. 12, fig. 8, 8a, as *Rissoa* (*Amphithalamus*) *densilabrum*) (タイプ産地は「Karachi」, パキスタンのカラチ) とされたが、その名は長谷川 (2000: 163, pl. 81, fig. 7, as *I.* (*Ps.*) sp.) が指摘した通りヒメゴマツボに相当し、本種に用いるのは誤同定である。本種には適切な学名が見当たらず、未記載種の可能性が高い。また属の所属は Ponder (1984) の分類に基づいて *Iravadia* の *Pseudonoba* 亜属に属すとされてきたが (ゴマツボモドキの項を参照), Golding (2014) が分子系統解析の結果に基づいて Ponder (1984) が *Fairbankia* Stoliczka, 1868 in 1867–1868: 274 の異名としていた *Pellamora* Iredale, 1943: 206 を復活させたのを受け、長谷川・福田 (2017: 811–812, pl. 81, fig. 1) が本種を *Pellamora* に移した。殻長約 3.0 mm, 殻径約 1.3 mm, 細長い円筒形, 若い個体では無色半透明の硝子質であるが老成すると厚く不透明になる。螺層はやや膨らみ, 縫合は縊れる。胎殻は大きく, 殻長は平坦。殻表は強い螺肋とそれよりやや弱い縦肋が交わって格子目をなすが, 螺肋の間は平滑 (本種に酷似する近縁種 *Pellamora reflecta* Laseron, 1956 ニセゴマツボは螺肋間に微細な螺脈を密に巡らす点で識別可能)。殻口は縦長の種子形で, 外唇は顕著に肥厚して外側は縦脹肋を形成する。蓋は半透明黄褐色の角質で半月形, 螺旋とならず, 周縁近くに位置する核を中心に同心円状に成長脈を刻む。頭部-腹足は透明感のある淡紅色で, 白斑を散在し, 頭触角は細長い (福田, 2001a: 34, 36, fig. 4, as *I. densilabrum*; 2010a: 295; 2010b: 40, text-fig.; both as *I. aff. densilabrum*; 2012: 39, text-fig., as *I.* (*Ps.*) aff. *densilabrum* に生体写真あり)。

写真： 玉野市渋川, 2004年4月21日, OKCAB M8573, 福田撮影。



**分布** 現時点で瀬戸内海中央部 (岡山・香川両県) と西部 (山口・大分両県), 有明海 (佐賀県), 九州西岸 (長崎県) など西日本の数箇所のみで知られる (濱田保, 2008: 13, no. 279, pl. 13, fig. G818, as *Iravadia* (*Pseudonoba*) sp.; 福田, 2012)。国外からの明確な報告がないため日本固有種の可能性がある。ただし関他 (2004: 137, fig. 250-1–2) が「*I. (P.) bella*」(ゴマツボモドキ) として図示した韓国産個体のうち fig. 250-2 は確かにゴマツボモドキであるが, fig. 250-1 は本種の可能性があり, その通りなら本種は朝鮮半島にも産することになる。

**生息状況** 内湾の湾口部や島嶼間で海水の流れが速く, 潮通しのよい海岸の平坦な岩礁や礫地において, 潮間帯中～下部の砂泥に埋もれた転石下面に棲息する。やや還元的な環境を好み, ヒナユキスズメ, ゴマツボモドキ, ウミコハクガイ, *Paraborniola matsumotoi* Habe, 1958 マツモトウロコガイ等が随伴する。本種はマツモトウロコガイに名を残す松本幸男によって 1950 年代前後に瀬戸内市牛窓町で発見され, その時の標本は国立科学博物館及び倉敷市自然史博物館に現存する。また畠田和一コレクションにもやはり「備前牛窓」産の標本 (「*Sinusicola* sp. (学名なし) イリエツボの一種 波部 [忠重] 氏同定 1952.2.」, 1 個体, #4145) が含まれる。その後は長く報告すらされないまま長い時間が過ぎたが, 2002 年に香川県小豆郡土庄町千振島で多数の生貝が見出され, 2004 年には岡山県玉野市渋川でゴマツボモドキとともにやはり生貝が確認された (OKCAB M8573; 写真)。本県では岡山市南区小串相引でも 2006 年に新鮮な死殻が採集されている (M16134)。千振島では砂浜辺縁の礫地において, 干潮時の汀線附近で転石間に高密度で棲息していた。これら岡山・香川両県以外ではどの場所でも同時に 1～数個体程度しか見出されておらず, 備讃海域は現時点で本種最大の産地と呼びうる。備讃地方は他の海域では今なお普通に産する貝類の種の多くが絶滅またはそれに近い状況を示す場所でありながら, それと逆に, 他処で稀な本種が最も多産するのは驚くべきことである。しかし現存する個体群も, 1960 年代以降の環境悪化を乗り越えてかろうじて生き延びたと考えられ, それ以前は今よりもっと産地が多かったことは確実である。それを裏付けるごとく, 最初の発見地である瀬戸内市ではいまだに再発見されない。千振島と同様, 離島には未知の個体群が残存している可能性があるが, 本土沿岸では本来存在していた産地の多くが消滅したと考えられる。

(福田 宏)

## イリエツボ

*Pseudonoba yendoi* (Yokoyama, 1927)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型クレード クビキガイ上科 ワカウツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Yokoyama (1927a: 415, no. 24, pl. 46, fig. 27, as *Rissoina yendoi*)。同じ日付の別論文で記載された *Turbonilla (Careliopsis) filiola* Yokoyama, 1927b: 453–454, no. 15, pl. 51, fig. 16 も同じ種であり、両名は国際動物命名規約の条 24 に定める「同時に公表された学名」に該当するが、Kuroda & Habe (1950: 16) が第一校訂者として *R. yendoi* に優位性を与えたため *T. (C.) filiola* は無効名となる。両名の原記載の図はともに Is. Taki & Oyama (1954: 7, pl. 43, fig. 27; pl. 48, fig. 16) と Oyama (1973: 19, pl. 4, figs 5a–b, 6a–b) に転載された。別名エンドウミズツボ、コドモミズツボ。*T. (C.) filiola* は *Sinusicola* Kuroda & Habe, 1950: 16 のタイプ種であるが、この属は Ponder (1984: 41, 43, 46, fig. 15E; 48) によって *Pseudonoba* の異名とされた。Ponder は *Pseudonoba* を *Iravadia* の亜属とみなしたが、現在はウチノミツボの項に記した通り、独立属とされている(長谷川・福田, 2017: 811, pl. 80, fig. 7)。殻長約 4.5 mm、殻径約 1.4 mm、細長い塔形、無色半透明の薄い硝子質で、螺層の膨らみは弱い、縫合ははっきりと縊れ、特に殻頂附近では階段状に近い。胎殻は大きく、平巻きで殻頂は窪む。殻表はほぼ等間隔に螺肋を巡らす、肋の太さは均一でない。殻口は縦長の種子形で、外唇は肥厚せず縦脈肋の形成もない。蓋は半透明黄褐色の角質で半月形、螺旋とならず、周縁近くにある核を中心に同心円状に成長脈を刻む。頭部-腹足は無色半透明で白斑を散在し、頭触角は細長い。波部 (1958d: 47, no. 11; 55–56, pl. 2, fig. 9, as *Sinusicola endoi* [sic]) が歯舌を図示している。

写真： 岡山市南区米崎沖水深 5.2 m 泥底，2002 年 9 月 18 日，OKCAB M24492。殻長 4.6 mm，殻径 1.4 mm。



**分布** タイプ産地は「Kuruma-chô」(東京都港区芝車町=現・高輪二丁目，後期更新世東京層化石)。*Turbonilla (Careliopsis) filiola* は「Koyasu」(神奈川県横浜市神奈川区子安，後期更新世下末吉層化石) から記載された。化石は大阪市や愛知県田原市からも見出されている(石井, 1993: 4–5, 21, pl. 2, fig. 5; 川瀬他, 2015: 55, pl. 5, fig. G53)。現生個体は太平洋側は東京湾以南、日本海側は能登半島の七尾湾以南、九州までと朝鮮半島に分布する(波部, 1958d; 関他, 2004: 137, fig. 249; 福田, 2012: 39, text-figs; 長谷川・福田, 2017) が、具体的な産出記録は少なく、三重県四日市市(松本幸, 1979: 14, no. 224)、和歌山県海南市船尾(池辺・吉田, 2006: 37, no. 773)、広島県三原市、海砂(濱村, 2004: 44, text-fig.)、山口県柳井市(河本・田邊, 1956: 14, no. 129; 福田, 1996: 26, pl. 9, fig. 12) 及び山陽小野田市沖、水深 11 m (土田他, 1991: 3, 13, pl. 1, fig. 2a–b)、福岡市湊町の博多湾(高橋・岡本, 1969: 34, no. 136, pl. 11, fig. 35)、大分県中津市大新田(福田, 2012)、熊本県長洲町沖の有明海、水深 13 m (波部・田中, 1959: 15, no. 9, as *Sinusicola endoi* [sic]) 及び天草郡苓北町富岡(Ponder, 1984)、長崎県有明海と西海市大瀬戸町(堀川, 1964: 11, no. 156, as *S. endoi* [sic]) など数えるほどしかない。

**生息状況** 大規模な内湾奥の潮下帯(水深 5–10 m 程度)の還元的な泥底に特異的で、死殻が浜辺に打ち上げられることは滅多になく、ドレッジや採泥器を用いない限り採集が困難な種である。また単に見出し難いだけでなく、本種が好む棲息環境は東京湾・大阪湾・博多湾など大都市のすぐ前の海に集中しているため、埋め立てや過度の水質汚濁などによって既にほとんどの個体群が壊滅した可能性があり、環境省第 4 次レッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)とされている。対照的に韓国南部では干潟の潮間帯下部に近年も多産が確認されており(福田未発表)、日本で産地が局限されているのは日本列島の島嶼化によって内湾環境が分断されたことに起因するのかもしれない。瀬戸内海では 1990 年代に大阪湾で生貝が見出され(福田, 2012)、2018 年 6 月にも淡路島の洲本市由良附近で潮下帯からゴマツボモドキなどととも複数個の生貝が確認された(和田太一私信)が、依然として産出例は著しく少ない。岡山県では矢野(1979: 2)が新岡山港に積み上げられた浚渫砂から死殻を採集したと報じ、また 2002 年 9 月に岡山市南区米崎沖(水深 5.2 m, 泥底)と玉野市波張崎~岡山市東区犬島の間(水深 14.3 m, 砂底)でドレッジによって死殻 2 個・破片 1 個が得られており(OKCAB M24143, M24492; 写真)、森他(2003: 88–89)の記録はそれらのことである。さらに畠田和一コレクション中にも「[[岡山市東区] 宝傳] 産 1 個体 (#4058) が含まれている。しかし岡山県では一度として生貝が採集された例がなく、ドレッジを用いてもわずかな古い死殻しか得られていないため、現在も個体群が維持されているかどうかは甚だ心もとない。もともと還元環境を好む種であるため水質の富栄養化などには比較的強いとも考えられるが、埋め立てや浚渫など棲息地そのものの物理的な破壊にはひとたまりもないはずである。

(福田 宏)

## ミヤイリガイ

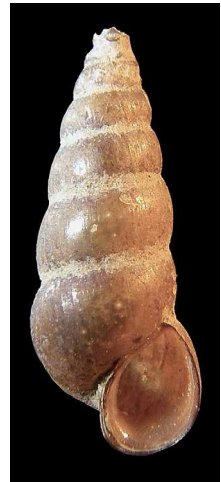
*Oncomelania nosophora* (Robson in Leiper & Atkinson, 1915)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型クレード クビキレガイ上科 イツマデガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したが、積極的な撲滅が実施された結果もはや棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Robson in Leiper & Atkinson (1915: 203, figs 7–8, 11, as *Katayama nosophora*) で、同時に本種をタイプ種 (単型) として *Katayama* Robson, 1915 が創設されたが、これは現在 *Oncomelania* Gredler, 1881: 120 の異名とされる。後者のタイプ種 (単型) は中国産の *O. hupensis* Gredler, 1881: 120–121, pl. 6, fig. 5, as *O. Hupensis* ミゾヒダニナで、従来ミヤイリガイはミゾヒダニナの亜種とされることが多かったが (e.g. Davis, 1967: 4), 近年は両者を別種と見なす傾向が強い。和名は本種が日本住血吸虫症の媒介者であることを突き止めた宮入慶之助を記念する。別名カタヤマガイ。殻長約 7 mm, 殻径約 3 mm, 細長い塔形, 厚く, 螺層は膨らみ, 縫合は明瞭。殻表は微細な成長脈以外ほぼ平滑, 濃い栗色で無紋, 鈍い光沢を帯びる。殻口は種子形で, 外唇は著しく肥厚して幅広く強固な縦脹肋を形成する。蓋は角質, 半透明, 黄褐色, 少旋型。頭部-腹足背面は黒く, 頭触角は細長い。腹足前方側面に雑搬溝と呼ばれる縦向きの溝があり, これらは多数の繊毛をそなえ, 右の溝は外套腔から糞や卵を外へ能動的に排出し, 左の溝は逆に外から外套腔内へ新鮮な水を搬入する。また左右の雑搬溝は, 体側を足と平行に前後に走る上足褶と呼ばれる構造に連なる。足の前後を交互に動かして尺取虫に似た匍匐様式を示す (Davis, 1979)。

写真： 後月郡 [現・井原市] 高屋, 畠田和一コレクション #2965, 福田撮影。殻長 7.8 mm, 殻径 3.0 mm。



**分布** タイプ産地は「In irrigation ditches and rice fields at Katayama」(広島県福山市神辺町片山, 灌漑用水路と水田)。本州と九州の固有種で、本来は関東 (利根川流域) から九州北部にかけて不連続的に分布していた。その産地の多くは後述する日本住血吸虫症の流行地と一致しており、代表的な産地は茨城・千葉・埼玉各県及び東京都の利根川水系, 千葉県小櫃川下流域, 山梨県甲府盆地, 静岡県富士川下流域, 広島県高屋川流域, 福岡・佐賀両県の筑後川下流域である。

**生息状況** 低地や盆地の水田用水路や湿地など緩い流水または止水環境において、水際の湿泥上や植物の根元などに棲息する。6 月ごろ保湿された軟泥中に産卵し、孵化した幼貝は秋までに成熟して土の窪みなどで越冬する (宮入慶之助記念館, 2020)。Schistosoma japonicum Katsurada, 1904 日本住血吸虫の中間宿主となる (宮入・鈴木稔, 1913)。ヒトがこの吸虫に感染すると肝硬変など深刻な症状を引き起こし、高確率で死に至る。本種の個体群が存在する (した) 地域では多くの罹患者や死者が生じていたため、その予防のために 1910~70 年代にかけて本種は積極的に駆逐され、生石灰など殺貝剤の散布, 火焔放射機による焼却, 水路のコンクリート化など多角的な方法で撲滅が試みられた結果 (吉田, 1977: 156–157), 本種は国内の大半で絶滅し、日本住血吸虫症は 1980 代までには発症例が途絶えた (その経緯は小林照, 1998 に詳しい)。現在本種は山梨・静岡両県にわずかに生存しているのみで、今世紀初頭にはまだ維持されていた千葉県木更津市の個体群も、2012 年 3 月 20 日に生貝が確認された (二瓶, 2012: 253) のを最後に再発見されない (亀田勇一・多留聖典私信)。岡山県ではかつて井原市大江町から高屋町にかけての高屋川 (芦田川支流) 流域に棲息し、その周辺ではナナメキガイという方言名で呼ばれていた (畠田, 1935: 233, no. 38)。本種のタイプ産地である福山市片山はこの高屋川の下流に位置し、そこは日本住血吸虫症の一大流行地として知られる。井原市でも発症例は古くから知られ、大江町の一部である西代地区に因んで「西代病」と称されていた (岡部, 1961: 61–62)。県境を挟んで隣接する片山では本種及び日本住血吸虫の研究が医学的見地から盛んになされ、この周辺で採集された本種の標本は現在も国内の様々な研究機関に保存されており、岡山大学医学部にも大量に現存する。ところが岡山県産個体の標本はどこにも見当たらず、唯一現存するのは畠田和一コレクションの 1 ロット (「後月郡高屋」, 4 個体, #2965; 写真) のみである。畠田は当時、日本貝類學會 (1934: 表紙 3 面) の機関誌 *グザナス* 巻末に掲載されていた「會員欄」へ、「備後片山産カタヤマガヒ餘品あり。各地貝友と交換を希望す」と広告を出しているのは極めて貴重な記録である。しかしこれは岡山県産ではない。現存する本県産標本の極端な少なさは、井原市での本種の棲息範囲が隣の福山市に比べて狭く局限されていたことを単純に反映したものとみられる。井原市ではまだ病の発症原因が定かでなかった 1909 年、日本住血吸虫の記載者桂田富士郎によって犬と猫を用いた感染実験が行われたが、症状の流行自体は「小規模」であったという (小林照, 1998: 77–78)。のちに岡部 (1961) は井原市での本種の情報に関し、「大正 9 年 (1920) の貝の記録以後は貝もいつとなくなり患者も消失した。その原因は、附近の染料工場の建設により汚水が流れこむ事によるものと考えられていた。然るに昭和 30 年 (1955) 11 月に再び同地方の小溝に宮入貝が発見されたが、貝は感染しておらず、虫卵保有者も発見されなかった」[原文ママ] と記しており、恐らくこの 1955 年の記録が岡山県最後の本種の出現例で、その後は一切確認されず絶滅が確実視される。本種は日本在来の貝類のうち、意図的に駆除対象とされ、実際に絶滅寸前の状態まで後退を余儀なくされた唯一の種である。本種の撲滅は住民の健康維持と安寧のためには必要かつ不可避であったが、同時に、生物多様性の一端に著しい影響を及ぼした事実も忘れてはならない。また、本種の棲息地の殲滅を目的に水路のコンクリート三面張りが全国で急速に進められた結果、本種のみならず水田周辺を主要な棲息地としていたマルタニシなどの種も巻き添えて危機的状況に追い込まれるなど弊害も生じた。かつて日本住血吸虫症が猖獗を極めた地域の一つ筑後川流域の福岡県久留米市では、1980 年代初頭までに本種も絶滅したが、その最後の発見地となった同市宮ノ陣町宮瀬には現在、「我々人間社会を守るため筑後川流域で人為的に絶滅に至らされた宮入貝 (日本住血吸虫の中間宿主) をここに供養する」と刻まれた「宮入貝供養碑」が建てられており、この「供養」の念には生物多様性保全の思想的根幹をなす重要な一部分が存在する。

(福田 宏)

## ミスゴマツボ

*Stenothyra japonica* Kuroda, 1962

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型クレード クビキレガイ上科 ミスゴマツボ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は Kuroda (1962a: 60–61, 66, 67, 68, pl. 4, figs 4–7)。ホロタイプの写真が阪神貝類談話会 (1986: 46, 82, pl. 5, fig. 4) 及び菊池他 (1996: 14, no. 29, pl. 5, fig. 29) に示されている。波部 (1973b: 317–318) は本種を, A. Adams (1861d: 307–308, nos 1–2) が中国北部から記載した *Stenothyra glabra* 及び *S. gibba* や, 台湾産 *S. formosana* Pilsbry & Y. Hirase, 1904b: 8 タイワンミスゴマツボ, 中国と北朝鮮国境の豆満江産 *S. recondita* Lindholm, 1929: 305, 沖縄県産 *Cochliopopsis basiangulata* Mori, 1938b: 110–111, fig. 1A–F オキナワミスゴマツボ, さらに Kuroda (1962a: 61–68, pl. 4, figs 1–3, 11–14) が本種と同時に記載した北海道産 *S. j. hokkaidonis* エゾミスゴマツボ, サハリン産 *S. j. karafionis* カラフトミスゴマツボ, 大分県の温泉に固有な *S. thermaecola* オンセンゴマツボと同種と考え, それら全てを異名として最古参の *S. glabra* を有効名とした。しかしそれらは殻形や大きさ, 螺状点刻列の有無や密度などに明瞭な差異があり, 現在は *S. recondita*, *S. j. hokkaidonis* 及び *S. j. karafionis* を同種(エゾミスゴマツボ)とする以外はそれぞれ別種とするのが主流である (e.g. 黒住, 1996: 22–28, pl. 5, figs a–b; 長谷川・福田, 2017: 871, pl. 89, figs 6–8)。本種は殻長約5mm, 殻径約3mm, 蛹形, 螺層は背腹に扁圧され, よく膨らみ, 厚質で半透明。殻表は鈍い光沢を帯び, 淡い橙色またはオリーブ色で無紋, 多数の螺状点刻列を巡らす。点刻は横長の長方形で浅く, ほぼ等間隔に並ぶ。殻口は円く, 体層の大きさに比べて極端に小さく, 殻口長は体層の1/3程度。蓋は亜円形で革質半透明の少旋型で, 内面には前後に1個ずつ薄片状の突起をもつ。頭触角は細長く鞭状。足の前端は左右に広がり, 中央は縊れ, 後端には短い後足触角がある (Hosaka & Fukuda, 1996: 65–77, 87–92, figs 1–27 が頭部・腹足を詳述)。Kosuge (1969: 220–223, 236–237, figs 1–29) は消化器・生殖器・中枢神経系など内部形態を詳細に報告したが, Davis *et al.* (1986: 319, 335–338) は Kosuge の記述内容 (特に生殖器) に疑義を呈しており, 再検討が必要である。

写真: 岡山市中区東中島 旭川左岸, 2012年11月27日, OKCAB M23589, 福田撮影。



**分布** タイプ産地は「Sasebo, Nagasaki Pref., Kyushu」(長崎県佐世保市)。最北の記録は太平洋側が岩手県 (Kuroda, 1962a), 日本海側が秋田県八郎潟 (西村正, 1967: 44–45) で, 本州・四国・九州の海に面した都府県の大半から記録がある。韓国にも産する (関他, 2004: 147, fig. 292-1–2, as *S. glabra*; Suncheon (順天), 2010年4月福田採集, OKCAB M22466, 22529, 22533)。

**生息状況** 海岸近くの平野部の水路や水田等において軟泥底表層に棲み, 止水または緩い流水中の底泥や植物・藻類, 転石などの上を匍匐する。塩分の低い汽水から淡水にまたがって見られ, 特に河口から分岐した水路や溝渠などが主要な棲息環境である。1960年代以前は都市部へ人工的に造成された運河等にも多産したが, それらが埋め立てられたり排水で汚染されるなどして激減し, 1990年代には全国でも数ヶ所しか健在産地が知られていなかった。それ以降都道府県レッドリストの「定番種」(増田・内山, 2004: 117, text-figs) となり, 現時点で実に21都府県が絶滅から情報不足に至るまで様々なカテゴリでレッドリストに登載している (野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所, 2018)。確かに本種は普通種では決してなく, 稀少貝類が豊饒に産する自然度の高い場所に見られることが多いが, 一方で底泥が真っ黒に還元化して悪臭を放つ排水溝に多数の生貝が平然と這っている場合もある。九州や東北地方には比較的産地が多く, 長崎県では諫早湾の1997年の閉め切り淡水化に乗じて *Pomacea canaliculata* (Lamarck, 1822) スクミリングガイなどとともに調整池に定着した (福田, 2000: 126–127, 136, fig. 5-16)。宮城県では2011年の東日本大震災直後, 津波で浸水した場所に進出して分布範囲を一時的に広げた (福田他, 2013: 126)。このように貧栄養・富栄養どちらの環境でも棲息可能で, 他の貝類は外来種しか見られない攪乱された場所にも多産する場合がある。その割には局所的かつ不連続的にしか出現しない奇怪で比類ない種であり, 本種の求める環境条件はいまだ厳密に特定できない (福田, 2012: 45, text-fig.)。岡山県では稲臣 (1953: 47, 49, no. 10, as *S. japonicus* [sic; nomen nudum]) が「児島湾沿岸」の「津田村・興除村・藤田村の一部」(現在の岡山市東区君津・南区中畦・同区藤田) に「非常に限定した分布状態」で産すると述べ, その証拠標本は岡山大学医学部に現存する。Kuroda (1962a) の挙げた「岡山県津田」も上記君津のことである。畠田和一コレクションにも「上道郡津田村」(「1950」, 37個体, #3505; 「1950.7.22」, 2個体, #3472 (part; カワグチツボ100個体に混在)), 及び「備前朝日村 [現・岡山市東区正義] 切石」(1個体, #3817) 産の標本 (それら全て「黒田 [徳米] 氏同定品」とラベルにある) が含まれている。さらに矢野 (1979: 2) は児島湖の閉切堤防北端附近 (岡山市南区築港緑町二丁目) から生貝1個体を記録したが, その後は県内から記録が途絶えた。本種はなぜかマメタニシとの相性が悪く, 後種が多産する場所に本種が見られることは減多にない。稲臣が挙げた君津, 中畦, 藤田には現在マメタニシが見られ, 本種は再発見されないままである。しかし2012年, 岡山市中区東中島の旭川左岸 (新京橋から約100m南, 汽水域上部) で久方ぶりに本種の個体群が見出された (OKCAB M23581, M23589; 写真)。これは現時点で県内唯一の産地であるが, 環境変化の激しい市街地の中にあり今後の存続が危ぶまれる。本種の個体群存続にはどんな条件が必要なのか不明瞭なことも, 保全対策を難しくしている。

(福田 宏)

## イソマイマイ

*Sigaretornus* aff. *planus* (A. Adams, 1850)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型グレード クビキガイ上科 イソマイマイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 本種の学名はつい最近まで *Sigaretornus planus* (A. Adams, 1850b: 43–44, as *Cyclostrema plana*) (A. Adams, 1864e: 255, no. 2, pl. 256, figs 3–4, as *Adeorbis plana* が図示し, Habe, 1985b: 8, pl. 1, fig. 7 がタイプ標本の写真を公表)とされてきたが、福田・久保及び久保・福田 (2012: 42–43, text-figs) は九州以北(和名イソマイマイはこれに相当)と南西諸島以南(*S. planus* はこちらにあたる)とで種が異なる可能性を論じ、前者は学名種小名未詳と考え、後者には和名をガタチンナンと新称した。イソマイマイは殻長約 5.3 mm, 殻径約 10 mm, この科としては巨大(ガタチンナンは殻径約 4 mm)で、螺塔低平、扁平されたドーム形、薄く華奢で不透明。螺層はやや膨らみ縫合は溢れる。周縁は鈍く角張る(ガタチンナンでは弱い)。殻表は繊細で密な螺脈と成長脈が交わって絹目状を呈し、純白で紋様を欠く。殻口は歪んだ円形で極端に前傾し、唇縁は薄く鋭い。臍孔は広い。蓋は半透明茶褐色の角質で円形、核を中心にもつ多旋型。軟体は未詳であるがガタチンナンは頭部・腹足のほぼ全体が赤褐色で、頭触角は太くて長く黒みがかかった紫褐色。足の前端は左右に広がって襟状の突起となり、後端中央はわずかに彎入する。外套腔の右端に短い一対の外套触角をもつ (Ponder, 1994b: 244–256, pls 1–5, figs 1–4, as *S. plana* が詳細に記載し, 久保・福田, 2012 が写真を公表)。

写真： [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #2035, 福田撮影。殻長 4.0 mm, 殻径 7.9 mm。



**分布** *Cyclostrema plana* のタイプ産地は「in insulis Philippinis」(フィリピン諸島)。黒田他 (1971: 89 (和文), 59 (英文), pl. 107, figs 1–2) は長崎県五島列島を「模式産地に指定する」としたが、Ponder (1994b) が指摘した通り原記載に記載されているのはフィリピンだけであり、五島は A. Adams (1863e: 75, no. 1, as *Adeorbis plana*) がのちに追加した産地(原文表記は「Gotto, 48 fathoms」)にすぎない上に、上記の通り五島産とフィリピン産は別種の可能性が高いという点でも黒田他の処置は適切でない。イソマイマイに同定可能な個体は太平洋側は房総半島(清水利, 2001: 33, no. 410)以南、日本海側は男鹿半島(西村正・渡部景, 1943: 65, no. 52, as *Tornus planus*)以南、九州まで(肥後, 1973: 47, no. 652, as *Sigaretrochus* [sic] *planus* は屋久島も挙げている)の狭い範囲に限定され、朝鮮半島や中国大陸沿岸での明確な記録は見当たらない。一方ガタチンナンは国内では沖縄県羽地内海などで知られ、Ponder (1994b) は香港産個体のほか、オーストラリア北東部のクイーンズランド州ロックハンプトン (Rockhampton) から記載された *Adeorbis sigaretinus* Pilsbry, 1897: 363, pl. 9, figs 4–6 及びタンザニアのタンガ (Tanga) とパンガニ (Pangani) 産の *Vitrinella declivis* Thiele, 1925: 73, pl. 3, fig. 23 をも *Sigaretornus plana* の異名としており、その通りならガタチンナンはイソマイマイとは対照的にインド-西太平洋の広い範囲に分布することになる。

**生息状況** 内湾湾口部の透明度の高い海水と清浄な砂浜からなる場所に時折死殻が打ち上げられるが、生貝の明確な記録は存在せず棲息の実態は明らかでない。一方でガタチンナンは砂干潟の中～下部に産する *Ochetostoma erythrogrammon* Rüppell & Leuckart, 1828 スジユムシ(香港)や *Listriolobus sorbillans* (Lampert, 1883) タテジマユムシ(沖縄島)の巢孔に棲むことが突き止められており (Ponder, 1994b; 久保・福田, 2012), さらに大分県中津市大新田の干潟では本種ともガタチンナンとも異なる未詳種が *Bigelowina phalangium* (Fabricius, 1798) シマトラフヒメシヤコの巢孔から発見されている(和田太一私信)。ここから類推すれば本種もユムシ類または軟甲類などが作る巢孔の中でホストと何らかの共生関係を結んでいるものと想像されるが、生貝の発見例に乏しいため断定はできない。本種はガタチンナンや中津市の種と異なり潮間帯で見出されたことがなく、もっぱら潮下帯に深に棲息するため調査や採集も困難である。しかしそれ以上に近年は本州～九州の分布域全体で死殻を見る機会すら大きく減ってきているため、内湾環境の悪化によって強い減少傾向にあると考えられる。広島県芸南地方でも三原市沖の海底の砂から採集された死殻が挙げられているのみである(濱村, 2004: 45, text-figs)。岡山県では文献記録はないが、畠田和一コレクション中に「[倉敷市下津井] 六口島」産(2個体, #2035; 写真)が含まれている。両個体は恐らく砂浜に打ち上げられていた死殻と思われるが、殻表はほとんど摩滅しておらず殻口内の光沢も強いまま残されているため、採集当時は近隣の海底のどこかに個体群が存在したことは確実である。しかし近年は2002年に岡山市南区米崎沖(水深5.2m, 泥底)でのドレッジによって、殻頂部分だけが残された殻径2mmほどの微小な破片が1個認められたのみである(OKCAB M24489)。完全な個体はもう50年以上県内から見出されておらず、もはや棲息しているか否かも大いに疑わしい。本種は他の動物に依存して生きる特異な生態を示すと推測され、もしその通りならまずホストが健全なことが必須となるが、岡山県ではユムシ類の種はことごとく絶滅の危機にあるなど、安泰には程遠い状況である。それら宿主動物とともに本種も絶滅一歩手前の段階まで追い詰められている可能性が濃厚である。

(福田 宏)

## ウミコハクガイ

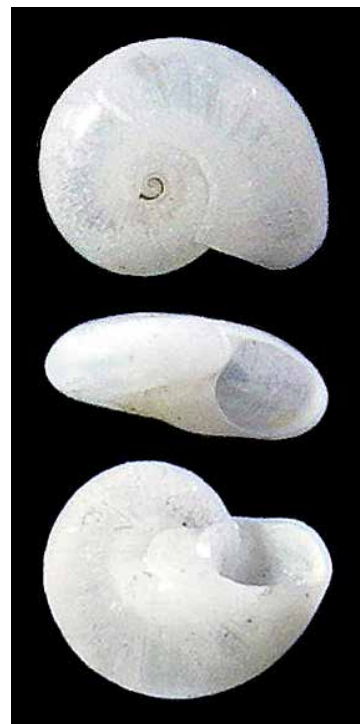
*Teinostoma lucidum* A. Adams, 1863

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツポ型グレード クビキレガイ上科 イソマイマイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1863h: 267, no. 3) で、のちに A. Adams (1864e: 260, no. 5, pl. 256, figs 49–50) に図示された。また波部 (1961b: 195, no. 6, pl. 1, figs 23–25, as オトギノキサゴ) はタイプ標本のスケッチを公表している。従来の文献の多くが本種の種小名を「*lucida*」と綴っているが、*Teinostoma* H. & A. Adams, 1853 in 1853–1858: 122 の性は中性であり (MolluscaBase, 2019) 種小名の語尾は *-um* とするのが正しい。また記載者名義を「Adams & Angas」としている文献が散見されるのは (e.g. 吉良, 1945: 28, no. 319; 窪田, 1962: 14, no. 176; 稲葉, 1982: 81, no. 81, pl. 1, fig. 3; 竹之内, 1986: 41, unnumbered fig.)、本種と同年に記載された *Neritula (Callomphala) lucida* A. Adams & Angas, 1864: 35–36 との混同が原因で、両者は異なる種である (後者はオーストラリア南東の「Coodgee Bay, N.S. Wales, in shell-sand」産)。別名オトギノキサゴ。殻長約 0.7 mm、殻径約 1.5 mm、螺塔低平な円盤状、光沢の強い硝子質で薄く、半透明で殻の内部が透過して見える。体層が螺塔の殻表全体を覆い、二次的に形成された偽縫合が明瞭。殻表は弱い成長脈以外平滑で無色。殻口は亜円形で前傾し、外唇縁は薄い、内唇は滑層が著しく発達して臍部に広がり、白色不透明な厚い層をなして臍孔を完全に隠す。蓋は半透明淡黄色の角質で円形、核を中心にもつ多旋型。軟体はアラウズマキのそれに似て全体が薄紅色に染まり、頭触角は細くて長い。足の前端は左右に広がり、後端は単純または中央でわずかに彎入する。外套触角は長いものと短いものが並ぶ。匍匐時は鰓の前方を殻の外へ大きく突出させる (福田, 2012: 43, text-figs, as *Teinostoma lucida* [sic] に生体写真あり)。

写真： 備前朝日村 [現・岡山市東区正儀]、畠田和一コレクション #2796、福田撮影。殻長 0.7 mm、殻径 1.8 mm。



**分布** タイプ産地は「Simoda」(静岡県下田)。産出報告が極端に少ない種で、しかも記録の多くはなぜか和歌山県に偏っている (吉良, 1945: 「紀伊 (2 fms)」; 波部, 1961b: 「和歌山県沿岸等の内湾」; 窪田, 1962: 「紀伊串本」; 竹之内, 2001: 13: 「紀伊潮岬」; 池辺・吉田, 2006: 38, no. 834: 「和歌山県串本町」)。その他の記録を目に付く限り列挙しても岩手県大槌湾 (堀越他, 1979: 55. 戸羽, 2009: 19, 20, fig. 17 も大槌湾から本種と称する個体を図示しているが、それは *Leucorhynchia caledonica* Crosse, 1867 オトギノスガイに似た別種である)、千葉県館山湾 (清水利, 2001: 33, no. 413)、館山市沖ノ島・神奈川県逗子市・能登半島 (具体的には石川県羽咋郡志賀町富来領家町の増穂ヶ浦; OKCAB M18977)・山口県長門市只の浜・長崎県松浦市御厨町西木場免 (福田, 2004: 7, fig. 6; 2012)、神奈川県三浦市城ヶ島 (多々良・福田, 2008: 31)・葉山町 (35°15' N, 139°35' E Hayama, Kanagawa) ; Takano & Kano, 2014: 260, 264)、駿河湾 (波部他, 1986: 7, as *Callomphala lucida*)、山口県沿岸全域及び萩市見島 (福田, 1992: 51, no. 64, pl. 41, fig. 64)、香川県三豊市詫間町大浜 (瀬尾・Tanangonan, 2014: 94, no. 72)、大分県国東半島 (稲葉, 1982) と豊後水道 (濱田保, 2008: 10, no. 186, pl. 10, fig. G489)、韓国 (関他, 2004: 109–111, fig. 149–1–4)、済州島の Hwasoon (Noseworthy *et al.*, 2007: 71) などくらいしかない。南西諸島以南や韓国以外の国外からは明確な記録を見出すに至っていない。例外的に Sowerby III (1892: 13) は本種を南アフリカの「Port Elizabeth」(ポートエリザベス) から報告したが、これはのちに別種 *Ethalia africana* E.A. Smith, 1904: 38, pl. 3, figs 10–11 として記載された。

**生息状況** 比較的最近まで棲息環境に関する情報がなく、例えば長谷川 (2000: 179, pl. 89, fig. 21) は「本州太平洋岸の砂浜に打ち揚げられる」と記すほかなかった。その後ようやく複数の産地で生貝が見出され、それらの場所はいずれも内湾湾口部や島嶼間であって透明度の高い海水に洗われる清浄な砂浜の辺縁部に生じた平坦な礫地の潮間帯下部で、砂泥に埋もれた転石の下の多少還元的环境に限られることが判明した (福田, 2012)。同所的には *Granata lyrata* (Pilsbry, 1890) アシヤガイ、ヒナユキズメ、ウチノミツボ、アラウズマキ、シラギク、*Vitrinella* sp. ナギツボ、*Caecum glabellum* (A. Adams, 1868) ミジンツツガイなど還元環境に典型的な種群が見られるが、本種はそれらの中でも稀少性が際立って高く、ウチノミツボと双璧をなす程度に出現頻度が低い。もともと局所的にしか産出せず棲息範囲も狭い上に、海岸の護岸や埋め立てなどで棲息地が物理的に損なわれ続けているため分布域全体で危機的状況にあると考えられている。岡山県では文献記録はないが畠田和一コレクション中に「備前朝日村 [現・岡山市東区正儀] 切石」(「*Teinostoma* (の一種) 黒田 [徳米] 氏同定品 [昭和] 14 [= 1939].1.21.」, 1 個体, #2771) 及び「備前朝日村」(「*Skenea consobrina* (A. Adams) 波部 [忠重] 氏同定 1952.2.」, 2 個体, #2796; 写真) の 2 ロットが現存している。このうち #2771 の個体は特に殻の光沢と透明感も強く、採集される直前まで生きていたと思われる良い標本である。しかし現在の正儀附近の砂浜に出向いても畠田和一存命当時とは環境が一変し、富栄養に傾いてしまっているため本種は一切見当たらない。近年の県内で本種が採集されたのは 2002 年の岡山市南区米崎沖 (水深 5.2 m, 泥底) でのドレッジのみで、その際は死殻 2 個体 (OKCAB M24490) が得られたが、いずれも殻が完全に不透明になってほぼ化石に近い古いものである。他県では本種より産地の多いアラウズマキすらも確実な健在産地が認められない昨今の本県では、本種の生貝を今後見出すのは著しく困難な目標であると言えよう。

(福田 宏)

## アツウミコハク

*Teinostoma radiatum* A. Adams, 1863

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソツボ型グレード クビレガイ上科 イソマイマイ科 ●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1863h: 267, no. 2) で、のちに A. Adams (1864e: 259, no. 4, pl. 256, figs 47–48) に図示された。また Higo *et al.* (2001: 24, fig. G486) はタイプ標本の写真を公表している。本種もウミコハクガイと同様、*Teinostoma* に所属させる以上は種小名の語尾を *-a* でなく *-um* とするのが正しい。殻長約 1 mm、殻径約 2.3 mm、殻はウミコハクガイに似るが多少大きく、より厚くて光沢が鈍く、透明感も低い。殻表は汚白色で微細な放射状の彫刻をもち、成長脈はウミコハクガイより粗い。蓋及び軟体は未詳。

写真： [瀬戸内市] 牛窓町前島、畠田和一コレクション #4341、福田撮影。殻長 1.0 mm、殻径 2.4 mm。

**分布** タイプ産地は原記載では「O-Sima」とのみ表記されているが、のちの A. Adams (1864e) で「Kino-O-Sima」とされたことから和歌山県東牟婁郡串本町紀伊大島であることがわかる。しかし記載文もその後の図もあまりに情報が乏しいために記載後 140 年近く再発見されずにいた。Higo *et al.* (2001) によるタイプ標本の写真公表によってようやく正確な同定が可能となり、長谷川 (2000: 179, pl. 89, fig. 22; 2017: 820, pl. 94, fig. 1) も本種を図示するとともに分布域を「紀伊半島から九州」とした。しかしそれ以外の具体的な文献記録はまだわずかしこ現れていない。そのうち濱田保 (2008: 15, no. 333, pl. 15, fig. G998-1) による大分県「豊後水道」産、及び三本・中尾 (2010: 6, fig. 3-1a-c) の「高知県の鮮新-更新統唐ノ浜層群穴内層」産個体はいずれも本種にしては螺層が過ぎ、タイプ標本や長谷川の図示個体と比べて印象が異なるため別種であろう。他には名和 (2011: 79) が「沖縄県沖縄島中城湾熱田沖、浚渫泥」産の標本が存在することを公表している。



**生息状況** 長谷川 (2000, 2017) は本種が「潮下帯の砂底」に産すると述べた。現時点でそれ以上の棲息状況の詳細は不明であるが、岡山県では畠田和一コレクション中の「[瀬戸内市] 牛窓町前島」産シラギク 65 個体の中に、本種のタイプ標本や長谷川の図示個体によく一致する 1 個体が混ざっている (#4341 (part))。それらは殻の摩滅具合から判断して砂浜へ打ち上げられた死殻と推測されるのみならず、シラギクには殻表に真っ黒で厚い沈着物を部分的に残した個体も含まれることから、生きていたのは潮通しの良い場所ではなく（そのような環境のシラギクは沈着物の色が薄い傾向がある）、内湾奥の軟泥底に深く埋もれた石の下に生じるような還元的環境であったかに思われる。さらに想像を逞しくするなら、本種の汚白色で成長脈の粗い殻がもたらす泥臭い雰囲気は外洋や湾口部など貧栄養の場所にはそぐわず、内湾奥部の比較的浅い（水深 5~10 m 程度？）泥底や砂泥底において、例えばイリエツボやカネコスズカゴなどが棲むような限定的な環境を好むのではなかろうか。いずれにせよ現時点で最も重要なのは、本県では上記畠田標本以外に 1 個体たりとも本種が見出されていないという事実である。古くから存在が広く認知され、他県では現在も多産する多くの種すらも絶滅または危機的状況に陥っている岡山県では、本種は他の種に先駆けて絶滅した可能性がある。近年は環境悪化の速度と規模が大きすぎて、多くの種が人類に存在を認識されるより前に絶滅してゆきつつあり、本種はその好例と考えられる。

(福田 宏)

## アラウズマキ

*Circulus duplicatus* (Lischke, 1872)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 リソソポ型クレード クビキガイ科 イソコハクガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** Janssen (1993: 407, pl. 2, fig. 12) が写真を公表した *Cyclostrema cingulatum* Dunker, 1860: 225, no. 9 のレクトタイプは激しく摩滅しているものの紛れもなく本種であり、この学名が最古参名であるが、Tryon (1888: 91, pl. 32, figs 48–49) によって *C. cingulata* (Philippi, 1853 in 1852–1853: 24–25, no. 33, as *Delphinula? cingulata*) の新参二次同名となることが指摘され、代替名 *C. Dunkeri* が提唱された (1961年より前の置換なので、*C. cingulatum* Dunker は国際動物命名規約の条 59.3 により永久に無効)。現在 *C. dunkeri* は本種と同属の別種 *Circulus cinguliferus* (A. Adams, 1850) カズウズマキの新参異名とされるか (Higo *et al.*, 1999: 107, no. G1013), または独立した種とされているが (MolluscaBase, 2019), それらの扱いは適切でない。一方、*Cyclostrema duplicatum* Lischke, 1872: 101–102 (のちに Lischke, 1874: 61–62, pl. 3, figs 9–10 に図示。Cosel, 1998: 27, 45, 49 によればタイプ標本は再発見されていない) も明らかにアラウズマキで、この名が *C. dunkeri* より先に記載されているので本種の有効名となる。ウズマキガイは別名で、黒田 (1933b: 176, no. 38) はアラウズマキ・ウズマキガイ両名の命名者である岩川 (1909: 95, as *C. dunkeri*, *C. cingulifera*) の標本を再検討した結果「アラウズマキは新鮮標本に、ウズマキガヒは漂れた死殻標本に與へられたもので、種類は別種ではなかつた。故にウズマキガヒの方を採用する」と明記している。にもかかわらず戦後の一時期からなぜかウズマキガイはカズウズマキの別名と見なされて現在に至る。吉良 (1945: 28, no. 323, as “*Cyclostrema*” *duplicatum*) がウズマキウミコハクなる和名を重ねて提唱したのはこの混乱をリセットするためだったかもしれないが、その名は定着しなかつた。殻長約 1 mm, 殻径約 3.5 mm, 螺塔低平な円盤状, 厚く堅固で不透明。周縁に強いレール状の螺肋を 2 本巡らし、個体によってはそれらが癒合して著しく太く角張った 1 本の肋となる。縫合下と殻底にも強い螺肋をもつ。地色は淡いクリーム色であるが、生貝では硫化化合物を沈着させて褐色～黒色を呈し、死殻では白色となる。殻口は円く全縁で唇縁は肥厚が顕著。臍孔は広く深い。蓋は半透明黄褐色の角質で円形、核を中心にもつ少旋型。頭部-腹足は全体が薄紅色で恐らくヘモグロビンをもつ。頭触角は細長く鞭状。外套腔の右側辺縁に短い外套触角を 2 本もつ。匍匐時は鰓の前端が殻の外に覗く (Fukuda *et al.*, 2000: 131, 182–183, no. 77, fig. 6h と福田, 2012: 41, text-figs に生体写真あり)。波部 (1958d: 47–48, no. 12; 56, as *Pygmaeorota duplicata*) が歯舌を図示している。なお本種は *Pygmaeorota* Kuroda & Habe in 波部, 1958d (Kuroda & Habe, 1952: 80 が *Pygmaeorota* とし提唱したがその時は裸名 (*nomen nudum*) で不適格であり、波部, 1958d で *Pygmaeorota* が適格名となった) のタイプ種であるが、Ponder (1994b: 257, 4 行目, 改行の誤植のため分りにくい) はこれを *Circulus* Jeffreys, 1865: 315 の異名とした。

写真：瀬戸内市牛窓町前島沖 水深 20.7 m 砂泥底 ドレッジ St. 7, 2014 年 1 月 27 日, OKCAB M28933, 福田撮影。殻長 2.1 mm, 殻径 3.5 mm。

**分布** 有効名である *Cyclostrema duplicatum* のタイプ産地は「Bucht von Jedo, und zwar von Jokohama bis hinaus zur Insel Eno-Sima」(江戸湾, 厳密に言えば横浜から江ノ島外周までの間), 異名 *C. cingulatum* Dunker (= *C. dunkeri*) は「im Hafen von Decima in Japan」(長崎市出島の港内) から記載された。太平洋側は房総半島 (清水利, 2001: 33, no. 407, as *Pygmaeorota duplicata*) 以南, 日本海側は男鹿半島 (西村正・渡部景, 1943: 64, no. 34, as “*Cyclostrema*” *duplicatum* ウズマキガヒ) 以南, 九州までと、朝鮮半島 (済州島にも; 関他, 2004: 147, fig. 290-1–2, as *Pygmaeorota* (*P.*) *duplicata*; Noseworthy *et al.*, 2007: 74, as *P. duplicata*) に分布する。南西諸島以南や韓国以外の国内からの明確な報告はなく、日本～朝鮮半島固有種の可能性がある。

**生息状況** 内湾湾口部や島嶼間などにおいて、潮通しが良く透明度の高い海水に洗われる海岸礫地の潮間帯上部～潮下帯に産し、砂中に埋もれた転石下の還元環境を好む種群の典型例の一つである。ヒナユキスズメ, *Stosicia annulata* (Dunker, 1860) ゴマツボ, シラギクなどと同所的に見られるがそれらよりさらに少なく、稀少性は *Rissoina costulata* Dunker, 1860 スジウネリチョウジガイなどとほぼ同等である。今なお各地で波に漂白された死殻は頻りに目にするものの生貝の記録は著しく少ない。護岸や埋め立てなどによる海岸岩礁の単純化及び水質の富栄養化によって戦後急激に減少したと考えられる。瀬戸内海では広島県芸南地方 (濱村, 2004: 46, text-figs, as *Pygmaeorota* [sic] *duplicata*) の複数の産地で棲息が確認されている一方、香川県 (瀬尾・Tanangonan, 2014: 94, no. 71, pl. 1, fig. 15, as *Circulus* [sic] *duplicatus* [sic]) では死殻しか得られていない。岡山県では大垣内 (1968a: 45; b: 71) が倉敷市塩生の浚渫砂中及び同市大島の鷺羽山大浜海岸から記録しており、畠田和一コレクション中にも「[瀬戸内市] 牛窓町前島」産の 75 個体からなる標本 (#5639) が含まれている。近年も死殻は瀬戸内市牛窓町前島沖 (水深 20.7 m 砂泥底, ドレッジ, 2014 年, OKCAB M28933; 写真), 岡山市南区小串相引 (2006 年, OKCAB M16135), 同市東区正儀の飯盛岩附近 (2018 年, M28934), 玉野市沼の出崎海水浴場 (2010–11 年, M20101, M22115) から少数ながら見出されているものの、生貝が確認されたことはない。ゴマツボなどは最近も一部の場所に棲息が認められているため本種の個体群も残存している可能性は残るが、本県ではもはや棲息に適した場所を探し出すこと自体が容易でなく、極端に稀少化して絶滅寸前の状態にあるのは確実である。

(福田 宏)





## キヌツヤイソコハク

*Vitrinella orbella* (A. Adams, 1861)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型クレード クピレガイ科 イソコハクガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 県内では死殻が見出されるのみで棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1861c: 245, no. 2, as *Adeorbis orbella*) で、のちに A. Adams (1864e: 256–257, no. 11, pl. 256, figs 16–17, as *A. orbella*) や Sowerby II (1874a: sp. 9, pl. 1, fig. 9, as *A. orbella*) に図示された。しかしアツウミコハクと同様、記載文や図が簡素すぎて特徴を捉えづらかったため存在自体が十分に認識されず、長谷川 (2000: 175, pl. 87, fig. 4) が鮮明な写真を公表して初めて広く知られるに至った。殻長約 1.4 mm, 殻径約 3 mm, 螺塔は低平で扁圧されたドーム状、やや厚く不透明または濁った半透明。殻表は微細だが明瞭な成長脈及び螺脈が交わって絹目状をなし、白色無紋で鈍い光沢をもつ。螺層上に不規則な間隔で角張った細い螺肋が複数現れ、周縁附近で角をなす。殻口は垂円形で前傾し、唇縁は薄い内側が多少肥厚する。殻底はほぼ平坦で、臍孔は広くて浅く、その周囲は縞帯状に弱く角張る。蓋と軟体はこれまで印刷物上に詳述されたことがないが、インターネット上の uni2 (2019) のブログに生貝の画像が公開されており、それによれば蓋は角質半透明で黄色く、輪廓は殻口の形に合致している。殻を透過して見えている軟体は殻口に近い部分で薄桃色を帯びているため、恐らくアラウズマキやウミコハクガイなどと同様に頭部-腹足は鮮やかな紅色と推測される。

写真： 玉野市波張崎～岡山市東区犬島間 水深 14.3 m 砂泥底 ドレッジ St. 2, 2002 年 9 月 18 日, OKCAB M24144, 福田撮影。殻長 1.5 mm, 殻径 3.1 mm。

**分布** タイプ産地は「Mino-Sima; 63 fathoms」(山口県萩市見島, 63 尋)。長谷川 (2000; 2017: 819, pl. 91, fig. 6) は分布域を「瀬戸内海から日本海西部」とした。筆者は岡山県レッドデータブック前版で岡山県産個体を図示し(福田, 2010a: 306, text-fig.; 詳細は後述)、また瀬尾・Tananganon (2014: 94, no. 69) が香川県綾歌郡宇多津町浜及び三豊市詫間町生里仁呂浜から死殻の産出を報告している。上記 uni2 のブログにある生貝は兵庫県淡路島産である。山口県柳井湾及び下関市長府港町沖(ともに水深約 10 m の砂泥底, 1988–89 年, OKCAB M3766, M23471, 福田未発表) からも採集されているため、瀬戸内海では東は淡路島から岡山・香川両県を経て西は関門海峡の近くまで、ほぼ全域で満遍なく産出する可能性がある。さらに石井 (1993: 4, 20, pl. 2, fig. 2a–c) が「*Starkeyna sobrinum* (A. Adams, 1861) イトコシタダミ」として報告した大阪市「難波」及び「堺筋本町西部」の沖積層の化石は、図示個体に角張った螺肋が見えることから本種と考えられる。国外で本種の産出が明確に言及された例はまだないが、関他 (2004: 147, fig. 289-1–3) が韓国から「*Tornus carinatus* (A. Adams, 1863)」(=*Anticlimax carinata* ヒナイツマイマイ) として図示した個体のうち、fig. 289-2 及び 3 の少なくとも一部は本種かもしれない (fig. 289-1 は多分イトコシタダミ)。

**生息状況** アツウミコハクともども認知されてから日が浅いため棲息の実態に関する情報は乏しいが、その中であって uni2 (2019) がブログ上で生貝画像の傍らに記した「水深 3～8 m の砂泥 [底] で見つかった」との一文は貴重である。その前後には同時に採集されたと思しきイリエツボや「ナガシマツボ近似種」(外唇が肥厚しているため *Ceratia nagashima* Fukuda, 2000 ナガシマツボではない。恐らくゴマツボモドキかそれに近縁な種) の生貝の写真が並べられている。岡山・山口両県でもキヌツヤイソコハクはイリエツボやゴマツボモドキの死殻とともに得られており、これらの種は同一の貝類群集を形成する可能性が高い。岡山県での文献記録は上記の福田 (2010a) 及びそれに先立つ森他 (2003) のみであり、それらは 2002 年に玉野市から岡山市の沖合にかけて実施されたドレッジでの採集個体をもとにしている。具体的な記録は米崎沖 (水深 5.2 m, 泥底, 7 個体, M24491), 波張崎～犬島間 (14.3 m, 砂泥底, 6 個体と破片 3 個, M24144; 写真), 大入崎～犬島間 (10 m, 砂底, 破片 2 個, M24278), 波張崎南東沖 (21.9 m, 砂底, 1 個体, M23451) である。またそれよりはるか以前の畠田和一コレクション中にも「備前朝日村切石 [現・岡山市東区正儀] 産」(*Teinostoma* (の一種) 黒田 [徳米] 氏同定品 [昭和] 14 [=1939].1.21.), 2 個体, #2768) の標本(砂浜打ち上げと推測される) が含まれており、戦前において既に本種が採集されていたことがわかる。しかしこれらすべての標本が死殻であり、生貝の確認例はいまだにない。畠田標本のうち少なくとも 1 個体は光沢を残し、外唇も完全な新しい殻であるが、今世紀に入って採集された標本はここに図示した 1 個体を除いて全てが不透明で艶を失い、化石化しつつある古い死殻である。本種はイツマイマイのごとく他の動物の巣孔に共生するといった特異な生態を示すがゆえに採集しにくい可能性もあるが、もしそうだとすると新しい死殻が採集されないのは既に激減または絶滅してしまったからと考えても奇異ではない。

(福田 宏)



## イトコシダタミ

*Vitrinella sobrina* (A. Adams, 1861)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型クレード クピキレガイ上科 イソコハクガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

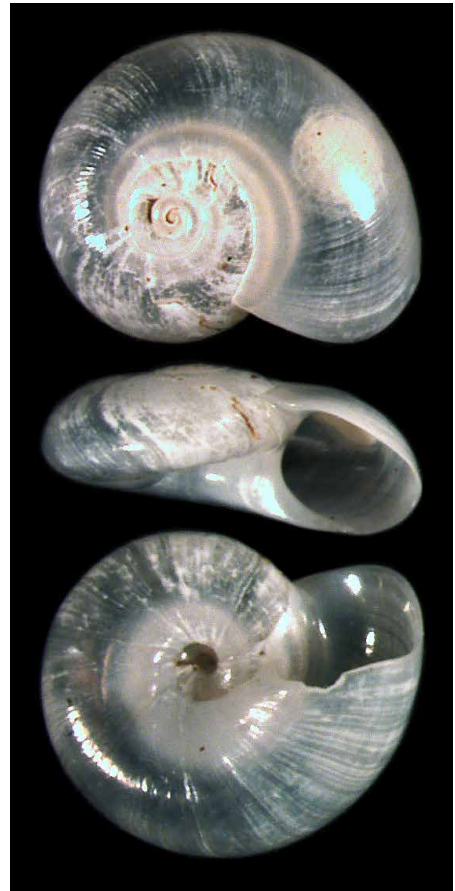
**形態** 原記載は A. Adams (1861d: 306, no. 3, as *Ethalia sobrina*) で、のちに Sowerby II (1878: sp. 19, pl. 4, fig. 19a–b, as *Rotella sobrina*) に図示された。また波部 (1961b: 195, no. 4, pl. 2, figs 1–2, as *Lissotesta sobrina*) はタイプ標本のスケッチを公表している。Is. Taki & Oyama (1954: 5, pl. 6, fig. 1a–c; pl. 24, fig. 7, as *Starkeyna sobrina*) 及び Oyama (1973: 16, pl. 3, figs 4a–c, 5a–c, as *L. sobrina*) によれば *Skenea nipponica* Yokoyama, 1920: 75, no. 74, pl. 5, fig. 1a–c は新参異名。殻長約 0.9 mm, 殻径約 2 mm, 螺塔はほぼ平坦な円盤状で、今回対象としたイソマイマイ科・イソコハクガイ科の種の中で最も平たい。やや厚く、不透明または曇った半透明。殻表は弱い成長脈以外は平滑、白色無紋で光沢がある。殻口は垂円形で強く前傾し、唇縁は薄く鋭い。殻底はほぼ平坦で、臍孔は広いが奥は急激に狭まる。蓋と軟体は未詳。

写真： 備前〔倉敷市下津井〕六口島、畠田和一コレクション #5636, 福田撮影。殻長 0.8 mm, 殻径 2.0 mm。

**分布** タイプ産地は「Tabu-Sima; 25 fathoms」(山形県酒田市飛島, 25 尋)。記載後 A. Adams (1863h: 266, no. 2) が「Akasi, 17 fathoms; Tsu-Sima, 25 fathoms」(兵庫県明石市, 17 尋; 長崎県対馬, 25 尋) の 2 産地を追加した。さらに Pilsbry (1895: 103–104, as *Teinostoma sobrina*) は Adams の報告の引用として「Kino-o Shima, Takano-Shima, 25 fms.」(和歌山県東牟婁郡串本町紀伊大島, 千葉県館山市鷹之島 25 尋) の産地を挙げているが、その出典は明らかでない。異名とされる *Skenea nipponica* は「Yokosuka Zone (Otsu)」(神奈川県横須賀市大津町, 更新世大津層化石) から記載され、のちの Yokoyama (1922: 81, no. 105, pl. 4, fig. 7) も同じ学名を用いて「Shisui, Tega」(千葉県印旛郡酒々井町と柏市手賀, 後期更新世印旛層) からの化石を報告している。本種は比較的早くから存在が知られ、奥谷・波部 (1975a: 52, unnumbered figs; 167, as *Lissotesta sobrinum* [sic], 「東京湾以南」) や竹之内 (1986: 40, 41, unnumbered figs, as *L. sobrina*, 「本州各地」) といった市販の図鑑にも掲載されていた。しかしその割には具体的な産出記録が少なく、列挙すると岩手県陸前高田市広田町天王前 (Nomura & Hatai, 1935: 34, no. 175, as *Skenea nipponica*; 堀越他, 1979: 55, as *Starkeyna sobrina*, 「三陸南部北半」), 千葉県館山湾 (清水利, 2001: 34, no. 417, as *L. sobrinum* [sic]), 三浦市初声町三戸 (村岡・内藤, 1991: 18, no. 0124, as *L. sobrina* イトコシダタミ [sic]), 駿河湾 (波部他, 1986: 7, as *L. sobrina*), 愛知県幡豆郡幡豆町の三河湾沿岸域 (早瀬他, 2011: 14, pl. 2, fig. 10), 紀伊 (?) (吉良, 1945: 27, no. 314, as *Teinostoma sobrinum*), 和歌山県串本町潮岬 (池辺・吉田, 2006: 38, no. 823, as *L. sobrina*), 山口県沿岸全域 (福田, 1992: 51, note at no. 64, as *L. sobrina*), 愛媛県松山市 (石川裕, 2012: 297, no. 119), 福岡県玄界灘 (津屋崎冲) (高橋・岡本, 1969: 35, no. 154, as *Starkeyna sobrinum* [sic]), 大分県蒲江深島沖 (濱田保, 2008: 10, no. 190, pl. 10, fig. G500) などが知られている程度である。以上を総合すると太平洋側は三陸海岸以南, 日本海側は北長門海岸以南, 九州までが現時点の分布範囲である。南西諸島からの記録はない。韓国では関他 (2004: 111, fig. 151-1–3, as *L. sobrina*) が図示しており、少なくとも朝鮮半島までは分布していると考えられる。済州島でも「Hwasoon, Supjikoji」での記録がある (Noseworthy *et al.*, 2007: 71, *L. sobrina*)。

**生息状況** 波部 (1961b) は本種を「日本の内湾に普通」と述べ、奥谷・波部 (1975) は「水深 5–10 m くらいの砂底」、竹之内 (1986) は「内湾潮間帯下部の砂泥底」に棲息するとした。それらの記述が間違っているわけではないが、福田 (1992; 1996: 15–16) で強調した通り「死殻は普通であるが、生貝はほとんど採集されず、生息状況は知られていない」状態のまま今日に至っている。砂浜の打ち上げや海底からの浚渫砂の中に殻を見る機会はウミコハクガイとさほど変わらないが、本種の生貝が見出されたという確実な情報は聞いたことがない。岡山県では文献記録もなく、ただ畠田和一コレクション中に「備前〔倉敷市下津井〕六口島産 (1 個体, #5636; 写真) が含まれており、これが唯一の産出の証拠である。この個体は摩滅もほとんどなく光沢もよく残されているため、死亡後間もない時に採集されたと考えられるが、その後は県内で一切発見されていない。キヌツヤイソコハクの項で述べたのと同様、本種もイソマイマイなどに似て他の動物の巢孔に潜むなど生貝を見出し難い特段の理由があるのかもしれない。しかしそれを考慮しても、これまででたった 1 個体の死殻しか得られておらず、既に絶滅してしまった可能性も否定できない。

(福田 宏)



## ヌノメツボ

*Japanonoba patula* (A. Adams, 1863)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型グレード シロネズミ上科 シロネズミ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1863i: 349, no. 6, as *Onoba patula*) で、波部 (1961b: 195–196, no. 8, pl. 2, fig. 4, as “*Onoba*” *patula*) がタイプ標本の描画を公表している。その後 Yoshizaki *et al.* (1997: 43–52, figs 2–15) がタイプ標本を含めて詳細な再検討を行い、同時に *Japanonoba itoi* Habe & Ando, 1987: 180–181, figs 1–2 ホソヌノメツボを新参異名とした。殻長約 3.2 mm, 殻径約 1.8 mm, 細長い紡錘形, 無色不透明の薄い硝子質で、縫合は強く縊れる。殻表は多数の螺肋と縦肋が交わって細かい格子目状をなし、縫合から数えて 5–8 本目の螺肋が他の螺肋より際立って強大で、顕著な肩角を形成する。殻口は縦長の種子形で、外唇は肥厚して縦脹肋となる。臍孔は狭く溝状に開き、臍域は幅広く、強い稜角をなす繃帯によって縁取られる。蓋及び軟体は未詳。

**分布** タイプ産地は「Yobuko, west coast of Kiusu [sic]; 14 fathoms, mud」(九州西岸, 佐賀県呼子, 14 尋, 泥底)。新参異名である *Japanonoba itoi* ホソヌノメツボのタイプ産地は「広島県三原市沖」で、同市からは濱村 (2004: 49, text-fig.) と池辺・吉田 (2006: 40, no. 892) も標本を得ている。それ以外には岡山県岡山市中区新岡山港に置かれた浚渫砂や、山口県柳井市柳井湾の水深約 10 m 砂泥底, 及び愛媛県大三島沖の砂から採集された記録がある (矢野, 1979: 2, text-fig.; 福田, 1996: 24, pl. 9, fig. 4; Yoshizaki *et al.*, 1997)。また川瀬他 (2015: 56, pl. 6, fig. G68) は愛知県田原市高松の中部更新世渥美層群豊橋層から本種の化石を見出した。以上が現時点での産出記録 (二次引用を除く) の全てであり、国外からも明確な報告はないが、「Arabian Sea, off Bombay, lat. 18°48' N., long. 71°45' E., 40 fathoms」(インド西北岸ムンバイ沖のアラビア海, 40 尋) から記載された *Fossarus (Couthouyia) uncarinalis* Melvill & Standen, 1903: 301, pl. 21, fig. 7 は本種に近似し、同種か、少なくともごく近縁な種と考えられる。

**生息状況** 長谷川 (2017: 822, pl. 96, fig. 1) がわざわざ記している通り、これまでに採集された個体はタイプ標本も含めて全て死殻である。いずれも潮下帯の砂底または砂泥底から得られているためその附近に棲息していると想像されるが、何しろ一度も生貝が見出された例がないので、T. Sasaki (2008: 172) の表現を借りれば「The habitat ... is a complete mystery」(その棲息環境は完全なる謎) のままである。岡山県では上記の矢野 (1979) が唯一の産出記録である。その時矢野は同時に「2 個体」が採集されたと記し、「何の仲間かよくわからない貝である ([*Berthais egregia* (A. Adams, 1863)] ヒナツボ [中略] の仲間であろうか)」としているが、傍らに付せられた簡素なスケッチは紛れもなく本種の特徴を表しているし、ヒナツボは現在本種に近縁と考えられているので矢野の感想は正鵠を射ている。このため岡山県に本種が産する (または、していた) ことは疑いがなく、その後は新たな産出記録が全くないまま今日に至っている。本種は殻の形態からの類推で恐らくシロネズミ科の一員とされており、同科に属すハツカネズミはユムシ類の棲管内に棲息することが近年になってようやく明らかにされたので (同種の項を参照), 本種も特異な環境条件下に棲息が限定される可能性があるが、長年に亘る海岸線や海底の改変と水質悪化が重なって現在に至る岡山県では、一旦生物多様性が著しく低下しているから、本種に代表される「謎の稀少種」が今なお県内のどこかに生き延びていると望むのは、困難かもしれない。

(福田 宏)

## ハツカネズミ

Macromphalus tornatilis (Gould, 1859)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 リソツボ型グレード シロネズミ上科 シロネズミ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Gould (1859: 44–45, as *Fossar tornatilis*) で、タイプ標本の写真は Yen (1944: 571, pl. 51, figs 1–2, as *Fossarus tornatilis*) 及び Johnson (1964: 159, pl. 5, fig. 3, as *Fossar[us] tornatilis*) が公表している。*Fossar japonicus* A. Adams, 1861b: 139 は新参異名で、そのタイプ標本は波部 (1961b: 200, no. 34, pl. 3, fig. 16; 1978: 163, 164, 166, text-fig. 8) に図示されたが、波部はこれを一貫して *Fossarus multicostatus* Pease, 1861 マルトリデニナ (現在の所属は Planaxidae Gray, 1850 ゴマフニナ科) に同定していた。逆に、一時期本種に対する有効名とされていた *Fossar (Couthouyia) reticulatus* var. *persoluta* Nevill, 1885: 166, no. 16 は恐らく薄い殻を持つ別種である。このように本種とは系統的に異なるにもかかわらず殻の形態が「他人の空似」的な類似を示す複数の種群が存在するため、分類は長い間激しく混乱し、*Phasianema* S.V. Wood, 1842 (現在の所属は Pyramidellidae Gray, 1840 トウガタガイ科) や *Couthouyia* A. Adams, 1860 (*Macromphalus* S.V. Wood, 1842 の異名) など様々な属名が用いられるとともに種名も一向に安定せず、和名も *Fossarus trochlearis* A. Adams, 1853 トリデニナと混線していた時代すらあったが、土田他 (1991: 18–20, text-fig., pl. 3, figs 6–7) における鹿野康裕の詳細な検討によってようやく本種と他の種の識別に道筋がつけられた。殻長約 5 mm, 殻径約 4.5 mm, 太短い卵形で螺塔は小さく、対照的に体層が著しく大きく膨らむ。硬質堅固、白色の陶器質で鈍い光沢を持ち、殻表に強いレール状の螺肋を 7~8 本巡らす。殻口は大きく半月形、内唇~軸唇は直線的でその前端は広がる。臍孔は狭く深く開き、縞帯で囲まれた臍域は広い。蓋は角質で薄く半透明な黄色、少旋型。軟体は無色半透明、細長く明瞭な一対の頭触角をもち、口吻は短い四角形。

写真： 備中〔笠岡市〕白石島，畠田和一コレクション #5633，福田撮影。殻長 4.8 mm，殻径 3.7 mm。



**分布** タイプ産地は「Hong Kong Harbor, 10 faths.」(香港港, 10 尋)。*Fossar japonicus* は「Tsu-Sima; 16–26 fathoms」(長崎県対馬, 16–26 尋) から記載された。のちに A. Adams (1863f: 110, no. 1) は *F. tornatilis* と *F. japonicus* をともに地中海産の化石種 *Nerita costata* Brocchi, 1814 (not of Gmelin, 1791) の異名とした上で (しかしそれは誤同定である), 「Seto-Uchi; Kuro-Sima; Tsu-Sima」(瀬戸内海; 薩摩黒島; 対馬) の 3 産地を挙げた。現在知られる分布の北限は太平洋側が千葉県館山湾 (田村・奥谷, 1989: 21, as *Fossarus tornatilis*), 日本海側が福岡県響灘 (高橋・岡本, 1969: 38, no. 211, pl. 5, fig. 9, as *Couthouyia persoluta*) で、朝鮮半島からも記録がある (權他, 1993: 66, fig. 12-1-1–2; 254, as *Couthouyia tornatilis*; この図鑑は本種を Neritopsidae Gray, 1847 アマガイモドキ科に所属させるという独特の見解を示している)。南西諸島では今のところ確認されていない。波部 (1978a: 163, 164, 166, text-figs 1, 9, as *Fossarus tornatilis*) は本種の分布域に北海道礼文島とロシア沿海州を含め、肥後・後藤 (1993: 106, no. 1455, as *Fossarus tornatilis*) や Higo et al. (1999: 78, no. G624, as *Fossarus tornatilis*) も追随しているが、これは波部が本種の異名とした *Phasianema phycophyllum* Golikov & Kussakin, 1967 の産地であり、その名は現在 *P. lirata* (A. Adams, 1860) ツトクチキレの異名と見なされ (Hori & Iizumi, 1997: 38–40), 本種とは無関係である。

**生息状況** 高橋・岡本 (1969) が本種に対して述べた「〔北九州市若松区〕岩屋で唯一個採集」という表現は、当時まで本種が稀産で、存在自体ほとんど知られていなかったことを端的に印象付けている。対照的に瀬戸内海においてのみ頻繁に採集され、古くは瀧巖 (1938: 16, no. 139) が広島県の「竹原・有龍島」産として挙げた「*Phasianema* sp. トリデニナ」は土田他 (1991) が論じている通り本種のことと考えられる。岡山県においても窪田 (1962: 42, no. 556a, as *Phasianema (Couthouyia) tornatilis*) が「〔倉敷市下津井〕六口島」産個体に言及し (畠田和一が古川田溝に提供した標本と推察される), この記録は肥後・後藤 (1993) と Higo et al. (1999) にも引用された。また畠田自身のコレクションにも「備中〔笠岡市〕白石島」(2 個体, カネコスズカゴ 1 個体と混在, #5633; 写真) が含まれ、「トリデニナ *Phasianema* cf. *japonica* A. Adams (cf. [s] *toliczkana* Nevill) (黒田氏同定品)」とラベルに記されており、当時はやはり本種がトリデニナと呼ばれていたことを示す証拠となる。畠田の歿後、1970 年代の高度経済成長期に入ると、安価なコンクリート材料への需要が飛躍的に高まったことから瀬戸内海の浅海底で砂が大規模に浚渫され、その結果工事現場や学校の砂場などで本種の殻を少なからず目にする機会が生じた。しかしその一方で生貝は依然として滅多に見出されず、棲息状況が詳らかにされたのは今世紀に入ってからのものである。濱村 (2004: 48, text-fig.) は広島県呉市仁方町及び下蒲刈島で遂に複数の生貝を見出し、その時の観察結果と生体写真は福田 (2012: 56, text-figs) が提供を受けて公表した。生貝は内湾湾口部の海岸礫地砂泥底の潮間帯下部において、底泥中に半ば埋もれた転石下の還元的環境 (アシヤガイが多く見られる) に特異的で、その石の下に潜んでいるユムシ類が自らの粘液で泥を固めて作った棲管の壁に沿って、転石下面に点々と付着しているという。つまり本種は極端に限定的なハビタットで生きており、長らく生貝が容易に見出されなかったのも当然のものである。いうまでもなくホストであるユムシ類が健在でなければ本種の個体群も存続できないと考えられるが、海岸環境の変質と悪化に伴って多くのユムシ類が危機的状況に陥っている昨今、本種も絶滅へ向けて急激に傾斜しているとみられる。特に海砂の浚渫が深甚な悪影響を本種に与えたと考えられる。岡山県では近年も本種の死殻は時折目にするものの、他の貝類やベントスの多様性の激しい低下ぶりから類推すると、もはや本県内でユムシ類とともに本種が生き延びている場所を見いだすのは極めて困難と言わざるをえない。

(福田 宏)

## カリバガサ

Calyptrea yokoyamai Kuroda in Ta. Fujita, 1929

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 賊腹足上目 カリバガサ上科 カリバガサ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Kuroda in 藤田正 (1929: 89, no. 44; 94) で、それ以前に Yokoyama (1920: 75–76, no. 75, pl. 4, fig. 5, as *Calyptrea mamillaris* [sic]) が *C. [(Syphopatella)] mamillaris* Broderip, 1835: 201, no. 16, pl. 28, fig. 5 (タイプ産地は「in sinu Guayaquil. (Island of Muerte.)」つまりエクアドルのグアヤキルで、中米太平洋岸に分布する) として報告した個体が誤同定であるとして新名が与えられた。殻長約 5 mm, 殻径約 12 mm, 円錐形に高まる笠形で、殻頂側から見ると輪廓は真円に近い。殻頂は中央からやや偏り、螺層は急激に幅を増大して約 3 層をなす。殻表は白色で成長脈は粗い。殻口は殻底全体を占め、光沢が強く、大きく舌状に突出する隔板をもつ。臍孔は隔板の中央付近に狭く開く。蓋を欠く。軟体部は未詳。

写真：玉野市波張崎南東沖 水深 22 m 泥底 ドレッジ St. 1, 2002 年 9 月 18 日, OKCAB M24055, 福田撮影。殻長 1.0 mm, 殻径 3.3 mm。

**分布** タイプ産地は「[千葉県] 館山湾口大房岬より方向 Mag. Co., S.W. (True Co., 220°); 距離 1 1/2 哩 (Lat. 35°01'12" N. Long. 139°47'40" E.) で水深 84 米 (46 尋)」

(藤田正, 1929: 59)。また Yokoyama (1920) が *Calyptrea mamillaris* として報告した際の産地は「Miyata Zone (Kami-Miyata). Upper Musashino of Kazusa」(神奈川県三浦市上宮田, 鮮新世～更新世上総層群) である。現生個体は房総半島及び山口県萩市見島以南, 九州までと朝鮮半島から知られ、特に相模湾では多くの産出記録がある(黒田他, 1971: 135–136 (和文), 89 (英文), pl. 23, figs 20–22; 福田他, 1990: 33, no. 8, fig. 7; 関他, 2004: 150, fig. 303-1–3; 151, no. 303)。化石は本州・四国・九州各地で鮮新世～更新世の地層から多数報告されている (e.g. 瀧庸, 1938: 138, no. 1; 142, figs 8–10; 143; 松浦, 1996: 45; 奥村他, 2009: 15, no. 68; 天野他, 2012: 814, 817, fig. 3.6; Amano, 2019: 91, 92)。朝鮮半島以外の国外では唯一村岡 (1972: 47, no. 722) が「トンキン湾」産と称する標本に言及しているが、それは近似の別種かもしれない。Knudsen (2000: 186–187, fig. 2, pl. 2) は香港から「*C. cf. yokoyamai*」を報告しつつも、螺塔の高さや殻頂の位置、彫刻などが日本のカリバガサと完全には一致しないことから「may represent a new species」(新種かもしれない) と述べている。

**生息状況** 潮下帯から漸深海底 (水深約 20–300 m) の貝殻が多く混ざった砂底に産し、他の貝類の死殻などに固着する。太平洋岸では稀な種ではないが、瀬戸内海では福田他 (1990) が山口県柳井市沖から報告するまで知られていなかった。岡山県でも文献記録は皆無で、畠田和一コレクションにも含まれていない。その一方で、2002 年 9 月に玉野市～岡山市東区の沖で行われたドレッジ調査の際に、波張崎南東沖 (水深 22 m, 泥底) 及び大入崎～犬島間 (水深 10 m, 砂底) から、殻径 2–3 mm 程度の幼貝の死殻がそれぞれの産地で 2 個体ずつ得られている (OKCAB M24055, 写真; M24280)。このうち大入崎～犬島間の 2 個体は大きく破損した古い殻であるが、波張崎南東沖産はともに殻口内部の光沢が残され、殻表の摩滅も少ないため死後さほど時間が経過していないと考えられる。したがって波張崎沖の潮下帯に今なお本種の個体群が維持されている可能性があるが、上記の標本以外には一切の記録がなく、生貝はもちろんのこと成熟個体の死殻もいまだ確認されていないため、もし本種が本県内に棲息しているとしても、ごく少数が狭い範囲に局限されているものと推測される。

(福田 宏)



## ハナツトガイ

*Velutina pusio* A. Adams, 1860

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 賊腹足上目 タカラガイ上科 ハナツトガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1860a: 411, as *Velutina Pusio*)。タイプ標本は長らく図示されず、黒田 (1961b: 221–222; 1962c: 107) は Adams の記載文の記述内容だけに基づいて同定していたが、現在はインターネット上にシタイプの写真が公開され (Museums Victoria, 2019)、それを見ると黒田の見解は確かに正しい。*Philine takatensis* Yokoyama, 1922: 28, no. 14, pl. 5, fig. 4, 4a は新参異名。また本種は一時期 (e.g. 波部, 1961a: 40, pl. 18, fig. 15; 黒田他, 1971: 141 (和文), 93 (英文), pl. 108, fig. 17), *V. cryptospira* Middendorff, 1848: 17 ウスカワハナツト (タイプ標本は Kantor & Sysoev, 2006: 124, pl. 57, fig. A が図示している。タイプ産地は「Ins. Schantar, mar. Ochot.」(ロシア・ハバロフスク地方のシャンタル諸島, オホーツク海)) と混同されていたが、後種は殻形が横長となる点で識別可能な別種で、北海道以北に分布が限定される。ハナツトガイは殻長・殻径とも約 15 mm, 半球形で、螺塔はごく小さく、体層が殻の大半を占める。薄くて壊れやすく、殻表は赤褐色～淡い桃色または白色で、細い螺肋を密に巡らせ、その上で殻皮が毛羽立つ。殻口は極端に広く、唇縁は薄い。蓋は欠く。軟体の頭部・腹足は濃橙色から淡黄白色まで変異があり、体表に褐色の不明瞭な斑紋を散在する個体もある。頭触角は明瞭で細長く、先端は尖り、根元の外側に黒い眼がある (奥谷・波部, 1975a: 83, unnumbered figs; 250; 高重, 2019: 168, text-figs に生体写真あり。一方、奥谷 (1986: 96) が本種として図示した生体は別種 *V. plicatilis* (Müller, 1776) モモイロハナツト)。和名の原義は「花苞貝」で、「ハナツトガイ」と記すのは誤り。写真：玉野市波張崎～岡山市東区犬島間 水深 14.3 m 砂底 ドレッジ St. 2, 2002 年 9 月 18 日, OKCAB M24149, 福田撮影。残存部分の最大幅 3.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Straits of Korea; 63 fathoms」(朝鮮海峡 63 尋) で、これは恐らく山口県萩市見島沖のことである。*Philine takatensis* は「Shito」(千葉県市原市市東の瀬又貝化石層, 後期更新世印旛層・市原層) から記載された。太平洋側は福島県常磐沖以南、日本海側は新潟県以南、九州までと朝鮮半島に分布する (伊藤勝, 1989: 46, no. 59, pl. 5, fig. 3; 根本・秋元, 1990: 8–9, no. 64; 関他, 2004: 168, fig. 381-1–3; 169, no. 381, as *Velutina (Velutella) plicatilis cryptospira*; 山下博・栗原, 2012: 57, text-figs)。Oyama (1973: 35, pl. 8, figs 2a–c, as *Velutina (Velutella) takatensis*) は分布の南限を熊本県天草としている。一方、北海道からも繰り返し記録されている (e.g. 波部, 1965a: 77, no. 265, text-figs; 波部・小菅, 1967: 49, pl. 19, fig. 7; 石山, 1970: 176–177; 村岡, 1972: 50, no. 788; 奥谷・波部, 1975a; 池辺・吉田, 2006: 45, no. 1094; 柏尾・福井, 2012: 59, no. 89) が、それらはウスカワハナツトやモモイロハナツトなど同属の別種の誤同定であろう。

**生息状況** 潮間帯から潮下帯にかけて、緑藻の繁茂した岩礫間・岩盤上やアマモ場の礫底などに見られ、群体ボヤの一種である *Aplidium pliciferum* (Redikorzev, 1927) マンジュウボヤを捕食することが知られている (山下博・栗原, 2012)。かつては死殻が各地の砂浜に打ち上げられ、蛸壺や海底から浚渫された砂の中にも見られた (福田, 1992: 63, no. 189, pl. 12, fig. 189a–b) が、近年は分布域の全体で強い減少傾向にある。広島県芸南地方では死殻のみ報告され (濱村, 2004: 54, text-figs。), 香川県では 2012 年に辛うじて「生体の打ち上げを確認した」とされている (瀬尾・Tanangonan, 2014: 96, no. 89, pl. 1, fig. 20)。岡山県では矢野 (1979: 2) が岡山市中区新岡山港に積まれた浚渫砂中から死殻を得ており、これが唯一の文献記録である。その後は 2002 年に玉野市波張崎～岡山市東区犬島間の水深 14.3 m の砂底から、ドレッジによって殻頂周辺だけが残された破片 (OKCAB M24149; 写真) が 1 個得られたにとどまり、生具はおろか新しい死殻すらも確認されていない。現在の岡山県内に個体群が現存する確たる証拠はなく、もし今なお棲息しているとしても極めて狭い範囲に少数が生き残っているだけと推測される。海底の浚渫と水質汚濁が、かつて存在した本種の個体群に甚大な影響を与えて消滅させたと考えられる。

(福田 宏)

## ヤツシロガイ

*Tonna luteostoma* (Küster, 1857)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 賊腹足上目 ヤツシロガイ上科 ヤツシロガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Küster (1857: 66–67, no. 6, pl. 58, fig., as *Dolium luteostomum*) で、ホロタイプの写真は Vos (2007: 96–97, text-figs, pl. 43, figs 1–3; pl. 44, figs 1–3; pl. 63, fig. 3a–b) が公表し、MolluscaBase (2019) でも閲覧できる。新参異名は次の 3 つ：*D. favannii* Hanley, 1860 or 1861: 430, no. 3 (シタイプ画像が MolluscaBase, 2019 にあり); *D. Japonicum* Dunker, 1867 in 1858–1878: 104–106, pls 35–36, figs; *D. procellarum* Euthyme, 1885: 247–250。また Küster (1857: 74–75, no. 14, pl. 63, figs 1–2) がいう *D. variegatum* Lamarck, 1822: 261, no. 6 の一部は本種であり、これ以降本種と *D. variegatum* は多くの著者によって混同されてきた (Vos, 2007; 2013: 36, pl. 8, fig. 3a–b)。例えば Schrenck (1867: 401–403, no. 68) の *D. variegatum* は本種であり、また Kiliyas (1962: 53–54, no. 34, fig. 46) や Kilburn (1971: 483–485, fig. 1) の *Tonna variegata* にも本種が混在しているため注意が必要である。殻長 150 mm, 殻径 120 mm を超える大形種で、丸々と膨らんだ樽形。螺塔はごく小さくて低く、体層が殻の大半を占める。老成すると厚いものの、軽く壊れやすい。殻表は幅広くて低い螺肋を規則的に多数巡らし、肋間は浅いが明瞭。光沢を帯びた半透明の殻皮に覆われ、明るい赤茶褐色または白色で、一部の螺肋上へ濃褐色と白色の斑点をほぼ交互に並べ、それらが前後縦方向に繋がって縞模様をなす個体もある。殻口は広く半月形で、唇縁は薄く鋭い。内唇は滑層が広く発達し、光沢が強い。臍孔は明瞭に開く。前管溝は太く顕著。成貝では蓋を欠く。頭部–腹足背面は白色の地に紫褐色の斑紋が全体に広がる。頭触角は明瞭で細長く、根元の外側に黒く円らな眼がある。水管は太いストロー状で長い。足は垂円形で広く扁平 (高重, 2019: 158, 159, text-figs に生体写真あり)。奥谷・波部 (1975a: 101, unnumbered figs; 281) は幅広いリボン状の卵嚢を図示している。

写真： [備前市日生町] 鹿久居島, 畠田和一コレクション #644, 福田撮影。殻長 150 mm, 殻径 120 mm。



**分布** タイプ産地は「im indischen Ocean」(インド洋)。異名の *Dolium favannii* は「—?」(不詳)、*D. Japonicum* は「mare Japonicum」(日本の海)、*D. procellarum* は「Sainte-Elisabeth, au cap de Bonne-Espérance」(南アフリカ喜望峰, ポートエリザベス) からそれぞれ記載された。最北の記録は北海道函館 (Schrenck, 1867; 黒田・木下虎, 1951: 15, no. 165) で、陸奥湾や三陸海岸、男鹿半島からも記録があり (野村・畑井, 1932: 11, no. 128; Nomura & Hatai, 1935: 29, no. 139; 西村正・渡部景, 1943: 67, no. 100; 堀越他, 1979: 60; 土田, 1990: 16, pl. 5, fig. 8; 戸羽, 2009: 25, 26, fig. 53), 太平洋側・日本海側とも九州まで広く分布する。国外は朝鮮半島, 中国, 台湾, ベトナムなど東南アジア一帯 (Hylleberg & Kilburn, 2003: 65; 関他, 2004: 181, fig. 424-1–3; Ma, 2004: 79, pl. 049, fig. A), ハワイ諸島周辺 (Severns, 2011: 134, pl. 51, fig. 2), ニュージーランド (Cernohorsky, 1972: 109, pl. 31, fig. 1), 南アフリカ (Kilburn, 1971; Steyn & Lussi, 1998: 70, 71, fig. 260a, as *Tonna variegata*) と相互に遠く離れた海域から知られているが (Vos, 2007, 2013; MolluscaBase, 2019), それらの間からは明確な記録が少なく、それぞれが遺伝的に孤立した集団を形成している可能性もある。なお本種に長く混同されてきた別種 *D. variegatum* は「les mers de la Nouvelle-Hollande, dans la baie des Chiens-Marins」(現・Shark Bay, 西オーストラリア州) から記載されたオーストラリア西岸の固有種である (Vos, 2007: 103–104, pls 53–55)。

**生息状況** 内湾・外洋を問わず潮下帯～漸深海底 (水深約 220 m まで; Vos, 2013) の砂泥底に棲み、多産する場所では死殻が砂浜に打ち上げられるのみならず底引き網などで頻繁に混獲される。食用とされることは少ないが、殻が料亭などで置物として利用されているのを頻繁に目にする。ナマコ類など棘皮動物を好んで捕食する。日本の多くの海域では今も普通種で、レッドリストへ含められた例はこれまでにない。このためナガニシなどと同様、保全対象種となるイメージを想定しづらい種であるが、瀬戸内海中央部では本種はもともと極めて稀産である。稲葉 (1982: 100, no. 249) は瀬戸内海全体としては「普通」とする一方で、備讃瀬戸～備後灘・燧灘の「内区」だけわざわざ別扱いで「稀」と記した。実際に岡山・香川両県とも、本種の産出を明記している文献は見当たらない。岡山県での唯一の産出の証拠は、畠田和一コレクションに含まれる「[備前市日生町] 鹿久居島」(1 個体, #644; 写真) である。この個体は殻長 150 mm に達する堂々たる成貝で、殻表はさほど摩滅しておらず殻頂の胎殻も完全で、殻皮も一部が剥離したのみであるが、殻口内部の光沢はやや失われているため畠田が入手したとき既に死殻であったと考えられる。この個体が岡山県における本種の最初にして最後の標本であり、以後は今に至るまで破片すらも見出されたことはない。恐らく本種は 1950 年代までの、まだ人為的攪乱を被る前で多様な貝類相が存在した本県内にごく少数が棲息していたものの、その後の水質汚濁や海底浚渫などによって多くの種が絶滅または激減したのと同時期に、完全に本県から姿を消したと考えられる。本種を含む Tonniidae Suter, 1913 ヤツシロガイ科の多くの種は浮游幼生期間が長く、分布域も広いことで知られるため、いずれ本種も他の海域から幼生が入り込んできて新たな個体群を本県内に形成する可能性も皆無とは言えないが、少なくとも現時点では近隣の香川県や広島県でも棲息の確実な情報がないため、もし畠田標本に次ぐ個体が岡山県に現れるとしても長時間を経た環境回復の上で初めて起こりうることである。

(福田 宏)

## カズラガイ

*Phalium variegatum* (Perry, 1811)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 賊腹足上目 ヤツシロガイ上科 トウカムリ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 古くから知られる通り、形態的に識別可能な2型が存在する。一方は主に内湾に見られ、殻表は光沢が鈍く、体層全体に明瞭な螺溝を巡らし、縦縞はくすんだ褐色で稲妻状に彎曲し、蓋の輪廓は縦長の楕円形(カズラガイ)。他方は主に外洋で産出し、殻表の光沢が強く、体層の螺溝は殻底にのみ現れて他の部分は平滑、縦縞は鮮明な濃色でさほど彎曲せず、蓋は両端が尖った扇形(ナガカズラ)。両者を同種と見なす著者も多いが(e.g. Abbott, 1968: 89–90, pl. 7, figs 3–4; pl. 65, as *Phalium strigatum*)、ここでは暫定的に別種として扱う。その場合カズラガイの最古参名は *Cassis variegata* Perry, 1811: pl. 33, fig. 3 で、*P. (P.) strigatum breviculum* Tsi & Ma, 1980: 87–88, no. 6; 95, pl. 2, figs 3–4 (Su. & Sh. Zhang, 2015: fig. 39 がホロタイプを図示)は新参異名。ナガカズラの有効名は *C. Flammifera* Röding, 1798: 31, no. 377/30 で、二語名法適用外の *Chemnitz* (1788: 189–190, pl. 153, figs 1457–1458) の図示個体に対して命名された。

より古参の *Buccinum rugosum* Gmelin, 1791: 3476, no. 27 (not of Linnaeus, 1771) と *B. strigatum* Gmelin, 1791: 3477, no. 179 (not of Müller, 1774) もナガカズラであるが、それらは新参一次同名で無効である。また以下の5名もナガカズラである：*C. Rugosa* Röding, 1798: 31, no. 378/31, *P. flammeolum* Link, 1807: 112 in part 2, *C. zebra* Lamarck, 1822: 223, no. 10 (Abbott, 1968 がホロタイプを図示), *C. undata* Deshayes, 1844: 28–29, footnote, *P. areola* var. *küsteri* Bayer, 1935: 99。岡山県産で現存する標本はカズラガイのみのため以下にはその形態を記載する：殻長約70 mm, 殻径約50 mm, 太短い紡錘形で厚く堅牢、体層は強く膨らみ、殻長の約9割を占める。殻表は光沢が弱く、灰色の地にくすんだ赤褐色の太い稲妻模様をほぼ等間隔に並べる。殻頂附近から次体層までは縦肋と螺肋が交わって布目状をなすが、体層では縦肋は消え、細く明瞭な螺溝を全体に巡らす。体層の中ほどに強い縦脹肋をもつ。殻口は縦長の三日月形で、外唇は強く肥厚反転し、縦長の褐色斑が5個前後間隔をあけて並ぶ。外唇内側は多数の強い螺状彫刻で刻まれる。内唇～軸唇は滑層が発達して広範囲を覆う。軸唇は強い多数の褶をもつ。前管溝は広く明瞭。蓋は角質で半透明の褐色、細長い楕円形で、左端(内唇側)に核をもち、同心成長脈は明らか。頭部-腹足は灰白色で、腹足の側面は赤褐色の色帯で縁取られる。頭触角は明瞭で細長く、先端は尖って白く、根元に近い半分は濃赤褐色に染まり、根元外側に黒い眼がある(高重, 2019: 144, 145, text-figs に生体写真あり)。

写真： 備前[倉敷市下津井]六口島, 畠田和一コレクション #528, 福田撮影。殻長75.2 mm, 殻径48.6 mm。



**分布** タイプ産地は「Eastern Seas」(東洋の海)。異名である *Phalium (P.) strigatum breviculum* は中国の「辽宁省[大連市]小長山島」から記載された。分布域はナガカズラと重なり、図のない文献記録はどちらを指すか不明な場合が多い。ナガカズラの有効名 *Cassis Flammifera* は原記載に産地表記がない。Abbott (1968: 90) は *Buccinum rugosum* や *C. Rugosa* が命名対象とした M., S. & A. Lister (1770: pl. 1014, fig. 78) の産地を「Nagasaki, Japan」(長崎)と後次指定した。*B. strigatum* は「Oceano indico」(インド洋), *C. zebra* は「l'Océan indien et des Moluques」(インド洋とモルッカ諸島)からそれぞれ記載され、*C. undata*, *P. flammeolum* は産地不詳。本種の最北の記録は圓谷・鈴木明 (2015: 1–4, figs 2–3, as *P. flammiferum*) が報じた北海道檜山郡上ノ国町で、そこでの産出は近年の温暖化に伴う海水温上昇に関連付けて考察された。それ以前は鳥羽 (1915: 14) による青森県八戸と岩手県気仙郡が最北で、それらは本種とナガカズラのいずれか不明であるが、戸羽 (2009: 25, 26, fig. 54, as *P. (Bezoardicella) flammiferum*) が図示した「気仙海岸」産個体は本種である。日本海側は男鹿半島や山形県から記録があり(西村正・渡部景, 1943: 67, no. 98, as *P. (P.) strigatum*; 鈴木庄, 1979: 170, no. 131, as *P. (Bez.) flammiferum*)、鈴木は「外洋型は殻高が高く形が細長い。ナガカズラガイと呼ばれる」と記しているため山形県には両種とも産出するとみられる。ともに九州まで分布する。韓国から權他 (1993: 74, fig. 32-3-1–2; 280, as *P. (Bez.) flammiferum*) と関他 (2004: 181, fig. 426-1–2, as *P. flammiferum*) が図示した個体はともに本種で、中国では Ma (2004: 71, pl. 041, fig. B; pl. 042, fig. B, as *P. f. flammiferum*, *P. f. breviculum*) が両種を並記している。台湾とベトナムの記録(Kuroda, 1941: 104, no. 458, as *P. strigatum*; Hylleberg & Kilburn, 2003: 60, as *P. flammiferum*) はどちらか不明。フィリピンからの図示個体(Springsteen & Leobrera, 1986: 101, pl. 27, fig. 4, as *P. (P.) flammiferum*; Kreipl, 2008: 580, pl. 235, fig. 6, as *P. flammiferum*) はともに本種である。

**生息状況** 内湾の潮間帯下部から潮下帯にかけて細砂底に産し、本来は頻繁に見られた普通種であった。しかし高重 (2019) が「近年、太平洋側では減少し、個体数は少ない」としている通り全体的に稀少化した。池田等他 (2001: 41, fig. 43, as *Phalium flammiferum*, *P. avriegatum* [sic]) は相模湾でのナガカズラの減少要因を「底質の変化」と推測しているが、のみならず他の賊腹足類の種と同様、インボセックスが影響した可能性がある。瀬戸内海では1980年代以前、東西の湾口部ではごく普通であった一方で、中央部では当時既に「少ない」とされていた(稲葉, 1982: 99, no. 239, as *P. (Bezoardicella) flammiferum*)。その後さらに急減し、濱村 (2004: 58–59, text-figs, as *P. (B.) flammiferum*) は広島県芸南地方で「採集した標本は半化石状態のもので、現在も生貝が生息しているかは不明」と述べている。香川県では畠田 (1977: 8, as *P. (B.) strigatum*) が三豊海域から記録しているものの、近年の瀬尾・Tanangonan (2014) には言及がない。岡山県では文献記録はなく、畠田和一コレクションに現存する「備前[倉敷市下津井]六口島」(1個体, #528; 写真), 「備中[浅口市寄島町]安倉」(1個体, #531) の2個体が産出の証拠の全てである。六口島産標本は蓋付きのため生貝を得たものと推測され、安倉産も摩滅や褪色は見られず、殻口から腐肉が出てくるので、恐らく漁屑中に見出されたものであろう。これら以外に県内での記録も標本もなく、死殻や破片も全く見出されていない。したがってヤツシロガイなどと同様、1960年代以降の水質汚染(特に環境ホルモン)や海底浚渫など環境悪化によって、もともと岡山県では少なかった本種は絶滅したものと考えられる。

(福田 宏)



## ウネウラシマ

*Semicassis japonica* (Reeve, 1848)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 賊腹足上目 ヤツシロガイ上科 トウカムリ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1848: sp. 23, pl. 9, fig. 23a-b, as *Cassis Japonica*) で、シントタイプの写真を Abbott & Dance (1982: 112, text-fig., as *Phalium bisulcatum*; 波部・奥谷 (訳), 1985: 116, text-fig., as *P. (Semicassis) bisulcatum*; Higo et al., 2001: 47, fig. G1553s) が公開している。Küster (1857: 43-44, nos 17, 32, pl. 52, figs 3-4, 9) が記載した *C. nucleus* と *C. j.* var. *minor*, 及び *C. Pfeifferi* Hidalgo, 1871: 226; 1872: 143-144, no. 2, pl. 7, fig. 2 は新参異名で、このうち *C. j.* var. *minor* はマメシボリウラシマ (カズウネウラシマ, カスリウラシマ) の和名で知られるが、これは黒田 (1953b:



(18)52-19(53)) が指摘した通り本種の雄個体である。本種は Abbott (1968: 126-131, pl. 8, figs 13-21, pls 105-114; pl. 109 は *C. japonica*, pl. 111 は *C. Pfeifferi* のシントタイプ) によって *S. bisulcata* (Schubert & Wagner, 1829) ウラシマの異名の一つとされたが、これは粗分類に過ぎる。奥谷 (2000: 275, pl. 136, fig. 12; 2017: 869, pl. 156, fig. 6; both as *S. b. japonica*) は Abbott の扱いとの折衷案をとるごとく本種をウラシマの亜種とした。しかしウラシマと本種は分布域が重なっており、亜種 (= 生殖的隔離が不十分かつ分布を異にする複数集団) の定義にそぐわないため、両者は別種とするのが妥当である。殻長約 70 mm, 殻径約 47 mm (これは雌の計測値。雄は一回り小さい), 太短い紡錘形で厚く、体層は強く膨らみ、殻長の約 9 割を占める。縫合は浅い。殻表は鈍い光沢を帯び、灰白色の地に、暗赤褐色の四角い斑点列からなる螺旋状色帯が 4 本並ぶ。後成層の殻表全体に明瞭な螺溝を巡らす。個体によっては体層の中ほどに縦脹肋をもつ。殻口は縦長の三日月形で広く、外唇は強く肥厚反転し、白色。外唇内側は多数の強い螺旋状彫刻で刻まれる。内唇~軸唇は透明な滑層で覆われる。軸唇は強い多数の褶をもつ。前管溝は広く明瞭で、殻底は強く縊れる。蓋は角質、半透明の黄色で、両端が尖った細長い扇形。軟体は A. Adams (1862b: 297) の観察によれば頭部-腹足は明るい桃色で、腹足の側面は黄緑色に縁取られる。頭触角は錐状で先端は白く、側面は暗褐色に染まり、根元外側に大きな黒い眼がある。

写真: [笠岡市] 金浦, 畠田和一コレクション #525, 福田撮影。殻長 52.9 mm, 殻径 37.0 mm。

**分布** タイプ産地は「China and Japan (on the sands)」(中国と日本, 砂底上) で、シーボルトの標本に基づく。異名の *Cassis nucleus* は産地表記がなく、*C. j.* var. *minor* は「mit der Stammform an den japanischen Küsten」(*C. japonica* とともに日本の海岸), *C. Pfeifferi* は「in insularis Philippines?」(フィリピン?) からそれぞれ記載された。太平洋側は房総半島以南 (清水利, 2001: 44, nos 652, 654, as *Semicassis bisulcata japonica*, *S. b. minor*), 日本海側は男鹿半島以南 (鈴木庄, 1979: 170, no. 132, pl. 6, fig. 98), 九州まで分布する。国外は韓国 (權他, 1993: 73, fig. 32-2-1-2; 280; 関他, 2004: 181, fig. 429-1-2, as *S. b. japonica*), 台湾 (Kuroda, 1941: 104, no. 460; 村岡, 1972: 56, no. 919, 920, as *S. (S.) japonica*, *S. (S.) minor*), ベトナム (Thach, 2002: 16, as *S. b. form japonica*), フィリピン (Kreipl, 2008: 590, pl. 240, fig. 5, as *S. b. forma japonica*) から知られる。

**生息状況** ウラシマとともに、主として外洋の潮下帯~漸深海底において砂底に普通に産し、底曳網などの漁屑中に多く見出されるが、内湾では少ない。瀬戸内海での記録は皆無ではないものの、稲葉 (1982: 99, no. 240) は東部・周防灘・伊予灘に「稀」としている。特に近年は、生貝の確実な産出例は知られていない。岡山県でも文献記録は存在せず、畠田和一コレクション中に「[笠岡市] 金浦」(1 個体, #525; 写真) とラベルされた標本が含まれ、これが現時点で岡山県唯一の産出の証拠である。金浦は江戸時代以前から栄えた漁港で、上記個体も漁屑から得られたものと推測される。しかしそれ以降、本種は岡山県だけでなく対岸の香川県でも明確な報告はなされず、他に標本も一切見出されていない。1960 年代以前ならば瀬戸内海中央部に本種が少数棲息していたとしても奇異ではないが、その後はカズラガイやヤツシロガイすら全く見出されなくなり、その状況で本種が生き残っているとは考えにくい。もはや本県とその周辺海域からは絶滅したと考えられる。

(福田 宏)

## ウネボラ

*Gyrineum natator* (Röding, 1798)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 臍腹足上目 ヤツシロガイ上科 アヤボラ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

**選定理由** ごく最近まで棲息が確認されず、絶滅寸前と考えられていた。近年復活傾向にあるが、各個体群が安定して維持されるか否かは不明のため、注視する必要がある。

**形態** 原記載は [Röding] (1798: 127, no. 1636/19, as *Tritonium natator*) で、それ以前の Chemnitz (1780: 78 (part), pl. 128, figs 1229–1230; 二語名法適用外) の図示個体に対して命名された。新参異名が4つある：*Biplex elegans* Perry, 1811: pl. 5, fig. 3；*Ranella tuberculata* Broderip, 1833: 179；*R. (Apollon) ovlivator* Mörch, 1852: 106；*Gyrineum natator* Röding var. *robusta* Fulton, 1936: 10, pl. 2, fig. 4。本種のこれまでの学名の変遷など分類の経緯は Beu (1998: 57, figs 6h, 16a–i; 1999: 6–7, 64, figs 6–7) に詳しい。殻長 32 mm, 殻径約 20 mm, 螺塔の高い紡錘形で背腹に扁圧され、厚く堅牢。殻表は赤みがかった濃茶褐色の厚くピロード上の殻皮で覆われる。各螺層の左右両端に顕著な縦脹肋を生じる。畝状の強い螺肋と縦肋が交わって交点は疣状となり、螺肋は縦脹肋の上にも乗る。殻口は楕円形、内壁は薄紫色を帯びる。外唇は肥厚し、内唇は滑層が発達する。前管溝は短いが明瞭。蓋は角質、濃茶褐色で厚く不透明、楕円形で核を前端にもち、同心成長脈が明らか。頭部-腹足背面は淡灰褐色の地に赤紫色の色素斑を散在する。頭触角は細く短い。足は短い垂円形 (高重, 2019: 156, 157, text-figs に生体写真あり)。江川・野田 (2014: 113–116, figs 2–7) が頭部-腹足と歯舌を図示している。写真：上・中、倉敷市玉島黒崎南浦, 2014年8月13日, 福田撮影。下、同産地からの室内飼育個体による産卵, 2016年5月5日採集, 同年9月久保撮影。



**分布** 原記載ではタイプ産地は明記されていないが、Beu (1998) はネオタイプを指定し、その産地は「Malacca」及び「Bombay」(マレーシアのマラッカとインドのボンベイ=ムンバイ) であるので、それらがタイプ産地に相当する。また、同じ個体が *Biplex elegans* (産地は「Native place unknown」, 不詳) のネオタイプ、*Ranella tuberculata* (産地は「in Oceano Pacifico. (Taheite.)」, 太平洋 (タヒチ) のレクトタイプ、及び *R. (Apollon) ovlivator* (産地は「—」, 不詳) のレクトタイプにも指定されたため、これらの学名は全て客観異名となる。*Gyrineum natator* var. *robusta* は原記載では「Hong Kong」(香港) 産とされているが、タイプ標本のラベルには「Japan」と記されているという。国内では紀伊半島、瀬戸内海 (淡路島, 岡山県, 広島県向島・因島, 愛媛県大三島などに不連続的に記録がある。国外は東限がニューギニア, 西限がアラビア半島, 南限がモザンビークのベイラで、インド洋北部に広く見られ、インドネシアにも産するもののフィリピン, オーストラリア, ニューカレドニアには分布しない。西太平洋では南日本周辺のみから知られ、かつてより広範囲に分布していた時代の遺存と考えられている (Beu, 1998; 福田, 2017b: 39)。

**生息状況** 潮間帯下部から潮下帯にかけての岩礁に棲息し、オガイとともに転石下に見られる。最近まで明確な産出記録がなく棲息実態もほぼ知られていなかったが、江川・野田 (2014) が和歌山県和歌山市と日高・串本両町から生貝を報告した。岡山県での本種は従来、わずかな数の古い死殻が稀に見られる程度だったのに対し、2013年に倉敷市玉島黒崎南浦でヒメエガイの個体群が再発見された際、本種とオガイの生貝が同所的に見出され、それ以後複数の場所でそれら3種が常に随伴して出現している (両種の項を参照)。玉島黒崎では継続的に生貝が確認され (写真), 備前市鹿久居島や笠岡市五番町などでも複数個体が認められている。本種も他の2種と同様に消息不明の時代が長く続いていたものの、突如として急激な増加傾向に転じた。オガイ・ヒメエガイの項に記したのと同様の理由で、個体群動態の継続的な調査が必要である。なお、2016年5月に玉島黒崎南浦で採集された幼貝を久保が室内水槽で飼育したところ、カニの足や魚の切り身などを摂食して成熟に至り、餌選択の幅の広い肉食性であると実証された。これらの生貝は2016年9月に水槽の内壁へ産卵した (写真, 下)。卵嚢は直径2–3 mmの球形で、1個体が300嚢以上を円形に産み付け、1つの嚢には25–30個の卵が入っていた。よって、1個体で1万個近く産卵し、繁殖力自体は旺盛と考えられる。1ヶ月ほど観察を続けたところ、いつの間にか嚢の中身は空になっていたため幼生は把握できなかったが、産卵から浮出までの期間が比較的短いことは確実である (久保未発表)。

(福田 宏・久保弘文)

## ホソオリレボラ

*Trigonaphera amakusana* Petit, 1974

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 ガクフボラ上科 コロモガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 本種は長らく *Cancellaria costifera* Sowerby I, 1832 in Sowerby I & II, 1832–1841: *Cancellaria*, 5, no. 33, pl. [4], fig. 31 に同定されていたが (e.g. 波部, 1961a: 73, pl. 36, fig. 6, as *Trigonaphera costiferum* [sic]; 波部・小菅, 1967: 90, pl. 35, fig. 11, as *Trigonaph. costifera*), それ が誤りであることを Petit (1974: 112–113, 115, text-fig. 4) が指摘し、新種として記載した。ホ ロタイプの写真は Kaicher (1978b: 1909, fig., as *Trigonostoma amakusana* [sic]) 及び Hemmen (2007: 30–31, text-fig.) に掲載されている。殻長約 20 mm, 殻径約 11 mm, 細長い紡錘形で螺 塔が高く、厚く堅牢で、縫合は強く縊れ、明瞭な肩角と相まって階段状となる。各層の殻表 に太く強固な縦肋を 7–8 本広い間隔で並べ、肋間は細い糸状螺脈を数本巡らし、それらが 縦肋上に乗ってごく弱い結節を生じる。殻表は多くの場合濃茶褐色で、縦肋上はやや淡色と なる。殻口は楕円形で、外唇は明瞭に肥厚反転し、内面は約 10 本の螺肋が唇縁まで及ぶ。外 唇内側後端に低い歯状突起を 1 個もつ。内唇～軸唇は直線的で、斜めの褶を 3 個生じる。前 管溝は短い。臍孔は完全に閉じ、臍域を縁取る繻帯の発達は弱い。蓋は欠く。軟体は未詳。  
写真： 児島郡甲浦村宮ノ浦 [岡山市南区宮浦], 畠田和一コレクション #502, 福田撮影。殻長 15.6 mm, 殻径 8.9 mm。



**分布** タイプ産地は「10–30 meters depth, off Tomioka, Amakusa Islands, Kumamoto Pref., Kyushu, Japan」(熊本県天草郡苓北 町富岡沖, 水深 10–30 m)。波部 (1965a: 139, note at no. 515, as *Trigonaphera costifera*) はオリレボラと「ともに [本州 (房 総) ~九州・シナの水深 10–50 m の砂泥底に] 分布し、この方がむしろ普通である」と記したが、実際には具体的な産出 記録が少なく、長谷川 (2017: 1054, pl. 344, fig. 7) は「土佐湾および九州北西岸」に分布域を限定している。九州各県では 比較的文献記録が多いが (e.g. 波部・田中, 1959: 17, no. 64, as *Trigonostoma costiferum*; 堀川, 1964: 38, no. 590, as *Trigonost. costiferum*; 高橋・岡本, 1969: 48, no. 371, pl. 8, fig. 22, as *Trigonaph. costifera*; 竹之内, 2001: 62, as *Trigonaph. amakusaensis* [sic]; 池辺・吉田, 2006: 74, no. 2357, as *Trigonost. amakusana*; 濱田保, 2008: 46, no. 1178, pl. 46, fig. G3416, as *Trigonost. amakusana*; 北川, 2017: pl. 154, fig. 15, G3416), 後述する通りヘソアキホソオリレボラと混同されてきた可能性があり、分布範囲は不 明瞭である。国外からの明確な記録も今のところ見当たらない。

**生息状況** 潮下帯の砂底に産するとされるが、具体的な産出記録に乏しいため棲息状況も不明な点が多い。稲葉 (1982: 111, no. 346, as *Trigonostoma costifera*) は瀬戸内海での本種の産地として香川県庄内半島周辺～坂出沖 (畠山・矢野, 1979: 12, as *Trigonaphera costifera*), 山口県柳井 (河本・田邊, 1956: 39, no. 464, as *Trigonost. costifera*), 及び大分県別府湾のみを挙げた が、同じ目録には瀬戸内海の広範囲で産出することが確実なヘソアキホソオリレボラの登載がないことから、両種が混 同されていた可能性が高い。筆者もかつて山口県宇部市産の後種を誤って本種として報告した (福田, 1992: 71, no. 302, pl. 20, fig. 302, as *Trigonost. costifera*)。岡山県では大垣内 (1968a: 45) が倉敷市塩生のサンドポンプで本種を記録しているが、 これもどちらの種を指しているか定かでない。しかし、畠田和一コレクションの「児島郡甲浦村宮ノ浦」(現・岡山市南区 宮浦) 産オリレボラ 3 個体 (#502 (part)) に混じって、確かに本種に同定可能な個体が 1 つだけ現存する (写真)。このロ ットは本種もオリレボラも彩色や光沢がほぼ失われて灰色の化石状となった古い死殻である。1959 年に児島湾が閉め切 られる以前には宮浦周辺に広大な泥干潟が存在していたため、同地にオリレボラの個体群が存在した可能性が高く、本 種も同所的に棲息していたものと推測される。しかしこの 1 個体以外には産出記録や標本がなく、近年も一切確認されて いないことから、岡山県での本種はもともとオリレボラやヘソアキホソオリレボラよりはるかに稀産であり、その後 の棲息環境の消失によって完全に絶滅したと考えられる。

(福田 宏)

## オリレボラ

*Trigonaphera bocageana* (Crosse & Debeaux, 1863)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 ガクフボラ上科 コロモガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 棲息環境が悪化し、在来個体群は強い減少傾向にある一方で、県外からの人為的移入が疑われる個体が見られ、稀少性評価を行うだけの情報が不足している。

**形態** 原記載は Crosse & Debeaux (1863a: 77, no. 1; 1863b: 263–265, no. 11, pl. 9, fig. 3, as *Cancellaria Bocageana*) で、その図は Hemmen (2007: 61, text-fig.) が転載し、またシントタイプの写真を MNHN (2019) で閲覧できる。本種は 1970 年代初めまで正しく同定されていたが、Cernohorsky (1972: 180, pl. 50, fig. 2) や Garrard (1975: 27–29, fig. 4(3–4)) が *C. bocageana* を *C. scalariformis* Lamarck, 1822: 113, no. 4 の新参異名として以来、国内の著者の大半も本種を *Trigonostoma scalariformis* または *Scalptia scalariformis* としている (e.g. 長谷川, 2000: 583, pl. 290, fig. 15; 2017: 1054, pl. 344, fig. 4; 木村昭・福田, 2012: 74, text-figs a–c)。しかし *C. scalariformis* は別種フトネオリレボラ (Abbott & Dance, 波部・奥谷 (訳), 1985: 230, text-fig., as *S. (Trigonaphera) scalariformis*) に相当し、本種に用いるのは適切でない。他方、*C. nitida* A. Adams, 1855c: 123, no. 16, *C. Mangelioides* Reeve, 1856a: sp. 69, pl. 15, fig. 69a–b, *C. Thomasiana* Crosse, 1861: 231, no. 12 は原記載やタイプ標本の図を見る限り本種と同種の可能性が残り (Löbbecke in Kobelt & Löbbecke, 1881–1887: 10–11, no. 6, pl. 1, figs 17–18; 79–80, no. 77, pl. 20, figs 10–11; 88, no. 92, pl. 22, figs 7–8; Hemmen, 2007: 203–204, 223, 318–319, text-figs を参照), 引き続き検討が必要である。殻長約 20 mm, 殻径約 14 mm, ホソオリレボラに似るが殻長に比して殻径が大きく、相対的に螺塔が低い。縦肋はより太く、肋間の螺脈は不明瞭で、個体によってはほぼ平滑となる。殻表は鈍い光沢を帯び、淡赤褐色で、周縁に白色の螺状帯を巡らし、縫合直下も淡色となる。臍孔は狭く隙間状に開き、縞帯は太く顕著。蓋を欠く。頭部–腹足の背面は灰白色の地に、若い個体では橙色、老成個体では暗褐色の斑点を多数散らす。頭触角は細い針状で長さは中庸、腹足と同色の斑点で覆われ、中ほどに白色帯をもつ。足は楕円形 (木村昭・福田, 2012; 木村昭・木村妙, 2013: 35, fig. 132a–b; 147, as *Trigonost. scalariformis* に生体写真あり)。

写真: [岡山市南区] 小串, 1934 年 1 月 13 日, 畠田和一コレクション #571, 福田撮影。殻長 25.2 mm, 殻径 14.9 mm。



**分布** タイプ産地は「ad littus loci dicti «Ta-Kou,» Chinae septentrionalis」(中国北部, 渤海の北直隸海湾, 河北省滄州市東光)。日本では Lischke (1874: 41–42, pl. 2, figs 12–14, as *Cancellaria Bocageana*) が「Bucht von Jedo」(江戸湾) から初めて報告し、この産地はいまだに太平洋側の北限でもある。九州までの大規模な内湾から知られ、三河湾, 伊勢湾, 紀伊水道, 瀬戸内海, 土佐湾, 博多湾, 有明海などが代表的な産地である。日本海の石川県富来 (伊藤勝, 1999: 55, no. 1684, as *Trigonaphera [sic] bocageana*) や島根県隠岐 (島根大隠岐臨海, 2011: 12, as *Trigonaphera bocageana*), さらに奄美大島 (堀越他, 1963: 77, as *Trigonostoma (Scalptia) bocageana*) でも記録されているが、それらは内湾環境ではないことから別種かもしれない。国外は朝鮮半島から中国沿岸に分布する (權他, 1993: 90, fig. 45-1; 314, as *Trigonaph. scalariformis*; 関他, 2004: 259, fig. 720, as *S. (S.) scalariformis*; Li & Ma, 2004: 110, pl. 065, fig. I, as *S. scalariformis*; 張, 2008: 231, text-figs, as *Trigonost. scalariformis*; 張他, 2012: 115, no. 100, text-figs, as *Trigonost. scalariformis*; 楊他, 2013: 112, 113, fig. 415, as *Trigonost. scalariformis*; 鄭他, 2013: 283, text-figs, as *Trigonost. scalariformis*)。ベトナムより南方やインド洋からの記録は多くの場合本種でなく、フトネオリレボラまたは近似の別種の可能性が高い。一方で、本種の異名かもしれない *C. nitida* のタイプ産地は「Philippines」であり、もし同種であれば分布域はフィリピンまで広がることになる。*C. Mangelioides* の産地は「—?」(不詳)。*C. Thomasiana* は「West Indies」(西インド諸島) から記載されたが Hemmen (2007: 319) はこれを誤りと断じ、Tryon (1885b: 79–80, pl. 6, figs 92–94) は *C. thomasiana* と *C. bocageana* を異名と見なした上で産地を「China; Japan」としている。

**生息状況** 大規模な内湾奥の軟泥干潟下部～潮下帯に棲み、表層を匍匐する。国内では戦後、有明海を除いて激減し、1990 年代までほとんど産地が知られていなかった。今世紀に入ってからうじて浜名湖, 三河湾, 伊勢湾などで少数の生貝が確認されたが (木村昭・福田, 2012), 東京湾や博多湾などでは干潟の消失や環境悪化によって絶滅したとみられる。瀬戸内海ではかつて全域に「少産」とされていた (稲葉, 1982: 111, no. 345, as *Trigonostoma scalariformis*)。岡山県では窪田 (1962: 86, no. 1254, as *Trigonost. (Scalptia) bocageanum*) が「備前児島湾」から記録し、その標本は福井市自然史博物館に現存する (FKC3260)。また畠田和一コレクションにも「児島郡甲浦村宮ノ浦 [現・岡山市南区宮浦]」(3 個体, ホソオリレボラ 1 個体と混在, #502 (part)), 「[岡山市南区] 小串」(「S [昭和] 9 [=1934].1.13」, 6 個体, #571; 写真) の各標本が含まれている。その後は長く確認されない時代が続いたものの、2004 年、笠岡湾奥部の笠岡市西大島で複数の生貝がゴマフダマなどとともに見出された (OKCAB M9903)。しかしその周辺では有明海からサルボオを毎年大量に運んで干潟に蒔いており、これに伴って本種もその場に移入され、定着した疑いが強い (福田, 2007: 160, as *S. (S.) scalariformis*)。対岸の香川県でも瀬尾・Tanangonan (2014: 100, no. 155, pl. 2, fig. 13, as *Trigonost. scalariformis*) が「2011 年 7 月に [丸亀市] 土器川河口前浜干潟低潮帯の、アマモ場周辺で生貝がアカニシと共に採集された」と報告しつつも、笠岡湾同様に外来個体群である可能性をほのめかしている。その一方で岡山県では、2002 年以降継続的に、岡山市南区米崎沖 (水深 5.2 m, 泥底), 玉野市波張崎沖 (14.3–22 m, 砂底または泥底), 倉敷市水島川崎通一丁目地先 (14–14.5 m, 砂底) などからドレッジや採泥器によって複数の生貝が得られており (M24070, M24170, M24461, M24682), 潮下帯の比較的広範囲に本種が棲息しているのは確かである。それら全てが有明海からの人為的移入に由来するものなのか、あるいは岡山県在来個体群が 1960 年代以後の環境悪化を乗り越えて生き延びてきたのかは、現時点で判断できない。このため今回は稀少性評価を保留して情報不足とする。今後、有明海や三河湾・伊勢湾など他の海域に産する個体との間で、遺伝子解析を行うなどの検討が必要である。

(福田 宏)

## ヘソアキホソオリレボラ

*Trigonaphera stenomphala* Habe, 1961

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 ガクフボラ上科 コロモガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 現存産地が県内に2箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

**形態** 原記載は波部 (1961c: 432–433, 436–438; pl. 24, fig. 12)。ホロタイプの写真は Oyama (1963: *Trigonaphera* pl. 1, fig. 3) 及び Higo *et al.* (2001: 98, fig. G3417, as *Scalptia stenomphala*) にも掲載されている。殻はホソオリレボラに似るがはるかに小形でより細く、殻長約 14 mm、殻径約 8 mm。縦肋は細いが強く龍骨状で、肩角も鋭い。螺脈は縦肋間ではごく低いが、縦肋上に乗って顕著な結節を形成する。殻色は淡黄色、飴色ないし濃赤褐色。臍孔は狭く開き、臍域は強い縞帯で縁取られる。蓋を欠く。軟体は未詳。写真：倉敷市水島川崎通一丁目地先 水深 14–14.5 m 砂底, OKCAB M24683, 福田撮影。殻長 7.5 mm, 殻径 4.0 mm。



**分布** タイプ産地は「愛知県幡豆郡一色町沖」で、同時に「福岡県沖 (玄海灘 [sic])」の産地も挙げられた。ホソオリレボラと混同されがちなせいもあって文献記録は少なく、三重県鳥羽市答志島 (キス網; 松本幸, 1977: 91, 92, no. 20, pl. 10, fig. 13; 1979: 60, no. 1031, as *Trigonostoma (Trigonaphera) stenomphala*), 和歌山県 (北川, 2017: pl. 154, figs 17–18, G3417), 兵庫県神戸市須磨 (池辺・吉田, 2006: 74, no. 2358, as *Trigonost. stenomphala*), 香川県沖 (浚渫砂: 瀬尾・Tanangonan, 2014: 100, no. 156, as *Trigonost. stenomphala*), 広島県三原市 (海砂: 濱村, 2004: 91, text-fig., as *Trigonost. stenomphala*), 山口県宇部市 (浚渫砂: 福田, 1992: 71, pl. 20, fig. 302, as *Trigonost. costifera* [誤同定]), 大分県大分市大在 (濱田保, 2008: 46, no. 1179, pl. 46, fig. G3417, as *Trigonost. stenomphala*), 福岡県～長崎県の玄界灘 (堀川, 1964: 38, no. 591, as *Trigonost. stenomphala*; 高橋・岡本, 1969: 48, no. 372, pl. 8, fig. 21) 等が知られる程度である。国外からの報告例も見当たらない。

**生息状況** 潮下帯の砂底に棲息し、生貝は時折採泥器やドレッジ等で得られ、死殻は海底から浚渫された砂の中に比較的高頻度で見られる (e.g. 福田, 1992; 濱村, 2004; 瀬尾・Tanangonan, 2014)。特に 1970 年代に盛んに砂が採取された瀬戸内海沿岸各県では、コンクリート用や校庭・公園などの砂場に本種の殻が多く含まれていた。その一方で浜辺に打ち上げられることは滅多にないため、ビーチコーミングでは採集しがたい種である。岡山県では本県レッドデータブック前版 (福田, 2010a: 317, as *Scalptia stenomphala*) において、玉野市渋川海岸に打ち上げられていた死殻 (2004 年, OKCAB M8538) に言及したのが従来唯一の文献記録で、この時はまさに打ち上げで採集された点に不自然さを感じたため、他所 (まだ海砂採取の規制がない九州北西岸?) から人為的に搬入された浚渫砂由来でないかと疑い、情報不足とした。また、大垣内 (1968a: 45) が倉敷市塩生のサンドポンプで得たと称する「ホソオリレボラ」は本種だった可能性もあるが、現物を見ない限り断定はできない。ところが 2011 年、倉敷市水島川崎通一丁目地先 (水深 14–14.5 m, 砂底) から採泥器によって生貝 2 個体 (M24683; 写真) が採集された。またそれ以前の 2002 年に実施された玉野市波張崎南東沖 (21.9 m, 砂底) でのドレッジ調査においても、生きた幼貝 1 個体 (M24462) が得られていたと判明した。このため今も本種が県内に棲息していることは確実となったが、生貝が見出されたのは上記 2 箇所にとどまり、それ以外ではやはり波張崎南東沖 (22 m, 泥底) で破片 1 個 (M24071) が見出されたにすぎない。したがって本種はまだ絶滅はしていないまでも、狭い範囲にごく少数が棲息しているのみと考えられる。高度経済成長期の間断ない大規模な海底浚渫や埋め立ての拡張、さらに水質汚染等によって本種の個体群もその規模を大幅に縮小させた可能性が高い。

(福田 宏)

## ミクリガイ

*Siphonalia cassidariaeformis* (Reeve, 1846)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 エゾバイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1846 in 1846–1847: sp. 11, pl. 2, fig. 11, as *Buccinum Cassidariaeforme*)。この種群は形態的に著しく変異に富み、黒田 (1948a–c) は当時までに記載された 50 以上の学名を挙げて個々に論評したが、それらの名のどれが種として成立し、どれが種内変異に過ぎないのかは未解決のままである。Habe (1985b: 8–9, pl. 1, figs 1–6) は A. Adams (1863g: 203–205, nos 10–13, 15–16) が記載した *Siphonalia corrugata* トウマキミクリ, *S. conspersa* トラフミクリ, *S. concinna* シロオビミクリ, *S. ornata* ヤナギノイト, *S. ligata*, *S. grisea* ネズミミクリのタイプ標本を図示し、このうち *S. concinna* のみを別種ミカドミクリ (異名: *S. mikado* Melvill, 1888 348, text-fig. 及び *S. hyperodon* Pilsbry, 1895: 30–31, pl. 2, fig. 6) として区別した以外は全て本種の新参異名としている。また Higo *et al.* (1999: 235–236, no. G2676) は上記のほか *Neptunea aestuosa* Gould, 1860: 326–327; *S. cassidariaeformis* var. *funerea* Pilsbry, 1895: 29, pl. 2, figs 7–8 クロスジミクリ; *S. c. tosana* Y. Hirase, 1908e: 401 (和文), 73 (英文), pl. 41, figs 249–251 トサミクリをも本種の異名とした (*S. c.* var. *funerea* のシタイプは Higo *et al.*, 2001: 77, fig. G2676s に図示されている)。これら以外にも例えば A. Adams (1863g: 203–205, nos 9, 21) の *S. commoda* や *S. nodulosa*, さらに *S. vanattai* Pilsbry, 1905: 103, pl. 3, fig. 12 ヒメミクリ, *S. kikaigashimana* Y. Hirase, 1908e: 400–401 (和文), 73 (英文), pl. 42, figs 260–262 キカイミクリなど本種との差異が不明瞭な「種」が存在するため、分子系統解析を含めた包括的な再検討が必要である。殻長約 40 mm, 殻径約 25 mm, 紡錘形で螺塔は高まり、厚く堅牢。体層はやや膨らむ。殻表に太い畝状の縦肋を等間隔に並べ、肩部で結節となって角張る。螺状彫刻は個体(群)間で変異幅が極端に広く、太く明瞭なものから細密なもの、微弱でほぼ平滑な場合もある。色彩も多様で、淡褐色の地に明るい赤褐色の色帯や不規則な斑紋をもつもの、螺肋のみ白くそれ以外は黒褐色のもの、全体が橙色や白色のものなどが現れる。殻口は広く、縦長の木の葉形で、外唇は多少肥厚するが反転はしない。内唇・軸唇の滑層は白くて光沢が強い。前管溝は短くて幅広く、左側へ彎曲する。蓋は殻口長の半分以下で、縦長の種子形、茶褐色の角質で厚く、核を前端にもつ。頭部・腹足の背面は灰色またはベージュ色の地に多数の黒斑と白点を散在する。頭触角は細くて短く、途中の外側に眼がある。水管は太く明瞭(高重, 2019: 175, text-figs に生体写真あり)。歯舌を波部 (1943: 70, no. 4, pl. 3, fig. 3) が図示している。

写真: 備前〔倉敷市〕下津井, 畠田和一コレクション #842, 福田撮影。殻長 29.5 mm, 殻径 15.8 mm。



**分布** タイプ産地は「—?」(不詳)。現時点で異名とされている *Siphonalia corrugata* は「Kino-O-Sima」(和歌山県東牟婁郡串本町紀伊大島), *S. conspersa*, *S. ornata*, *S. ligata* はそれぞれ単に「Japan」, *S. concinna* は「Kuro-Sima」(鹿児島県鹿児島郡三島村黒島), *S. grisea* は「Simidsu」(静岡県静岡市清水区), *Neptunea aestuosa* は「Kagosima」(鹿児島), *S. cassidariaeformis* var. *funerea* は「Satsuma」(薩摩; =鹿児島県), *S. c. tosana* は「土佐〔高知県幡多郡大月町〕柏島」から記載された。本種と識別できない可能性がある *S. commoda* は「Tsaulian」(恐らく Dalian; 中国遼寧省大連市), *S. nodulosa* は「Mino-Sima; 63 fathoms」(山口県萩市見島沖 63 尋), *S. vanattai* は「Yakushima, Ōsumi」(鹿児島県屋久島), *S. kikaigashimana* は「大隅〔鹿児島県大島郡〕喜界島(鮮新層(?)化石)」をタイプ産地とする。陸奥湾以南(鈴木庄, 1979: 179, no. 177)の太平洋・日本海両岸に九州まで分布し、沖縄、台湾、朝鮮半島、中国北部からも知られる(A. Adams, 1863g; Kuroda, 1941: 115, no. 627; 黒田, 1960: 29, no. 850; 関他, 2004: 227, fig. 605-1-3)。本種を含む *Siphonalia* A. Adams, 1863 は糸魚川 (1953: 213–217, fig. 4) が「ある意味で日本特産の貝」と述べた通り、日本とその周辺を主たる分布域とする。

**生息状況** 外洋と内湾を通じて潮間帯下部から潮下帯の砂底に棲む。本来は多産し、肉食性(清水利, 1976: 50)のため蝦籠で一網打尽に漁獲して食用に供されていた。しかし近年は各地で激減が報じられ、池田等他 (2001: 46, fig. 43) は相模湾で「底刺網によって 1970 年代には大量に採集されたが、最近ではほとんどみられなくなった」と述べ、その原因を「有機スズ化合物によるインボセックス」に求めた。玄界灘に面した福岡県福岡市(現・福津市)でも魚住 (1998: 78–79, no. 164, fig. 42-1) が「1970 年代半ばを境に激減」と記している。瀬戸内海でも稲葉 (1982: 106, no. 299) の時点では全域に多産するとされていたのに、その後の濱村 (2004: 86, text-fig.) は広島県芸南地方において「1970 年代前半まで全域」に見られたのに対し、「現在、どこも確認できない」と述べた。香川県でも畠山 (1977: 9) は三豊海域で「多い」としたが、近年の瀬尾・Tanangonan (2014) には言及すらない。岡山県では大垣内 (1968a: 46) が倉敷市塩生のサンドポンプで記録し、岡大玉野臨海 (1978: 161) の目録にも掲載されている。畠田和一コレクションには「備前〔倉敷市〕下津井」(6 個体, #842; 写真), 「〔浅口市〕寄島」(「〔昭和〕 31 [= 1956].11.21.」, 1 個体, #1776; 「昭和 35 [= 1960].12.4. 文比古と伴に [sic] 2557」), 「備中〔笠岡市〕白石島」(1 個体, #848) の各標本が現存し、かつては確かに少なくなかったことを今に伝えている。このうち下津井産個体は殻口内の光沢が強く、奥からいまだに肉片が出てくることから、港に揚げられた漁層中から生貝を得たものであろう。しかしその後は他県と同様に生貝が全く見出されなくなり、近年はかろうじて、笠岡市夏目の砂浜打上、及び同市五番町の漁港の漁層から、いずれも著しく古い化石様の死殻計 3 個 (2002・2018 年, OKCABM5606, M28935) が得られたほか、玉野市波張崎沖(水深 14.3 m, 砂底)でのドレッジによって、体層の一部のみであるものなんとか本種と同定可能な破片 4 個 (M24169) が採集されたのみである。それらを見る限り、現在の岡山県の海底に本種が棲息している雰囲気は全く感じられない。恐らく上記池田らの推測通り、インボセックスによってヤツシロガイやオニサザエ等ともども、1970 年代以降に絶滅したと考えられる。

(福田 宏)

## トウイト

*Siphonalia fusoides* (Reeve, 1846)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 エゾバイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1846 in 1846–1847: sp. 9, pl. 2, fig. 9, as *Buccinum Fusoides*)。 *Siphonalia longirostris* Dunker, 1882: 16, pl. 1, figs 13–14 及び *S. semiplicata* Pilsbry, 1896: 21–22 は新参異名。別名ウスイロミクリ、マルミクリ。殻長約 50 mm, 殻径約 27 mm, ミクリガイに似るが縦肋が発達せず、肩部に結節を全く生じないか、生じたとしてもごく弱い。細く明瞭な螺肋を密に巡らせる。螺層はよく膨らんで丸みを帯び、縫合の縊れも明瞭。殻表は黄褐色で、微かな茶色の斑点を散らすこともあるが、変異には乏しい。前管溝は多少彎曲する程度。蓋と頭部-腹足はミクリガイとほぼ同様 (奥谷, 2017: 929, pl. 218, fig. 5 に生体写真あり)。歯舌を波部 (1943: 70, no. 5, pl. 3, fig. 4) と黒田・波部 (1954: 89, 96, fig. 17) が図示している。雌は自らの殻の腹面に透明な膠質の卵嚢を産み付け、その付着面は侵蝕されて「痘痕様」の凹みとなる (瀧巖, 1934: 331–332, 表紙画; 波部, 1944c: 198, no. 10)。

写真： [浅口市] 寄島, 畠田和一コレクション #2596, 福田撮影。殻長 40.4 mm, 殻径 21.3 mm。



**分布** タイプ産地は「—?」(不詳)。異名である *Siphonalia longirostris* は「Mare Japonicum」(日本の海), *S. semiplicata* は「Yokohama, Japan」(横浜) から記載された。最北の産地は北海道小樽市高島 (木下虎, 1937: 13, no. 67) で、北海道南部・東北地方から複数回記録があり、北日本でも稀ではない ([平瀬興], 1908a: 5–6, pl. 24, figs 13–15, as *S. fusoides* var. *longirostris*, *S. sp.*; 黒田・木下虎, 1951: 19, no. 297; 波部・伊藤潔, 1965: 79, pl. 30, fig. 2; 石山, 1970: 176–177; 鈴木庄, 1979: 179, no. 178; 堀越他, 1979: 63; 戸羽, 2009: 41, 42, fig. 69)。太平洋・日本海両沿岸とも九州まで分布するが、南西諸島からは記録がない。国外は朝鮮半島, 中国, ベトナムから知られる (權他, 1993: 85, figs 39–25–26; 302; Hylleberg & Kilburn, 2003: 81, as *S. fusiodes* [sic]; 関他, 2004: 227, fig. 606–1–2; Li & Ma, 2004: 95, pl. 057, fig. K; 张, 2008: 203, text-figs)。

**生息状況** ミクリガイと同様に潮間帯下部から潮下帯の砂底または砂泥底に棲むが、内湾では本種の方がより多く、例えば瀬戸内海周防灘では本種は多産していたものの、ミクリガイはほとんど見られなかった。かつて本種は底引網などで頻繁に混獲され、漁港に多数が転がっていた。しかしミクリガイ同様 1970 年代を境に各地で激減し、やはり有機スズに起因するインボセックスに罹患して激減したと考えられている (池田等他, 2001: 46, fig. 42)。広島県芸南地方でミクリガイの消滅に言及した濱村 (2004: 86, text-fig.) は、本種も仁方・下蒲刈・蒲刈各町でことごとく「古い死殻」しか見られなくなったと記している。香川県でも畠山 (1977: 9) は三豊地域に「普通」としているのに対し、最近の瀬尾・Tanangonan (2014) は本種の産出に触れておらず、最近 40 年間でほぼ消滅したと考えられる。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 161) の目録にミクリガイと並んでその名が見えるのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクションに「[浅口市] 寄島」(1 個体, #2596; 写真) 及び「[笠岡市] 大飛島」(1 個体, #838) の両標本が現存する。両者とも殻口内の光沢が失われており、死殻を採集したものとみられ、またミクリガイよりロット数・個体数とも少ないことから、かつての岡山県では本種はミクリガイほど多産しなかったものと推測される。近年もミクリガイが破片や極端に古い死殻だけは得られているのと対照的に、本種はかつて棲息していた痕跡すら、一切見出すことができない。ミクリガイの個体群存続がほぼ絶望視される現状では、本種が今も岡山県内に棲息している可能性はより一層低いと考えざるをえない。

(福田 宏)

## コハナマツムシ

*Aesopus japonicus* Gould, 1860

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 タモトガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出していた証拠の標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Gould(1860: 383) で、ホロタイプの写真は Johnson(1964: 95, pl. 12, fig. 9) に掲載されている。 *Parviterebra raritans* Yokoyama, 1922: 36, no. 28, pl. 1, fig. 25 は新参異名で、原記載の図は Is. Taki & Oyama (1954: 21, pl. 21, fig. 25) 及び Oyama (1973: 42, pl. 14, fig. 6a–b) にも転載された。殻長約 7 mm, 殻径約 2 mm, 前後に細長い砲弾形で厚く堅牢、螺層はほとんど膨らまず周縁は直線的で、縫合の縊れも弱い。胎殻は大きくドーム形で、殻頂は尖らず丸い。殻表は明るい赤褐色の個体が多く、上部螺層では明瞭な縦肋を等間隔に並べるが、体層へ近付くにつれて弱まる。細かく波打った螺溝を多数巡らし、殻底では間隔が広がる。殻底は多少縊れるが個体変異が大きく、ほとんど縊れず前端まで輪廓が直線的な場合もある。殻口はやや広く、縦長の木の葉形で、外唇は肥厚し内側に弱い襞を等間隔に並べる。内唇・軸唇の滑層は狭く、光沢が強い。水管溝は短くて幅が広く、前端は截断状をなす。蓋と軟体は未詳。

写真： 備中〔笠岡市〕白石島，畠田和一コレクション #4144，福田撮影。殻長 6.8 mm, 殻径 2.0 mm。



**分布** タイプ産地は「Kagosima Bay, at 5 fathoms, sandy bottom」(鹿児島湾, 5 尋, 砂底)。 *Parviterebra raritans* のタイプ産地は「Otake」(千葉県成田市(旧印旛郡八生村)大竹, 後期更新世印旛層群の化石)。太平洋側の最北の記録は千葉県南房総市白浜町(清水利, 2001: 59, no. 1000), 日本海側は男鹿半島(鈴木庄, 1979: 176, no. 160, pl. 7, fig. 113) であるが、報告例の極めて少ない種であり、具体的な産地は山形県鼠ヶ関(鈴木庄, 1979), 相模湾(堀越他, 1963: 59), 神奈川県横須賀市長沢(村岡・内藤, 1991: 67, no. 0605), 八丈島(西村和, 1999: 65, no. 940), 愛知県三河一色(竹之内, 2001: 51; 西浩他, 2012: 15, no. 2360, pl. 14, fig. 3), 三重県伊勢湾答志島(松本幸, 1977: 91–92, pl. 10, fig. 9; 1979: 49, no. 828), 和歌山県(波部, 1961a: 56, pl. 28, fig. 20), 瀬戸内海備讃瀬戸と安芸灘(稲葉, 1982: 104, no. 281), 香川県(瀬尾・Tanangonan, 2014: 99, no. 136), 高知県沖ノ島(波部・増田, 1990: 47, no. 0723), 長崎県西海市大瀬戸町(堀川, 1964: 31, no. 471), 鹿児島県屋久島屋久町栗生(池辺・吉田, 2006: 62, no. 1813), 奄美大島(黒田, 1928: 62, no. 770; 横山, 1931: 43, no. 1475; 坂田, 1999: 24; 池辺・吉田, 2006), 沖縄県(岡田他, 1959: 165, no. 664; 黒田, 1960: 28, no. 838), 小笠原諸島(Fukuda, 1995: 18, no. 936, pl. 61, fig. 936), 台湾(波部, 1961a) などが知られている程度である。

**生息状況** 潮間帯下部から潮下帯(水深約 20 m) の岩礁に棲むとされるが、生貝の記録が少ないので棲息状況の詳細は明らかでない。伊勢湾答志島ではキス網で採集されている(松本幸, 1977)。瀬戸内海では上記稲葉(1982) は「少ない」とし、最近香川県から本種を報告した瀬尾・Tanangonan(2014) も浚渫砂からのみ得られたと記すとともに、調査対象の香川県沿岸を通じて「ほとんど見られない」種の一つとしている。岡山県でも文献記録はないが、畠田和一コレクションに「備中〔笠岡市〕白石島」産の 1 個体(「黒田〔徳米〕氏同定品」, #4144; 写真) が含まれ、ラベルには黒田の筆蹟で「*Aesopus japonicus* Gould」と本種の学名が正しく綴られている。殻の状態から判断して恐らく浜辺に打ち上げられた死殻とみられ、殻口外唇が大きく破損し、殻表も多少摩滅しているものの、褪色はさほど見られず胎殻も残っており、採集された時点で死後長時間が経過していたとは思われない。このため当時は白石島附近に棲息していたと考えられるが、その後は県内全体でも一切本種は見出されておらず、2018 年 7 月に白石島で行った調査の際にも全く確認できなかった。本種に限らず畠田和一は白石島で多様な種を得て標本を遺しているが、その大半はもはや見ることができず、1960 年代以降に激滅または完全に消滅したとみるほかない。

(福田 宏)



## カゲロウマツムシ

*Pyreneola semipicta* (Sowerby III, 1894)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 タモトガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。絶滅した可能性もある。

**形態** 原記載は Sowerby III (1894: 154, no. 5, pl. 12, fig. 3, as *Columbella* (*Mitrella*) *semipicta*) で、シタイプの写真が Yen (1942: 228, pl. 22, fig. 148, as *Pyrene semipicta*) に公表された。*C. delineata* Thiele, 1925: 177(143)–178(144), pl. 31(19), fig. 10 は新参異名で、レクトタイプの写真を Monsecour & Köhler (2006: 288–289, fig. 15) が示している。奥谷 (1986: 142, 143, unnumbered fig.) が *Pyreneola semiplicata* と誤った学名を公表して以来、種小名を *semiplicata* とした例が蔓延しているが (e.g. 肥後・後藤, 1993: 203, no. 2931; 西村和, 1999: 64, no. 921; 土屋, 2000: 433, pl. 216, fig. 53; 清水利, 2001: 59, no. 992; 池辺・吉田, 2006: 62, no. 1794; 竹林・和田年, 2010: 16, no. 162), そのような名は実在しない。しかも奥谷 (1986) とそれに先立つ奥谷・波部 (1975a: 115, unnumbered figs; 183–184, as *Pyrenola* [sic] *semipicta*) の図示個体は殻表の紋様が斜めに傾いている点で本種でなく、同属の別種 *Pyreneola abyssicola* (Brazier, 1877) ミナミカゲロウマツムシである。Sleurs (1987: 53–56, figs 12–13, pl. A, fig. 2; pl. D, fig. 2) は本種を後種の異名としたが、Monsecour & Köhler (2006) が反駁した通り両者は明確に識別できる別種である。別名カゲロウムギガイ。殻長約 5 mm, 殻径約 2.2 mm, 紡錘形で厚く、紡錘層はさほど膨らまず縫合の縊れも弱い。殻頂は鈍く尖る。殻表は光沢が強くほぼ平滑、各螺層の肩部及び殻底に赤褐色の直線的な縦縞が螺状に並び、肩部では白斑が等間隔に現れて縦縞を消す。体層中央は無色無紋。殻底は前方へ向けて緩やかに狭まり、低く太い螺肋を巡らす。殻口は狭く縦長で、外唇はさほど肥厚せず単純。内唇・軸唇の滑層は狭く、光沢が強い。水管溝は短くて幅広い。蓋と軟体は未詳。

**分布** タイプ産地は「at the Port of the Harbour of Hong-kong, at depths varying from forty to sixty feet」(香港の港, 40–60 尋の間)。異名である *Columbella delineata* は「Station 193 [0°30.2' nördl. Br., 97°59.7' östl. L., 132 m Tiefe, südl. von Pulo [= Pulau] Nias im Nias-Süd-Kanal] stimmt mit einigen aus der Straße von Malakka überein」(インドネシア・スマトラ島中央部西岸のニラス島南部沖, 及びマラッカ海峡) から記載された。太平洋側は千葉県館山湾以南 (清水利, 2001), 日本海側は新潟県佐渡真野湾以南 (伊藤勝, 1978: 207, no. 78) から知られ、伊豆諸島三宅・八丈両島 (西村和, 1999), 奄美大島 (堀越他, 1963: 58, as *Pyrene* (*Pyreneola*) *semipicta*) から記録がある。国外は台湾 (Kuroda, 1941: 114, no. 612, as *Mitrella* sp. (*abyssicola* Brazier, var. ?)), 中国南部～タイ西部 (Monsecour & Köhler, 2006) に分布する。韓国済州島からも記録があるが (関他, 2004: 238, fig. 652; 239; Noseworthy *et al.*, 2007: 81), 関他が図示した個体は本種でなく *M. bicincta* (Gould, 1860) ムギガイであり、正しく本種に同定できる個体が同国で得られているか否かは定かでない。

**生息状況** 主として太平洋・日本海の外洋に面した海岸において、潮間帯下部から潮下帯 (水深約 30 m) の岩礁に棲息する。死殻が浜辺へ時折打ち上げられるが、どの地域でも多産する種ではなく、特に瀬戸内海での記録は極めて少ない。岡山県では大垣内 (1968a: 45, as カゲロウマツムシ [sic]) が倉敷市塩生のサンドポンプで得たと報告しているのが唯一の記録である。そこでは同時に *Sandalia triticea* (Lamarck, 1810) ツグチガイ, *Gyroscaia lamellosa* (Lamarck, 1822) ネジガイ, アサジガイなど現在の岡山県では全く確認できない種も見出されたと記されており、1960 年代までの倉敷市周辺の潮下帯に見られた貝類相は現在のそれと著しく異なっていたことを示している。これ以降本種は県内で一切の確認例がない。今回は岡山県産の標本を実見できなかったため、暫定的に情報不足とするが、高度経済成長期以後に絶滅してしまった可能性も否定できない。

(福田 宏)

## ナガニシ

*Fusinus perplexus* (A. Adams, 1864)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 イトマキボラ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1864c: 106, no. 7, as *Fusus perplexus*)。 *F. nodosoplicatus* var. Lischke, 1869: 34; 1871: pl. 3, fig. 6 に対して命名された *F. n. var. lischkii* [sic] Grabau, 1904: 32–33, pl. 3, fig. 5 及び *F. p. var. nagasakii* Grabau, 1904: 33–36 は新参異名。 Callomon & Snyder (2004: 14–18, figs 2a–b, 3a–b, 4a–b, 5–10, 17a–b; 2019: 8–13, 103–104, figs 4–23) が殻と蓋の形態を詳細に再記載し、レクトタイプの写真も示している。殻長約 130 mm, 殻径約 40 mm, 前後に細長い紡錘形で螺塔が高く、水管は著しく伸長して殻長のおよそ 1/3 を占める。さほど厚くはないが堅牢で、螺層はよく膨らみ縫合は明瞭に縊れる。殻表に明瞭な螺肋を巡らし、肩部で結節列をなす個体もある。若い個体では強い畝状の縦肋を持つが、成長とともに弱まる場合が多い。殻表はオリーブ色の剥離しやすい殻皮で覆われる。蓋は角質で厚く傘形で、核は尖った前端に位置する。生時の軟体は鮮やかな朱色を呈する (高重, 2019: 182, 183, text-figs に生体写真あり)。波部 (1944c: 199–200, no. 15, fig. 5; 1945a: 4, no. 21, fig. 16) が歯舌と卵嚢を图示している。なお Callomon & Snyder (2019) は奥谷・土屋 (2000: 513, pl. 255, fig. 35) の「ハシナガニシ *Fusinus longicaudus* (Lamarck, 1816)」は本種であるとしているがこれは誤りで、その図示個体は本種ではなくハシナガニシとして区別すべきである。一方で、奥谷・土屋 (2000: 513, pl. 255, fig. 41) の「サイズチナガニシ *Fusinus becki* (Reeve, 1848)」はナガニシに他ならない。  
写真： [浅口市] 寄島, 畠田和一コレクション #2561, 福田撮影。殻長 56.8 mm, 殻径 16.8 mm。



**分布** タイプ産地は「Tatiyama」(千葉県館山市)。*Fusus nodosoplicatus* var. *lischkei* 及び *F. perplexus* var. *nagasakii* のタイプ産地はそれぞれ「Japan Sea; Yenosima, Japan」(日本海; 神奈川県藤沢市江ノ島) 及び「Nagami Bay」(恐らく相模湾)。最北の記録は北海道南部の「噴火灣, 津軽海峡, 渡島江差」(木下虎・諫早, 1934: 10–11, no. 58, pl. 8, fig. 57; 木下虎, 1937: 15, no. 82) で、その後黒田・木下虎 (1951: 20, no. 307) や石川政 (1953: 13, no. 33, pl. 15, fig. 3, 「久根別, 銭亀沢」), 波部・伊藤潔 (76–77, pl. 29, fig. 1) も北海道で記録している。またそれ以前に、Schrenck (1867: 417–419, no. 78) が「der Bai von Hakodate」(函館湾) から報告した「*Tritonium* (*Fusus*) *spectrum* Adams et Reeve」を黒田・木下虎 (1951) は「カドバリナガニシ」と解釈しており、これも実際には本種だった可能性がある。日本海側最北の記録は男鹿半島 (西村正・渡部景, 1943: 68, no. 130) で、太平洋・日本海両岸とも九州南部まで広く分布し、国外は韓国から知られる (權他, 1993: 87, fig. 40-3; 307–308; 関他, 2004: 249, fig. 686)。

**生息状況** 内湾・外洋を問わず潮下帯から漸深海底にかけて (水深 10–200 m) の砂底または砂泥底に産し、生貝は底引網などで得られ、死殻は頻りに海岸へ打ち上げられる。食用目的で魚市場や鮮魚店店頭に並ぶこともあれば、漁港に廃棄された漁屑中に見る機会も多い。他の海域では現在も普通に見られる印象が強く、環境省や他の都道府県のレッドリストが本種を掲載対象とした例はない。ただし木村昭 (2017: 8, fig. 1-12) は三河湾・伊勢湾において「ほとんど生貝が確認できない期間があった」と記しており、実際には少なくとも一部の海域で減少傾向にある可能性が否定できない。岡山県では畠田 (1935: 236, no. 62) は本種が 1930 年代に「[岡山市南区] 小串, [同市東区] 寶傳, [浅口市寄島町] 安倉」で「ヨナキ」, 「[倉敷市] 下津井, [笠岡市] 伏越, [同市神島] 外浦」で「ヨナキニシ」という方言で呼ばれていたことを記録しており、当時は地元住民にも存在が広く認知されていたことが窺える。岡大玉野臨海 (1978: 161) 及び牛窓臨海 (刊行年不詳: 48) の目録にも種名が挙げられている。その一方で現存する標本はわずかしがなく、畠田和一コレクションに含まれる「備中寄島」(「黒田 [徳米] 氏同定 1956.2」, #996), 「寄島」(「[昭和] 31 [=1956].11.21」, #1768), 「寄島」(「昭和 35 [=1960].12.4」, #2561; 写真) の 3 ロット (各 1 個体) にとどまり、これら全てが殻皮も色彩も失われて化石様に白化した古い死殻である。このため戦前までは本県でもごく普通に見られたものの、1950 年代には既に生貝を得るのが容易でなくなっていた可能性もある。その後は県内での消息が不明となり、少なくとも 21 世紀に入ってからの 20 年間では死殻や破片すら一切見出されることがない。また本県の対岸の香川県では畠山 (1977: 9) は当時の三豊海域で本種が「普通」に見られたと記録しているのに対し、2009–2013 年に同県で調査を実施した瀬尾・Tanangonan (2014) は本種を確認しておらず、やはり岡山県と同様に消滅またはそれに近い状況にあるらしい。これらを総合すると岡山県とその近隣海域での本種は、棲息環境や食性などが共通するヤツシロガイ, カズラガイ, トウイトなどと同時に戦後激減し、遂には絶滅に至ったと考えられる。今なお本種が普通に見られる地域での状況を考えるとこれは驚愕すべきであるが、岡山県では高度経済成長期から 20 世紀末にかけての海岸線の埋め立てや護岸など海岸線改変の進行, 工業・生活排水による水質汚濁, 海砂採取による海底陥没と有毒な貧酸素水の発生, 船底塗料に用いられていた有機錫に起因するインボセックス (その被害が最も顕著に現れる新腹足目に本種は属す) など複数の要因が同時期に重なって、県内の本種の個体群は消滅し、近隣他県からの新規加入にも依然として成功していないものと考えられる。

(福田 宏・木村昭一)

## テングニシ

*Hemifusus tuba* (Gmelin, 1791)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 テングニシ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 従来、国内文献の大半が、肩部の結節が比較的小さく、殻形が前後に細長い紡錘形となるものを本種とし、結節が著しく強く張り出すことで殻形が菱形に近づき、前管溝が太い個体をオニニシ(ツノニシ)と呼んで区別してきた(e.g. 奥谷, 2017: 940, pl. 230, figs 1–2, as *Hemifusus tuba*, *H. crassicaudus* [sic])。しかし Alf et al. (2002: 200–201, figs 5–24, as *Volema* (*H.*) *crassicauda*) が様々な産地からの個体を比較して明示した通り、両者は連続的で明確に識別できず、同一種の変異と見なされる。またそもそも、狭義のテングニシ型に対して現在使用されている学名 *Murex tuba* Gmelin, 1791: 3554, no. 103 は、Chemnitz (1780: 171, pl. 143, fig. 1333) の図示個体に対して与えられたものであるが、その図はむしろオニニシ型である(Alf et al., 2002: 207–208, figs 45–48, 52 は同じ図を *V. (H.) cochlidium* (Linnaeus, 1758: 753, no. 482, as *M. Cochlidium*) アツテングニシと解釈したが、それには無理があり賛成できない)。 *Pyrula crassicauda* Philippi, 1849: 98, no. 3 はやはりオニニシ型であり、本種の新参異名である(Kobelt, 1875 in 1884–1880: 41–42, no. 15, pl. 5, fig. 1; pl. 7, fig. 1, as *P. tuba* を参照)。日本産の本種を最初にテングニシとオニニシに分けた Pilsbry (1895: 27) と平瀬與 (1907c: 358–359, figs 甲–丙) は、前者を *H. ternatanus*、後者を *H. tuba* と同定し、この扱いが現在まで影響を及ぼしている。しかし *H. ternatanus* (Gmelin, 1791: 3554, no. 197, as *M. ternatanus*) (タイプ産地は「ad littora insulae Ternate」(インドネシア、テルナテ島の海岸))は現在ナガテングニシの和名で知られる日本の領土内に産出しない別種で、本来は無関係な種との混同が原因でテングニシとオニニシの不必要な細分が定着してしまったと言える。殻長約 200 mm、殻径約 85 mm、前後に細長い紡錘形、螺塔は短く、体層が殻長の約 8 割を占める。厚く堅牢で、螺層はよく膨らみ縫合は強く溢れる。殻表は無紋の肌色で、濃いオリーブ色の天鵞絨状殻皮に覆われるが、この殻皮は脆くて剥離しやすい。後成層全体に明瞭で低い螺肋を密に巡らし、肩部に強い結節の螺状列を生じる。個体(群)によってはこの結節が著しく強大で鋭く尖り、間隔が広くて数が少ない(オニニシ型)。殻口は縦長で広く、外唇はやや肥厚する。内唇～軸唇は単純。殻口内は肌色で光沢が強い。水管は太く、前方へまっすぐ伸長し、前端は截断状。蓋は角質で著しく厚い木の葉形、核は前端に位置し、成長同心肋が明瞭。頭部-腹足の地色は灰色であるが、背面の大部分は黒褐色の色素斑で覆われる。頭触角は細くて尖り、長さは中庸。水管は太く長い。グンバイホオズキと呼ばれる角質の卵嚢を 5–6 月に硬い基質上に産み付ける(波部, 1944b: 190–191, no. 3, figs 8–10, as *H. ternatanus*; 奥谷, 2017 に産卵中の生体写真)。

写真： [浅口市] 寄島, 1960 年 12 月 4 日, 畠田和一コレクション #2556, 福田撮影。殻長 130.0 mm, 殻径 64.3 mm。



**分布** タイプ産地は「rurus in Sina」(中国, 稀)。異名 *Pyrula crassicauda* も「China」(中国)から記載された。A. Adams (1864c: 105, no. 1) 及び Schrenck (1867: 400, no. 67; 899, as *P. tuba*) は別々に「Hakodadi」「der Bai von Hakodate」(ともに函館)から本種を記録したが、それ以降北海道～東北太平洋岸では再発見されていない。太平洋側は房総半島以南(清水利, 2001: 64, no. 1003)、日本海側は男鹿半島以南(西村正・渡部景, 1943: 68, no. 121; 鈴木庄, 1979: 184, no. 196; both as *Hemifusus ternatanus*)、九州まで広く知られる。南西諸島では Pilsbry (1895: 168, as *H. ternatanus*, with syn. *P. tuba*) が「Kudaka Is. Native name, Uni. 4 live shells」(沖縄県南城市久高島, 現地方言はユニ。生貝 4 個体)を記録し、黒田 (1960: 30, nos 884–885, as *P. (H.) tuba*, *P. (H.) ternatana*) も沖縄群島の目録に含めているが、近年の記録はない。国外は朝鮮半島, 中国, 台湾を経て南限は恐らくベトナム周辺である(Kuroda, 1941: 117, no. 658; Alf et al., 2002; Hylleberg & Kilburn, 2003: 88, as *H. crassicaudus* [sic], *H. tuba*; 関他, 2004: 249, fig. 682-1–3, as *Pugilina* (*Semifusus*) *tuba*; Li & Ma, 2004: 95, pl. 058, fig. E; 张, 2008: 209, text-figs; both as *H. crassicaudus* [sic]; 张他, 2012: 98, no. 83, text-figs; 杨他, 2013: 98–101, figs 357, 359, as *H. crassicaudus* [sic], *H. tuba*; 郑他, 2013: 251, text-figs; 王他, 2016: 55, nos 155–156, text-figs, as *H. crassicauda*, *H. tuba*)。インドネシアを分布域に含めた文献が多いがそれはアツテングニシの産地であり、本種は同国周辺には産出しないと思われる。

**生息状況** 外洋・内湾を通じて潮間帯下部～潮下帯の砂底に産し、本来は干潟でも生貝を確認できた種で、1970 年代前半までは食用目的で頻りに漁獲されていた。しかしその後オニサザエ、バイ等とともに激減し、特に本種はバイ同様のインボセックス発症が明確に報じられ(堀口, 1998: 548; 2000: 61, 62; 2007: 232)、最大の減少要因はそこにある可能性が高い。ただし太平洋や日本海など外洋の個体群は壊滅まで至らず(e.g. 池田等他, 2001: 48, fig. 46; 福田・木村昭, 2012: 72, text-figs a–b, as *Pugilina* (*Hemifusus*) *tuba*)、博多湾や唐津湾などでは 2010 年代に入って市場へ頻りに出回るほど漁獲され、回復傾向が認められる。対照的に瀬戸内海中央部など湾奥では惨憺たる状況で、瀬尾・Tanangonan (2014: 100, no. 151, as *P. (H.) tuba*) は香川県において「殻皮が完全に失われた死殻を 1 個体のみ確認した。潮下帯の生息状況は不明」と記した。岡山県では戦前、県内の貝類方言をまとめた桂 (1932: 15, fig. 15) が、当時の「和氣郡[現・備前市]伊里村」で「ヨナキ」と呼ばれていた種として描いた絵は明らかに本種である。岡大玉野臨海 (1978: 161) の目録にも登載され、また畠田和一コレクションには「備前[岡山市南区]小串」(1 個体, #1031), 「[倉敷市玉島黒崎]沙美」(1 個体, #1033), 「[浅口市]寄島」(「昭和 35 [= 1960].12.4. 文比古と伴に [sic], 2 個体, #2556; 写真), 「[笠岡市]白石島」(1 個体, #1032) の各標本が現存する。その多くは殻皮や殻口内部の光沢がよく保存され、一部は蓋も伴っているため入手時は生貝であったとみられる。しかしその後は目にする機会がほぼ失われ、漁業関係者も「見なくなった」と口を揃える(2018 年笠岡市での聞取)。潮下帯深部にはまだ少数が生き残っている可能性も残るが、絶滅に限りなく近い状態にあることは確実である。

(福田 宏・久保弘文)

## ウネハナムシロ

*Nassarius variciferus* (A. Adams, 1852)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 新腹足目 エゾパイ上科 オリレロフパイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は A. Adams (1852 in 1852–1853: 108, no. 20, as *Nassa varicifera*) で、Reeve (1853 in 1853–1854: sp. 118, pl. 18, fig. 118–b) に図示され、その図は Tryon (1882: 31–32, pl. 10, fig. 91, as *N. [(Zeuxis)] varicifera*) 及び [平瀬興] (1908b: 152, text-fig. 100, as *N. [(Z.)] varicifera*) に転載された。タイプ標本の写真を Yen (1942: 232, pl. 23, fig. 165, as *Z. varicifera*), Cernohorsky (1974: 62–63, 64, fig. 19, as *Nassarius (Varicinassa) varicifera* [sic]; 1984: 172–173, pl. 35, figs 8–9) と Higo *et al.* (2001: 86, fig. G2967, as *V. varicifera*) が公表している。Pilsbry (1895: 36–37) は本種の「変種」として *Nassa (Z.) v. var. fraterminor* を記載したが、そのタイプ標本 (ANSP, 2019: #70704 に写真あり) を検討した Cernohorsky (1984: 181, pl. 38, figs 5–6) がいう通り、その名は本種でなく *Reticunassa fuscolineata* (E.A. Smith, 1875) フカボリヒメムシロの異名である。殻長約 25 mm, 殻径約 11 mm, 前後に細長い紡錘形で螺塔が高い。厚く堅牢で、螺層はやや膨らみ、縫合は多少溝状に窪んで階段状となる。各層の殻表に約 20 本の細く明瞭な縦肋を等間隔に並べ、縫合直下で螺溝に切られて顆粒列を形成し、螺層の中央部では螺溝は弱い、殻底では強まり、縦肋と交わって格子目状となる。螺層上に太い縦肋をもつ点が本種特有の際立った特徴で、これがどこに現れるかは個体ごとに異なる。殻表は淡黄褐色の地に 2–3 本の褐色螺状帯を巡らす。殻口は種子形で、外唇は甚だ肥厚してその背面側は太い縦肋となり、内側には 6–8 個の鈍い歯状突起を並べる。内唇～軸唇は光沢ある滑層が大きく発達する。内唇後端に強い突起を 1 個有し、それより前方に 7 本前後の襞をもつ。殻口内面は殻表の褐色螺状帯が透過して見える。前管溝は短く幅広い。蓋は黄色い半透明の角質で短楕円形、殻口より一回り小さく、前縁は粗い鋸歯状で、成長同心肋が明瞭。頭部～腹足はベージュ色で足の背面は無紋。足は長方形で、前端は左右に広がる。後端には一対の細長い外套触角をもつ。頭触角は細長くて針状に尖り、水管は太くて長く、それらの表面は黒斑を散在する (小菅丈他, 1998: 68–69, fig. 1A–B; 福田, 2000: 115–116, 136, fig. 5.9a–b に生体写真あり)。波部 (1946a: 193, no. 4a, fig. 19) は歯舌を図示するとともに本種をタイプ種として *Varicinassa Habe*, 1946 を創設し、これは現在亜属として使用されることが多い。  
写真： 児島湾, 古川田溝コレクション #43.15, 福井市立自然史博物館所蔵, 福田撮影。殻長 26.1 mm, 殻径 12.3 mm。



**分布** 原記載での産地は「Eastern Seas」(東洋の海)であるが、タイプ標本のラベルには「Shanghai fide Mr. Hanley」(Hanley 氏によれば上海産)と追記されている (Cernohorsky, 1974)。Cernohorsky (1984) は「Peitaho [sic], north Chihli coast, China」(中国河北省秦皇島市北戴河区)をタイプ産地として後次指定した。19 世紀後半以後、中国北部や韓国南西部から相次いで報告され (Debeaux, 1863: 246, as *Nassa varicifera*; A. Adams, 1870a: 425, no. 1, as *Zeuxis varicifera*; E.A. Smith, 1879: 210, no. 69, as *N. (Z.) varicifera*, var.; Grabau & King, 1928: 113, 206–207, no. 69, pl. 8, fig. 69, as *N. (Z.) varicifera*; 野村・神保, 1934: 305), 初めて日本産としたのは Tryon (1882) である。Pilsbry (1895) は「Isi, Kamakura」(鎌倉市)を産地に加えたが、これは上記の *N. (Z.) v. var. fraterminor* であり本種ではない。横山 (1931: 42, no. 1403, as *Phos variciferus*) が「肥前」から記録したのち、河本 (1934: 307–309, figs 1–2) が「瀬戸内海 (児島湾, [山口県] 小野田) 北九州 (福岡, 肥前)」産個体を詳述した。さらに房総半島沖 (Nomura, 1940: 111, no. 192), 山口県日本海側 (池田美・多田武, 1963: 23, no. 471, as *Varicinassa varicifera*), 長崎県有明海 (堀川, 1964: 34, no. 523, as *Tritia varicifera*), 鹿児島湾 (Cernohorsky, 1984), 台湾 (Kuroda, 1941: 118, no. 677; 堀越他, 1963: 67; 村岡, 1972: 78, no. 1413, as *T. (V.) variciferus*) から記録がある。オーストラリア北西部からも報告がある (Wilson, 1994: 89, text-fig.), その個体は螺層の膨らみが強く、螺肋が螺層全体で明瞭な点で明らかに別種であり、豪州は分布域から除外すべきである。現時点で本種の分布南限は中国南部であり、それより南に産する確たる証拠は存在しない。

**生息状況** 大規模な内湾奥の砂泥干潟下部～潮下帯に産し、表層を匍匐する。韓国南西部～中国沿岸では普通種で、近年も頻繁に記録されているが、日本では河本 (1934) が報告した時点で「多く発見せられず」、児島湾・周防灘・博多湾・有明海に「僅少の産出あるを知らるゝのみ」とされていた。その産出状況に基づき、宮地他 (1954: 146, as *Varicinassa varicifera*) は本種を大陸沿岸系種の代表例に含めている。その後は長く再発見されず、1994 年に有明海最奥部の福岡県柳川市沖端川河口付近で久方ぶりに生貝の産出が報告されたが (小菅丈他, 1998), 同時期に同じ海域で中国産外来種カラムシロが見出されたこと、さらに中国からの輸入アサリに本種が混在していたことなどから (Tamaki *et al.*, 2002; 大越健, 2004: 77, 78, 80, fig. 4d; 大越健・大越和 (編), 2011: 11, 12, 171; both as *V. varicifera*), 柳川市の個体群はカラムシロとともに国外から移入された可能性が指摘されている (福田・木村昭, 2012: 71, text-figs a–d, as *V. varicifera*)。したがって現在、確実に日本在来と認められる個体群は知られておらず、国内ではほぼ絶滅したとみられる。かつての児島湾は代表的な産地で、河本 (1934) は「タヒラギ漁船の網に掛つて上つて来るから比較的易く採集出来る由である (畠田 [和一] 氏談)」と記録し、波部 (1946a) が歯舌を検討した個体も宮地伝三郎採集の児島湾産であった。古川田溝コレクション中に同地の標本 (窪田, 1962: 77, no. 1096) が現存し (写真), 畠田和一コレクションにも「備前 [瀬戸内市] 牛窓」(「波部 [忠重] 氏同定 1952.2.」), 7 個体, #4313 (part)), 「[倉敷市玉島] 黒崎村沙美」(1 個体, #5983), 「[浅口市] 寄島」(「昭和 35 [=1960].12.4. 文比古と伴に [sic]」), 2 個体, #2556), 「[岡山市南区] 阿津」(「S [昭和] 27 [=1952]」), 1 個体, #6509) の各標本が含まれている。しかし本県の個体群は 1959 年の児島湾閉め切りが直接の要因となって一挙に失われた。矢野 (1979: 2–3) は児島湖閉切堤防周辺で 100 個以上の本種を採集したものの、「すべて死殻で摩滅しており、完全な個体は少ない」と述べ、この時既に絶滅していたと考えられる。古い死殻は現在も児島湖周辺の干拓地からハイガイなどと掘り出され、高密度で多産していた往時の様子かをろうじて今に伝えている。

(福田 宏)

## ウネムシロ

*Reticunassa hiradoensis* (Pilsbry, 1904)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 オリイロコバイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry (1904a: 20–21, pl. 4, fig. 35, 35a, as *Nassa semiplicata hiradoensis*) で、レクトタイプの写真は Cernohorsky (1984: 184–185 (part), pl. 39, fig. 12, as *Nassarius (Hima) fraterculus*) と Higo et al. (2001: 87, fig. G2975, as *H. f. hiradoensis*) が公表し、ANSP (2019: #85999) でも閲覧できる。Cernohorsky はこの著者特有の現実離れした極端な疎分類によって本種をクロスジムシロの異名とし、土屋 (2000: 451, no. 62 (part), as *Reticunassa fratercula*) もそれに引きずられてしまった。あるいは後種の亜種としている文献も多いが、実際には、本種は以下の下線を付した特徴によってクロスジムシロから容易に識別できる。殻長約 12 mm、殻径約 6 mm、太い紡錘形で硬質堅固、螺層はよく膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。殻表は淡黄褐色ないし濃紫褐色で光沢はほとんどなく、濃褐色の螺状色帯をもつ個体もある。太さが均等な多数の明瞭な螺肋が、等間隔に現れる太く低い畝状の縦肋の上に乗る、彫刻は全体として粗布目状をなす。殻口は楕円形で外唇は肥厚し、内側に突起を 4–5 個並べる。内唇～軸唇は滑層が幅広く発達し、光沢が強い。殻底は縊れ、前管溝は太く短い。蓋は殻口より一回り小さく、薄い角質で楕円形 (瀧巖, 1951: 129, no. 6, figs 18–19, as *Nassarius (Tritonella) f. hiradoensis*)。頭部-腹足の背面は淡黄色または灰色の地に細かい濃褐色斑や白斑を散在する。頭触角は細い針状で短い。水管は長く、先端を除いて黒色に染まる (福田・川内野, 2012: 126–127, text-figs と木村昭・福田, 2012: 67, text-figs; both as *H. hiradoensis* に生体写真)。写真： 備前 [岡山市南区] 小串村米崎, 畠田和一コレクション #921, 福田撮影。殻長 17.3 mm, 殻径 8.5 mm。



**分布** タイプ産地は「Hirado, Hizen」(長崎県平戸)。肥後・後藤 (1993: 210, no. 3041, as *Reticunassa fratercula hiradoensis*) が分布域を「北海道以南」として以来多くの文献が北限を北海道としているが、今回改めて調べたところ北海道からの明確な産出記録は見当たらず、*R. hypolia* (Pilsbry, 1895) アオモリムシロの記録と混線していた可能性が高い。実際の最北の記録は太平洋側が宮城県石巻市万石浦 (木村昭・福田, 2012; 2009 年 7 月福田採集, 生貝, OKCAB M26113)、日本海側が男鹿半島と山形県鼠ヶ関 (鈴木庄, 1979: 183, no. 189, as *R. f. hiradoensis*) で、九州まで分布する。国外は韓国 ([平瀬興], 1908c: 180–181 (和文), 30 (英文), pl. 30, figs 100–103, as *Nassa (Hima) semiplicata hiradoensis*; 權他, 1993: 80, fig. 38-5 [38-6 はクロスジムシロ]; 294, no. 38-6, as *R. f. hiradoensis*; 関他, 2004: 246, fig. 679-1–2, as *H. f. hiradoensis*)、中国北部 (Li & Ma, 2004: 99, pl. 059, fig. K, as *Nassarius hiradoensis*) から知られる。

**生息状況** 内湾の潮間帯岩礁間に生じた礫混じりの粗砂底または砂底に棲息し、砂礫がつねに海水で濡れている場所を好む。往時の瀬戸内海では、花崗岩が破碎された砂からなる貧栄養の浜辺 (いわゆる白砂青松の典型と言える場所) において、多くの場合カヤノミカニモリとともに多産したが、1970 年代中葉以降両種とも急減し、前世紀末にはごく稀に古い死殻や破片が見られるだけとなった。カヤノミカニモリの減少要因は不明であるが、本種は肉食性の賊腹足類であるため、まだ実証はなされていないもののバイの項で言及したインボセックスが打撃を与えた可能性がある。近年は一時期に比べれば多少の回復傾向にあるものの、万石浦、浜名湖、三河湾、広島県厳島 (大鳥居の周囲に多産する)、タイプ産地の平戸島を含む長崎県～熊本県一帯など、健在な個体群が見られる場所は全国でもごく限られている。瀬戸内海中央部では 1970 年代の香川県の荘内半島周辺～坂出沖において「多い」と報告されたが (畠山・矢野, 1978: 6, as *Reticunassa hiradoensis*)、近年の瀬尾・Tanangonan (2014) には言及がない。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 161) の目録に含められているのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクションには以下の 6 ロットが現存する：[岡山市東区] 犬島 (幼貝 4 個体, #922)、備前 [岡山市南区] 小串村米崎 (「黒田 [徳米] 氏同定品」, 1 個体, #921, 写真; 「1956.7.7.採集」, 1 個体, #7409; 1 個体, #5449)、[玉野市築港] 宇野日之出海水浴場 海岸採集 (「1957.4.29.」, 115 個体, #5926)、具体的な産地表記なし (1 個体, #4414)。この大半がほとんど摩滅・褪色の見られない新鮮な殻で、特に玉野市日之出海水浴場の標本は 100 個体を超え、蓋も伴っていることから大半が採集時に生貝であったことは確実であり、極めて高密度で棲息していたと考えられる。しかしその後は香川県での状況と同様に死殻すらも全く見出されなくなり、畠田和一の時代に波打ち際に観察できた個体群の大半が減り去ったことは確実である。ただし、最近刊行された北川 (2017: pl. 158, fig. 158-05, G2975, as *Nassarius hiradoensis*) には「岡山 磯」と称する本種の標本写真が掲載されている。そこには採集日時が記されていないので最近得られた個体かどうかは不明であるが、他の海域でも近年になって少しずつ産出が認められ、特に近隣の広島県に比較的大きな個体群が維持されていることを考えると、岡山県でも例えば笠岡・倉敷・備前各市などの島嶼部や半島の先端等にひっそりと生き残っている可能性は否定できず、改めて精査が必要である。

(福田 宏)

## オガイ

*Cantharus cecillei* (Philippi, 1844)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾパイ上科 ベッコウパイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

**選定理由** ごく最近まで棲息が確認されず、絶滅寸前と考えられていた。近年復活傾向にあるが、各個体群が安定して維持されるか否かは不明のため、注視する必要がある。

**形態** 原記載は Philippi (1844: 166–167, no. 12, as *Turbinella? Cécillii*)。種小名の原綴りは *Cécillii* であるが、これは J.-B. T. M. Cécille (フランス海軍提督) に献名されたものなので Pilsbry (1895: 33) は *cecillei* とし、以後圧倒的多数の著者がこれに倣っている。このため *cecillei* は国際動物命名規約の条 32.5「訂正しなければならない綴り(不正な原綴り)」の修正名(条 33.2)に相当し、仮にこれが条 33.2.3 について「不当な修正名」であったとしても、条 33.2.3.1 の「ある不当な修正名が慣用されておき、しかも原著者と日付に帰せられているならば、それを正当な修正名と見なすものとする」に該当するとの解釈が可能のため、いまや *cecillei* と綴るべきである。*T. cecillei* は図示された例がないが、Tryon (1881: 157, pl. 73, figs 262–263, as *Cantharus Cecillii*) が *Buccinum ligneum* Reeve, 1846: sp. “56” [57], pl. 8, fig. 57 と *B. balteatum* Reeve, 1846: sp. 59, pl. 8, fig. 59 をともに異名と断定し、以後はそれら Reeve の図によって同定されてきたとみられる。また Tryon は同時に *B. Cumingianum* Dunker, 1846: 111, no. 12 も同種と考え、Dunker (1882: 18, as *Pollia Cumingiana*) 自身も *B. ligneum* を *B. cumingianum* の異名としている。殻長約 40 mm、殻径約 20 mm、太い紡錘形、厚く堅牢、縫合は縊れる。殻表は著しく太く幅広い軟状の縦肋を広い間隔で並べ、肩部は鈍く角張る。縦肋の上に細く明瞭な螺脈が乗る。生時はオリーブ色の毛羽立った厚い殻皮で覆われ、その下の地色は白く、赤茶褐色の不規則な斑紋に彩られる。殻口は縦長の三角形で、外唇内側は螺状の低い隆起が並ぶ。殻口内は陶器質で白く光沢が強い。軸唇は直線的で、前管溝は短く幅広い。蓋は革質、厚く不透明で黄褐色、雫形で、核は前端にあり、成長脈は粗い。頭部-腹足背面は淡黄色の地に赤褐色の斑点を散らす。頭触角は極めて細く短い。その中ほどあたりに小さな眼がある。水管は太くて長く、黒斑で覆われる。蹠面は淡橙色(高重, 2019: 170, 171, text-figs に生体写真あり)。

写真： 倉敷市玉島黒崎南浦, 2016年5月5日, 福田撮影。

**分布** タイプ産地は「China, ad ostium fluminis Yang-tse-kiang」(中国, 揚子江河口)。異名とされる *Buccinum cumingianum* は「Patria Insulae Java et Amboina」(インドネシア, ジャワ島とアンボイナ)、*B. ligneum* は「—?」(不詳)、*B. balteatum* は「Torres Straits」(オーストラリア北端のトレス海峡)からそれぞれ記載された。国内では太平洋側は房総半島以南(清水利, 2001: 62–63, no. 1078)、日本海側は富山湾以南(山下博・木村昭, 2012: 65, text-figs a–d)、九州まで知られる。南西諸島での記録はない。国外は朝鮮半島に産し(関他, 2004: 228, fig. 617-1–2, as *Cantharus cecillii* [sic])、中国沿岸では黄海・渤海北部から海南島周辺に至るまで広く分布するとされ、近年も頻繁に図示されている(Li & Ma, 2004: 93, text-fig. 21 (map), pl. 057, fig. B; 张他, 2012: 94, no. 79, text-figs; 王他, 2016: 53, no. 148, text-figs)。さらにベトナム(Hylleberg & Kilburn, 2003: 80)、インドネシア(Dharma, 2005: 100, pl. 25, fig. 21a–b)からも比較的最近の記録があるが、豪州での現状は不明。

**生息状況** 三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海など大規模な内湾において、潮間帯下部～潮下帯の岩礁または礫混じりの砂泥底に産する。韓国西岸では現在も普通種であるが、国内では1990年代以降各地で激減または絶滅が伝えられ、例えば三河湾では生貝は再発見されていない。瀬戸内海でも濱村(2004: 88, text-figs)が広島県において「現在、周辺各地でも生息を確認できない」と述べ、また瀬尾・Tanangonan(2014: 99, no. 149, pl. 2, fig. 11)が「完全に殻皮の失われた死殻が1個体得られたのみ」と報じるなど極端に稀産化していた。このため環境省レッドリストにも絶滅危惧IB類(EN)として最近になって追加された(福田, 2018: 41)。ところが2014年、岡山・香川両県でヒメエガイの生貝が再発見されたとき、同種及びウネボラ、ナガゴマフホラダマシ等と随伴して本種が出現する場所が複数見出され、これを境に急激に増加傾向に転じた。2019年時点の岡山県ではヒメエガイが最初に再発見された倉敷市玉島黒崎(写真)のみならず、備前市鹿久居島や笠岡市五番町などにやはりヒメエガイとともに高密度で多産し、場所によっては夥しい個体数が見られる。対岸の香川県でも同様にごく普通に生貝が見出されるようになった。突然の復活に至った理由は明らかでないが、従来の減少要因は有機錫によるインボセックスと推測され、これが規制されて海水が浄化されたことも一因かもしれない。ただしまだ生貝が現れ始めてから数年しか経っておらず、いつまた急減するとも限らないため、しばらくは継続的な注視が必要である。

(福田 宏)

## ナガゴマフホラダマシ

*Engina menkeana* (Dunker, 1860)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻区 新腹足目 エゾバイ上科 ベッコウバイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

**選定理由** 現存産地が少なく、棲息環境も限定的である。

**形態** 原記載は Dunker (1860: 222–223, no. 2, as *Cantharus (Pollia) Menkeanus*) で、翌年 Dunker (1861: 7–8, no. 32, pl. 1, fig. 7) に図示された。Janssen (1993: 412, pl. 4, fig. 30) がホロタイプの写真を発表している。*Tritonidea submenkeana* Pilsbry, 1901f: 387–388, pl. 21, fig. 24 は新参異名で、そのシノタイプは Higo *et al.* (2001: 78, fig. G2697s, as *Engina submenkeana*) に掲載され、ANSP (2019: #80538) でも閲覧できる。別名ゴマフホラダマシ。殻長約 10 mm, 殻径約 5 mm, 紡錘形で、厚く堅牢。殻表は太い縦肋の上に細い螺肋が乗り、交点上は横長の疣状となる。縦肋は黒色、肋間は白色で、さらに周縁に白色の螺状色帯を巡らす。殻口は縦長でやや広く、外唇は肥厚し、内部に 6–7 個前後の明瞭な歯状突起を縦に並べる。前管溝は短い明瞭。蓋は小さく、角質、楕円形で黄褐色で中央が黒く、前端に核をもつ。頭部–腹足は乳白色の地に黒と橙色の斑点を散らす。頭触角はごく短くて細く、基部の目の周囲は幅広く黒色の帯に彩られる。水管は比較的太くて長く、黒斑及び黄斑で彩られる (高重, 2019: 173, text-fig. に生体写真あり)。

写真： 上 (殻), [倉敷市] 下津井久須美, 畠田和一コレクション #782。殻長 12.5 mm, 殻径 5.5 mm。下 (生体), 倉敷市玉島黒崎南浦, 2016 年 5 月 5 日, とともに福田撮影。



**分布** タイプ産地は「im Hafen von Decima in Japan」(長崎市出島港)。異名の *Tritonidea submenkeana* は「Hirado, Hizen, Western Kiusiu」(九州西部, 長崎県平戸) から記載された。太平洋側は房総半島以南 (清水利, 2001: 62, no. 1076, as *Enzinopsis menkeana*), 日本海側は男鹿半島以南 (西村正・渡部景, 1943: 68, no. 118; 鈴木庄, 1979: 178, no. 171, as *Enginopsis [sic] menkeana*), 九州まで分布する。インターネット上で検索すると、フィリピンやポリネシア等にも本種が産するとしているサイトが多く現れるが、それらはことごとく別種の誤同定で、今のところ国外 (朝鮮半島や中国も含めて) からの確実な記録は見当たらない (福田, 2017b: 43)。このため本種は日本固有種の可能性がある。



**生息状況** 内湾湾口部や海峡部など潮通しがよく透明度の高い海水に洗われる海岸において、潮間帯下部～潮下帯岩礁の礫間や転石下に見られ、クロマキアゲエビス、ウネボラ、オガイ、ヒメエガイ、*Ostrea futamiensis* Seki, 1929 クロヒメガキ、*Neotrapezium sublaevigatum* (Lamarck, 1819) タガソデモドキなどとともに独特の貝類群集を構成する。摩滅した古い死殻は各地の浜辺に時折打ち上げられるが、近年生貝が見出された場所は分布域全体でも 10 箇所程度と少ない。場所によっては高密度で見られるが、ごく少数の個体しか見られない産地も多い。オガイやヒメエガイと同等かそれ以上に危機的状況にあると考えられる。岡山県内では岡大玉野臨海 (1978: 161, as ゴマフホラダマシ) に掲載され、畠田和一コレクションにも「[倉敷市] 下津井久須美」(18 個体, #782; 写真, 上) が含まれている。これらの標本は肉抜きされたいま蓋と軟体の残骸が残っているため、採集時全て生貝であったことは確実である。近年は古い死殻が少数得られていただけであったが、2014 年に倉敷市玉島黒崎でヒメエガイの個体群が再発見されたのち、同じ場所で本種の生貝がわずか 2 個体のみながら確認された (写真, 下)。ウネボラやオガイと同様に転石下に見られるが、それらの種よりも格段に個体数が少なく、密度は著しく低い。他の 3 種が急激に復活して個体数を増加させているのに対し、本種はまだわずかしこ確認されていないため、少なくとも現時点での岡山県ではそれらの種よりさらに稀少性が高い。畠田和一の時代には多産していたにもかかわらずその後激減し、いまだ完全には復活していないと考えられる。

(福田 宏)

## コホラダマシ

*Pollia subrubiginosa* (E.A. Smith, 1879)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 エゾバイ上科 ベッコウバイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出していた証拠の標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は E.A. Smith (1879: 206, no. 57, pl. 20, fig. 40, as *Tritonidea subrubiginosa*) で、その図は Tryon (1881 in 1880–1881: 155, pl. 73, fig. 252, as *Cantharus fumosus* Var. *subrubiginosus*) に転載された。またシタイプの写真を Higo *et al.* (2001: 78, fig. G2715) が公表している。殻長約 15 mm, 殻径約 7 mm, 前後に細長い紡錘形, 厚く堅牢で、螺層はやや膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。後成層の殻表には強い畝状の縦肋を等間隔に並べ、その上に複数の細い螺脈が並んで形成される太い螺肋が載る。海老茶色の地にさらに濃色の螺状色帯を各螺層の周縁附近及び殻底に巡らし、表面は剥離しやすいオリーブ色の殻皮で覆われる。蓋は厚い角質で黄色く、雫形で、核は尖った前端に位置する。軟体の頭部・腹足は薄い黄色で、細かい黒色素斑と白斑を体表に散らす。頭触角は短くて細く、その途中の根元附近に黒い眼がある。水管は細長く、密な黒斑で彩られる (高重, 2019: 174, text-figs, as *C. subrubiginosa* [sic] に生体写真あり)。

写真： 備前 [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #2475, 福田撮影。殻長 16.0 mm, 殻径 7.6 mm。



**分布** タイプ産地は「Station 8\* (Ukushima, Goto Islands, 33°16' N. lat., 129°4' E. long. Among rocks at low water)」(長崎県五島列島北端の佐世保市宇久島西岸, 低潮線の岩の間)。太平洋側は房総半島 (清水利, 2001: 63, no. 1080, as *Cantharus (Pollia) subrubiginosa* [sic]) 以南, 日本海側は男鹿半島 (鈴木庄, 1979: 178, no. 173) 以南, 九州までと小笠原諸島 (岩川, 1909: 24, as *C. fumosus rubiginosus* Reeve ひめほらだまし; Fukuda, 1994: 18–19, no. 526 が岩川の証拠標本を検討した結果, 本種と判明した), 及び朝鮮半島 (済州島を含む; 関他, 2004: 229, fig. 615; Noseworthy *et al.*, 2007: 81) から記録がある。本種は記載されてわずか2年後に Tryon (1881 in 1880–1881) が *P. fumosa* (Dillwyn, 1817) ホラダマシの「slight variation」(差異の微妙な変種) としたこともあり, 日本以外の文献にはほとんど登場しない。Cernohorsky (1971: 157–158, figs 37, 63, 71, as *C. (P.) subrubiginosus*) は本種と称する個体をフィジーから報告し, 同時に南アフリカから記載された *C. natalensis* (E.A. Smith, 1901) (MolluscaBase, 2019 では *P. subcostata* (Krauss, 1848) の異名) も本種によく似ていると述べた。しかし Cernohorsky の図示個体は殻長に比して殻径が大きい点でコホラダマシとは明らかに異なり, 誤同定と考えられるため, フィジーや南アフリカにまで本種が産する確たる証拠は今のところない。Vermeij (2006: 85, 86, 91) は本種及び *P. mollis* (Gould, 1860) シワホラダマシを「endemic to warm-temperate Japan」(日本の温帯域に固有) と述べており, これは妥当な見解と思われる。

**生息状況** 主に太平洋・日本海の外洋に面した海岸において潮間帯下部～潮下帯の岩礁に棲息し, 高重 (2019) は「洞窟内部など, 光の届かない場所で多く見られる。個体数はやや少ない」と述べている。瀬戸内海では淡路島に産することが戦前から知られ (岩川, 1909: 24, as *Cantharus fumosus subrubiginosus*; 矢倉, 1932: 42, no. 532), 広島県倉橋島 (瀧巖, 1938: 20, no. 211) や山口県大島瀬戸 (河本・田邊, 1956: 36, no. 421, pl. 14, fig. 126, as *C. (Pollia) subrubiginosus*; 福田, 1992: 67, pl. 17, fig. 254) からも記録があるが, 全体的に産出例は少なく, 稲葉 (1982: 105, no. 295) は東端の大阪湾・播磨灘と西端の安芸灘・伊予灘・周防灘で「少ない」とし, 備後灘・燧灘で「稀」とした。なお濱村 (2004: 88, text-fig., as *C. (P.) subrubiginosa* [sic]) は倉橋島から本種の死殻を報告したが, その個体はシワホラダマシである。岡山県では一切の文献記録がないが, 畠田和一コレクションに「備前 [倉敷市下津井] 六口島」(「黒田 [徳米] 氏同定品」, 1個体, #2475; 写真) の標本が含まれている。この個体はやや褪色しており, 恐らく浜辺へ打ち上げられたかヤドカリが使用していた死殻と推察されるが, 極端に古いというほどでもない。ここから, 当該標本の採集当時には六口島周辺の水島諸島に点在していたであろう, 潮通しが良く海水の透明度が高く, 多様な石灰藻などが繁茂する岩礁に本種の個体群が存在していたものとみられる。しかしその後破片すらも一切見出されないのは畠田標本に多く含まれる県内産の外洋性種と同様で, 現在の県内から本種が再発見されそうな兆しはない。コハナマツムシなどと同様, もはや岡山県では絶滅したのと考えられる。

(福田 宏)



## オニサザエ

*Chicoreus asianus* Kuroda, 1942

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 アツキガイ上科 アツキガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 過去に県内で産出していた証拠の標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** かつて本種に同定されていた *Murex elongatus* Lamarck, 1822: 161, no. 12 は *M. elongatus* [Lightfoot], 1786: 65, no. 1479 (カラスキ) の新参一次同名である上に、現在は *M. brevifrons* Lamarck, 1822: 161, no. 14 ニシインドガンゼキボラ (カリブ海西インド諸島産) の異名と考えられている (Houart, 1992: 38)。次いで古い *M. Sinensis* Reeve, 1845 in 1845-1849: sp. 25, pl. 6, fig. 25 は本種であるが、この名も *M. sinensis* Gmelin, 1791: 3542, no. 54 (トウガタカニモリ) の新参一次同名で無効となり、その置換名 *Chicoreus asianus* Kuroda, 1942: 80-81, no. 1 が有効名である。*C. orientalis* Zhang (張), 1965: 13, 18-19, no. 9, pl. 2, fig. 2 は新参異名。別名キエボラ (オニサザエの漢字表記兎榮螺を音読したもの)、イワボラ。殻長約 100 mm, 殻径約 60 mm, 紡錘形, 厚く堅牢で、後成層の各層には約 120 度ごとに太い縦脹肋が現れ、その上に太く長い管状の棘が多数生じる。それらの棘は分枝し、肩部で最長となって背面側へ反り返る。縫合は明瞭に縊れる。殻表は灰白色の地に海老茶色の斑点を散在し、細かい螺肋を巡らす。殻口は楕円形でその辺縁は濃い紅色に縁取られ、内面は白い陶器様で光沢が強く、外唇の前方に鋭い牙状突起を生じる。前管溝は太く長い管状。殻の形成過程を稲葉 (1967: 5-7) がつぶさに観察している。蓋は角質の厚い板状で濃褐色、雫形で、核は前端にあり、成長脈は粗い。軟体の頭部-腹足は明るい黄色の地に茶褐色の色素斑を散らす。頭触角は短く、その途中の根元附近に黒い眼がある。足は幅が広い (高重, 2019: 222, 223, text-figs に生体写真あり)。歯舌を木下虎・木下清 (1931: 192-198, text-fig. 1, as *C. sinensis*)、花瓶形の卵嚢を波部 (1944c: 196-197, no. 4, fig. 1) が図示している。

写真： [瀬戸内市邑久町] 虫明, 畠田和一コレクション #667, 福田撮影。殻長 90.5 mm, 殻径 55.7 mm。



**分布** *Murex Sinensis* 及びその置換名である *Chicoreus asianus* のタイプ産地は「China」(中国)。*C. orientalis* は「广东的闸波」(中国広東省陽江市江城区開坡鎮) から記載された。古くは A. Adams (1863c: 371, no. 1, as *C. Sinensis*) が「Tatiyama; Mososeki」(千葉県館山市; 関門海峡)、Lischke (1869b: 43, as *M. sinensis*) が「Jedo, Nagasaki」(江戸; 長崎) から報告している。最北の記録は八田・佐々木望 (1910: 95, no. 25, as *M. brebiferous* [sic] き江ぼら) による北海道であるが、それ以降は東北地方以北で再発見されておらず、太平洋側は房総半島以南 (岩川, 1909: 3, as *M. brevifrons* きえぼら; 清水利, 2001: 54, no. 881)、日本海側は兵庫県但馬海岸以南 (矢倉, 1932: 44, no. 568, as *C. elongatus*; 伊藤勝, 1967: 55, no. 282) に知られる。伊豆諸島でも大島・新島・神津島・三宅島・八丈島で報告があるが (西村和, 1999: 57, no. 745)、小笠原諸島での記録 (遠山, 1937: 60, as *C. sinensis* えきぼら [sic]) は恐らく *C. cnissodus* (Euthyme, 1889) シロガンゼキの誤同定である (Fukuda, 1994: 3, no. 398)。南西諸島では Pilsbry (1895: 169, as *M. (C.) brevifrons*) が「Yaeyama. Found also in many parts of the islands」(八重山諸島の多数の産地) から「21 shells in various stages of growth」(様々な成長段階の 21 個体) を得たと述べ、黒田 (1960: 25, no. 718) も沖繩群島の目録に含めている。国外は韓国, 中国 (浙江・福建・広東・海南各省), 台湾, ベトナム, フィリピンから記録がある (De Elera, 1896: 13, no. 29, as *C. elongatus*; Kuroda, 1941: 108, no. 518, as *C. elongatus*; Houart, 1992: 36-38, figs 143-145; 2008: 150, pl. 370, fig. 6; Hylleberg & Kilburn, 2003: 68; Li & Ma, 2004: 82-83, pl. 051, figs H, as *C. asianus*, *C. orientalis*; 張, 2008: 168, text-fig.; 张他, 2012: 84, no. 69, text-figs; 杨他, 2013: 82, 83, fig. 289; 郑他, 2013: 212, text-figs; 王他, 2016: 43, no. 121, text-figs; Kim, 2017: 260, no. 1088)。

**生息状況** 現在では外洋に面した海岸の潮下帯~漸深海底 (フィリピンでは水深 150 m で採集されている: Houart, 2008) の岩礁に特異的に棲息するイメージが強く、その限りにおいては高重 (2019) がいうごとく「普通種」に見えるかもしれない。しかし本来は瀬戸内海や有明海など内湾奥の砂泥干潟にも多産し、干潮時にはカキが密生した岩の側面へ *Rapana venosa* (Valenciennes, 1846) アカニシなどとともに付着する様子が頻りに観察された種である (福田・木村昭, 2012: 65, text-figs a-b; 稲葉 (1967) が飼育した個体も「[*Saccostrea kegaki* Torigoe & Inaba, 1981] ケガキ層下部から採集した」とある)。それらの環境では高度経済成長期以降に激減してほとんど確認できなくなったため、あたかも最初から潮下帯に深に限られるかに見えているだけである。今や愛知・愛媛・福岡・熊本・長崎各県のレッドリストに登載され (野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所, 2018)、日本各地で絶滅が危惧される種であることを忘れてはならない。その劇的な減少が生じた主要因は、まだ明確な報告はないものの恐らくバイをはじめとする賊腹足類の様々な種と同様、有機錫によるインボセックスの可能性が濃厚である。かつての瀬戸内海では全域に「普通」とされ (稲葉, 1982: 101, no. 256)、実際に 1970 年代前半までは頻りに潮間帯で生貝が見られ、浜には多数の死殻が打ち上げられていた。しかし近年は著しく稀少化し、わずかに広島県川尻町で「刺網」によって「水深 20 m 岩礁」で得られた個体 (濱村, 2004: 77, text-fig.) が報告されている程度である。岡山県では文献記録がなく、畠田和一コレクションに含まれる「[瀬戸内市邑久町] 虫明」産 1 個体 (#667; 写真) が唯一の貴重な産出の証拠である。この個体は外唇内側がまだ完全に肥厚しきっていない亜成貝で、蓋も残されていないが、摩滅や褪色は見られず殻口内に光沢もあり、しかも奥から肉片が出てくるため、恐らくは漁港に捨てられていた漁屑に由来する。岡山県ではこの標本以外、今日に至るまで死殻や破片も含めて一切の確認例が見当たらない。瀬戸内海沿岸各県での強い減少傾向を踏まえると、それら他県よりも一層海域の環境悪化が激しかった本県では、本種はいち早く絶滅したと考えられる。

(福田 宏)

## ヒラドサンゴヤドリ

*Coralliophila jeffreysi* E.A. Smith, 1879

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 アッキガイ上科 アッキガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出していた証拠の文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は E.A. Smith (1879: 213, no. 76, pl. 20, fig. 48) で、その図は Tryon (1880a: 209, pl. 66, fig. 371) 及び [平瀬興] (1907b: 205, text-fig.) に転載され、Kaicher (1985: 3992, as *Hirtomurex jeffreysi* [sic]) がタイプ標本の写真を示した。種小名を *jeffreysi* とするのは誤綴。*Coralliophila jeffreysi* [sic] var. *hiradoensis* Pilsbry, 1904a: 16, pl. 3, fig. 27 は新参異名で、そのシントタイプの写真は Kaicher (1985: 4066, as *H. hiradoensis*) と Kosuge & Suzuki (1985: 34, 69, pl. 46, figs 1–2, as *C. jeffreysi* [sic]) にある。岩川 (1919: 122) は「北海道」と「根室」の標本を *C. jeffreysi* に同定するとともにヤセガタサンゴヤドリと和名を命名したが、本種が本当に北海道に産するかは疑問が残る、標本を再検討する必要がある。殻長約 20 mm, 殻径約 10 mm, 紡錘形, 厚く堅牢, 縫合は明瞭。各螺層の肩が強く角張り、殻底は縞れる。殻表は赤みを帯びた淡褐色で、太い畝状の螺肋を多数巡らし、肋間は深い。一見 *Bedevina birileffi* (Lischke, 1871) カゴメガイに似るが、螺肋上に顕著な棘状突起を並べ、特に肩部で長くなって一部は短く分枝する。殻口は卵円形で、外唇には顕著な棘が鱗状に並び、内面は白い。前管溝は太い管状で明瞭。蓋は角質の厚い板状で赤褐色、半月形で、核は外唇側に偏る。軟体 (山口県上関町祝島産個体の観察による) の頭部-腹足は無紋で白色。頭触角は細く短い。図: E.A. Smith (1879: pl. 20, fig. 48) によるタイプ標本 (倉敷市産) の描画。殻長 20 mm, 殻径 10 mm と原文にある。



**分布** 明治初期にイギリスの調査船 *Sylvia* 号が日本周辺各地でドレッジして回った際の標本をもとに記載された。タイプ産地は「Station 22. Inland sea between Shikoku and Nippon, 34°31' N. lat., 133°40' E. long.; 22 fathoms」(地点 22, 四国と本州の間の瀬戸内海, 22 尋) で、経緯度の数値は倉敷市玉島沖に相当し、同時に同地点から記載された *Drillia flavonodulosa* カンダイボシャジク (後掲) と並び、岡山県をタイプ産地とする数少ない海産貝類の一つである。異名の *Coralliophila jeffreysi* var. *hiradoensis* は「Hirado, Hizen」(長崎県平戸市) から記載され、和名はこれに由来する。上記の岩川 (1919) の北海道での記録が本当に本種であればそこが最北限であるが、その後関東以北で本種が記録された例はなく、太平洋側は伊豆諸島八丈島 (西村和, 1999: 62, no. 859) と三重県紀伊長島 (松本幸, 1979: 47, no. 796), 日本海側は平戸島と五島列島 (堀川, 1964: 30, no. 462) が実際の分布限界と思われる。奄美大島でも記録がある (竹之内, 2001: 45, as *C. jeffreysi*)。国外での報告例はごく少なく、朝鮮半島, フィジー, オーストラリアのクイーンズランド州から記録があるのみで (Wilson, 1994: 17, text-fig.; Higo *et al.*, 1999: 216, no. G2389; Oliverio, 2008: 493, fig. 7; Kim, 2017: 260, no. 1090; all as *C. jeffreysi*), Oliverio は本種に近似する *C. fernleyi* (Emerson & D'Attilio, 1965) イセカセンと混同されてきた可能性に言及している。

**生息状況** 本種が属す *Coralliophilinae* Chenu, 1859 サンゴヤドリ亜科は刺胞動物のいわゆるサンゴに取り付いて専食するため、大半の種が亜熱帯から熱帯域に分布する。本種は *Babelomurex deburghiae* (Reeve, 1857) キキョウニシとともに、この亜科としては例外的に瀬戸内海に産する種で、後種が今のところ湾口部の山口県上関町祝島 (福田未発表, 本種と同時に 2000 年 1 月採集, 生貝だがホストは不明) と愛媛県中島西方沖 (濱村, 2004: 77, text-fig.) からのみ得られているのに対し、本種は瀬戸内海中央部まで棲息することが知られている唯一の種である。潮間帯下部~潮下帯の岩礁に棲み、上記祝島で本種の生貝が得られた際は漁網にかかった *Dendrophyllia cribrosa* (Blainville, 1830) オノミチキサンゴの表面に付着していた。濱村 (2004: 78, text-fig.) は広島県仁方町沖の延縄漁によって「水深 50 m のオレンジ色の単体サンゴが多く固着する礫上から」本種の生貝を採集したと述べており、この「オレンジ色の単体サンゴ」も恐らくオノミチキサンゴであろう。一方で稲葉 (1982: 102, no. 271, as *C. jeffreysi*) は本種が「*Axifera*, *Madreporaria*」(有軸類=ヤギ目, イシサンゴ目) に外部寄生するとしており、ホストは複数種のサンゴにわたる可能性もある。もともと生貝を目にする機会の少ない種で、稀に死殻が浚渫砂や蛸壺, 漁屑などで得られる程度である。岡山県では Smith による新種記載以外の文献記録は皆無であるが、畠田和一コレクション中に「[笠岡市] 白石島」産 1 個体 (#746) が現存する。この個体は殻表が多少褪色し、殻口内の光沢も失われているため死殻を得たものと推測される。近年も 2002 年に倉敷市玉島黒崎の沙美海岸で砂浜に転がっていた死殻 1 個が見出された (OKCAB M28722)。ただしこれは摩滅したオガイ, ヒメエガイ, ネコノアシガキなど海底からの浚渫砂に含まれることが多い種とともに得られたため、自然に打ち上げられたものではない可能性がある。いずれにせよ、生貝や新鮮な死殻は岡山県では Smith 以後一度も採集されたことがない。だからと言って直ちに本県で絶滅したと言い切れないのはもともと瀬戸内海の他県でも同程度に稀な種であるためで、現在も潮下帯の深所には宿主のサンゴとともに生き延びていないとも限らない。ただ少なくとも多産する普通種では決してなく、もし個体群が維持されているとしても少数個体が狭い範囲に存在するのみであることは確実と思われる。

(福田 宏)

## アッキガイ

*Murex troscheli* Lischke, 1868

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 アッキガイ上科 アッキガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後確認されず現状不明。絶滅した可能性もある。

**形態** 原記載は Lischke (1868: 219) で、翌年 Lischke (1869b: 41–42, pl. 1, figs 1–2) に見事な絵が披露された。Cosel (1998: 29, 47, fig. 19a–b) 及び Higo *et al.* (2001: 60, fig. G2125) がホロタイプの写真を公開している。*Murex (Tribulus) ternispina* Lamarck var. *rufolirata* Schepman, 1911: 342 は新参異名。また Radwin & D’Attilio (1976: 74, pl. 10, fig. 5) が本種の異名とした *M. heros* Fulton, 1936: 9–10, pl. 2, fig. 2 (ホロタイプの写真を Cernohorsky, 1978: 64, pl. 17, fig. 8; Kaicher, 1980: 2567, fig.; Ponder & Vokes, 1988: 29–32, figs 14, as *M. troscheli troscheli* が公表) は他の著者は別亜種とする場合が多く、Ponder & Vokes (1988) は亜種として識別しうる可能性に言及しながらも暫定的に異名としている。殻長約 150 mm, 殻径 (棘を含めず) 約 50 mm, 前管が著しく長い棍棒形, 厚く堅牢で螺層はよく膨れ, 縫合は明瞭に縊れる。後成層の各層には約 120 度ごとに太い縦脹肋が現れ, その上に細長く鋭い中空の棘を生じ, 肩部で最長 50 mm に達する。殻表は白色の地に赤茶褐色の明瞭な螺肋をほぼ等間隔に巡らす。殻口は種子形で, 内面は白く陶器様で光沢が強い。前管溝は螺層の約 2 倍の長さに達し, 直線的で右側が隙間状に開き, 右側辺縁に長い棘と短い棘を交互に生じて, 左側や背面にも短い棘を等間隔に並べる。蓋は角質の厚い板状で濃褐色, 零形で, 核は前端に偏り, 成長脈は規則的で明瞭。軟体の頭部–腹足背面は淡褐色の規則的な縞模様で覆われ, 頭触角は細長い針状 (土屋, 2000: 365, pl. 181, fig. 1 に生体写真あり)。歯舌を Arakawa (1964: 356, 360, pl. 21, figs 17–18) と藤岡 (1986: 124, text-figs; 125, unnumbered figs), 胎殻と陰茎を Ponder & Vokes (1988) が図示している。

**分布** タイプ産地は「ad Nagasaki」(長崎)。異名である *Murex (Tribulus) ternispina* var. *rufolirata* はインドネシアの「Stat. 294. 10°12'.2 S., 124°27'.3 E. Timor Sea. 73 M. Soft mud with very fine sand」(ティモール海, 水深 73 m, ごく細かい砂の混ざった軟泥底), 「Stat. 306. 8°27' S., 122°54'.5 E. Savu Sea. 247 M. Sandy mud」(サヴ海, 水深 247 m, 砂泥底; この産地の標本を Ponder & Vokes (1988) がレクトタイプに指定), 及び「Stat. 312. Saleh-bay, North coast of Sumbawa. 274 M. Fine sandy mud」(スンバウ島北岸サーレ湾, 水深 274 m, 細砂泥底) から記載された。本種の異名か別亜種か見解が分かれている *M. heros* の産地は原記載では「unknown」とされたが, Harasewych (1980: 141, figs 1–2) が「Russel (= Russell) Island, Solomon Islands」(ソロモン諸島のラッセル諸島) をタイプ産地に指定した。日本は分布の北限で, 太平洋側は房総半島以南 (Ponder & Vokes, 1988; 清水利, 2001: 53, no. 877), 日本海側は島根県隠岐以南 (島根大隠岐臨海, 2011: 11), 伊豆諸島大島 (西村和, 1999: 56, no. 739), 奄美大島 (村岡・内藤, 1991: 57, no. 0502) まで記録がある。国外は中国南沙諸島, 台湾, ベトナム, フィリピン, インドネシア, ニューギニア, アンダマン諸島 (最西の記録) から知られる (Kuroda, 1941: 109, no. 531; Hinton, 1972: 34, pl. 17, fig. 1; Ponder & Vokes, 1988; Hylleberg & Kilburn, 2003: 73; Dharma, 2005: 158, pl. 54, fig. 1a–b; 張, 2008: 166, text-figs; Houart, 2008: 136, pl. 363, figs 4–5)。Cernohorsky (1978) はオーストラリア北部のグレートバリアリーフから *M. heros* を記録しているが, Ponder & Vokes (1988) はその海域からの標本は未見と述べている。

**生息状況** 主として外洋または大規模な内湾湾口部の潮下帯～漸深海底 (水深 6–280 m: Ponder & Vokes, 1988) において砂底に棲息する。西南日本の太平洋岸ではさほど少ない種ではなく, 特に鹿児島県錦江湾などでは多産する。一方で瀬戸内海では極めて稀産で, 稲葉 (1982: 100, no. 254) は産地として 2ヶ所のみを挙げた上で「偶存種」(偶発的に少数個体が得られているが, 個体群の形成と定着には至っていないと考えられる種) とした。その 2 産地とは伊予灘の愛媛県松山市中島と岡山県笠岡市六島で, これが今に至るまで岡山県における本種の唯一の記録である。稲葉は六島の記録に「Nishimoto, '59, dead」と添え書きしており, これは西本 (1959) からの引用であるが, その原典や証拠標本は残念ながら今回は実見できなかった。これ以外に本種は岡山県とその周辺海域から一度も見出された例がなく, 島田和一コレクションにも含まれていない。ただし島田標本に含まれる他の多様な種の顔ぶれを見る限り, 1950 年代ごろまでの岡山県には主に太平洋に産する外洋性の種が多数棲息していたことは明らかであり, それを踏まえて考えれば当時の笠岡諸島に本種が産出したとしても決して奇異ではない。このため西本–稲葉の記録が誤りや偶然の産物であったと断定することはできず, むしろ, かつては県内に個体群が存在したものの戦後になって絶滅したとの解釈も可能である。当面は情報不足としておくが, 本来は岡山県で絶滅した種に数え上げるべきかもしれない。

(福田 宏)

## オウウヨウラク

*Ocinebrellus inornatus* (Récluz, 1851)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 アッキガイ上科 アッキガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 県内では古い死殻が採集されたのみで棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Récluz (1851: 207–209, no. 13, pl. 6, figs 7 (“var.”), 8, as *Murex inornatus*)。新参異名は以下の6つ：*M. crassus* A. Adams, 1853f: 269, no. 10 (not of Dillwyn, 1817)；*Trophon incomptus* Gould, 1860: 329；*M. Japonicus* Dunker, 1860: 230, no. 25；1861: 4, no. 17, pl. 1, fig. 14 ニッポンヨウラク；*Tritonium (Fusus) submuricatum* Schrenck, 1862b: 411, no. 9；*M. Talienshanensis* Crosse, 1862: 56–57, no. 5, pl. 1, fig. 9；*M. (Cerastoma [sic]) endermonis* E.A. Smith, 1875: 420, no. 22 エブヨウラク。このうち *Tritonium (Fusus) submuricatum* を除く各異名のタイプ標本を Houart & Sirenko (2003: 58–66, figs 1, 2A (卵囊), 3F–G, 5A–D, 6A–G, 7A–E, 8B–D (胎殻, 歯舌), 9A–J, 10A–J, 11A–C) が図示し、また *Trophon incomptus* のレクトタイプは Johnson (1964: 90, pl. 14, fig. 6), Kaicher (1978a: 1628, figs, as *Ocenebra incompta*) 及び Higo *et al.* (2001: 64, no. G2268, as *O. incompta*), *O. endermonis* のシタイプは Kaicher (1980: 2558, figs) にも公表されている。和名の語義は奥羽環瑠で、オウウヨウラクと記すのは誤り。殻長約30 mm, 殻径約18 mm, 太い紡錘形, 厚く堅牢, 螺層は膨らみ, 縫合は明瞭。胎殻は大きく, 1.5–2層。後成層の各層には4–6本の太い鱗状の縦肋を広い間隔を置いて生じ, 肩部で鉤状に反り返る個体が多いが, 個体間で変異が激しく, 低い畝状にとどまる場合もある。縦肋間は大い螺肋を巡らし, その間にさらに細い二次・三次肋をもつが, 螺肋の発達が全体的に弱くて平滑に近い個体も現れる。殻表に光沢はなく, 淡褐色ないし白色。殻口は楕円形で, 外唇は著しく肥厚して広がり, 内側に弱い歯状突起を並べる。内面は白く光沢がある。前管溝は太短く, 直線的で右側が隙間状に開く。蓋は角質の厚い板状で赤みがかった濃褐色, 半月形で, 核は前端に偏り, 成長脈は規則的で明瞭。軟体の頭部-腹足背面は透明感のある乳白色の地に白斑を散らし, 頭触角は細い針状でその中途外側に小さな眼がある (高重, 2019: 226, 227, text-figs, as *O. inornata* に生体写真あり)。歯舌及び卵囊を Houart & Sirenko (2003) と Lützen *et al.* (2011: 181–190, figs 2A–B, 4A, 5A–B) が図示している。*Ocinebrellus lumarius* (Yokoyama, 1926: 270, no. 32, pl. 32, fig. 21, as *Ocenebra [sic] lumaria*) カギヨウラクは本種に酷似するが, 胎殻が小さくて巻き数が少ない点で識別可能な別種である (Houart & Sirenko, 2003: 66–68, figs 8A, E–F, 11E–I, 13B–C, as *Ocenebra lumaria*)。本種を含む種群の分子系統解析が Barco *et al.* (2010: 1031, 1034, 1035, as *Cerastostoma inornatum*) や Barco *et al.* (2017: 315, 327, 329, 334, fig. 1) によってなされている。

写真：倉敷市玉島黒崎 沙美海水浴場, 2002年2月27–28日, OKCAB M28723, 福田撮影。殻長19.4 mm, 殻径12.8 mm。



**分布** タイプ産地は「La mer de Corée」(韓国の海)。異名である *Murex crassus* は「China」(中国), *Trophon incomptus* は「Hakodadi」(函館), *M. Japonicus* は「im Hafen von Decima in Japan」(長崎市出島港), *Tritonium (Fusus) submuricatum* は「Fretum Sangaricum prope litus insulae Jesso」(北海道津軽海峡), *M. Talienshanensis* は「in sinu Talienshanensi», “la baie de Talienshan” (中国遼寧省大連市の湾), *M. (Cerastoma) endermonis* は「Endermo Harbour, Yesso, 4 to 7 fathoms, sandy mud」(北海道室蘭市絵鞆港, 4–7 尋, 砂泥底) からそれぞれ記載された。千島・北海道以南, 九州まで分布する。国外はサハリン南部からロシア沿海州を経て朝鮮半島, 中国山東半島までと台湾から知られる (関他, 2004: 211, fig. 554-1–4, as *Cerastostoma inornatum*; Li & Ma, 2004: 88, pl. 055, fig. A, as *Cerat. inornata [sic]*; Kantor & Sysoev, 2006: 139, pl. 62, fig. B, as *Ocenebra inornata*; 張, 2008: 173, text-fig., as *O. inornata*)。近年は日本周辺からの養殖牡蠣の輸出に伴ってアメリカ合衆国 (太平洋岸のオレゴン州, 大西洋岸のワシントン州), カナダのブリティッシュコロンビア州, フランス大西洋岸, ポルトガル南西岸, オランダ, デンマークなどへ移入個体群が次々に生じ, 牡蠣を食害するため問題視されている (e.g. Radwin & D’Attilio, 1976: 113, text-fig. 68 (歯舌), pl. 18, figs 10–12, as *Cerat. inornatum*; Afonso, 2011: S85–S88, fig. 2; Lützen *et al.*, 2011)。

**生息状況** 潮間帯から潮下帯にかけての岩礁に棲息し, かつては干潮時にマガキ・ケガキが密生した岩盤上で, *Reishia bronni* (Dunker, 1860) レイシや *R. clavigera* (Küster, 1860) イボニシとともに多産し, それら牡蠣を捕食する光景が見られた。稲葉 (1982: 102, no. 265) は瀬戸内海全域に「普通」と記録している。しかし近年は, 濱村 (2004: 74, text-figs, as *Cerastostoma inornatus [sic]*) が広島県芸南地方において「1970年代前半までは各地で採集できたが, 現在は全く採れない」と述べている通り劇的に消え去り, 山口県周防灘でも同様に一切目にする機会がなくなった。ある時を境に突如として見られなくなったことから, 実証はされていないものの恐らくは有機錫によるインボセックスのせいで, 短期間のうちに大半の個体群が一扫され消滅した可能性が高い。一方, 岡山・香川両県が面する備讃海域ではもともと少なかったとみられ, 文献記録はなく畠田和一コレクションにも標本は含まれていない。近年も生貝は全く確認されていないが, 岡山県では2002年に倉敷市玉島黒崎の沙美海水浴場及び浅口市寄島町青佐鼻で少数の死殻が採集されている (OKCAB M28700, M28723)。その全てが摩滅の甚だしい古い殻で, 多くは殻口外唇も破損しており, 死亡後相当長い年月が経過していることは疑いを容れない。それらは有機錫が瀬戸内海を席捲した高度経済成長期より前か, さらにその前の時代に棲息していた個体の殻がわずかに残っていたものと推測され, 現在の岡山・香川両県とその周辺には本種はもはや棲息していないと考えられる。

(福田 宏)

## チリメンボラ

*Rapana bezoar* (Linnaeus, 1767)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 アッキガイ上科 アッキガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出していた証拠の文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Linnaeus (1767a: 1204, no. 473, as *Buccinum bezoar*)。記載年を「1758」としている文献が多いがそれは誤り。この名は二語名法適用外の d'Argenville (1742: 294, pl. 18, fig. G) が図示した個体に対して命名された。それと同じ図並びに Martini (1777: 36–37, pl. 68, figs 754–755) の図示標本に基づいて命名された *Volema Plicata* Röding, 1798: 58, no. 726 と *Rapana foliacea* Schumacher, 1817: 214 は新参異名。その後の Kiener (1836 in 1835–1838: 64–66, pl. 17, fig. 49, as *Purpura bezoar*) は本種を正しく図示したが、Reeve (1847: sp. 15, pl. 4, fig. 15a–c, as *Pyrula bezoar*) は本種と *R. venosa* (Valenciennes, 1846) アカニシを同種とみなし、さらに Tryon (1880a: 203, pl. 63, fig. 336) は本種とアカニシとともに *Rapana bulbosa* (Dillwyn, 1817) (= *R. rapiformis* (Born, 1778) シロニシの異名) と混同するなど、3種間で同定が混乱する時代が続いた。[平瀬興] (1907a: 170–171, pl. 7, fig. 63) は本種の標本を時の碩学 Dautzenberg と Sowerby III に送って同定を仰いだ結果、「両氏共に *R. bezoar*, Linn. 即ちアカニシと同種とせられたり」と疑念をあらわにしている。このため 19 世紀半ば～20 世紀初頭までの文献に現れる「*R. bezoar*」は本種とは限らないので注意が必要である。殻長約 75 mm, 殻径約 57 mm, 輪廓が菱形に近い拳形, 厚く堅牢, 螺層はよく膨らみ縫合は縊れる。殻表は淡灰褐色で、太く波打った縦肋と螺肋が交わって鱗片状に立ち、顕著な皺の連なりを呈する。肩部は角張り、個体によっては棘が発達する。殻口は楕円形で広く、内面は白色。外唇は肥厚反転し、螺肋に即して鋸歯状となる。前管溝は太く、右側が隙間状に開く。臍孔は閉じるか隙間状に開き、顕著な軟状の縋帯が臍域を縁取る。蓋は角質の厚い板状で不透明な濃赤褐色、核は右端に位置し、同心成長脈は明らか。軟体の頭部・腹足背面は淡いベージュ色の地を黒色素が覆ってまだら模様となる。頭触角は細長い針状。歯舌を Arakawa (1964: 356, 358–359, pl. 21, figs 7–8) が図示している。

写真： [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #689, 福田撮影。殻長 75.4 mm, 殻径 57.4 mm。



**分布** タイプ産地は「...」(不詳)で、異名の *Volema Plicata* と *Rapana foliacea* もともに原記載に産地表記はない。本種の分布北限を「北海道南部」とする著者が多いが (e.g. 土屋, 2017: 963, pl. 255, fig. 11), 北海道での記録は Schrenck (1867: 397–400, no. 66, as *Pyrula bezoar*) によるもので、これは記述内容から明らかにアカニシを指している。したがって、黒田・木下虎 (1951: 15, no. 166) も疑義を呈した通り、北海道での本種の記録はない。実際の最北の記録は太平洋側が岩手県三陸沿岸 (戸羽, 2009: 31, 32, fig. 19), 日本海側が兵庫県但馬沖 (伊藤勝, 1967: 55, no. 293, pl. 3, fig. 1) で、九州まで多くの記録がある。国外は朝鮮半島, 中国, 台湾, ベトナム, タイから知られる (Kuroda, 1941: 108, no. 515; 村岡, 1972: 62, no. 1032; Eisenberg, 1981: pl. 79, fig. 4; Hylleberg & Kilburn, 2003: 74; Li & Ma, 2004: 81, pl. 050, fig. D; 张, 2008: 179, text-fig.; Kim, 2017: 261, no. 1113)。フィリピンにも産するとされてきたが (e.g. 藤岡, 1986: 122, 123, text-figs), 近年は報告されておらず、シロニシの誤同定であった可能性がある。

**生息状況** 外洋・内湾を通じて潮下帯 (水深約 50 m 程度まで) の砂泥底に棲息する。高知県土佐湾など外洋では現在も決して稀ではなく、瀬戸内海でも 1970 年代前半まではアカニシとしばしば混獲され、稲葉 (1982: 101, no. 258) は全域に「普通」とした。しかし近年は、アカニシは依然として瀬戸内海各地に少なからず見られるのと対照的に、本種は激減して著しく稀少化した。濱村 (2004: 77, text-fig.) は広島県仁方町での底引で得られた生貝を図示しているがこれはむしろ例外的である。特に備讃瀬戸～備後灘・燧灘周辺では全く確認されず、香川県では畠山 (1977: 9) が三豊海域で「普通」とした以降は記録が途絶え、近年の瀬尾・Tanangonan (2014) には言及すらされていない。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 161) の目録にアカニシと並んで掲載され、また畠田和一コレクションに [倉敷市下津井] 六口島 (1 個体, #689), [浅口市] 寄島 (「昭和 35 [=1960].12.4. 採集品 (文比古と伴に [sic])」, 1 個体, #2559), 備中 [笠岡市] 白石島 (2 個体, #690), 産地表記なし (1 個体, #4451) の各標本が現存する。しかし近年は破片すら県内で見出された例がなく、ヤツシロガイやオニサザエ等と同様にもはや絶滅した可能性が高い。本種と同属で棲息環境や食性など生態も近似するアカニシにはインボセックスの症状が確認されており (堀口・清水誠, 1992: 113; 堀口, 1998: 548; 2000: 61, 62; 2007: 232), ここから類推して本種も同様またはそれ以上の被害を被り、早い段階で消滅に追い込まれたと考えられる。

(福田 宏)

## ヒゼンツクシ

*Vexillum inerme* (Reeve, 1845)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 オニコブシ上科 ミノムシガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1845 in 1844b–1845: sp. 279, pl. 34, no. 279, as *Mitra inermis*). *M. (Costellaria) hizenensis* Pilsbry, 1901f: 386–387, pl. 21, fig. 31 は古くから知られる新参異名。以上両名のシントタイプの写真を Higo *et al.* (2001: 97, figs G3360, G3360s, as *Vexillum inerme*, *V. hizenense*) が公表している。もう一つの異名とされてきた *Pusia awajiensis* アワジツクシ (アワジオトメフデ) は *M. hizenensis* と同年に Pilsbry が記載したかのごとく扱われている (e.g. Higo *et al.*, 1999: 290, no. G3361, as *V. (P.) i. awajiense*; 土屋, 2017: 991, pl. 284, fig. 4, as syn. of *V. (P.) i. inermis* [sic])。しかし実際には長く原稿名 (MS) のままで、波部 (1961a: 69, note at no. 2) が短い記載文を付した際に初めて適格名となったため、記載者・年は Habe, 1961 とすべきである。さらに *M. kraussii* Dunker, 1861: 8, no. 36 (のちに Dunker, 1882: 53, pl. 5, figs 11–12 に図示; 従来ほぼ全ての著者が種小名を *kraussi* としてきたがそれは誤綴) クラウスオトメフデは本種より太短いことを主な理由に別種または別亜種とされてきたが、Janssen (1993: 412, pl. 5, fig. 39, as *P. kraussii*) が示したレクトタイプ (殻長 14 mm, 殻径 6.2 mm) の写真を見ると太さは本種と大して差がなく、色彩など他の特徴でも識別困難のため異名とみなす。別名ヒゼンオトメフデ。殻長約 12 mm, 殻径約 5 mm, 前後に引き伸ばされた紡錘形, 厚質堅固, 螺層の膨らみは弱く縫合の縞は浅い。殻表に太い縦肋をほぼ等間隔に並べるが、その強さや間隔は個体間で変異が大きい。肋間には弱い螺肋が生じる。地色は濃紫褐色で、縫合と周縁の間の螺層上に白色螺状帯を巡らし、この色帯は個体によっては輪廓が不規則に乱れ、黄白色の稲妻模様や海老茶色の小斑で彩られることもある。殻口は狭くて前後に細長く、内部は紫褐色で、外唇内側に褶を並べる。外唇はさほど肥厚せず鋭い。内唇から軸唇にかけてはほぼ直線的で、軸唇には斜めに傾いた強い褶を等間隔に 4 個並べ、後方ほど強大となる。蓋はない。軟体の頭部–腹足背面は漆黒色の地に鮮やかな檸檬色の色素斑を散在する。頭触角は短くて先端が針状に尖り、その基部に小さな眼がある。水管は太く短い。高重 (2019: 235, text-figs, as *V. inermekraussi* [sic] クラウスオトメフデ) に生体写真あり。歯舌を波部 (1943: 72, no. 14, pl. 3, fig. 10, as *P. hizenensis*) と東 (1965: 55, 56, fig. 12, as *P. hizenensis*) が図示している。

写真: 備前〔倉敷市下津井〕六口島, 畠田和一コレクション #4399, 福田撮影。殻長 13.7 mm, 殻径 5.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Puteao, Province of Albay, Island of Luzon (found on the sands)」(フィリピン・ルソン島アルバイ州のプタオ, 砂底)。異名である *Mitra (Costellaria) hizenensis* は「Hirado, Hizen, western Kiusiu」(長崎県平戸), *M. kraussii* は「Japon」から記載された。*Pusia awajiensis* は波部 (1961a) には産地表記がないが、Pilsbry が淡路島産個体をもとに記載するつもりだったことは種小名から自明である。最北の産地は北海道西部で (黒田・木下虎, 1951: 20, no. 308, as *P. kraussi* [sic] クラウスオトメフデ; 波部・伊藤潔, 1965: 45, pl. 13, fig. 10, as *P. kraussi* [sic] クラウスオトメフデガイ; 吉岡, 2000: 31, as *P. kraussi* [sic] クラウスオトメフデ), 太平洋・日本海両岸とも東北の三陸海岸 (宮城県志津川湾; 福田, 準備中)・男鹿半島 (西村正・渡部景, 1943: 68, no. 133, as *P. hizenensis*) 以南, 九州までと伊豆～小笠原諸島に知られる (西村和, 1999: 75, nos 1184–1185, as *P. inermis*, *P. i. awajiensis* アワジツクシ, *P. i. kraussi* [sic] クラウスオトメフデ)。沖縄でも記録はあるが (岡田他, 1959: 172, no. 797, as *Pusia hizenensis*), 本当に産するか否かは不明である。国外は朝鮮半島に産する (權他, 1993: 89, fig. 42-1; 310–311, as *P. hizenensis*; 関他, 2004: 257, fig. 715-1–3, as *Vexillum (P.) inermis* [sic])。タイプ産地のフィリピンではその後明確な記録がなく、産地は誤記かもしれない。

**生息状況** 主に太平洋や日本海の外洋に面した海岸の潮間帯下部～潮下帯に普通に見られる種で、石灰藻が覆う岩礁の隙間や表層を匍う。瀬戸内海でも湾口部の紀伊・豊後両水道北端では決して稀な種ではないが、湾奥に相当する中央部では少なく (稲葉, 1982: 110, no. 334, as *Pusia inermis*), 山口県でもより内湾的性格の強い周防灘には見られず伊予灘に限定される (福田, 1992: 70, pl. 20, fig. 299, as *P. inermis*)。岡山県での文献記録は存在しないものの、畠田和一コレクション中に「備前〔倉敷市下津井〕六口島」(1 個体, #4399; 写真) 及び「備中〔笠岡市〕白石島」(「アハヂツクシ (?)」黒田〔徳米〕氏同定品, 1 個体, #6994) 産の標本が現存する。両個体とも殻表がやや摩滅し、白石島産は外唇の一部が破損しており、ともに浜辺へ打ち上げられた死殻とみられる。畠田和一が活躍した 1950 年代以前にあっても、岡山県では生貝や新鮮な死殻を得るのが容易でない程度に寡産であったと考えられる。その後は一切見出されることがなく、もともと個体数の多くなかった本種は高度経済成長期以降の水質汚濁や海岸環境の破壊によって本県から消え去った可能性がある。岡山県ではベニバイ, チグサカニモリ, チャツボ, コハナマツムシ, コホラダマシ, ハッカクフタナシジャクなど、外洋的環境の岩礁域潮間帯～潮下帯に棲息する種がことごとく確認できなくなっており、本種もその例の一つに数え上げる。ただし笠岡諸島など離島にはまだ生き残っているかもしれないため、改めて精査が必要である。

(福田 宏)

## フデガイ

*Nebularia inquinata* (Reeve, 1844)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 フデガイ上科 フデガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1844 in 1844b-1845: sp. 29, pl. 5, no. 29, as *Mitra inquinata*)。 *Mitra Hanleyana* Dunker, 1877: 70-71, no. 15 (Dunker, 1882: 51, pl. 2, figs 6-7 に図示) 及び *M. Wrighti* Crosse, 1878: 57-59, pl. 1, fig. 1 はともに新参異名。 Cernohorsky (1976: 328-330, color pl. 255, figs 10-11; pl. 281, figs 1-4, as *M. inquinata* subspecies *inquinata*) は *M. inquinata* のレクトタイプと *M. Hanleyana* のホロタイプの写真を示し、 Higo *et al.* (2001: 92, fig. G3191) も *M. inquinata* のパラレクトタイプを図示している。別名カヤガイ。殻長約 70 mm, 殻径約 20 mm, 細長く引き伸ばされた砲弾形で殻頂は尖り、厚質堅固、螺層の膨らみは弱く縫合の縊れは目立たない。殻表に細かい点刻列状の螺溝を体層で約 20 本、それ以外の螺層で 6-8 本巡らすとともに、やや粗雑な成長脈をほぼ等間隔に刻む。クリーム色の地に赤味があった濃褐色の細い色帯を多数巡らし、これが螺溝と成長脈とで切られて四角い斑点の連なりとなる。殻口は狭くて前後に細長く、内部は白色で平滑。外唇は肥厚し、内唇から軸唇にかけてはほぼ直線的で、軸唇には斜めに傾いた強い襞を等間隔に 5 個並べる。蓋はない。軟体は純白の地に鮮やかな檸檬色の色素斑を散在し、これは特に足の後半背面で顕著。頭触角は短く、その基部に小さな眼がある。水管も短い。足は長く、比較的幅が広い (高重, 2019: 214, text-figs, as *M. inquinata* に生体写真)。本種は原記載以来長年にわたって *Mitra* Lamarck, 1798 の一員とされてきたが、 Fedosov *et al.* (2018: 315) の詳細な検討によって *Nebularia* Swainson, 1840 に属することが確定した。*Mitra* と *Nebularia* は殻は一見似ていたとしても亜科が異なり (*Mitra* は Mitrinae, *Nebularia* は *Cylindromitrinae* に属す)、系統的には相互に離れている。

写真： 備前 [倉敷市] 下津井, 畠田和一コレクション #1137, 福田撮影。殻長 54.0 mm, 殻径 15.7 mm。



**分布** タイプ産地は「—?」(不詳)とのみ記されたが、 Cernohorsky (1976) は異名である *Mitra Hanleyana* が「maris Japonici」(日本の海) から記載されたことから、 *M. inquinata* のタイプ産地も「Japan」とした。*M. Wrighti* のタイプ産地も「Japonia」である。太平洋側は房総半島以南に知られ (黒田他, 1971: 285-286 (和文), 186-187 (英文), pl. 52, fig. 2), 日本海側は従来「能登半島以南」とされてきた (肥後・後藤, 1993: 252, no. 3677, as *Vicimitra inquinata*) が、最近渡部辰 (2019: 18-19, fig. 2) ははるか北の男鹿半島船越で本種を見出し、それ以前に男鹿市内で採集された標本 3 個体も現存すると報じた。しかし日本海ではもともと産出例が少なく、兵庫県但馬沖 (伊藤勝, 1967: 57, no. 375, as *Nebularia hanleyana*) や山口県萩市見島・北長門海岸 (河本・田邊, 1956: 39, no. 453, pl. 16, fig. 153, as *M. (N.) inquinata*; 多田武, 1964: 153, as *M. (N.) inquinata*) などの記録がある程度である。南西諸島 (奄美大島・沖縄) からも記録はあるものの (岡田他, 1959: 175, no. 856, as *M. (N.) inquinata*; 瀧庸, 1960: 193, pl. 88, fig. 10, as *M. (N.) hanleyana*; 肥後・後藤, 1993), 近年の具体的な産出は知られていない。本種の和名フデガイは江戸時代~明治までは *Neocancilla clathrus* (Gmelin, 1791) イワカワフデを指していたことがあり (e.g. 岩川, 1909: 32; 1919: 142), これが原因で両種の記録が混乱した可能性がある。国外で本種の産出が確実なのは朝鮮半島 (関他, 2004: 257, fig. 711, as *M. (M.) inquinata*), 中国東シナ海沿岸 (Cernohorsky, 1976; Li & Ma, 2004: 103, pl. 061, fig. G, as *M. inquinata*), 台湾 (Kuroda, 1941: 123, no. 767, as *M. (N.) inquinata*; Cernohorsky, 1976), フィリピン (Springsteen & Leobrera, 1986: 195, pl. 53, fig. 20, as *M. (M.) inquinata*) のみであり、分布域は南半球やインド洋までは達していないとみられる。

**生息状況** 水深 10 m 程度の潮下帯から 100 m 前後までの砂底・砂泥底に産するが、分布範囲内でも大半の場所では個体数は少ない。例外的にかつての瀬戸内海では Pilsbry (1895: 25, as *Mitra hanleyana*) の記録を皮切りに比較的高頻度で産出が記録され、特に淡路島周辺からの記録が多く (岩川, 1909: 31; 1919: 142, both as *M. inquinata*; 横山, 1931: 38, no. 1249, as *M. hanleyana*; 矢倉, 1932: 40, no. 507, as *M. hanleyana*; 平瀬信・瀧庸, 1951: pl. 100, fig. 10, as *M. hanleyana*; Cernohorsky, 1976), 戦前の広島県でも「佐伯・安藝・賀茂・豊田・御調・沼隈」と広範囲で記録されている (瀧庸, 1938: 20, no. 227, as *M. (Nebularia) hanleyana*)。周防灘でも 1970 年代頃までは砂浜に打ち上げられた死殻を見る機会が多かった (福田, 1992: 70, pl. 19, fig. 298)。しかし近年は全体的に激減し、広島県芸南地方でも底引きで得られた死殻のみが報告されている (濱村, 2004: 88, text-fig., as *M. inquinata*)。岡山県では岡大玉野臨海 (1978: 161) のリストに和名が記載されているのが唯一の文献記録であったが、畠田和一コレクション中に「備前 [倉敷市] 下津井」産の標本 1 個体 (#1137; 写真) が含まれており、1960 年代以前の県内に本種が棲息していたことは確実視される。しかしその後は死殻すら全く見出されておらず、完全に絶滅したかそれに近い状態にあると考えられる。最大の減少要因は水質の汚染と、海底浚渫によって棲息環境が直接破壊されたことと推測される。また、パイの項で述べた有機スズ化合物によるインボセックスは賊腹足上目に属す多くの分類群で発症することが知られており、本種もまた賊腹足類の一員であるのでその影響を被った可能性もあるが、少なくとも日本産のフデガイ科の種でインボセックスが明確に把握された例はないため、現時点では想像の域を出ない。いずれにせよ現在の岡山県で本種が全く見出されないことは儼然たる事実である。

(福田 宏)

## マクラガイ

*Oliva mustelina* Lamarck, 1811

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 マクラガイ上科 マクラガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Lamarck (1811: 316–317, no. 24) で、二語名法適用前の M., S. & A. Lister (1770: pl. 20, fig. 731) と Martini (1773: 171–173 (part), pl. 48, figs 515–516) の図示個体に対して命名された。その後 Tryon (1883 in 1882–1883: 78, pl. 22, figs 6–14, as *Oliva mustellina* [sic]) は、*O. Caroliniana* Duclos, 1835: no. 105, pl. 19, figs 5–8 や *O. jayana* Ducros de St-Germain, 1857: 68–69, no. 44, pl. 3 (“2” in the text), fig. 44a–b、及び Marrat (1870–1871: 1–46, pls 328<sup>bis</sup>–351) が記載した *O. angustata*, *O. arctata*, *O. cana*, *O. grata*, *O. laevis*, *O. neostina* (not of Duclos, 1835), *O. pacifica*, *O. scitula* を全て本種の異名またはその可能性があるとしたが、それらの原記載の図を見る限りいずれも本種と同種とは思われない。一方、近年新種記載された *O. virgata* Sterba, 2005: 74–77, figs 1, 3A は明確に識別できないため本種の新参異名とみなす。殻長約 30 mm, 殻径約 14 mm, 円筒形で厚質堅固。螺塔が低平な一方で体層が極端に大きく殻長の 9 割を占める。縫合の後方に 1 本の深い螺溝を巡らす。殻表は平滑で光沢が強く、クリーム色の地を黒褐色のジグザグ模様が密に覆う。殻口は狭くて前後に細長く、内部は莖色。外唇は直線的で厚く、前端は彎入する。内唇から軸唇にかけて白色の光沢ある滑層が発達し、軸唇は前方に向けて広がり、多数の強い鬚を斜めに並べる。縞帯は幅広く明らか。蓋はない。軟体の頭部-腹足は灰色の地に多数の顕著な白斑を散らす。足は頭部の真下にある深い溝で前足と後足に分かたれ、前足は左右に広がる短い三角形、後足は甸甸時に著しく大きく広がり、全体の輪廓は円形で、左右両側面が上方へ反り返って殻を覆う。頭触角は短く、水管は細い筒状で長さは中庸 (木村昭, 2012: 73, text-figs や高重, 2019: 231, text-figs に生体写真)。歯舌を波部 (1943: 71, no. 10, pl. 3, fig. 6) が図示している。

写真： [瀬戸内市] 牛窓町筵江浜, S8 [=1933].6.28., 畠田和一コレクション #1062, 福田撮影。殻長 32.7 mm, 殻径 15.6 mm。



**分布** タイプ産地は「... probablement l'Océan américain」(多分アメリカの海) であるがこれは誤りである。異名である *Oliva virgata* は「off Kuantan, Malaysia (Sunda-Schelf im Südchinesischen Meer)」(マレーシア, パハン州のクアンタン沖 (南シナ海スダ海棚)) から記載された。これまで大半の文献が「房総半島以南」に分布するとしているが、実際には青森県八戸での記録がある (鳥羽, 1915: 14)。これは本種の産地としては極めて異例で、鳥羽自身が「遠く八戸迄北進し居るは、意外の事に属す」と述べている。日本海側は男鹿半島以南、九州まで知られ (西村正・渡部景, 1943: 68, no. 131), また宮城～茨城県の間で報告例がないことから、八戸での産出は津軽海峡を経て日本海から太平洋に流入する対馬暖流末端の影響化に生じたと推測される。沖縄からも記録はあるが (岡田他, 1959: 170, no. 765; 村岡・内藤, 1991: 83, no. 0764), 実際に産するか否かは定かでない。国外は朝鮮半島, 中国 (黄海南部～海南島), 台湾, ベトナム, タイ, マレーシア, シンガポール, インドネシア, フィリピンまで分布する (Reeve, 1850c: sp. 23, pl. 13, fig. 23; Ducros de St-Germain, 1857: 57, no. 32, as *O. mustellina* [sic]; Lischke, 1869: 69; 1871: 61; Weinkauff in Küster & Weinkauff, 1878: 92–93, no. 63, pl. 24, figs 10–11; Springsteen & Leobrera, 1986: 187, pl. 51, fig. 6, as *O. mustellina* [sic]; 權他, 1993: 90, 313, fig. 44-3; Swennen *et al.*, 2001: 132, fig. 450, as *O. mustellina* [sic]; Hylleberg & Kilburn, 2003: 92–93; 関他, 2004: 253, fig. 695, as *O. (Musteloliva) mustelina mustelina*; Li & Ma, 2004: 101, pl. 060, fig. E; Dharma, 2005: 148, pl. 49, fig. 7a–b; 張, 2008: 220, text-fig.; 張他, 2012: 108, no. 93, text-figs; 楊他, 2013: 106, 107, fig. 385; 鄭他, 2013: 261, text-figs; 王他, 2016: 60, no. 169, text-figs)。

**生息状況** 砂質干潟の低潮帯から潮下帯に産し、かつてはごく普通種であった。瀬戸内海でも 1970 年代前半頃までは大潮の干潮時に干潟表層を多数の生貝が甸甸する様子が観察できた。近年も外洋に面した海岸の潮下帯には個体群が残存するものの、内湾域では激減し、特に潮間帯ではほぼ壊滅的である (木村昭, 2012)。フデガイの項で述べたのと同様に本種も賊腹足類の一員であるため、今のところ明確な報告は見当たらないものの有機スズがもたらしたインボセックスによって急減した可能性が論じられている。香川県では近年の調査で「新鮮な死殻は全く採集されなかった」とされ、その惨状を視覚的に訴えるごとく、殻表が激しく摩滅してチョーク状に白化し尽くした見るも無残な死殻があえて図示されている (瀬尾・Tanangonan, 2014: 100, no. 152, pl. 2, fig. 12)。岡山県では大垣内 (1968a: 46) が倉敷市塩生のサンドポンプで採集したことを報告し、岡大玉野臨海 (1978: 161) のリストにも和名が掲載され、その当時はまだ本種の減少傾向に注意が払われていなかったと思われる。畠田和一コレクション中にも「[瀬戸内市] 牛窓町筵江浜」(「採集日 S8 [=1933].6.28」, 4 個体, #1062; 写真) と「[浅口市] 寄島」(「[昭和] 31 [=1956].11.21. 採集品」, 1 個体, #1779) の標本が含まれており、特に筵江浜産個体は光沢も色彩もよく保存され、肉抜きしきれなかった肉片が殻口から出てくるため採集時は生貝であったと考えられる。しかし近年は生貝はおろか新鮮な死殻すらも全く見出されなくなり、殻表が擦れて赤褐色の下層が露出した古い殻がたまに転がっているのみである (OKCAB M1791, M9328)。2018 年には笠岡市の漁港に揚げられた漁屑中から、殻頂が飛んで大きく円い穴がぽっかり開き、色彩を一切欠く殻だけが得られた (M28936)。本種はフデガイなど潮下帯に棲息環境の中心がある種と異なり潮間帯にも多産する種であるため、本来なら少なくとも新鮮な殻が浜に打ち上げられるはずである。それが全く見られないばかりか潮下帯においても極端に古い殻しか見られないのは、既に完全に絶滅したことを示すと捉えざるを得ない。香川県でも同様の状況であることから、もはや瀬戸内海中央部に本種は生存していない可能性が濃厚である。

(福田 宏)



## ムシボタル

*Olivella fulgurata* (A. Adams & Reeve, 1850)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 マクラガイ上科 マクラガイ科 ●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録が存在するが、その後棲息が確認されず現状不明。絶滅した可能性もある。

**形態** 原記載は A. Adams & Reeve (1850: 31, no. 1, pl. 10, fig. 12, as *Oliva fulgurata*)。シタイプとおぼしき標本の写真を Higo *et al.* (2001: 91, fig. G3143) が公表している。本種を含む種群は恐らく多数の隠蔽種が存在し、分類も未確定であるが、現時点で本種の異名の可能性がある学名として *Oliva consobrina* Lischke, 1871a: 41 (のちに Lischke, 1871b: 62, pl. 5, figs 10–11 に図示)、及び *Oliva fabula* Marrat, 1870 in 1870–1871: 36, no. 190, pl. 350 (*Oliva* 23), figs 420–421 がある。殻長約 10 mm, 殻径約 3.5 mm, 前後に細長い紡錘形、半透明で薄い割にはかなり堅牢。殻頂は尖る。縫合は溝となり明瞭だが縊れはほとんどない。殻表は光沢が強く平滑で、灰色の地に明るい褐色の顕著な稲妻模様をもつ個体が多いが、色は変異に富み、殻表の大部分が褐色に塗りつぶされる場合もある。殻底に幅広い白色螺状帯を巡らし、その前方は低く幅広い縋帯が明らか。殻口は狭く縦長の三角形で、外唇は薄く鋭い。軸唇は多少傾き、前方に襞がある。前管溝は背面側に短く幅の広い彎入を形成する。蓋は角質、淡黄色で半透明、ごく薄く、半月形で殻口をほぼ覆う。軟体の頭部–腹足背面は無色または灰色で、足は頭部の真下にある深い溝で前足と後足に分かたれ、前足は左右に広がる短い三角形、後足の左右両側面が上方へ振り返って殻を覆う。頭触角は短い。水管は細い筒状で体全体の大きさの割には長く、黄白色の地に黒斑を散在する (土田, 2000: 525, pl. 261, fig. 13; 高重, 2019: 230, text-figs に生体写真あり)。

**分布** タイプ産地は「China Sea」(中国の海)。異名の可能性がある *Oliva consobrina* は「in der Bucht von Nagasaki」(長崎湾) から記載され、*Oliva fabula* は「—?」(産地不詳)。太平洋側は三陸海岸以南 (Nomura & Hatai, 1935: 25, no. 116; 石山, 1972: table 1; 堀越他, 1979: 63; 戸羽, 2009: 43, 44, fig. 84)、日本海側は男鹿半島以南 (西村正・渡部景, 1943: 68, no. 132)、九州まで分布する。国外は朝鮮半島 (權他, 1993: 90, fig. 44-2; 313; 関他, 2004: 253, fig. 700-1-2)、中国 (Li & Ma, 2004: 101, pl. 060, fig. F)、フィリピン (Poppe, 2008b: 502, pl. 546, fig. 1a-b; Poppe & Tagaro, 2011: 610, pl. 1296, fig. 3a-b) から記録されているが、それらすべてが本当に同種とは限らず、日本国内だけでも複数の異なる種が混在している可能性があるため、分布の全体像は不明瞭である。

**生息状況** 主に外洋に面した砂浜の潮間帯下部から潮下帯にかけて棲息し、場所によっては砂干潟の表層を多数の個体が匍匐する様子を観察できる。太平洋や日本海では普通に見られ、死殻は頻繁に浜辺へ打ち上げられる。一方で瀬戸内海などの内湾奥には少なく、東西の湾口部周辺に見られる程度である。特に備讃海域など中央部での近年の記録は皆無であるが、唯一、E.A. Smith (1879: 216, no. 87) が「*Oliva (Olivella) consobrina*, Lischke」、つまり本種の異名とされる学名を用いて、「Station 22. Inland sea between Shikoku and Nippon, 34°31' N. lat., 133°40' E. long.; 22 fathoms」で得られた個体を記録している。その経緯度は現在の岡山県倉敷市玉島沖に相当し、Smith は同時に同じ地点からヒラドサンゴヤドリ、アミコシボソクチキレツブ、カンダイボシャジクも報告した (それらの項を参照)。この記事には本種の図は付せられておらず、対応する標本も今のところ見出されていない (長谷川和範私信)。そのため Smith が目にした個体が実際にどのような形態を示していたのかは不明確であるが、少なくとも明言できるのは、ムシボタルまたはそれに近似する何らかの種は、Smith 以後の 140 年間で一度たりとも岡山県から報告例がないということである。上記の同時に記録された 3 種もカンダイボシャジクはやはり再発見されず、アミコシボソクチキレツブは 1950 年代までの畠田和一コレクションに残るのみで、ヒラドサンゴヤドリは古い死殻がごく稀に採集されているにとどまる。したがって、明治時代初期までは確かに倉敷市の沖合にムシボタルらしき種が棲息していたものの、その後絶滅したと考えるのが自然である。ただ、カンダイボシャジクは標本が現存し、他の 2 種は岡山県産の別の個体が知られているのに対し、本種は Smith が文字で書き残した記録のみであり実態がわからないため、今回は情報不足にとどめおく。もはや現在の岡山県では決して目にするのできない、何らかの種がかつて存在したことは恐らく間違いない。

(福田 宏)

## リュウグウボタル

*Amalda albocallosa* (Lischke, 1873)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 マクラガイ上科 リュウグウボタル科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Lischke (1873: 21–22, as *Ancillaria albo-callosa*) で、翌年 Lischke (1874: 44–46, pl. 2, figs 24–25) に図示された。この時 Lischke は Dunker (1861: 9, no. 38) が「*Ancilla* (*Ancillaria*) *rubiginosa* Swains.」として報告した日本産個体 (Lischke は「Decima」つまり長崎市出島産としている) を同種と解釈した。後者の学名は Swainson (1825: 283–284, no. 12, as *Ancillaria rubiginosa*) が「China」(中国) から記載し、Swainson (1829 in 1829–1833: pl. 4) に図示された。両名のタイプ標本の写真は Higo *et al.* (2001: 90, figs G3129–3130, as *Ancilla r. rubiginosa*, *Ancilla r. albocallosa*) に掲載されている。黒田・波部 (1965: 131, no. 484, text-fig., as *Baryspira rubiginosa albocallosa*) は両者を同種の亜種として扱い、狭義の *B. rubiginosa* をトガリリュウグウボタルと呼んだ。これ以降の日本ではリュウグウボタルを *B. r. albocallosa*、トガリリュウグウボタルを *B. r. rubiginosa* とする著者が圧倒的優勢となったが、土田 (2000: 523, pl. 260, fig. 4) がトガリリュウグウボタルには言及せずリュウグウボタルを *Amalda rubiginosa* として以来、両者の区別自体がなされない傾向にある。確かにリュウグウボタルとトガリリュウグウボタルの関係は微妙で、殻長が尖るか鈍いかという点しか明確な差異が見られないため、これらは同種の変異と見るのが妥当であろう。しかしどの学名を用いるかはそれとは別の問題で、上記両学名のタイプ標本を見比べると *Ancilla rubiginosa* は殻頂周辺を覆う滑層が薄く、不規則な螺状の彫刻が多数明瞭に刻まれる点で *Ancilla albocallosa* すなわち日本産リュウグウボタルとは異なった印象を受ける。近年中国で刊行された文献 (Li & Ma, 2004: 101, pl. 060, fig. G; 张, 2008: 221, text-figs; 杨他, 2013: 106, 107, fig. 389; all as *Ancilla rubiginosa*) の図示個体は *Ancilla rubiginosa* によく一致する。したがって *Ancilla rubiginosa* は中国沿岸に特異的に見られる種の可能性があり、日本産はそれとは区別して *Ancilla albocallosa* に同定するのが現時点では妥当であろう。殻長約 70 mm, 殻径約 33 mm, 螺塔の高い紡錘形で厚く堅牢。殻頂は鈍いか尖り、白く厚い滑層で二次的に覆われ、縫合はその下に埋もれて見えない。殻表は光沢があり、赤みがかった肌色で、体層の縫合下と殻底に赤褐色の太い螺状色帯を巡らし、殻底の色帯はさらに後方が白色帯で縁取られる。縞帯は白く、幅広く明瞭。殻口は縦長の三角形で広く、外唇は単純。前管溝は短い彎入となる。蓋は角質、半透明の黄褐色、長方形で殻口よりはるかに小さい。軟体は未詳 (同属の近縁種の生体写真は土田, 2017: pl. 288–289 に複数掲載されている)。

写真： 備前 [倉敷市下津井] 六口島沖, 畠田和一コレクション #1059, 福田撮影。殻長 24.7 mm, 殻径 11.2 mm。



**分布** タイプ産地は「aus der Nähe von Nagasaki」(長崎近郊)。太平洋側は房総半島以南 (清水利, 2001: 65, no. 1143, as *Amalda rubiginosa*), 日本海側は山口県北長門海岸以南 (池田美・多田武, 1963: 24, no. 486; 多田武, 1964: 153; both as *Ancilla* (*Baryspira*) *albocallosa*), どちらも九州まで分布する。国外は韓国から閩他 (2004: 252, fig. 696, as *Amalda* (*Baryspira*) *rubiginosa albocallosa*) が図示した個体は殻頂の滑層が平滑で日本産と共通し、同種とみられるが、中国沿岸以南に産するものは上記の通り別種の可能性がある。ベトナムからも *Amalda albocallosa*, *Amalda rubiginosa* とともに記録があるが (Hylleberg & Kilburn, 2003: 91), これらも日本や中国の個体と比較しなければ正確な同定は難しい。

**生息状況** 潮下帯から漸深海底にかけて砂泥底に棲息し、漁屑に混入していることが多い。主に外洋に産するイメージが強い種で、稲葉 (1982: 110, no. 339, as *Baryspira rubiginosa albocallosa*) は瀬戸内海では「稀」としているが、実際はさほどでなく、特に山口県周防灘では多産し、1970年代には周南市徳山の鮮魚店の店頭で防府市佐波島近海で漁獲された生貝が連日大量に並べられて1個体8円で売られていた (福田, 1992: 70, no. 293, pl. 19, fig. 293, as *B. r. albocallosa* の図示個体)。ただし近年は減少傾向にあり、濱村 (2004: 90, text-figs, as *Amalda rubiginosa*) は広島県倉橋・仁方・下蒲刈・蒲刈各町での底引き網で得られた本種を記録しているが、そのうち生貝は仁方町だけで、あとは全て死殻であったと記している。岡山県では上記稲葉 (1982) が「Ushimado」(瀬戸内市牛窓町) を産地として挙げたのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクション中に「備前 [倉敷市下津井] 六口島沖」(1個体, #1059; 写真) 産の標本が現存する。この個体は本種としては著しく小さく、若干の褪色と軸唇の破損が見られるため死殻を採集したものと考えられる。畠田がラベルにわざわざ「沖」と記しているのは、この個体が下津井港揚がりの漁屑由来という意味であろう。これ以降岡山県では本種は全く確認されていない。本種は周防灘ではヤツシロガイ、カズラガイ、トウイトなどと随伴し、これらの種が同時に見られるのが通例であったが、岡山県では今挙げた3種全てがもう50年以上一度も見出されておらず、ことごとく絶滅したと見なさざるを得ない状況である。本種もそれらの種と運命をともにして、1960年代以降に本県から滅び去ったものと考えられる。

(福田 宏)

## バイ

*Babylonia japonica* (Reeve, 1842)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 上科未詳 バイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 従来多くの文献が Reeve (1843b: 200) を本種の本記載とみなしてきたが、その前年に刊行された Reeve (1842 in 1841–1842: 239, pl. 271, fig. 1, as *Eburna Japonica*) がより古いので、学名の記載年は 1842 が正しい。のちに Reeve (1849a: sp. 3, pl. 1, fig. 3) にも図示され、Higo *et al.* (2001: 78, fig. G2736, as *Babylonia japonica*) はレクトタイプの写真を公表した。殻長約 70 mm, 殻径約 40 mm, 太い紡錘形で硬質堅固, 生時は厚く茶褐色のピロード状殻皮を被り, その下の殻表は成長脈を除きほぼ平滑で, 白色の地に淡紫褐色の顕著な斑紋をもち, この斑紋は縫合下と周縁に並ぶ大きな勾玉形の斑点列と, それらの間の小さな円形の斑点群から成る。殻口内は薄紫色を帯びた白色で陶器状の光沢がある。臍孔は狭く開き, 綫帯は顕著で幅広い。蓋は角質で厚く, 前端の尖った雫形で, 核は前端に位置する。軟体の背面は細かい黒色斑で覆われ, 臍面は幅広く扁平でベージュ色。頭部に一對の細長い頭触角と, 長い水管をもつ (高重, 2019: 210, 211, text-figs など多くの文献に生体写真あり)。



写真：瀬戸内市牛窓町鹿忍, 2004年5月23日, OKCAB M8638, 福田撮影。長さ 8.2 mm。

**分布** タイプ産地は「found on the sands at Japan」(日本の砂上), シーボルト採集。Schrenck (1867: 440–441, no. 92) 及び八田・佐々木望 (1910: 95, no. 20) がそれぞれ「Hakodate」, 「北見」から報告したのをはじめとして北海道南部以南から知られ, 本州・四国・九州の海に面したすべての都道府県から産出記録がある。沖縄県では横山 (1931: 41, no. 1471), 黒田 (1960: 30, no. 881), 窪田 (1962: 73, no. 1030) による記録があり, Altena & Gittenberger (1981: 25–27) も U.S. National Museum に「Ryukyu Islands」産の標本が存在するとしているが, 琉球列島での近年の確実な産出記録はなく, 同属の沖縄島及び徳之島固有種 *Babylonia kirana* Habe, 1965 ウスイロバイと混同されていた可能性が高い。台湾や中国をも本種の分布域に含める場合があるが (e.g. Kuroda, 1941: 116, no. 642; Habe, 1965d: 122, pl. 1, fig. 7; Higo *et al.*, 1999: 240, no. G2736), それらも疑わしく, 現時点で国外での本種の産出が確実なのは朝鮮半島 (関他, 2004: 230, 231, fig. 620) までである。

**生息状況** 内湾・外洋にまたがって潮間帯下部～漸深海底の砂泥底または砂底に棲息し, かつては砂干潟の汀線附近にも生貝が多産していた。食用となるだけでなく, 殻がペーゴマ(「バイゴマ」が転訛してその名がある) など貝細工に利用されていたため, 海底に沈めた蛸籠(本種は腐肉食性であるため, 籠に魚の屍肉などを入れて誘き寄せる)で一度に多数個体を捕らえる伝統的な漁法も盛んに行われていた。しかし 1970 年代以降全国的に急減し, 90 年代にはほとんど漁獲できない状態に陥って, 死殻を目にする機会すら稀になった。これは当時まで船底塗料として防汚性能に優れていたために使用されていた有機スズ化合物(トリブチルスズ (TBT) 及びトリフェニルスズ (TPT)) が, 本種に対する内分泌攪乱物質(いわゆる環境ホルモン)として作用し, 雌に陰茎と輸精管が形成されて産卵が不能となるインボセックス=雄性形質誘導及び生殖不全症候群(堀口・清水誠, 1992: 113, 124–126, figs 7–13, 7–14; 堀口, 1998: 548–550, figs 3–4; 2000: 61, 62, 65–66; 2007: 231–232; 庄司他, 2003: 7–13, fig. 3; Horiguchi *et al.*, 2005: 13–18, fig. 4) が最大の要因と考えられている。その後 1990 年に TBT や TPT が第二種特定化学物質に指定されて総量規制が実施されるなどした結果, 太平洋岸や日本海岸など開放的な外洋にあって海水の入れ替わりが盛んな海域から徐々に復活傾向に転じ, 近年は岡山県でも鮮魚店の店頭に島根・鳥取県や九州西岸などで漁獲された本種が再び並ぶようになった。しかし本県ではもともと少なかったらしく, 畠田和一コレクションに標本は含まれていない。岡大玉野臨海 (1978: 161) の目録中には本種の名が挙げられているものの, それ以外には 2004 年に瀬戸内市牛窓町鹿忍の矢寄ヶ浜で, 体層の一部だけになった摩滅の著しい破片 1 個 (OKCAB M8638; 写真) が採集されたのみで, 生貝はおろか新しい死殻すら見出されないまま今に至る。瀬戸内海で最も内奥に位置し, 外部海域との海水の交換が比較的少ない本県では TBT・TPT によるインボセックス被害も近隣他県以上に甚大であった可能性が高く, 本種は 1970～90 年代に致命的な打撃を受けたと考えられ, 今もなお復活の兆しすら見えないままである。岡山県に比べればまだしも海産貝類の多様性が豊富な状態に保たれている広島県芸南地方でさえ, 2004 年の時点で「現在生息は確認できない」とされているほどで (濱村, 2004: 85, text-fig.), 現時点で岡山県内に本種の個体群が存在すると考えるに足る証拠は見出されず, 絶滅したと判断せざるをえない。本種はインボセックスによる脅威に加え, ヴェリジャー幼生の浮遊期間がわずか 2～3 日程度しかなく (網尾, 1963: 327, fig. 52a–b), 分散能力が低い点も個体群が容易に復活できない重要な要因のひとつと考えられる。仮に将来近隣他県から新規加入が生じ, かつてのように生貝が産出するさまを岡山県内で目にする日が来るとしても, それは今よりずっと先のことになるであろう。

(福田 宏・久保弘文)

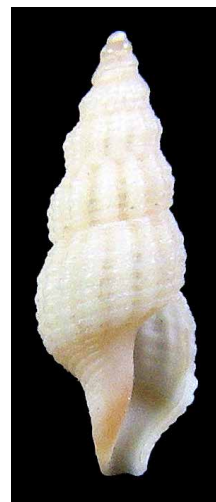
## アミコシボンクチキレツブ

*Etrema texta* (Dunker, 1860)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 コシボンクチキレツブ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Dunker (1860: 225–226, no. 11, as *Defrancia texta*) で、のちに Dunker (1861: 2, no. 5, pl. 1, fig. 19) が図示し、その図は Tryon (1884: 207, pl. 9, fig. 42, as *Drillia texta*) に転載された。さらに Janssen (1993: 416, 430 (pl. 6), fig. 45, as *Etremopsis texta*) がホロタイプの写真を公表している。殻長約 6 mm, 殻径約 2 mm, 前後に細長く引き伸ばされた紡錘形, 螺塔が高く, 螺層は 7 層以上を数え, よく膨らみ, 縫合は縊れる。殻表は緩やかに彎曲した縦肋を狭い間隔で並べ, 肋間は肋幅の半分以下。多数の細かく明瞭な糸状螺脈が縦肋の上に乗って縄目状をなすが, 殻底では螺脈のみとなる。胎殻は赤褐色。後成層は殻口内も含めて全体的に淡いクリーム色で, 縫合下及び殻底は明るい赤褐色に彩られ, 殻口内側の 2 箇所と内唇～軸唇の滑層も同色に染まる。殻口外唇背面の縦脹肋は強大で幅広く, 後端の肛彎入は顕著。殻口外唇内側は外側を走る螺脈と対応する形で小歯が規則正しく並ぶ。内唇と軸唇は単純でほぼ直線的。前管溝は短いが明瞭で幅広い。蓋を欠く。軟体は未詳。写真： 備前 [倉敷市下津井] 六口島, 畠田和一コレクション #4077, 福田撮影。殻長 5.3 mm, 殻径 1.8 mm。



**分布** タイプ産地は「im Hafen von Decima in Japan」(日本 [長崎県長崎市] 出島の港内)。太平洋側は岩手県三陸沿岸, 日本海側は能登半島以南, 九州までと朝鮮半島, 台湾緑島に分布する (Matsuura, 1977: 148, no. 182, pl. 7, fig. 24, as *Clathurella (Etremopa) texta*; 張, 1995: 285, no. 61, pl. 2, fig. 9; Chang, 2001 (23 Jul.): 149, fig. 177; 関他, 2004: 267, fig. 757-1-2, as *Etrema (Etremopa) streptonotus* (この学名はホソヌメシヤジクであり誤同定); 戸羽, 2009: 47, fig. 109; 長谷川, 2017: 1015, pl. 309, fig. 7)。

**生息状況** 潮間帯下部から潮下帯にかけての砂底に産し, 死殻は浜辺に打ち上げられることがあるが, 生貝を見る機会は少ない。岡山県での文献記録は E.A. Smith (1879: 195, no. 30, as *Drillia texta*) が最初で, 「Station 22. Inland sea between Shikoku and Nippon, 34°31' N. lat., 133°40' E. long.; 22 fathoms」から本種をドレッジで得たと報告しており, その経緯度の数値は現在の倉敷市玉島沖に相当する(同時に報告されたヒラドサンゴヤドリ, ムシボタル, カンダイボシヤジクの項も参照)。また岡大玉野臨海 (1978: 161) も当時の岡山大学理学部付属玉野臨海実験所周辺に産する海産生物目録の中に本種を含め, 矢野 (1979: 2) は岡山市中区新岡山港に置かれた浚渫砂の中から本種の死殻をセムシマドアキガイ, ヌノメツボ, ナワメグルマなどと共に得たと記している。さらに畠田和一コレクションには「備前 [倉敷市下津井] 六口島」(4 個体, #4077; 写真) 及び「[笠岡市] 白石島」(1 個体, #4154) の 2 ロットが現存する。それらはいずれも標本の状態から判断して, 砂浜に打ち上げられていたものと推測される。しかし近年は県内から見出されたことがなく, 2000 年代以降に岡山・玉野・瀬戸内各市で実施されたドレッジ調査によっても確認できなかった。白石島では 2018 年にも海岸を調査したがやはり全く採集できなかった。このため本種は 1970 年代頃を境に県内から急速に姿を消し, 今となっては生き残っているかどうか怪しい状態にある。海岸と海底の人工的改変及び水質汚濁が本種に悪影響を与え, 個体群存続を妨げたものと考えられる。

(福田 宏)

## カタカドマンジ

*Guraleus semicarinatus* (Pilsbry, 1904)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 マンジガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Pilsbry (1904a: 9, pl. 2, fig. 16, 16a, as *Mangilia semicarinata*)。Higo *et al.* (2001: 108, fig. G3769, as *Guraleus semicarinata* [sic]) がシタイプの写真を公表している。殻長約 7.5 mm, 殻径約 3 mm, 前後に細長く引き伸ばされた紡錘形, 螺塔は高くして螺層数は 6 層以上を数える。螺層の膨らみは弱く、縫合は多少溢れる。殻表は緩く彎曲した細い縦肋を狭い間隔で並べ、糸状の螺脈と交叉して格子目状となる。縫合下には螺脈がなく傾斜のついた部分があり、その直下の肩部を走る螺脈は明瞭に角張って肩角をなす。胎殻や殻口内も含めて全体的に淡いクリーム色で、外唇背面中央部に淡茶褐色の斑点を 1 個もつが、個体によっては薄く目立たない。殻口外唇背面の縦張肋は強力で幅広く、後端の肛彎入は顕著で、その前後に小さいが鋭い歯状突起を 1 個ずつそなえる。殻口外唇内側は著しく肥厚する。内唇と軸唇は単純でほぼ直線的。前管溝は短く幅広い。蓋と軟体は未詳。

写真： [倉敷市] 下津井, 畠田和一コレクション #4151, 福田撮影。殻長 7.4 mm, 殻径 2.8 mm。



**分布** タイプ産地は「Hirado, Hizen」(肥前國 [現・長崎県] 平戸)。現生個体は房総半島・佐渡島以南、九州までに分布するとされる (Higo *et al.*, 1999: 320–321, no. G3769; 長谷川他, 2017: 1020, pl. 314, fig. 8)。Choe *et al.* (1997: 116–117, no. 20) は朝鮮半島から「*Mangilia* (*Guraleus*) *deshayesii* (Dunker, 1860)」(ソソチャマンジ) の産出を報告した際、本種をその同物異名として扱ったが、両者は明らかに別種であり、本種が朝鮮半島にも分布するかどうかは検討の余地がある。また日本でも、Yokoyama (1920: 41–42, no. 24, pl. 1, fig. 24a–c) がやはりソソチャマンジの学名である「*Pleurotoma* (*Mangilia*) *deshayesii*, Dunker」を用いて報告した「Koshiha Zone (Koshiha); Upper Musashino of Shimosa」(神奈川県横浜市金沢区柴町小柴, 鮮新世上総層群小柴層の化石) の個体は、Oyama (1973: 54, pl. 16, fig. 4a–c) によると本種の誤同定である。

**生息状況** 潮下帯の砂礫底に棲息するらしく、時に死殻が浜辺に打ち上げられるが、棲息の実態に関する情報はいまだ乏しい。瀬戸内海では備讃瀬戸及び水島灘・備後灘及び燧灘・安芸灘・伊予灘に「普通」に産するとされている (稲葉, 1982: 114, no. 374)。岡山県でも文献記録はなく、畠田和一コレクションに含まれる「[倉敷市] 下津井」産の状態の良い (採集時は生貝であったかもしれない) 1 個体 (#4151 (part), *Etrempa gainesii* (Pilsbry, 1895) チャイロフタナシヤジク 1 個体とともに; 写真) が唯一の産出の証拠で、その後は死殻も一切確認されていない。高度経済成長期の海岸の埋め立てや水質汚濁、海底の砂の浚渫などによって棲息環境が奪われ、絶滅またはそれに近い状況に追い詰められた可能性が高い。

(福田 宏)

## ハッカクフタナシシャジク

*Hemicythara octangulata* (Dunker, 1860)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 マンジガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Dunker (1860: 234–235, no. 39, as *Pleurotoma octangulata*) で、のちに Dunker (1861: 1–2, no. 4, pl. 1, fig. 18) が図示し、その図は Tryon (1884: 283, pl. 16, fig. 50, as *Clathurella octangula* [sic]) に転載された。さらに Janssen (1993: 413, pl. 5, fig. 43) はレクタタイプの写真を公表している。殻長約 8.5 mm、殻径約 4 mm、螺塔が高く、各螺層の肩が鋭く角張って階段状をなし、縫合は強く縊れる。厚く堅牢で、ほぼ等間隔に太い畝状の縦肋を並べ、その上に低い螺肋が乗る。地色は白く、周縁から縫合に沿って茶褐色の色帯を巡らし、個体によっては不連続な破線状となる。殻口外唇背面に太く顕著な縦脹肋を生じ、後端の肛彎入は深く幅広い。前管溝は短い幅広い。殻口はやや広く、内面は白色で、殻表の螺状色帯に対応する形で、より濃いチョコレート色の模様が明瞭かつ不連続に現れる。軸唇に弱い歯状突起を数個並べる。和名の通り蓋を欠く。軟体の頭部-腹足の背面は白地に不透明な白斑及び檸檬色の細かい色素斑を多数散在する。頭触角は短く、水管は中庸の長さ（高重, 2019: 200, 201, text-figs に生体写真あり）。

写真：〔倉敷市下津井〕六口島、島田和一コレクション #2217, 福田撮影。殻長 9.2 mm, 殻径 4.3 mm。



**分布** タイプ産地は「im Hafen von Decima in Japan」（日本〔長崎県長崎市〕出島の港内）。太平洋側は房総半島、日本海側は男鹿半島以南、南西諸島までと朝鮮半島に分布する（西村正・渡部景, 1943: 68, no. 141; 関他, 2004: 271, fig. 770-1–5; 久保, 2014: 334; 長谷川他, 2017: 1019, pl. 313, fig. 1）。

**生息状況** 主として太平洋や日本海の外洋に面した海岸の潮間帯下部～潮下帯に多く見られる種で、多くの場合石灰藻が覆う岩礁の隙間や表層を匍匐する。瀬戸内海でも全域に普通に産するとされ（稲葉, 1982: 114, no. 375）、広島県や香川県では近年も採集例がある（濱村, 2004: 95, text-fig.; 瀬尾・Tanangonan, 2014: 101, no. 164）。しかし岡山県では文献記録は存在せず、島田和一コレクション中の「〔倉敷市下津井〕六口島」産標本（1 個体, #2217; 写真）が現在に至るまで唯一の産出の証拠である。ベニバイやヒゼンツクシなどと同様、どちらかといえば外洋水の影響を受ける潮通しの良い場所を好む種であるため、岡山県では同様の環境が護岸や水質汚濁などによって大きく損なわれた今日、特に県内本土沿岸で生貝が再発見される可能性はほぼ絶望的である。ただし笠岡諸島の南部など島嶼部にはまだ個体群が存続している可能性も否定できず、今後の精査が必要である。

（福田 宏）

## キバコトツブ

*Ithyocythara oywana* (Yokoyama, 1922)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 マンジガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Yokoyama (1922: 43–44, no. 39, pl. 1, fig. 36, as *Mangilia (Cythara) oywana*) で、ホロタイプの図は Oyama (1973: 54, pl. 16, fig. 12a–b, as *Ithyocythara oywana*) に転載された。殻長約 8 mm、殻径約 2.8 mm、前後に細長く、螺塔は高く螺層数は 7 層以上を数える。螺層の膨らみは弱く、縫合は多少縊れる。光沢のある硬質堅固な瑠璃状の質感で、殻表は緩く彎曲した強い畝状の縦肋を広い間隔で並べ、それらの間の周縁附近に 2–3 本の細い糸状螺脈が走り、また殻底にも微弱な螺状脈をもつが、それ以外は平滑。胎殻や殻口内も含めて全体的に赤みがかった褐色で、縦肋のみ白く浮き上がる。殻口外唇背面に太く顕著な縦脹肋を生じ、後端の肛彎入は浅いが明瞭で、その前と後ろに 1 個ずつ低い歯状突起をそなえる。殻口は外唇内側が肥厚して狭められる。内唇から軸唇にかけては直線的で、その中程に弱い突起を 1 個もつが、個体によっては不明瞭。前管溝は短く幅広い。蓋と軟体は未詳。

写真： 備前〔倉敷市下津井〕六口島、畠田和一コレクション #2779、福田撮影。殻長 8.0 mm、殻径 2.9 mm。

**分布** タイプ産地は「Shisui」（千葉県印旛郡酒々井町、後期更新世印旛層群の化石）。現生個体は房総半島・能登半島以南、九州までに分布するとされ (Higo *et al.*, 1999: 322, no. G3785; 長谷川他, 2017: 359 (pl. 315), fig. 4; 1021), 朝鮮半島でも確認されている (関他, 2004: 273, fig. 781-1–3)。

**生息状況** 潮下帯の砂泥底または砂礫底に棲息するらしく、時に死殻が浜辺に打ち上げられる。化石としては千葉県の地層から Nomura (1932: 121(57), no. 393) や大炊御門・池邊 (1934: 181, no. 70) らが報告しているが、現生個体の記録は少ない。瀬戸内海では大阪湾・周防灘（山口県山陽小野田市）・伊予灘に「稀」に産するとされる (稲葉, 1982: 114, no. 382)。岡山県でも文献記録はなく、畠田和一コレクション中の「備前〔倉敷市下津井〕六口島」産 1 個体（黒田〔徳米〕氏同定品）、#2779；写真が唯一の産出の証拠で、近年瀬戸内市や岡山市南区～玉野市で実施されたドレッジ調査によっても確認されていない。県内ではもともと少なかった可能性が高いが、戦後の海岸の環境悪化によって完全に絶滅した可能性もある。

(福田 宏)



## シロヌノメツブ

*Venustoma lacunosa* (Gould, 1860)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 マンジガイ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Gould (1860: 338, as *Clathrella lacunosa*) で、ホロタイプの写真を Johnson (1964: 97, pl. 5, fig. 4) が公表している。*Venustoma harucoa* Bartsch, 1941: 11, pl. 1, fig. 7 は新参異名で、こちらのホロタイプは Powell (1966: 121–122, 155, pl. 19, fig. 9, as *Nodotoma harucoa*) 及び Higo *et al.* (2001: 106, fig. G3651s) に図示された。殻長約 5 mm, 殻径約 2.5 mm, 太い紡錘形ないし蝸形で螺塔は高く、各螺層の肩は弱く角張り、縫合は明瞭。やや厚く、殻表はわずかに彎曲した低い縦肋と細く直線的な螺脈とが交叉して布目状を成す。殻全体が乳白色。胎殻は乳頭状。殻口外唇は肥厚せず、後端の肛彎入は浅い。前管溝は短く幅広い。殻口はやや広い。蓋や軟体は未詳。

写真：岡山市南区米崎沖 水深 5.2 m 泥底 ドレッジ St. 6, 2002 年 9 月 18 日, OKCAB M24516, 福田撮影。殻長 7.0 mm, 殻径 3.2 mm。



**分布** タイプ産地は「Hong Kong Harbor in 10 fathoms, shelly bottom」(香港港, 10 尋, 貝殻砂底)。*Venustoma harucoa* のタイプ産地は「Japan Seas」。長谷川他 (2017: 1021, pl. 315, fig. 6) は「北海道以南九州まで」に分布するとしているが、筆者は北海道からの具体的な記録を見出すに至っていない。それ以前の波部 (1961a: 78, pl. 39, fig. 6) は北限を三重県及び若狭湾, Higo *et al.* (1999: 313, no. G3651) は宮城県としており、分布域の北端の記述は著者ごとに定まっていない。また、タイプ産地が香港であるにもかかわらず南西諸島からは明確な記録がなく、その一方で Kay & S. Johnson (1987: 122, as *Nodotoma harucoa*) は本種を日本周辺から遠く離れた「Enewetak Atoll」(中部太平洋マーシャル諸島のエニウエトク環礁) から報告しており、この記録は本当に同種であるか再検討の必要があろう。

**生息状況** 潮下帯(水深 5 m 程度)から漸深海底上部にかけての砂泥底に見出される種であるが、文献上の言及例は少なく、棲息の実態はいまだ不明瞭な点が多い。福岡県では玄界灘の「イタヤガイ漁網」で得られている(高橋・岡本, 1969: 50, no. 418, pl. 9, figs 27–28)。瀬戸内海では備後灘及び燧灘・安芸灘・伊予灘に普通に見られるとされている(稲葉, 1982: 115, no. 390)ものの、生貝が得られたという確実な報告例はなく、近年の広島県芸南地方でも「海砂」から死殻が記録されているのみである(濱村, 2004: 95, text-fig.)。岡山県での産出は現在まで 2 例にとどまり、畠田和一コレクション中の「備前朝日村切石[現・岡山市東区正儀]産(2 個体, 「黒田[徳米]氏同定品[昭和]14 [=1939].1.21.」, #2769)及び、2002 年 9 月に岡山市南区米崎沖の水深 5.2 m の泥底からドレッジによって得られた比較的新しい死殻 1 個(OKCAB M24516; 写真)が記録のすべてである。畠田標本は恐らく砂浜へ打ち上げられた死殻とみられ、2002 年の採集個体も水深約 5 m という浅所で得られていることから、岡山県での本種は児島湾湾口部の潮下帯に個体群が存在する(またはかつて存在していた)と推測されるが、いまだ生貝が確認されたためしがないのでそれ以上のことは不明である。少なくとも広い範囲に多産する普通種ではなく、現在も県内に生存しているという確証はない。

(福田 宏)



## カンダイボシヤジク

*Crassispira flavonodulosa* (E.A. Smith, 1879)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 モミジボラ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す文献記録や標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** カンダイボシヤジクの和名で知られる種は、黒田 (1950c: 50–51, text-figs 1–2) が *Crassispira* (*Crassispirella*) *kandai* として新種記載した (その前年にも黒田, 1949: (14)40, text-figs が同じ名で記載を試みているが、手書き原稿の複写のため国際動物命名規約第4版の条9.「公表したことにならないもの」に該当し、不適格である)。そのホロタイプの写真は菊池典他 (1996: 23–24, no. 74, pl. 13, fig. 74a–b, as *Pilsbryspira kandai*) 及び Higo *et al.* (2001: 104, fig. G3595, as *P. kandai*) に掲載されている。ところが、Higo *et al.* の図のすぐ左, fig. G3594 の「*P. flavonodulosa* (E.A. Smith, 1879)」のホロタイプも識別困難で、これらは明らかに同種である。後者は *Drillia flavonodulosa* E.A. Smith, 1879: 194, no. 27, pl. 19, fig. 21 として記載され (原図は Tryon, 1884: 202, pl. 11, fig. 99, as *D. flavonodulosa* に転載)、対応する和名はキボシヤジクが用いられてきた (e.g. 肥後・後藤, 1993: 296, no. 4340, as *P. flavonodulosa*)。黒田 (1950c) は *C. kandai* を記載した際、「“*D.*” *flavonodulosa* Smith (1879) 瀬戸内海産は遠い類縁を有するものの如くである」と曖昧な表現をしており、*D. flavonodulosa* の実態を十分に把握できていないまま *C. kandai* の記載に踏み切ったと読み取れる。したがってここでは *C. kandai* を *D. flavonodulosa* の新参異名と見なす (新異名)。一方、波部 (1961a: 76, pl. 38, fig. 5) は「*C. flavonodulosa* (Smith) キボシヤジク」を図示したが、その個体は *D. flavonodulosa* ではなく、すぐ右 (fig. 6) に載っている「*C. albiguttata* (Pilsbry) シラボシヤジク」と同種である。シラボシヤジクは *D. albiguttata* Pilsbry, 1904a: 8, pl. 3, fig. 19 として記載され (タイプ産地は「Seto, Kii」, 和歌山県白浜町瀬戸)、*D. flavonodulosa* (= *C. kandai*) とは明確に識別可能な別種であるが、殻表に現れる斑点の色が鮮やかな檸檬色から白色まで変異があり、波部は恐らく「シラボシヤジク」「キボシヤジク」の和名に引きずられて色彩変異を別種と思い込み、しかも真のキボシヤジク (= カンダイボシヤジク) を認識していなかったと推測される。その後稲葉 (1982: 112, no. 361) は、「*C. flavonodulosa* シラボシヤジク」と「*D. albiguttata* キボシヤジク」を同種の異名と見なしており、これは上記波部 (1961a) の誤同定に影響されたとみられる。なぜなら上記の通り波部 (1961a) の「シラボシヤジク」と「キボシヤジク」は同種であるから、それに従えば両者の学名が互いに異名に見えてしまうのはやむを得ない。さらに波部・増田 (1990: 63, no. 1010) に至っては *C. flavonodulosa* の和名を「シラボシヤジクガイ (ギボシヤジクガイ [sic])」と表現し、これは稲葉と同様 *D. flavonodulosa* = *D. albiguttata* という見解に基づくと考えられる。しかしそれはもちろん誤りで、*D. flavonodulosa* (= *C. kandai*; カンダイボシヤジク, キボシヤジク) と *D. albiguttata* (シラボシヤジク, 波部のいうキボシヤジク) は別種として峻別されねばならない。ややこしいのはキボシヤジクという和名が両種に跨って使用されてきたことであり、今後は混乱を避けるためにその名を棄て、*D. flavonodulosa* をカンダイボシヤジク、*D. albiguttata* をシラボシヤジクとする方が無難と考えられる。本種は殻長約 9.5 mm, 殻径約 3 mm, 細長い紡錘形で螺塔が高く、厚い。縫合は明瞭。殻表は太い畝状の縦肋をほぼ等間隔に並べ、その上に明瞭な螺肋を巡らし、交点は横長の疣状となる。縫合下、周縁と殻底は白色で、それらの間の肩部と周縁下に栗色の螺旋色帯を巡らす。胎殻は大きく乳頭状。殻口は狭い楕円形で外唇は肥厚せず、後端の肛彎入は広く明瞭な U 字形。内唇後端に滑層瘤をもつ。前管溝は短く幅広い。蓋や軟体は未詳。図： E.A. Smith (1879: pl. 19, fig. 21) によるタイプ標本 (倉敷市産) の描画。殻長 9.5 mm, 殻径 3 mm と原文にある。



**分布** タイプ産地は「Station 22. Inland sea between Shikoku and Nippon, 34°31' N. lat., 133°40' E. long.; 22 fathoms」(四国と本州の間の瀬戸内海, 22 尋=約 40 m) で、経緯度の数値は現在の岡山県倉敷市玉島沖を示す。新参異名の *Crassispira* (*Crassispirella*) *kandai* は「和歌山縣日高郡白崎村大引産, 神田 [耕一郎] 氏が海老網から採集」した個体をもとに記載された。今日に至るまで著しく文献記録の少ない種で、本種に同定可能な個体を図示した近年の文献は北川 (2017: pl. 201, fig. 15, no. G3594, as *Crassispira flavonodulosa* キボシヤジク, 産地は「三重」; fig. 16, no. G3595, as *Pilsbryspira kandai* カンダイボシヤジク, 「和歌山 35 m」) 及び西邦 (2019: 10, fig. 5, as カンダイボシヤジク, 「宮崎市」) ぐらいしか見当たらない。堀川 (1964: 39, no. 611, as *Crassispina* [sic] *flavoclosa* [sic] キボシヤジク) は長崎県西海市大瀬戸, 池辺・吉田 (2006: 80, no. 2580, as *P. kandai* カンダイボシヤジクガイ) は和歌山県御坊市上野からそれぞれ本種を記録しているが、図がないため同定が正しいか否かは判断できない。その他の文献記録の大半はシラボシヤジクを指すと考えられる。

**生息状況** タイプ標本は水深約 40 m の潮下帯深部からドレッジで得られ、深度は北川 (2017) の「35 m」に近い。また異名の *Crassispira kandai* は海老網によるとされ、やはり潮下帯から水揚げされたものであろう。しかしそれ以上の具体的な情報は無い。最も驚くべきは、このような極端な稀産種のタイプ産地が岡山県であったという点にある。E.A. Smith は本種を記載した際、同じ倉敷市玉島沖 22 尋からヒラドサンゴヤドリ, ムシボタル, アミコシボクチキレも報告している (それらの項を参照)。このうちムシボタルは再発見されず、アミコシボクチキレは畠田標本以後の記録はなく、ヒラドサンゴヤドリも畠田が標本を残した後はわずかな死殻が得られているのみである。そして本種は、畠田コレクションにも含まれておらず、一度たりとも産出が認められたことはない。Smith の検討標本が採集された時代、つまり明治初期の倉敷市沖の海底には、現在とは全く異なる貝類相が存在したことは明らかで、それ以降の環境悪化によって本来の海底環境が一変し、本種も絶滅したと考えられる。

(福田 宏)

## カスリマンジ

*Kuroshiodaphne subula* (Reeve, 1845)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 フデシャジ科 ●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅またはそれに近い状態にあると考えられる。

**形態** 原記載は Reeve (1845 in 1843–1846: sp. 211, pl. 24, fig. 211, as *Pleurotoma subula*) で、その図は Tryon (1884: 270, pl. 20, fig. 94, as *Mangilia* [(*Cythara*)] *subula*) にも転載されている。殻長約 18 mm、殻径約 7 mm、細長い紡錘形、螺塔は高く螺層数は 6 層以上を数える。螺層は弱く膨らみ、縫合は多少溢れる。殻表はわずかに彎曲した細い縦肋と、それより多少太く目立つ螺脈がそれぞれ密に並び、両者が交叉して明瞭な格子目状となる。肩部の螺脈が最も強く、多少角張って微弱な肩角をなす。胎殻や殻口内も含めて全体的に赤みがかった明るい褐色で、周縁や外唇の縦肋肋上に不規則な白斑を生じる。殻口外唇背面の縦肋肋は低い幅広く明瞭で、後端の肛彎入は深く顕著。殻口は縦長の半月形で内部は光沢が強く、内唇と軸唇は単純。前管溝は短く幅広い。蓋を欠く。軟体は未詳。

写真： [倉敷市下津井] 六口島、畠田和一コレクション #4074、福田撮影。殻長 18.0 mm、殻径 5.8 mm。



**分布** タイプ産地は「Island of Corrigidor [sic; = Corregidor], Philippines (found among coarse sand at the depth of seven fathoms)」(フィリピン、ルソン島マニラ湾のコレヒドール島、水深 7 尋、粗砂底)。Brazier (1876: 158, no. 36, as *Daphnella subula*) はオーストラリア北東端の「Darnley Island, Torres Straits; 8 fathoms, mud」(トレス海峡エラブ島) から本種を報告し、この記録はのちの著者に何度も引用されたが、Hedley (1922: 322) は *Hemidaphne axis* (Reeve, 1846) の誤同定としている。また Melvill & Standen (1901: 443, as *Mangilia subula*) と Melvill (1917: 193–194, no. 167, as *Daphnella subula*) はペルシャ湾 (オマーン湾やパキスタンのマクランコースト) から、さらに Bouge & Dautzenberg (1914: 212, as *Daphnella subula*) はニューカレドニアの「Lifu」 (= Lifou, リフー島) から本種を報告した。それらの同定が正しいなら、本種はインド-太平洋の広い範囲に赤道を跨いで分布することになるが、その一方で南西諸島からは明確な記録がない。国内では相模湾で産出すること (黒田他, 1971: 368–369 (和文), 234 (英文), pl. 55, fig. 24) が広く知られており、また「房総半島、佐渡島以南」に産するとされるが (長谷川・奥谷, 2017: 365 (pl. 321), fig. 1; 1027), 具体的な産出記録が少ないため、分布域の全貌ははっきりしない。

**生息状況** 潮下帯の砂底に棲息すると言われ、海底から浚渫された砂から時折死殻が採集されるが、生貝を見る機会は稀であり、棲息の実態は不明瞭である。瀬戸内海では「内区」 (= 備讃瀬戸 + 水島灘 + 備後灘 + 燧灘), 安芸灘 (今治), 伊予灘に産するものの「少ない」とされている (稲葉, 1982: 115, no. 393)。岡山県では畠田和一コレクションの中に「[倉敷市下津井] 六口島」産の保存状態の良い (採集時は生貝であった可能性のある) 1 個体 (#4074; 写真) が含まれ、かつては確かに県内に棲息していたことが窺える。しかしその後は、2002 年に岡山市南区米崎沖のドレッジ (水深 5.2 m, 泥底) により、殻底の一部だけとなった破片 1 個 (OKCAB M24517) が得られた他は一切見出されていない。本種もカタカドマンジやキバコトツブなどと同様、1970 年代以降の海岸の埋め立てや水質汚濁、海底の砂の浚渫などによって個体群はほぼ一掃され、既に県内から絶滅したか、あるいはそれに近い状況に追い詰められた可能性が濃厚である。

(福田 宏)

## スクナビコナトクサ

*Euterebra tantilla* (E.A. Smith, 1873)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 タケノコガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は *Myurella tantilla* E.A. Smith, 1873: 270 で、のちに E.A. Smith (1879: 185, no. 7, pl. 19, fig. 4, *Terebra tantilla*) に図示され、その図は Tryon (1885a: 35, pl. 11, fig. 4) 及び平瀬與 (1917: 36, no. 63; 48, pl. 8, fig. 116) に転載された。また E.A. Smith (1879) は *M. tantilla* と同じ記事の中で記載した *M. pumilio* E.A. Smith, 1873: 269–270 を自ら新参異名と見なしている。それら両学名のホロタイプは Bratcher & Cernohorsky (1987: 118, no. 124, pl. 32, fig. 124a–b, as *T. tantilla*) が図示し、Higo *et al.* (2001: 116, fig. G4109s, as *T. tantilla*) も *M. tantilla* のタイプ標本を公表した。山下博 (1996: 61–64, figs 1–10) は本種を日本産個体に基づいて再記載した際、*M. tantilla* より *M. pumilio* の方が掲載順が早いという理由で後者を有効名とみなし、この扱いは近年の文献 (土田, 2000: 673, pl. 335, fig. 32, as *Pristiterebra pumilio* ヘリグロツクシ; 濱村, 2004: 97, text-fig., as *P. pumilio* ヘリグロツクシ (スクナビコナトクサ); 池辺・吉田, 2006: 83, no. 2707, as *P. pumilio* ヘリグロトクサガイ [sic], スクナビコナトクサガイ; 瀬尾・Tanangonan, 2014: 101, no. 168, pl. 2, fig. 16, as *T. pumilio*; 土田・久保, 2017: 379 (pl. 335), fig. 16; 1044, as *P. pumilio*) に継承されているが、これは適切でない。なぜなら国際動物命名規約上は同一記事内で記載された複数のタクサは「同時に公表された学名」(条 24) であり、それらのうちのどの名が優先権を持つかは掲載順でなく「第一校訂者による決定」(条 24.2) が適用されると定められている。本種においては E.A. Smith (1879) が第一校訂者に相当し、彼はそこで *M. tantilla* へ優位性を明確に与えているため、両名を同種とみなす場合は常に *M. tantilla* を有効名とせねばならず、*M. pumilio* は無効となる。なお Bratcher & Cernohorsky (1987) は *T. asiatica* Ray, 1968: 28–29, no. 30, text-fig. 27 を本種のもう一つの新参異名と見なしている。属の所属はここでは Terryn (2007: 16, pl. 41, fig. 5; pl. 65) に従った。本種は殻長約 10 mm、殻径約 2.8 mm と小さく、日本に産するタケノコガイ科貝類のうち最小の種のひとつである。細長い塔形で螺層はおよそ 10 層を数え、やや厚い。殻表は弱い光沢のある淡褐色で、縫合下・周縁・殻底に茶褐色の色帯を巡らす。縦肋は太くてわずかに彎曲し、明瞭な縫合下帯上で顆粒状となり、肋間は細かい多数の螺脈が走る。蓋と軟体は未詳。別名ヘリグロツクシ。



写真： 岡山市築港緑町 児島湖 浚渫砂泥，2005年10月28日，OKCAB M15929，福田撮影。殻長 7.7 mm，殻径 2.0 mm。

**分布** タイプ産地は「Japan」であるが、のちの E.A. Smith (1879) は「Station 21. Between south-western extremity of Nippon and the island of Shikoku, 33°45' 1/2" N. lat., 132°30' E. long.; 30 fathoms. Persian Gulf」(本州南西端と四国との間、愛媛県伊予市沖、及びペルシャ湾、30 尋) としており、これが事実上のタイプ産地である。Higo *et al.* (2001: 116, footnote 2) は「The type locality ('Japan') may be incorrect」と記しているがその根拠は不明である。異名である *Myurella pumilio* のタイプ産地は「—?」、*Terebra asiatica* のタイプ産地は「off Puri on the Orissa coast of Bay of Bengal, India」(インド東北岸、ベンガル湾に面したオリッサ海岸のプリー沖)。また Melvill & Standen (1917: 217, no. 25, as *Terebra tantilla*) は「Persian Gulf, Henjam [= Hengam] Island. India [now Pakistan], Karachi, 3 fathoms, muddy stone bottom」(ペルシャ湾、イランのヘンガム島及びパキスタンのカラチ、3 尋、礫混じり泥底) から本種を報告している。最近 Terryn (2007) はオーストラリア北部のノーザンテリトリー州産の個体を図示した。日本では山下博 (1996) による大分県東国東郡姫島及び山口県柳井市(瀬戸内海周防灘～伊予灘)における記録が E.A. Smith 以降最初の詳細な報告で、その後濱村 (2004) が広島県三原市、池辺・吉田 (2006) が兵庫県淡路島北西岸の北淡町[現・淡路市] 石田、川淵 (2012: [32]) が淡路島の属島である成ヶ島、瀬尾・Tanangonan (2014) が香川県での採集例を追加した。Aubry & Gargiulo (2019: 66–67, text-fig.) は本種の日本で分布を示す地図において、三河湾と土佐湾あたりに産出を示す赤丸を打っているが、具体的な情報は記されておらず、本文でも日本での産出に関する詳細かつ信頼できる情報を得ていないと述べているため、結局国内での確実な産地はいまだに瀬戸内海からしか知られていない。また日本とインド及びオーストラリア北部の間からの産出記録もなく、もしそれら全てが同種であれば生物地理学的に興味深い、あるいは国外の個体は別種である可能性も除外できない。

**生息状況** 内湾奥潮下帯の砂泥底または細砂底に産するとみられ、瀬戸内海では水深約 1–40 m の海底から浚渫された砂や漁屑の中に稀に死殻が見られるが、生貝の報告例はいまだ存在せず、棲息の実態は知られていない。岡山県では畠田と一コレクションに「備前 [岡山市東区] 犬島」(26 個体, #2795) 及び「犬島」(「ヒメトクサ 波部 [忠重] 氏同定 1957.6.」, 1 個体, #4083) で採集された 2 ロットが現存する。また 2002 年に岡山市東区水門湾中央部 (水深 1.4 m, 泥底)、同市南区米崎沖 (水深 5.2 m, 泥底)、玉野市波張崎南東沖 (水深 22 m, 泥底)、波張崎～犬島間 (水深 14.3 m, 砂底)、玉野市大入崎～犬島間 (水深 10 m, 砂底)、及び大入崎東沖 (水深 17.4 m, 砂底) で実施されたドレッジ調査によっても多数の死殻が得られている (OKCB M24074, M24177, M24300, M24388, M24519, M24640)。しかしそれらすべてが褪色・摩滅の甚だしい古い殻であるため、今も県内の海底に本種の生貝が棲息しているという証拠にはならず、ずっと以前に絶滅してしまっている可能性が濃厚である。それ以前に本種はネコノアシガキなどと同様、有史以前に自然絶滅し、海底堆積物の中に含まれている化石が採集されている可能性もあるので、その場合は近年の人為的要因によって絶滅の危機に陥った他の種と同列に扱うべきではないが、現時点では絶滅した年代や要因すら一切不明のため、とりあえずここに絶滅種として掲載する。

(福田 宏)

## アワジタケ

*Strioterebrum japonicum* (E.A. Smith, 1873)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 タケノコガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は E.A. Smith (1873: 265–266, as *Terebra japonica*)。 *T. Lischkeana* Dunker, 1877: 74, no. 26 (のちに Dunker, 1882: 71–72, pl. 5, figs 13–16 (as “var.”) に図示), 及び *T. awajiensis* Pilsbry, 1904a: 4–5, pl. 1, fig. 3, 3a は新参異名。これら 3 学名のタイプ標本の写真は Bratcher & Cernohorsky (1987: 94–96, no. 88, pl. 24, fig. 88a–c, as *T. japonica*), Higo *et al.* (2001: 116, figs G4098–G4099, as *T. japonica*, *T. awajiensis*), Terryn (2007: 27, pl. 30, figs 2–4; pl. 60), Aubry & Gargiulo (2019: 182–183, figs 1–4) に掲載されている。従来国内の文献ではもっぱら、*T. japonica* と *T. lischkeana* はヒメトクサ (トクサガイ)、*T. awajiensis* はアワジタケとして区別されてきた (e.g. Oyama, 1961b: *Brevimyrella*·*Myurella*, figs 1–2, 8; 3, 9; 大山, 1961c: 455, as *B. lischkeana*, *B. awajiensis*; 土田・久保, 2017: 1049, pl. 339), figs 8–9, as *B. japonica*, *B. awajiensis*)。両者は体層の太さ及び縫合下溝が縦肋上で途切れるか連続的かで識別されている。しかし、もしヒメトクサとアワジタケが相互に区別可能な別種であるとしても、*T. japonica*, *T. lischkeana* 及び *T. awajiensis* それぞれのタイプ標本は全てアワジタケに相当するため、少なくともこれら 3 学名は異名であり、ヒメトクサには適切な学名が見当たらないことになる。現時点で確認できた岡山県産標本はアワジタケのみであるため、以下にはアワジタケの形態を記載する：殻長約 36 mm, 殻径約 8 mm, 細長い塔形で螺層はおおよそ 15 層に達し、厚く堅牢。螺層の膨らみは弱い、体層では多少下膨れとなり、周縁から殻底にかけては丸い。殻表は光沢のあるクリーム色で、濃褐色の四角い斑紋が不規則に現れる。周縁に白色帯を巡らす。縦肋は細くて鋭く、わずかに彎曲し、肋間は縦肋と同幅またはそれよりやや広く、微細な螺脈を巡らせるかまたは平滑。細い縫合下溝が縦肋上を横切る (ヒメトクサでは縦肋によって切られる)。蓋は角質、半透明で赤褐色、楕円形で核は前端にある。軟体は未詳であるがヒメトクサの生体写真を高重 (2019: 205, text-figs) が公表しており、それによれば頭部-腹足は乳白色で、水管は太くて褐色に染まる。足は楕円形。

写真： 備中〔浅口市〕寄島，1 個体，畠田和一コレクション #1263，福田撮影。殻長 35.7 mm，殻径 8.1 mm。



**分布** タイプ産地は「Japan」。異名の *Terebra Lischkeana* も「Japon」, *T. awajiensis* は「Fukura, Awaji」(淡路島福良) からそれぞれ記載された。アワジタケとしての産出記録は太平洋側の最北が房総半島の千葉県勝浦市鶴原 (大山, 1961c; 清水利, 2001: 78, no. 1434, as *Brevimyrella awajiensis*) , 日本海側は山形県鶴岡市堅苔沢 (大山, 1961c; 鈴木庄, 1979: 191, no. 239, as *B. lischkeana awajiensis*) で、瀬戸内海まで産するとされる (Higo *et al.*, 1999: 346, no. G4099, as *T. awajiensis*; 土田・久保, 2017)。ヒメトクサの方は大山 (1961c) は「種子島から茨城県と秋田県の安田 (現生) を北限とし、瀬戸内海にも産して各地の海岸に打ち上げられる」とし、土田・久保は「函館・岩手県・山形県から九州」に分布するとしているが、今回は函館からの具体的な記録を見出せていない。岩手県三陸海岸では土田 (1991: 16–17, pl. 6, fig. 14, as *Punctoterebra* (*B.*) *lischkeana*) と戸羽 (2009: 47, 48, fig. 118, as *B. japonica*) が大槌湾から、山形県では鈴木庄 (1989: 191, no. 238, pl. 9, fig. 145, as *B. japonica*) がそれぞれ標本写真を公表している。国外は権 (1993: 92, figs 48-3, 48-4; 320–321, as *B. lischkeana*, *B. japonica*) や関他 (2004: 278, fig. 799, as *Terebra awajiensis*) が図示した個体はどちらもアワジタケでもヒメトクサでもない全くの別種で、Choe *et al.* (1997: 123, no. 32, as *T. japonica*) の記録も図がないため同定の確かさは判断できない。結局国外からは現時点でアワジタケ・ヒメトクサのいずれも信頼できる記録が存在せず、両者は日本固有種の可能性がある。

**生息状況** 外洋・内湾を問わず潮下帯の砂泥底に棲息し、大山 (1961c) によればアワジタケは「生息深度は数 m. から 125 m. まで」、ヒメトクサは「海岸に打ち上げられるが、生息深度は 40 m. くらいまで及ぶ」という。瀬戸内海では稲葉 (1982: 116, nos 404–405, as *Punctoterebra* (*Brevimyrella*) *lischkeana*, *P.* (*B.*) *awajiensis*) によればアワジタケ・ヒメトクサとも広い範囲で記録されているものの、両者とも「少ない」とされている。岡山県での文献記録は唯一、波部・増田 (1990: 69, no. 1141, as *P.* (*B.*) *japonica*) が野口博コレクション中に「備前」産「トクサガイ (ヒメトクサガイ)」1 個体が含まれていると報じたのみで、この個体がアワジタケ・ヒメトクサのどちらに該当するかは当該標本を改めて検討する必要がある。一方、畠田和一コレクションには「〔倉敷市下津井〕六口島」(1 個体, #2246), 「〔倉敷市玉島〕黒崎村沙美」(「昭和」10 [=1935].2.3.), 1 個体, #5995), 「備中〔浅口市〕寄島」(「トクサ (ヒメトクサ) 黒田〔徳米〕氏同定 1956.2.」, 1 個体, #1263; 写真), 「寄島」(「昭和」31 [=1956].11.21.), 3 個体, #1794) からの 4 ロット 6 個体が現存し、いずれもアワジタケに同定可能である。そのうち #1263 の寄島産のみが殻口内部の光沢が残り、採集時に生貝であった可能性があるのに対し、それ以外は全て摩滅または褪色した死殻である。同時に採集された他の種の顔ぶれや殻の状態から判断して、#5995 の沙美産のみ砂浜での打ち上げで得られ、他は漁屑由来であろう。また、畠田が活躍した 1950 年代以前においても生貝や新鮮な死殻が頻繁に得られていたわけではないことが窺える。その後は上記野口標本の記録を除いて有力な情報が無い。かろうじて 2002 年に玉野市波張崎南東沖 (水深 22 m, 泥底) 及び大入崎～岡山市東区犬島間 (10 m, 砂底) で実施されたドレッジにより、微小な幼貝の死殻 3 個と破片 1 個が得られたが (OKCAB M24073, M24299), これらも同定もままならないほど劣化が激しい。畠田標本のうち、寄島ではミクリガイ、トウイト、ウスベニマスオ、アワジタケ、アオサギなどどれも戦後の岡山県で絶滅したと考えられる種と同時に採集されており、本種もそれらとともに潮下帯の環境悪化によって本県から滅び去ったと考えられる。

(福田 宏)

## カリガネ

*Unedogemmula deshayesii* (Doümet, 1839)

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔区 新腹足目 イモガイ上科 クダマキガイ科 ●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

**選定理由** 過去に県内で産出したことを示す標本が存在するが、その後棲息が確認されず、絶滅したと考えられる。

**形態** 原記載は Doümet (1839: 325, as *Pleurotoma Deshayesii*) で、翌年 Doümet (1840: Mollusques pl. 11, figs) に図示された。種小名を *deshayesi* とするのは誤り。恐らくタイプ標本ではないものの同種とみられる個体を Reeve (1843 in 1843–1846: sp. 19, pl. 3, fig. 19) が図示し、その図は Weinkauff (1875 in Weinkauff & Kobelt, 1875–1887: 26–27, no. 22, pl. 5, fig. 7, as *P. Deshayesi* [sic]) と Tryon (1884: 168, pl. 6, figs 80, 82, as *P. Indica*) に転載されている。Tryon は本種を *P. indica* Deshayes, 1833 (not *Turris indica* Röding, 1798) マダラクダマキの異名としたが、現在この扱いは支持されていない。また日本の文献では本種を *Murex (Fusus) polytropa* Helbling, 1779 に同定し、*P. deshayesii* を異名としていた時期があった (e.g. 矢倉, 1932: 46, no. 597; Kuroda, 1941: 126, no. 817; Kuroda & Habe, 1952: 77, 95; 吉良, 1959: 92, pl. 35, fig. 16: all as, as *T. polytropa*)。その後 Powell (1964: 270, pl. 175, figs 7–8; pl. 210, figs 1–2, as *Gemmula* [(*Unedogemmula*)] *deshayesii*) や大山 (1966: 11–12, as *G. (U.) deshayesii*) が *P. deshayesii* を本種の有効名とみなして以来、その見解が現在に受け継がれている。属の所属は Bouchet *et al.* (2011: 297) に倣い、*Unedogemmula* MacNeil, 1961 を亜属でなく属として用いた。殻長約 80 mm、殻径約 23 mm に達し、螺塔は細長い円錐形、水管は長い。厚く堅牢で不透明。体層は多少膨らみ、周縁から殻底にかけて丸く彎曲する。縫合は弱く縊れ、その下の肩部に鋭いキール状の螺肋を 1 本巡らす。殻表は全体が光沢のないチョコレート色で無紋、微細な螺脈を多数巡らし、殻底では太い螺肋の間に細い螺脈数本が並ぶ。殻口は縦長の楕円形で外唇は肥厚せず、後方に顕著な U 字形の肛彎入がある。水管は殻口長にほぼ長さが等しく、太くて幅広く開く。蓋は角質で厚く、不透明な黒褐色、楕円形で核は前端にある。頭部-腹足の形態は未詳であるが、Taylor (1994: 188–191, figs 3–5; pl. 1, fig. b; pl. 3, figs a–b, as *G. deshayesii*) が歯舌を含む消化器系の解剖学的特徴を記載している。

写真： 備中〔浅口市〕寄島，1 個体，畠田和一コレクション #1176，福田撮影。殻長 33.0 mm，殻径 12.8 mm。



**分布** タイプ産地は「? sans doute les mers de la Chine」(恐らく中国の海)。太平洋側は千葉県銚子以南 (渡辺富, 1988: 57; 清水利, 2001: 2001: 72, no. 1300; both as *Gemmula (Unedogemmula) deshayesi* [sic])、九州まで産出が知られるが、日本海側からは今回遂に文献記録を見出せなかった。国外は韓国 (權他, 1993: 91, fig. 47-1; 316, as *U. deshayesi* [sic]; Choe *et al.*, 1997: 111, no. 10, as *G. (U.) deshayesii*; 関他, 2004: 261, fig. 729, as *G. (U.) deshayesi* [sic])、中国沿岸 (Li & Ma, 2004: 111, pl. 066, fig. H, as *G. deshayesii*; 張他, 2012: 118, no. 103, text-figs, as *Lophiotoma deshayesii*; 楊他, 2013: 124, 125, fig. 467, as *G. deshayesii*)、香港 (Taylor, 1994)、台湾 (Kuroda, 1941; 村岡, 1972: 95, no. 1809, as *G. (U.) deshayesi* [sic]) に分布する。

**生息状況** 外洋の漸深海底の砂泥底に棲息するイメージが強い種で、奥谷他 (2017: 1039, pl. 331, fig. 8) は「水深 50~100 m」に見られるとしているが、実際にはそこまで深い場所が存在しない瀬戸内海でも何度も記録されているため、濱村 (2004: 93, text-fig., as *Gemmula (Unedogemmula) deshayesi* [sic]) が述べた通り潮下帯下部の「水深 20~30 m」にも産することは確実である。日本での文献記録の総数は決して多くないが、淡路島周辺は古くから本種の産地として知られ、何度も言及されている (e.g. Y. Hirase, 1907e: 34, no. 556, as *Pleurotoma Deshayesii*; 平瀬興, 1910: 38, no. 808, as *P. deshayesii*; 横山, 1931: 49, no. 1688, as *Turris deshayesi* [sic]; 矢倉, 1932; 窪田, 1962: 89, no. 1293, as *T. (U.) polytropa*; 堀越他, 1963: 79, as *T. (Lophiotoma) polytropa*)。また広島県下蒲刈町の底引漁 (濱村, 2004) や山口県上関町祝島・八島間に仕掛けられた磯立網 (保阪, 1994: 2, pl. 1, fig. 7, as *T. polytropa*) では比較的近年においても生貝が採集され、稲葉 (1982: 113, no. 369, as *U. deshayesi* [sic]) のいう通り瀬戸内海の広い範囲に寡産ながらも出現すると言える。しかし岡山県での文献記録は皆無で、畠田和一コレクションに含まれる「備中〔浅口市〕寄島」(「波部〔忠重〕氏同定 1956.12.」, 1 個体, #1176; 写真) の標本が唯一の産出の証拠である。この個体は水管が根元で折れて失われ、体層には大穴が開き、殻表や殻口内部の大部分はどす黒い沈着物で覆われて、一目で著しく古い死殻とわかる。殻が黒色沈着物で被覆される現象は、瀬戸内海の潮下帯のやや還元的な砂泥底に棲息する腹足類には生貝・死殻を問わず広く見られ、ヤツシロガイ、カズラガイ、トウイト、*Nassarius multivocus* Kool, 2008 ハナムシロ、*Funa jeffreysii* (E.A. Smith, 1875) モミジボラなども殻頂部が同様に黒く染まることが多い (今回アワジタケの項で図示した個体も同様)。したがって寄島産カリガネも、それらの種と同様に潮下帯の比較的浅所から水揚げされた漁屑に由来する可能性が高い。岡山県での本種はこの 1 個体以外に一切の記録がない。また、畠田が 1950 年代までに寄島漁港で得ている種の大半はその後の岡山県で全く確認されないため、それらの種で構成されていた貝類群集そのものが消滅したとみられる。本種はその群集の一員としてごく少数が県内に棲息していたものの、その後の潮下帯の極端な環境悪化によって絶滅したと考えられる。

(福田 宏)